

博 多 32

—— 博多遺跡群第68次発掘調査報告 ——

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第287集

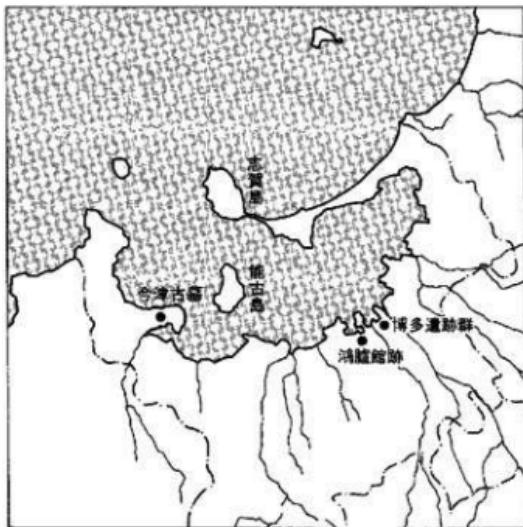
1992

福岡市教育委員会

博 多 32

—博多遺跡群第68次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第287集



1992

福岡市教育委員会



第68次調査第1面全景（南から）



第68次調査第2面全景（南から）



石積遺構SX32（東から）



溜枡SX03、及びSX21 完掘状況（西から）

序 文

福岡県の北西部に位置する福岡市は、玄界灘に面して豊かな自然環境と歴史的な遺産に恵まれています。しかし、近年は福岡市における著しい都市化によってこれらは失われつつあります。私共は自然環境や歴史的遺産について保護し、後世に伝えていくことの責を負っていることは言うまでもありません。

福岡市教育委員会では、各種の開発事業に伴い、埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存に努めているところです。

本書は平成2年度に発掘調査を行った博多道跡第68次調査の成果について報告するものです。この調査地点は「息の濱」と呼ばれた砂丘上に立地しており、平安時代の終わりから江戸時代までの遺構・遺物を発見することができました。なかでも元寇の役と同時期の護岸状石積みは、中世都市博多を復原する上での重要な手懸かりになるものと考えられます。

本書が埋蔵文化財へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成4年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例 言

1. 本書は福岡市博多区古門戸98-1他の特別養護老人ホーム建設に伴い、福岡市教育委員会が平成2年(1990)年10月29日から3(1991)年1月31日の期間中に発掘調査を実施した博多(はかた)遺跡群第68次調査の報告である。
2. 本書に掲載した遺構の実測は井沢洋一、菅波正人、吉田扶希子、多田映子、福田小菊、西嶋恵子、上村素が行った。
3. 遺物の実測は古出、牛房綾子、中西香、田中昭子、井沢が行った。
4. 遺構・遺物の製図は牛房、中西、田中、松枝礼子が担当した。
5. 遺構・遺物の写真撮影は井沢、吉三が行った。
6. 本書に掲載する遺構一覧表は古出が、遺物一覧表は牛房、中西が作成した。
7. 本書作成にあたって小山田緑、倉光京子、多田映子、西嶋恵子、福田小菊の協力を得た。
8. 遺構番号は発掘調査中に於いて検出した順に番号をふり、本書では遺構略号を遺構番号の頭に付けた。遺構の略号として用いたのはSE(井戸)、SK(土壙)、SX(不定形土壙・墓・構築物)である。
9. 本書の遺物番号は遺構の種類毎に通し番号で示し、挿図・図版番号に一致させている。
10. 遺構に用いた方位は磁北である。
11. 本書に掲載した陶磁器の鑑定、及び分類については九州陶磁文化館の大橋康二氏にお願いした。又、瓦文字の解説は文化財整備課の三木氏に依頼した。
12. 本報告にかかる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
13. 編集は古出、牛房、中西の協力のもと井沢が行った。

遺跡調査番号	9042		遺跡番号	HKT-68
地番	福岡市博多区古門戸町98-1		分布地図番号	千代博多48
開発面積	640m ²	調査対象面積	640m ²	調査面積 353.6m ²
調査期間	1990年(平成2年)10月29日～1991年(平成3年)1月31日			

本文目次

第1章はじめに	1
1. 発掘調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の組織	1
第2章立地	5
第3章調査経過	7
1. 試掘調査の概要	7
2. 発掘調査の概要	7
(1) 調査経過	7
(2) 上層	7
(3) 第1~3面の調査概要	8
3. 遺構・遺物解説	9
(1) 土塹(SK)及び出土遺物	9
(2) 井戸(SE)及び出土遺物	28
(3) 不定形土塙・墓・構築物(SX)及び川土遺物	75
(4) トレンチの調査	111
(5) Pit川土遺物	117
(6) 遺構面出土遺物	117
第4章まとめ	122
1. 遺構・遺物の時代・時期について	122
2. 石積遺構(SX32)について	126
付編1 調査地点の地形および地質	134
付編2 博多第68次調査川土遺物岩石薄片作製鑑定報告	140

挿図目次

Fig. 1 博多68次調査の範囲図(縮尺 1/300)	2
Fig. 2 博多遺跡群と周辺の遺跡(縮尺 1/50,000)	3
Fig. 3 博多遺跡群と調査地点位置図(縮尺 1/9,000)	4
Fig. 4 第68次調査地点位置図(縮尺 1/2,000)	6
Fig. 5 第68次調査第1・2面遺構配置図(縮尺 1/150)	9

Fig. 6 第68次調査第2・3面遺構配図（縮尺 1/150）	11
Fig. 7 土壌SK01～04・06～09・12・13実測図（縮尺 1/40）	12
Fig. 8 上塙SK01・02出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）	14
Fig. 9 土壌SK03～06出土遺物実測図（縮尺 1/3）	15
Fig. 10 土壌SK06～09出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）	17
Fig. 11 土壌SK10～12出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3）	18
Fig. 12 上塙SK15・17～20実測図（縮尺 1/40）	20
Fig. 13 土壌SK13・15～18出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3・1/4）	21
Fig. 14 上塙SK19・20出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3）	22
Fig. 15 土壌SK21・23実測図（縮尺 1/40）	23
Fig. 16 土壌SK24実測図（縮尺 1/40）	24
Fig. 17 上塙SK21・22出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）	25
Fig. 18 土壌SK21・22・24出土遺物実測図（縮尺 1/3）	26
Fig. 19 井戸SE01・02実測図（縮尺 1/40）	28
Fig. 20 井戸SE01出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3・1/4）	29
Fig. 21 井戸SE04実測図（縮尺 1/40）	31
Fig. 22 井戸SE03・05・07実測図（縮尺 1/40）	32
Fig. 23 井戸SE02掘り方出土遺物実測図①（縮尺 1/3）	35
Fig. 24 井戸SE02掘り方出土遺物実測図②（縮尺 1/3）	36
Fig. 25 井戸SE02井筒出土遺物実測図③（縮尺 1/3）	37
Fig. 26 井戸SE02出土遺物実測図④（縮尺 1/3・1/4）	38
Fig. 27 井戸SE03出土遺物実測図①（縮尺 1/3）	39
Fig. 28 井戸SE03出土遺物実測図②（縮尺 1/3・1/4）	40
Fig. 29 井戸SE04出土遺物実測図①（縮尺 1/3）	41
Fig. 30 井戸SE04出土遺物実測図②（縮尺 1/2・1/3・1/4）	42
Fig. 31 井戸SE05出土遺物実測図（縮尺 1/4）	44
Fig. 32 井戸SE12・14実測図（縮尺 1/40）	45
Fig. 33 井戸SE12出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3）	47
Fig. 34 井戸SE12・13出土遺物実測図（縮尺 1/4）	48
Fig. 35 井戸SE13・14出土遺物実測図（縮尺 1/3）	49
Fig. 36 井戸SE14出土遺物実測図①（縮尺 1/3）	50
Fig. 37 井戸SE14出土遺物実測図②（縮尺 1/2・1/3・1/4）	51
Fig. 38 SX19・井戸SE15・16実測図（縮尺 1/40）	52

Fig.39	井戸SE15・16出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）	54
Fig.40	井戸SE18・19実測図（縮尺 1/40）	55
Fig.41	井戸SE18出土遺物実測図①（縮尺 1/3）	57
Fig.42	井戸SE18出土遺物実測図②（縮尺 1/3・1/4）	58
Fig.43	井戸SE18出土遺物実測図③（縮尺 1/4）	59
Fig.44	井戸SE19出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）	60
Fig.45	井戸SE20実測図（縮尺 1/60）	62
Fig.46	井戸SE20掘り方出土遺物実測図①（縮尺 1/3）	65
Fig.47	井戸SE20掘り方川土遺物実測図②（縮尺 1/3）	66
Fig.48	井戸SE20掘り方出土遺物実測図③（縮尺 1/3）	67
Fig.49	井戸SE20掘り方出土遺物実測図④（縮尺 1/3・1/4）	68
Fig.50	井戸SE20川土遺物実測図⑤（縮尺 1/4）	69
Fig.51	井戸SE20井筒出土遺物実測図⑥（縮尺 1/3）	70
Fig.52	井戸SE20出土遺物実測図⑦（縮尺 1/3・1/4）	71
Fig.53	井戸SE20掘り方川土遺物実測図⑧（縮尺 1/4）	72
Fig.54	井戸SE20掘り方出土遺物実測図⑨（縮尺 1/4）	73
Fig.55	SX01・02・07実測図（縮尺 1/40）	76
Fig.56	SX01・02川土遺物実測図（縮尺 1/3）	78
Fig.57	溜柵SX03実測図・1層図（縮尺 1/60）	79
Fig.58	SX02出土遺物実測図（縮尺 1/3）	83
Fig.59	SX02・03出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3・1/4）	84
Fig.60	溜柵SX03出土遺物実測図①（縮尺 1/3）	85
Fig.61	溜柵SX03出土遺物実測図②（縮尺 1/3）	86
Fig.62	溜柵SX03川土遺物実測図③（縮尺 1/3）	87
Fig.63	溜柵SX03出土遺物実測図④（縮尺 1/3）	88
Fig.64	溜柵SX03川土遺物実測図⑤（縮尺 1/4）	90
Fig.65	溜柵SX03出土遺物実測図⑥（縮尺 1/2・1/3・1/4）	91
Fig.66	溜柵SX03出土遺物実測図⑦（縮尺 1/3・1/4）	93
Fig.67	SX04川土遺物実測図（縮尺 1/3）	94
Fig.68	SX14・15・16実測図（縮尺 1/40）	95
Fig.69	SX07出土遺物実測図（縮尺 1/3）	97
Fig.70	SX10・11・14出土遺物実測図（縮尺 1/3）	98
Fig.71	SX16出土遺物実測図①（縮尺 1/3）	100

Fig.72	SX16出土遺物実測図②（縮尺 1/3・1/4）	101
Fig.73	SX20・21・23実測図（縮尺 1/40）	102
Fig.74	SX18～20出土遺物実測図（縮尺 1/3）	104
Fig.75	SX21出土遺物実測図（縮尺 1/3）	105
Fig.76	SX30出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3）	106
Fig.77	土壤草SX31実測図・出土遺物実測図（縮尺 1/40・1/3）	107
Fig.78	石積遺構SX32実測図（縮尺 1/60）	109
Fig.79	石積遺構SX32出土遺物実測図（縮尺 1/3）	110
Fig.80	Aトレンチ西壁土層図（縮尺 1/40）	111
Fig.81	B・Cトレンチ上層図（縮尺 1/80）	112
Fig.82	A・B・Cトレンチ出土遺物実測図（縮尺 1/3）	115
Fig.83	第Ⅳ期砂地居川土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3・1/4）	116
Fig.84	Pit 02・04出土遺物実測図（縮尺 1/3）	117
Fig.85	遺構面出土遺物実測図①（縮尺 1/3）	118
Fig.86	遺構面出土遺物実測図②（縮尺 1/3）	119
Fig.87	遺構面出土遺物実測図③（縮尺 1/4）	120
Fig.88	文字瓦拓影（縮尺 1/1）	120
Fig.89	第68次調査出土の貨幣（縮尺 1/1）	121
Fig.90	石積遺構SX32（点線部分）と調査地点位置図（縮尺 1/8,000）	126
Fig.91	西区・早良区の元寇防界	131
Fig.92	石積遺構SX32上端部の状態（縮尺 1/90）	132

表 目 次

Tab. 1	第68次調査遺構一覧表	143
Tab. 2	第68次調査遺物一覧表	149
Tab. 3	第68次調査出土瓦類一覧表	173
Tab. 4	第68次調査石製品及び土製品一覧表	177
Tab. 5	第68次調査青銅製品一覧表	177
Tab. 6	第68次調査鉄製品一覧表	178
Tab. 7	第68次調査SX02・03出土木製品及び竹製品一覧表	182

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至る経緯

平成2年(1990)3月9日、福岡市博多区古戸町在住の石橋清助氏は同じ町内に所有している土地を「老人福祉のために役立てて欲しい」旨で、福岡市に寄付された。この所有地は、自家に隣接した駐車場で、面積は約680m²である。石橋氏は御両親を老人保健施設などに入院させており、「生まれ育った所に施設があれば最適ではないか」との想いから寄付を思い立たれた由。これを受けて福岡市民生局では、老人福祉法による施設を作る構想を検討すると共に、平成2年度に埋蔵文化財の発掘調査、平成3年度に建設工事、平成4年4月オープンのスケジュールで特別養護老人ホームを建設する運びとなった。

分布地図によれば、この地域は博多遺跡群の北端に位置しており、從来から遺跡の発掘調査例も少ないとこから、「鬼の塚」の砂丘の形成や、町屋の発展を知る手堅かりとなることが期待できた。

平成2年2月26日に石橋氏により埋蔵文化財事前審査願いが申請されたため、3月13日に試掘調査を行った。この結果、現地表から2.3mの深さで、中世末～近世の遺構や遺物を検出すると共に、石垣状の構造物を発見した。

発掘調査は老人ホームの建物敷地に限定して行っており、調査面積は353.6m²である。調査は山留工事及び、地表上面から深さ1.8mまでの鋤取り工事が終了次第実施することとし、平成2年10月29日から平成3年1月31日までの期間を行った。尚、当該調査地点の西側約80mに位置する株式会社中林産業が発注した軒屋建設工事においても、当該調査地点と同様の護岸状石積みが発見されていることを付記しておく。

2. 発掘調査の組織

調査委託 福岡市民生局高齢者対策部高齢者福祉課

調査主体 福岡市教育委員会文化財部(前文化部)埋蔵文化財課

調査総括 課長 柳田純孝(前任)

第2係長 柳沢一男(前任)

調査・整理 主任文化財主事 井沢洋一

庶務 松近好文(前任)、寺崎幸男

試掘調査 古留秀敏、佐藤一郎

調査・整理補助 高田一弘、吉田扶希子、牛房綾子、中西香、田中昭子
調査作業 家村富基郎、井上八郎、内野弘行、神田武則、熊本文伸、齊藤善弘、島津明男、高尾甚一郎、橋良平、藤善弘、原田敬一郎、村田圭介、八尋弘人、横尾泰広、吉川春美、吉川順岳、上田エイ子、上野ミヤコ、上村素、江里ヨシエ、小山田綾、萩野敦子、木村みさを、黒木美代子、小林光子、坂本ハツ子、高石ヤス子、高木志保、永井鈴子、西口キミ子、野田文香、箱田香代子、堀タケ子、宮崎ヨシ子、宮原スマ子、脇山喜代子
整理作業 萩野敦子、小山田綾、倉光京子、多田映子、西嶋彰子、箱田香代子、福田小菊

発掘調査にあたっては民生局高齢者福祉課をはじめ関係者の方々に多大なご協力をいただいたことを記して感謝の意を表わしたい。



博多さくら町の現況

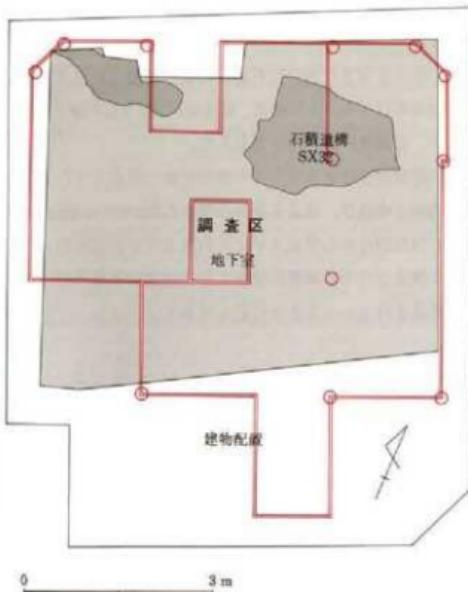
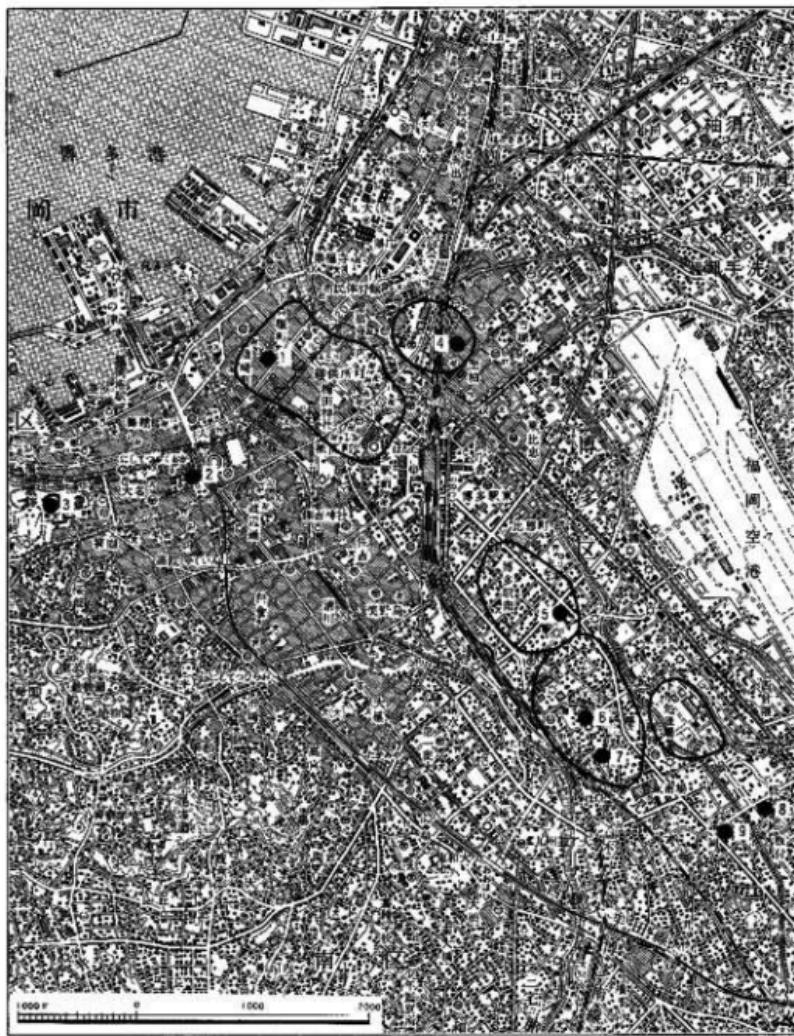


Fig. 1 博多68次調査の範囲図 (縮尺 1/300)



- | | | |
|----------|-----------|----------|
| 1. 博多遺跡群 | 4. 堅粕遺跡 | 7. 那珂遺跡群 |
| 2. 肥前船跡 | 5. 比嘉遺跡 | 8. 梶付遺跡 |
| 3. 洪肚船跡 | 6. 那珂八幡古墳 | 9. 諏岡遺跡 |

Fig. 2 等多遺跡群と周辺の道路 (縮尺 1/50,000)

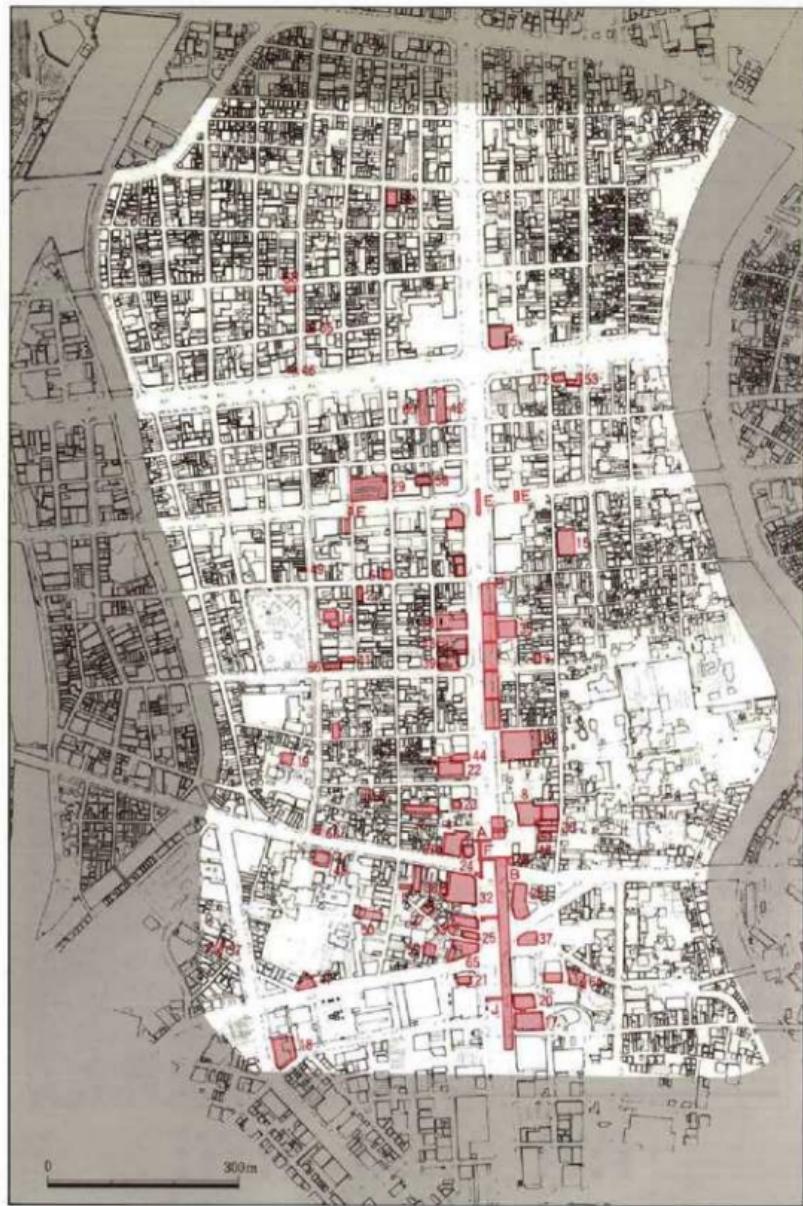


Fig. 3 博多遺跡群と調査地点位置図 (縮尺 1/9,000)

第2章 立地

福岡市のはば中央を占める福岡平野は南北に延びる洪積台地と沖積平野からなり、北は博多湾に面し、東は三郡山塊、南から西は背振山塊の山々で囲まれている。この平野には南北方向に貫流する御笠川と那珂川の二大河川が存在し、北側の博多湾岸には砂丘を形成している。この砂丘は縄文時代の海進以後に形成されたもので、内陸部から海岸部へ向けて3つの列状を呈している。これらの砂丘は歴史的に大きくは「息の濱」と「博多濱」と呼ばれるふたつの砂丘に分けられ、現在の明治通りをその境としている。博多遺跡群はその砂丘上に立地し、東は石堂川、南を旧比恵川、西は那珂川によって囲まれる。遺跡の範囲は東西約1km、南北約1.5kmを想定している。この地域は、博多駅前の商業地域として市街化しており、標高4~5mを測る。遺構は時代毎に幾層にも重なっており、現在の地表の下、約1~5mの深さに検出できる。弥生時代から古墳時代の遺跡は「博多濱」に分布するが、古代末から中世初頭には息の濱でも遺構が認められ、中世後半期になると、遺跡の分布が飛躍的に拡大することが文献や発掘調査においても明らかになっている。これは、砂丘の形成が博多濱から息の濱へ拡大し、更に人工的な干拓などにより、町の中心も次第に息の濱へ移ったものと考えられる。

今回の発掘調査地点は、この「息の濱」と呼ばれる砂丘の北側傾斜面上に位置する。



石積造橋SX32の発掘作業風景（西から）

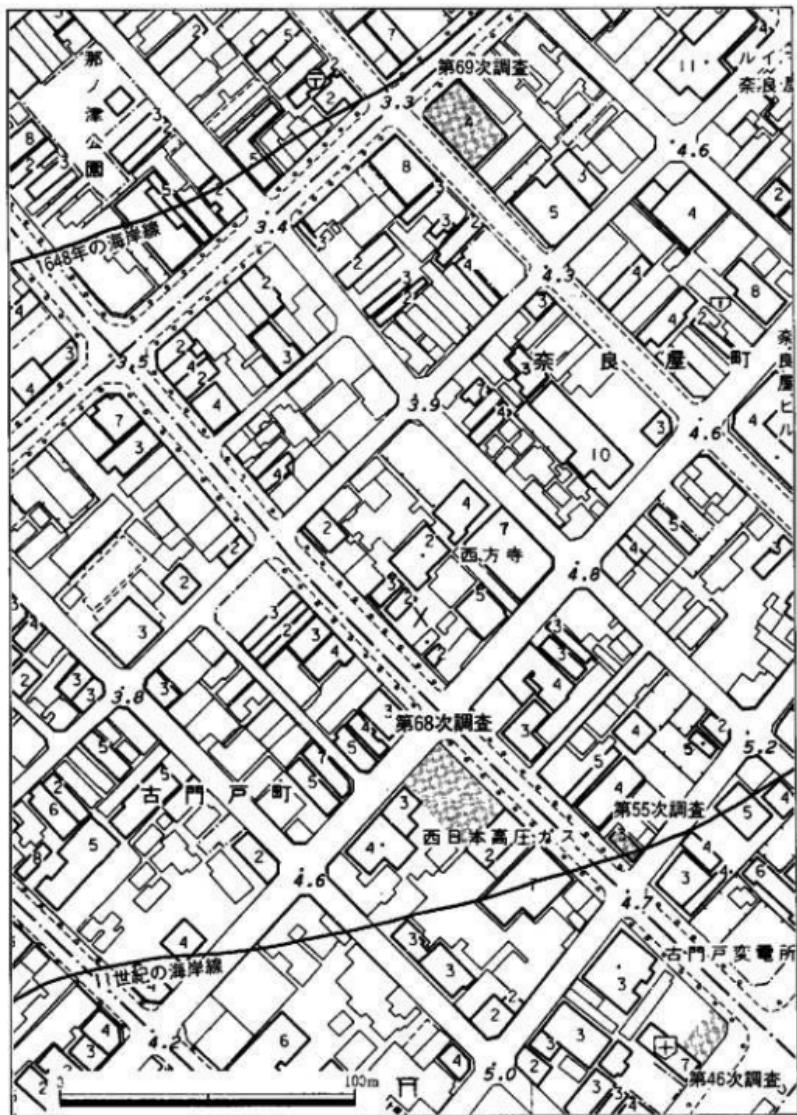


Fig. 4 第68次調査地点位置図(縮尺 1/2,000)

第3章 調査経過

1. 試掘調査の概要

平成2年3月13日に実施した。周辺では第46・55次調査が行われているが、当該地はこれらの西側に位置しており、従来の試掘調査によれば、中世の遺構・遺物が出土しない地域と考えられていた。

調査は敷地の中央部分に北西から南東方向のトレンチを設けた。このトレンチは長さ14m、深さ2.8mを測る。トレンチ南東側の土層々位は、①盛土、②黒色土（近世擾乱）、③黒灰色砂質土（近世）、④黄褐色粗砂（中世）となっている。黄褐色粗砂層はGL-210cmの深さで検出できる。中世末の土師器皿が出土しており、砂層の厚さはGL-280cmまで確認できた。又、北西側では、深さ230cmまで擾乱が入っているが、その下から石垣状の構造物を検出した。この石積みは大略東西方向で、黄褐色粗砂層上面に築かれている。博多の町割りである横町筋に並行しているところから、「聖福寺の絵図」に描かれている元寇防界、或いは行政府の名称の元となった石築地の可能性をもっているため発掘調査を実施することとなった。

2. 発掘調査の概要

(1) 調査経過

発掘調査は平成2年（1990）10月29日から平成3年（1991）1月31日の期間に実施した。調査に先立って、外周のフェンス工事、山留工事、調査範囲内の鏝取り工事が行われている。この鏝取り工事は地表面から1.8mの深さまで近世層及び擾乱層を除去しており、この面の標高は約2.5mを測る。これを便宜的に第1面と称した。第2面は試掘調査で検出した石積遺構を対象にしたが、面的にいえば、第1・2面の遺構は同一面上で検出できる。江戸時代と中世遺構の切り合いの関係から2回に分けて調査を行った。第3面は第2面の遺構面の断ち割りの際に検出した遺構面である。調査期間の制約から部分的に調査した。調査対象面積は640m²であったが、敷地内に調査事務所を設置したことや残土搬出のための駐車スペースをとったために調査範囲は結果的に353.6m²に縮まった。

(2) 上層

調査地点は砂丘上に立地しており、現在の地表面の標高は約4.3mを測る。地山は海辺の砂堆層で、標高2.0m前後を測る。

先述したとおり、敷地の外周に山留工事が施工されたことや調査区南側の傾斜面には擦り付け

が行われたために、精細な上層観察は不可能であった。井戸SE15・16の上位における土層面では、現在の地表から深さ約2.3mまでは近世・現代の擾乱が著しく、遺構の検出は困難な状況を示していた。深さ2.5m前後からは黄灰色を呈した地山の砂層面が検出できる。この面においてのみ遺構を確認することが比較的容易であった。この面が調査第1面にほぼ相当する。層位は大略に述べると、Ⅰ 現代の客土層、Ⅱ 近・現代の擾乱層、Ⅲ 海砂堆積層、Ⅳ 風成層の順に堆積している。焼土層も一部に遺存していたが、時期を明確にできなかった。

(3) 第1～3面の調査概要

第1・2面の分別は層位的見解に立ったものではなく、調査の作業上において便宜的に設定したものであり、これらの面が時代・時期を区切った牛面面（文化層）を示すものではないことを断っておきたい。ここでは第1～3面における遺構の検出状況を述べることにとどめ、詳細については別項にゆずりたい。

1) 第1面 (Fig. 5)

標高2.0m～2.5mを測る。(1)の調査経過の中で述べた様に、試掘調査のデータに合わせて深さ1.8mまで機械的に掘り下げられたのであるが、結果的には北側に風成砂層の一部を残して、浜砂堆積層の上面を遺構面とすることになった。この面では中世・近世の遺構が検出できるが、上位からの擾乱も多く、特に調査区の中央部分は5m四方の擾乱層が存在した。検出した遺構は工場、井戸、溜槽、土壌墓などである。いずれも上部が削平をうけている。近世の石垣積みの溜槽や中世末の石組井、等は上部を撤去されており、これが掘取り工事によるものか不明であるが、少なくともこれらの遺構内には現代的な遺物は入っていないかった。

遺構は13世紀～18世紀までの時期幅をもっているが、砂層内、或いは遺構内からは11世紀～19世紀までの遺物が出土している。

2) 第2面 (Fig. 5・6)

遺構面の標高は第1面と同一である。第1面において護岸状の石積遺構SX32の一部を検出していたが、この遺構の全容を明らかにするために、切り合っていた遺構を全て除去した結果、この石積遺構SX32が海岸線を示すことが判明した。この石積遺構SX32の上部には風成砂層が堆積しているが、石積遺構の北側下部には浜砂が堆積していた。石積遺構SX32は南から北へ傾斜する投食斜面に構築されていた。

石積遺構北側部分の標高は0.87mを測る。この石積遺構の北側或いは南側浜砂堆積層からは12～14世紀の遺物を検出した。詳細は後述したい。

3) 第3面 (Fig. 6)

標高約1.1mを測る。地山の断ち割りのトレンチによって土壌墓、Pitを検出したため、土壌墓を中心として約3.4m²を発掘調査した。地山は浜砂の堆積層である。土壌墓には龍泉窯系の青磁碗が副葬されており、12世紀後半～13世紀前半を示している。

3. 遺構・遺物解説

(1) 上塙 (SK) 及び出土遺物

素掘りの穴を土塙 (SK) と称した。他の遺構と切り合い関係にあるため、平面形が明確ではない土塙もある。平面形は大略、圓丸長方形・不整円形・不整橢円形に分けられる。圓丸長方形を呈する土塙にはSK01・07・21が相当する。不整円形の土塙はSK02・03・04・06・13・15・19・23・24で、不整橢円形にはSK09・17・18・20が相当する。

SK01 (Fig. 7) 長軸の長さ194cmを測る。断面形は逆梯形で、上部は削平を受けている。SX02に切られる。覆土は灰黒色を呈する。

遺物 (Fig. 8) は土師器皿、土師質土器の火舍片 (7)、龍泉窯系青磁碗片 (8) がある。小皿

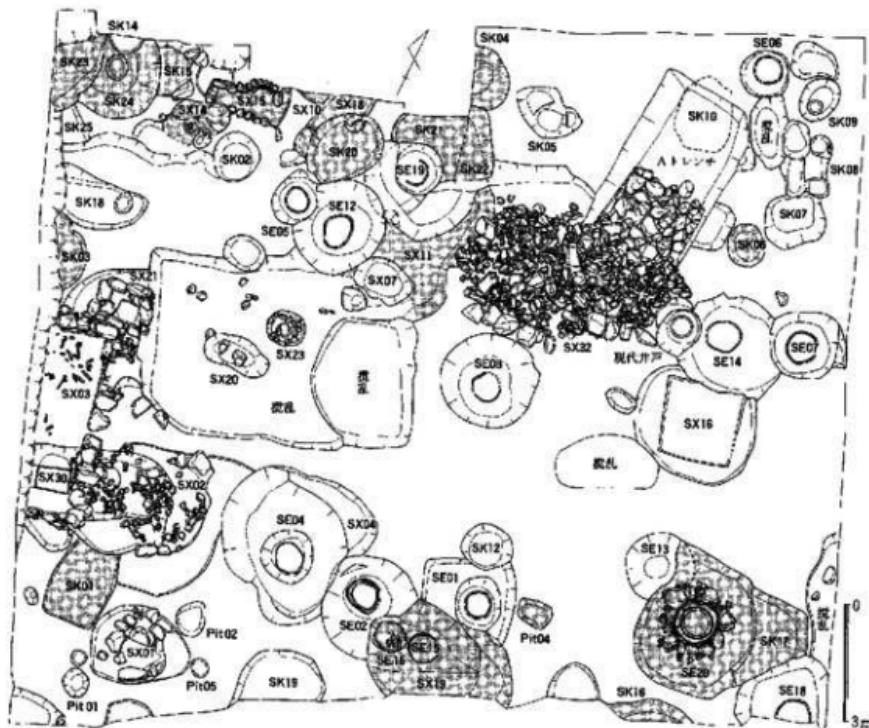


Fig. 5 第68次調査第1・2亘遺構配置図 (縮尺 1/150) 東7(中世遺構)



第68次調査 第1面全景（南から）



第68次調査 第2面全景（南から）



土壤SK07・08（東から）



土壤SK09（東から）

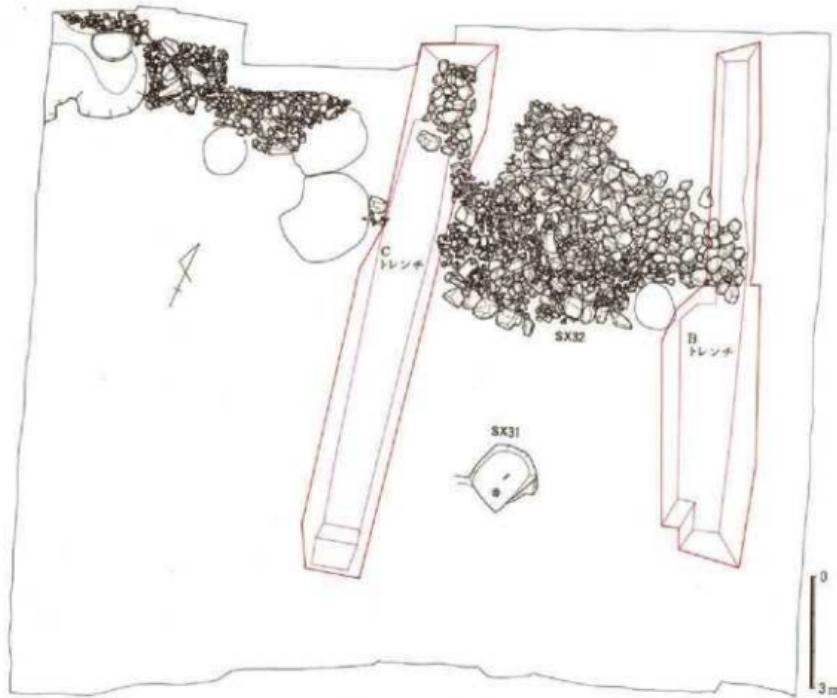


Fig. 6 第68次調査第2・3面遺構配置図（縮尺 1/150）

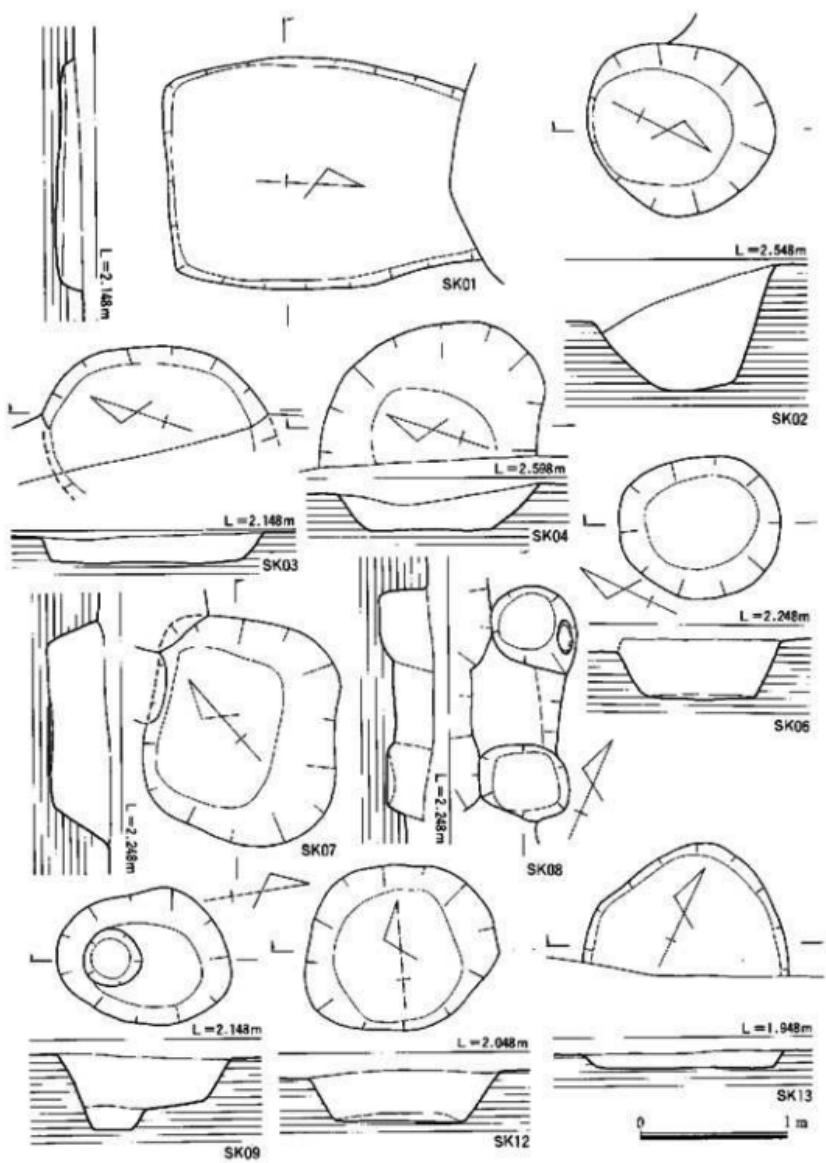
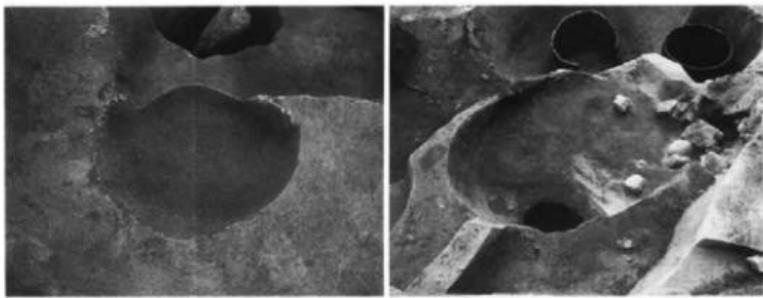


Fig. 7 土壌 SK01~04・06~09・12・13実測図（縮尺 1/40）



土塙SK12（北から）

土塙SK20（北から）

(1~4) は口径7.0~7.6cm、小皿(5・6) は口径8.0~8.8cmを測る。いずれも糸切り底である。火舎の外側には梅花文をスタンプする。

SK02 (Fig. 7) 平面形は不整円形を呈し、断面形は摺鉢状である。長径は128cmを測る。

遺物 (Fig. 8) は土師器小皿(9~11)、龍泉窯系青磁碗片(17)、盤片(16)、肥前白磁碗(12)、有田焼碗(13)、唐津燒碗(15)、国産陶器瓶片(14)、土師質土器蓋(19)、火舎(22)、瓦質土器(20・21)、丸瓦(24)、平瓦(25)、石製硯(23)が出土した。小皿は口径6.2~7.0cmを測る。唐津燒碗は高台が低く、釉色は暗緑灰色を呈するが、内面は全体に釉がかいらぎ状を呈する。19の土師質蓋は消炎臺の蓋と思われる。20の瓦質摺鉢は口縁部内面を肥厚させている。大内系の土器である。21・22の火舎の外側は黒色研磨されており、雲文のスタンプがある。22の外側には花文のスタンプがある。平瓦は棟を有する瓦で、これは1674年以降の所産である。23の硯は底部の残片で、厚さ1.1cm、深さ0.25cmを測る。石材は小豆色凝灰岩である。

SK03 (Fig. 7) SK18に切られる。平面形は不整円形を、断面形は逆梯形を呈する。現存の長さ150cmを測る。

遺物 (Fig. 9) は土師質土器の捏鉢(26)、陶器摺鉢(27)が出土した。27の陶器摺鉢の下し目は7本単位である。備前焼である。

SK04 (Fig. 7) 平面形は不整円形を、断面形は逆梯形である。現存の長径は152cmを測る。

遺物 (Fig. 9) には土師器小皿(28~30)、杯(31・32)、陶器壺片(33)がある。28の小皿は口径8.1cm、29・30は口径7.0cmを測る。29の外底部に板目痕がある。31の杯は体部の立ち上がりが強く、口径と底径の比が小さい。口径11.0cm、器高3.0cmを測る。小皿の29・30が伴うものと考えられる。33の陶器壺は内外面に灰釉が施される。内外面共にカキ目状の条痕がある。唐津系であろう。

SK05 (Fig. 5) 平面形は不整形を呈し、断面形は逆梯形である。最大径188cmを測る。

遺物 (Fig. 9) には土師器皿・杯、土師質土器鉢(36)、国産陶器、染付碗(34)・皿(35)、瓦

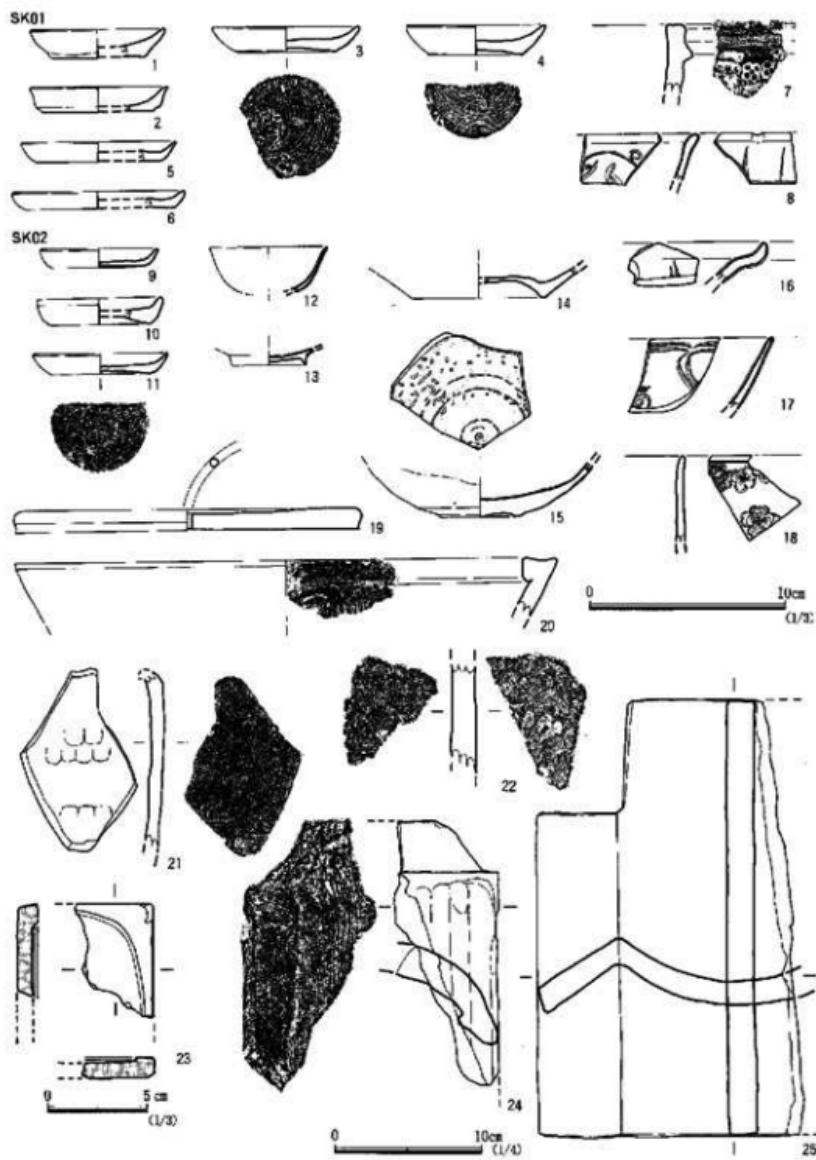


Fig. 8 土壤SK01-02出土遺物實測圖 (縮尺 1/3 · 1/4)

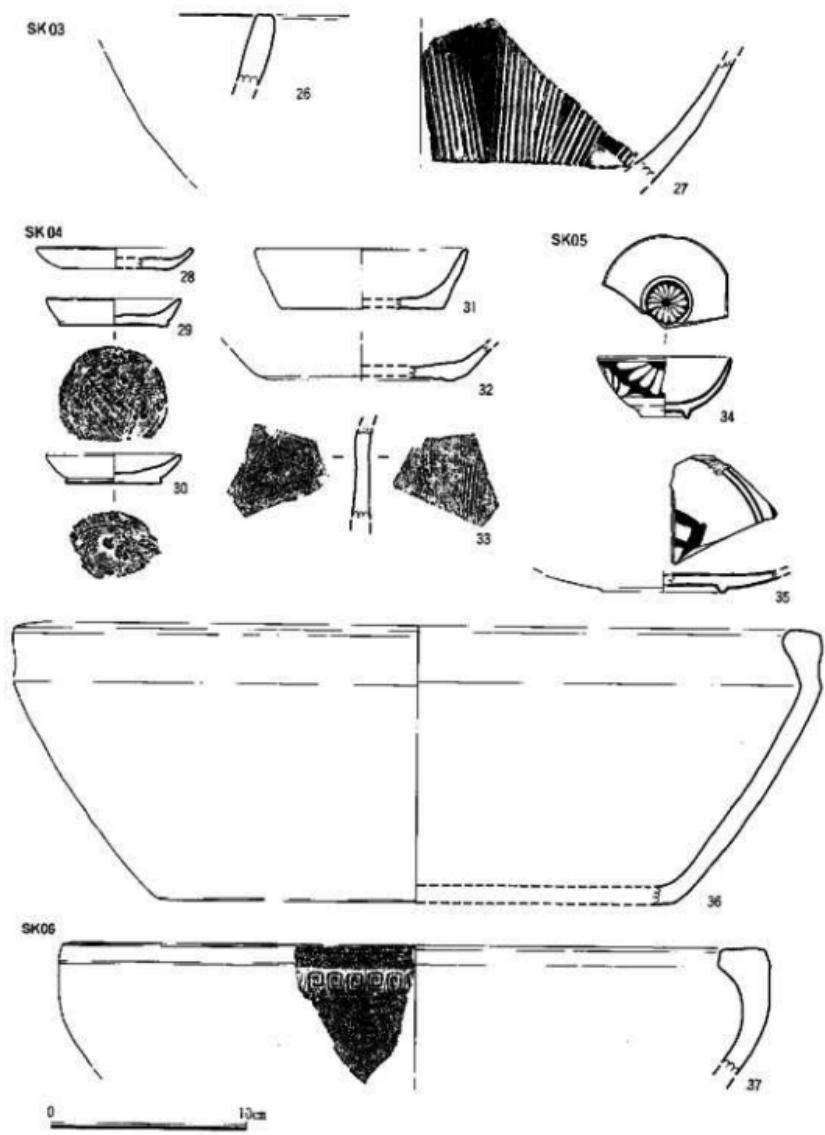


Fig. 9 十城 SK03~06出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

類がある。34の染付碗は口径7.0cm、器高3.1cmを測る。内底見込み、体部外面に菊花文を配している。36の土師質土器鉢は口径39.0cm、器高24.6cmを測る。体部上位に屈曲をもち、口縁部を肥厚させる。

SK06 (Fig. 7) 平面形は不整円形、断面形は逆梯形を呈する。長径111cmを測る。

遺物 (Fig. 9・10) は土師器小皿 (38)、杯 (40・41)、明代青磁碗 (39)、瓦質土器火合 (37・42)、李朝陶器 (43) がある。38の皿の口径は7.0cmを測る。40・41は糸切り底の杯で、口径は11.6cm・13.4cmを測る。37の火合は口径37.8cmを測る。外面に雷文を施す。42は有脚の火合で、脚外面に雲文を印刻する。43の李朝摺鉢は口径が22.8cmを測る。内面にヘラ掛けの下し口がみられる。

SK07 (Fig. 7) 平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。最大長は155cmを測る。

遺物 (Fig. 10) には白磁皿 (44)、唐津焼甕 (45)、鉢 (46)、軒平瓦 (47) がある。44は明代の白磁で、高台径8.0cmを測る。45の唐津焼甕は平底で、外底部に目痕がある。46は上げ底気味で、外底部に砂目がある。47の軒平瓦は瓦当厚約4.6cmを測る。外縁は深い。中心飾りは不明で、左右に梅花文と唐草文を配しているものと考えられる。

SK08 (Fig. 7) 平面形は不整形を呈し、南北に各々Pit が存在する。現存長163cmを測る。

遺物 (Fig. 10) は白磁皿 (48)、染付碗 (49・50) が出土している。49・50は体部に丸みをもち、内底見込みに形状の不明な文様を描く。1800年代の伊万里窯である。48は肥前系の白磁皿と考えられる。

SK09 (Fig. 7) 平面形は不整橢円形を、断面形は逆梯形である。長径は118cmを測る。壇底部の両側にPit がある。

遺物 (Fig. 10) は土師器小皿 (51)、杯 (53・54)、唐津系の皿 (52) がある。51は糸切り式で、板目痕がある。口径6.8cm、器高1.2cmを測る。53は体部が強く立ち上がりしており、口径11.6cmを測る。54はいわゆる大内系の杯で、体部は大きく開き、器高は低い。口径14.6cmを測る。52の皿は口縁部が屈曲しており、暗い褐色釉を施している。

SK10 (Fig. 5) 平面形は不整隅丸長方形を呈しており、施葉物上塗として利用していた。

遺物 (Fig. 11) の内、56は土師器の高杯脚部である。表面は磨滅している。57は肥前系の陶器摺鉢の破片で、単位が6本以上の下し口がある。58は唐津焼の皿で、内底見込みに砂目痕がある。口径13.2cm、器高3.4cmを測る。暗い灰緑色釉を内外面に施している。55は唐津焼碗で、内外面は淡い灰褐色釉を施す。

SK12 (Fig. 7) 平面形は不整形を、断面形は逆梯形である。最大長132cmを測る。

遺物 (Fig. 11) は江戸時代を中心としている。59は糸切りの土師器小皿で、口径7.0cm、器高1.7cmを測る。60は白磁の猪口で、口縁部に模様が施されている。61は伊万里染付碗で、外面に網目文と花文を配している。63は染付皿で、SX03からも同一個体片が出出土している。65は蓋で、肥前系である。灰色の胎土に透明釉をかけており、64は陶器天目で、有取系と考えられ、高台付及び内側は釉

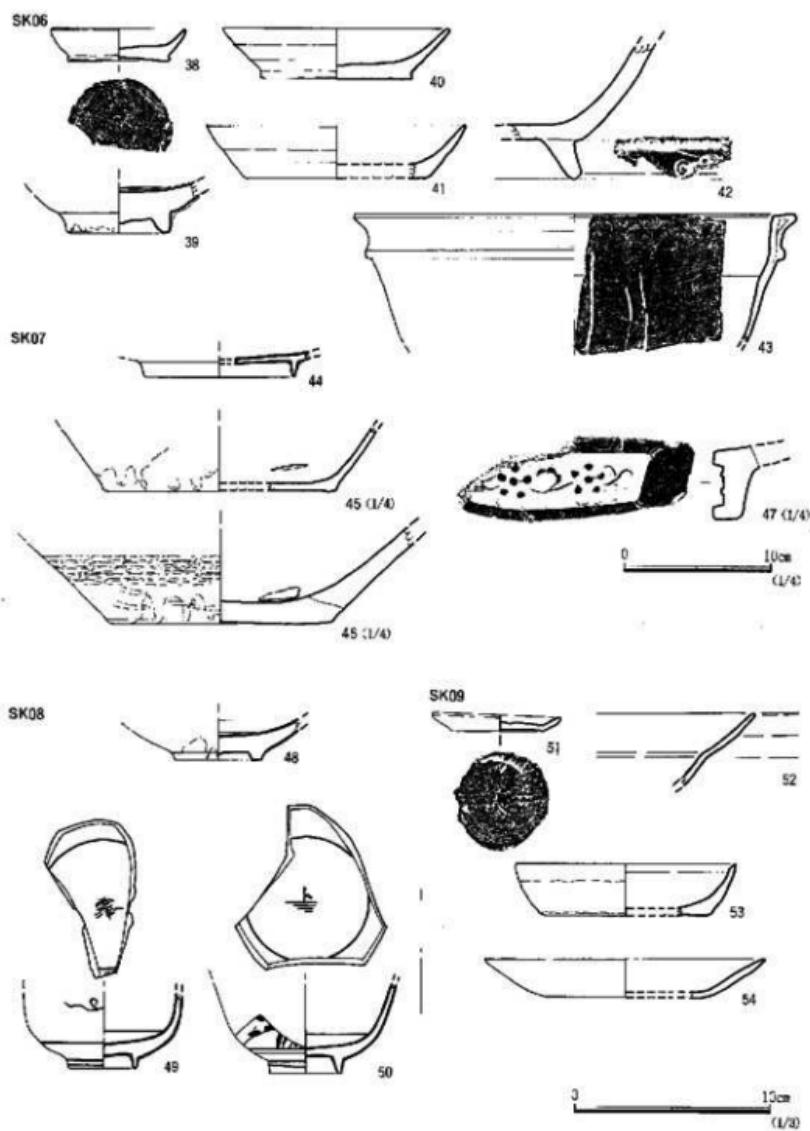


Fig. 10 十旗SK06~09出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/4)

ハギが施されている。胎上は灰黄色である。62は耳付の壺で、透明釉が全体にかかる。胎上は灰色を呈している。船載の陶器である。66は芦津系の摺鉢、67は高取系の摺鉢、68は筑前系の甕である。陶磁器の時期は63を除いて17世紀後半から18世紀後半に比定できる。69は「黒字元寶」である。

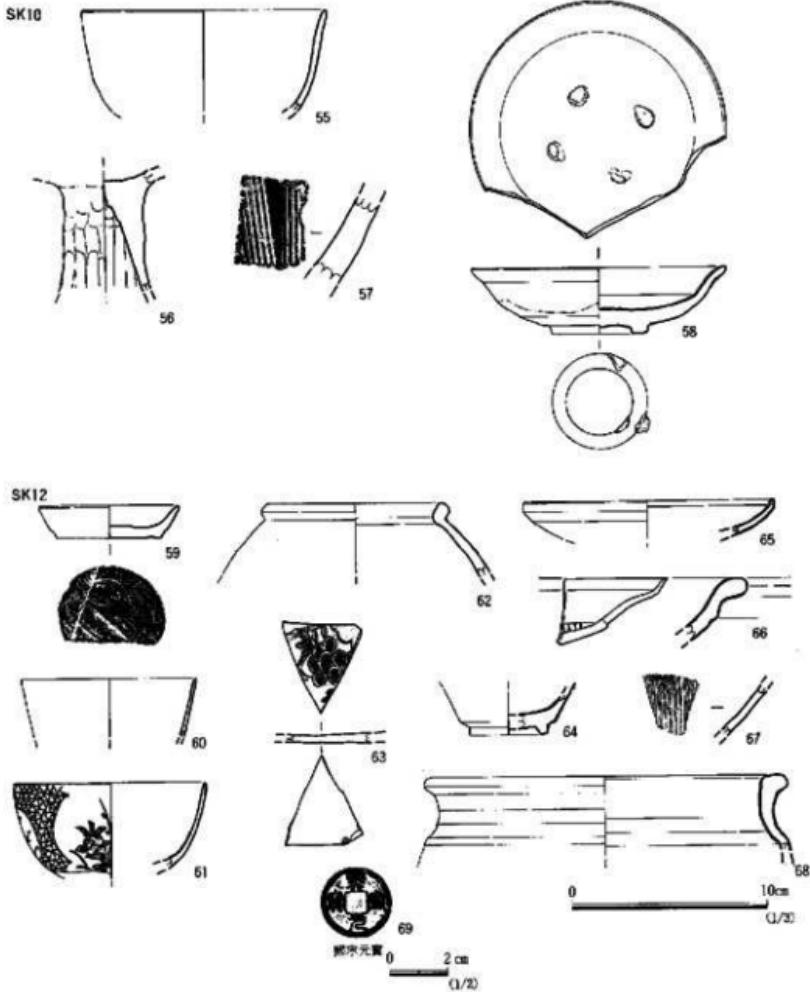


Fig. 11 土塚SK10・12出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3）

SK13 (Fig. 7) 境界地にある。不整円形を呈している。上部の削平は著しい。長径は138cmを測る。

遺物 (Fig. 13) は少なく、糸切りの土師器小皿 (70・71) がある。口径は6.8cm、器高は1.35cm・1.8cmを測る。71の体部は丸味をもっている。

SK15 (Fig. 12) SK24に切られているため全形は不明であるが、平面形が不整円形を呈するものと考えられる。現存長は127cmを測る。

遺物 (Fig. 13) はⅦ類-1の白磁碗 (72) が出土した。他に貨幣 (73) が1点ある。破片のため貨幣名称は不明である。

SK16 (Fig. 5) 南側の境界地に位置しており、SK13と切り合い関係にある。形状は不明である。現存長183cmを測る。

遺物 (Fig. 13) は土師器小皿 (74・75)・杯 (76) が出土した。74・75は体部が開く器形で、口径7.8・8.2cm、器高1.5・1.4cmを測る。76の杯は口径11.8cmを測る。

SK17 (Fig. 12) 井戸SE18・20に切られる。平面の形状は不整梢円形を呈する。現存長は225cmを測る。

遺物 (Fig. 13) の土師器小皿 (77・78)・杯 (80) は糸切り底である。79は須恵器环蓋で、口径は10.0cmを測る。81は土師質土器の捏鉢である。内面はココハケ調整を施している。

SK18 (Fig. 12) 西側境界地に位置する。平面形は不整梢円形を呈し、長径は203cmを測る。

遺物 (Fig. 13) の内、82・83は土師器杯で、糸切り底である。85は唐津鉄輪皿、87は唐津焼碗である。87の高台は三日月高台で、疊付に砂目が残る。灰緑色釉を内外面に施すが、高台部にかいらぎがみられる。86は備前焼指鉢で、格子目状に下し目を施す。内面の磨減は著しい。84は伊万里染付皿である。88の軒丸瓦は瓦当径13.7cmを測る。瓦当面の三巴文は左回りで、尾が短い。珠文は14個である。

SK19 (Fig. 12) 南側境界地に位置する。平面形は不整円形を、底面はレンズ状を呈する。現存長は232cmを測る。

遺物 (Fig. 14) の内、89は糸切り底の土師器小皿、90は須恵質土器の壺片で、外面に綾衫状の叩きを施す。91は長方形の瓦質火舌で、四隅に脚が付く。鉢の深さは4.3cmを測る。内外面は黒色を呈する。体部下位に板目状の調整を行う。92の貨幣名称は「開元通寶」であろう。

SK20 (Fig. 12) 平面形は不整梢円形を呈し、底面はレンズ状に窪む。最大径192cmを測る。

遺物 (Fig. 14) の内、93～95が土師器皿、96・97は杯で、いずれも糸切り底である。93・94の器高は低く、立ち上がりが小さい。口径は7.5・6.8cm、96・97の口径は11.6・12.0cm、器高2.1・2.6cmを測る。98は明代の青磁碗で、緑色釉は厚い。外底と内底見込みに釉ハギがある。99は薄手の磁器碗で、胎土は灰白色を呈し、外底の釉は鉄釉、内面は透明釉である。100は明代染付碗、101は明代の青磁碗であるが、二次火のため緑釉を帯びた茶褐色を呈する。103・104は高麗青磁

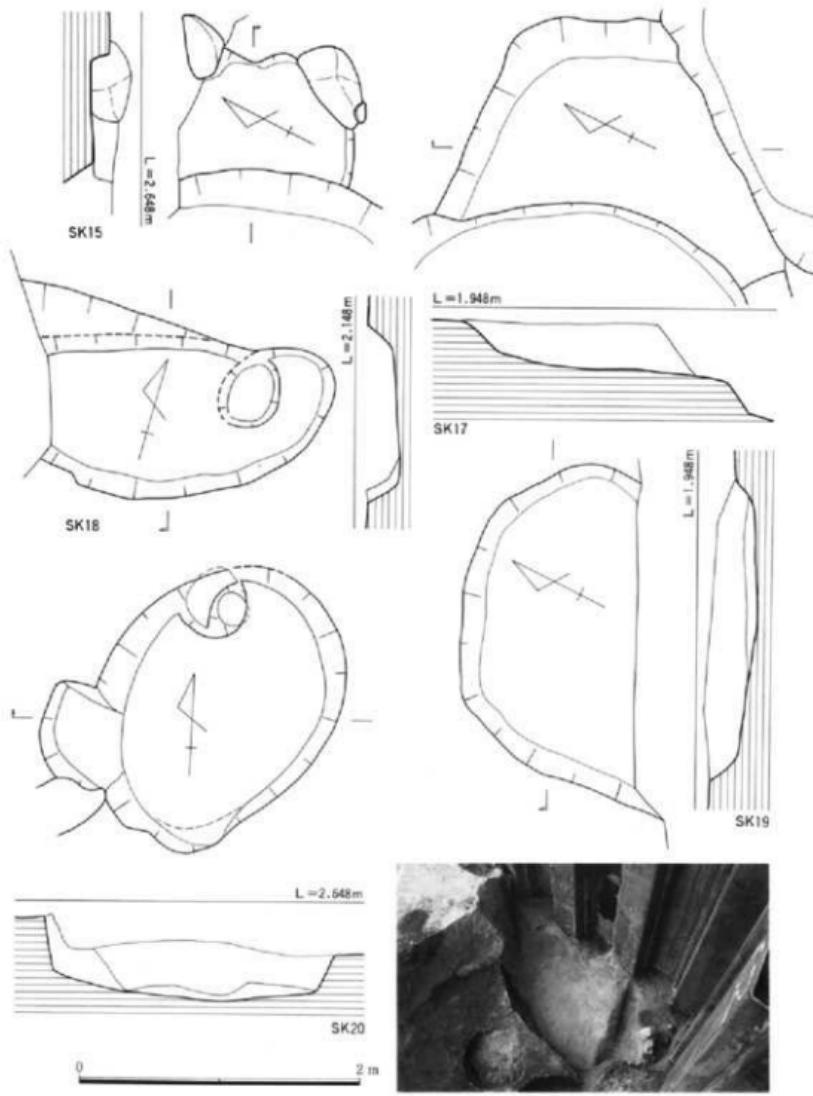


Fig.12 土壌SK15・17~20実測図 (縮尺 1/40)

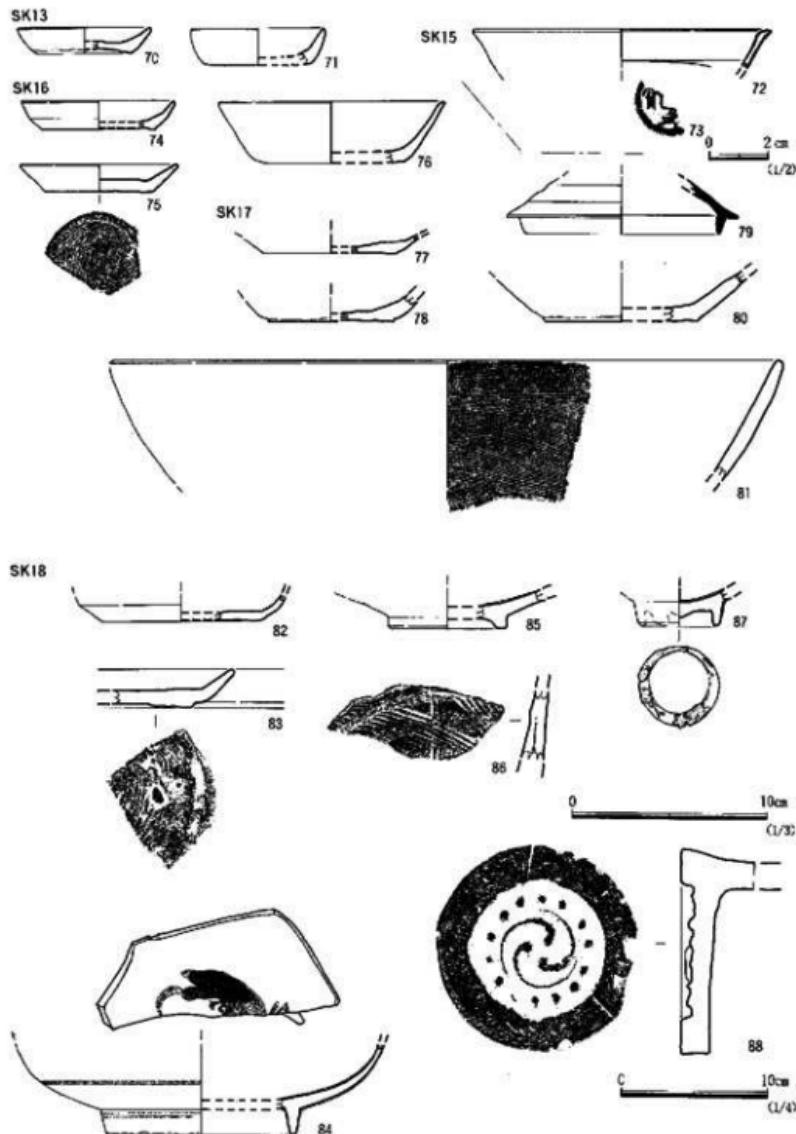


Fig.13 上層 SK13・15~18出土物実測図 (縮尺 1/2・1/3・1/4)

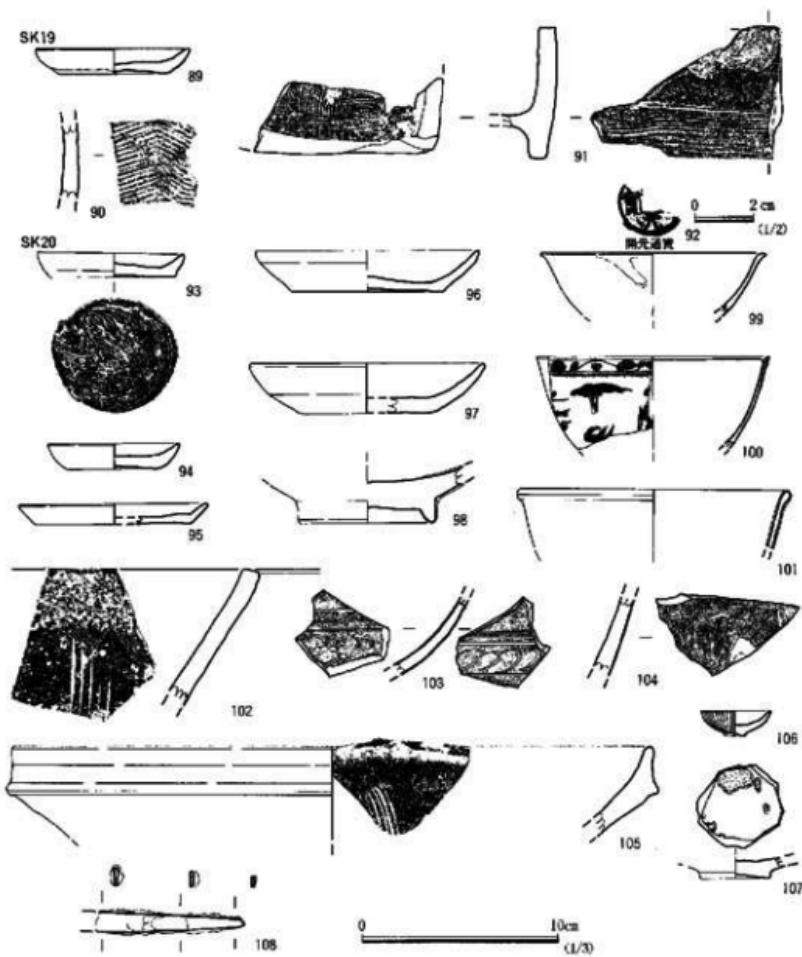


Fig.14 土塹SK19・20出土遺物実測図 (縮尺 1/2・1/3)

で、象嵌を施す。104は瓶、103は碗である。103の象嵌には白色粘土と黒色土を用いている。102は上部質上器の摺鉢で、5本単位の下し目がある。105は備前焼押鉢のN期、106は伊万里の紅皿である。107は李朝の皿で、内底と外底に砂目が残る。暗灰青色釉である。108は鉄製刀子で、刃部を破損している。

SK21 (Fig. 15) 井戸SE19に切られる。北側境界地に位置しているが、平面形は丸長方形と考

えられる。最大の長さ188cmを測る。北側境界地の斜面が崩壊する危険性があったため、発掘は未完了である。規模からみて、井戸であろう。

遺物 (Fig. 17) の内、109・110は土師器糸切り皿、111～113は土師器の杯である。110には板目痕がある。115は国産陶器の甕で、海上り品である。116は瓦質土器の火合で、突帯上部に木葉文の印刻がある。117は軒平瓦で、瓦当面の中心飾りに宝珠形を用い、5回転の唐草文を左右に配する。蔓草は唐草から一本ずつ派生している。118は丸瓦で、内側に繩紐痕がある。

SK22 (Fig. 15) 北側境界地に位置するため、遺構の全形は不明である。井戸SE19、上塙SK21、SX18と切り合い関係にある。平面形は不整の隅丸方形を呈しており、最大の長さは200cmを測る。土塙SK21はSK22のはば中央に位置する。本発掘のために用途は不明であるが、井戸の可能性もあることから、SX18・SK21・22は一体の遺構と見做すこともできる。

遺物 (Fig. 17) の内、119は土師器皿で、板目痕がある。120は土師器杯、121は瓦質土器の擂鉢、122は三島手の李朝象嵌粉青沙器で、瓶の破片であろう。124は軒平瓦、123は丸瓦である。123の背部には纏目叩き痕がある。

SK21・22出土遺物 (Fig. 17・18) 126は土師器の杯、127は瀬戸・美濃系の皿、128は朝鮮白磁の皿、129は庄津焼皿、131は備前焼の擂鉢、132は上野焼の片口である。130は鉄製釘である。125は半瓦で、凹部に布目があり、凸部に斜格子叩きを施す。

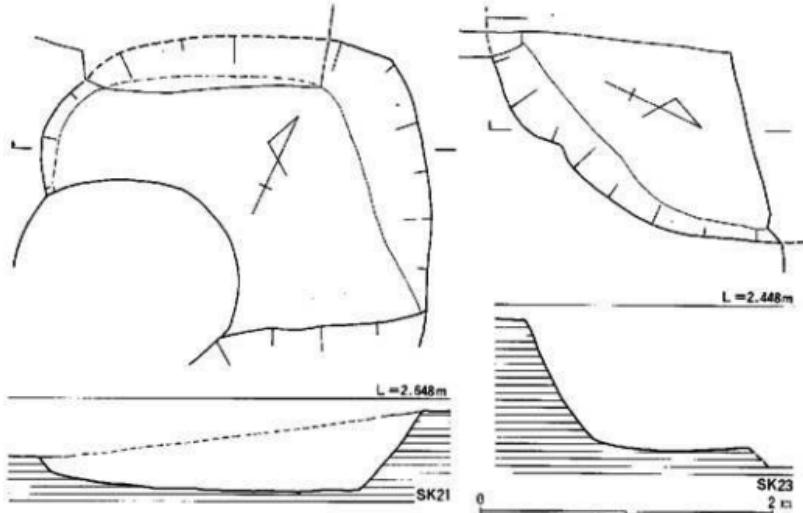


Fig. 15 上塙SK21・23実測図 (縮尺 1/40)

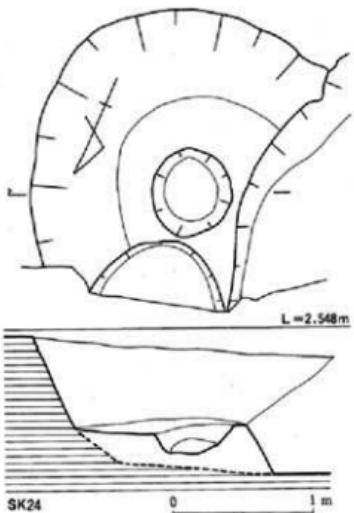
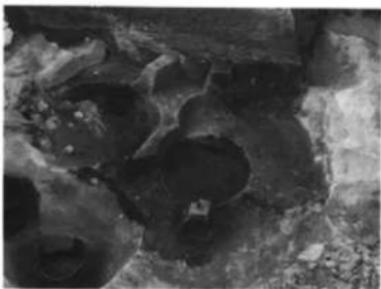


Fig. 15 土塹SK24実測図 (縮尺 1/40)



土塙SK20～22、井戸SEI9、SX11 (南から)



土塙SK24 (西から)

SK23 (Fig. 15) 北西側の境界地に位置するため規模は不明である。平面形は不整円形である。深さは41.5cmを測る。

遺物は中世の上部器片などが出土した。

SK24 (Fig. 16) 北側境界地に位置し、SK23に切られている。平面形は不整円形を呈し、底面に直径57cmを測るPitが存在する。井戸と考えられるところから、この小Pitは曲物を据えた位置であろう。掘り方の深さは83.5cmを測る。

遺物 (Fig. 18) の内、133は土器皿、134は壺である。135は明の染付皿で、長筒底である。136は龍泉窯系青磁碗で、外面に線彫りの鶴蓮弁文を施す。137は瀬戸天目碗、138は瓦質土器摺鉢の底部片、139は水注の把手、140は備前焼のN期摺鉢である。

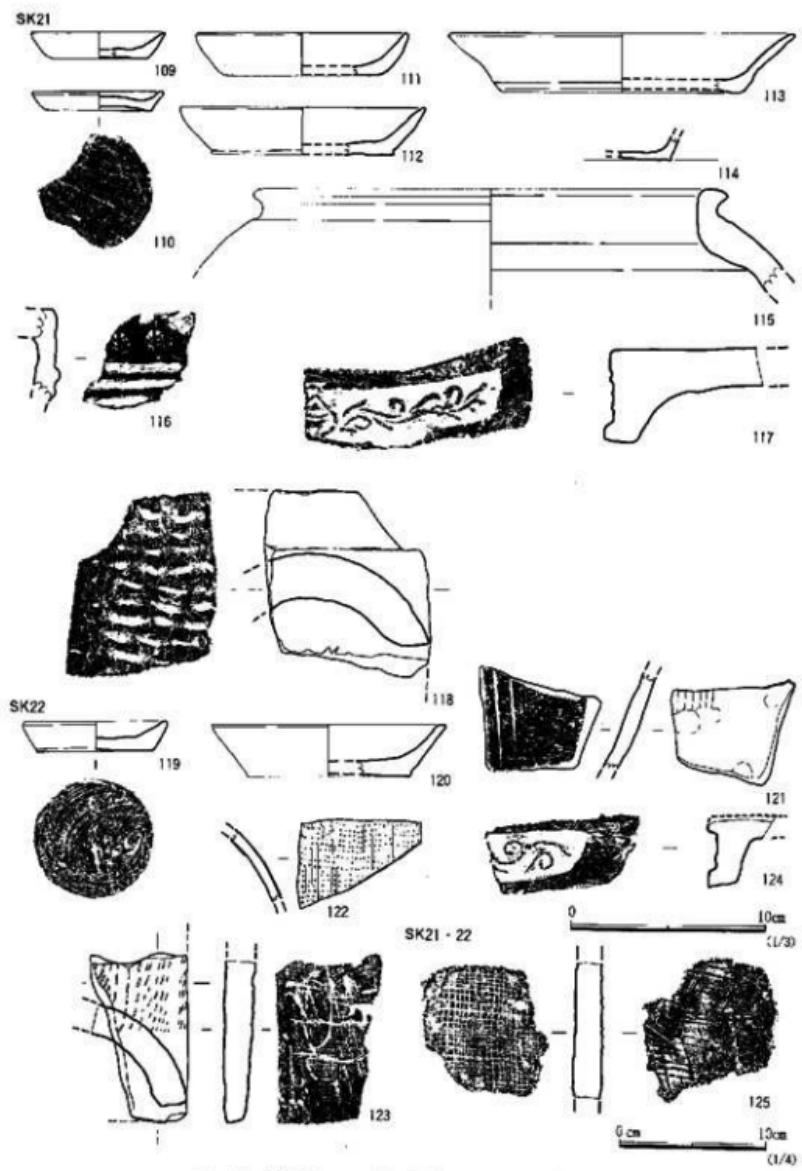


Fig.17 十渡SK21・22山上遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）

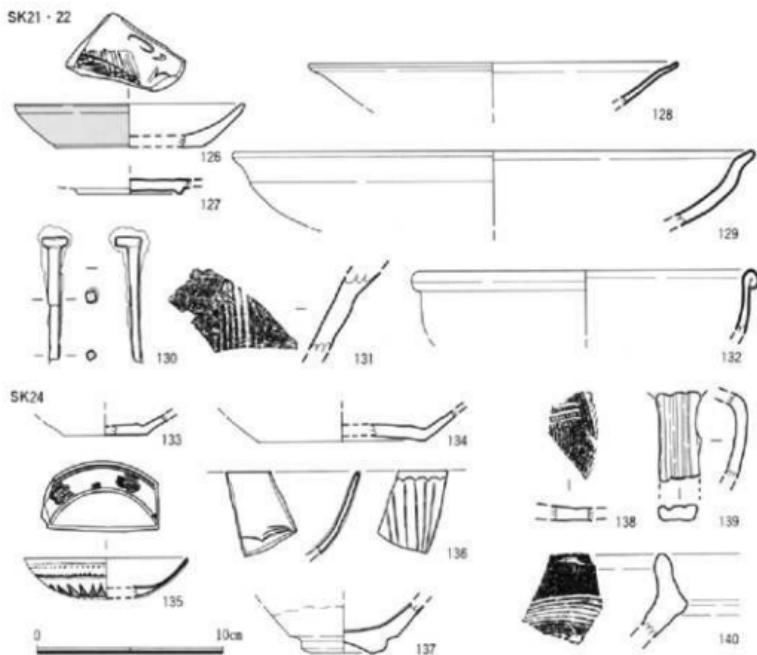
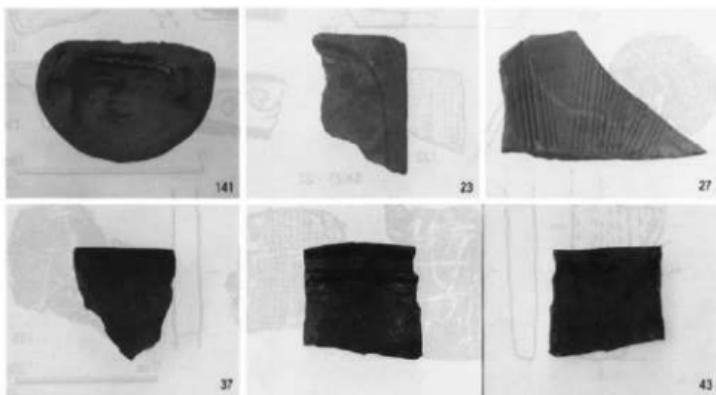
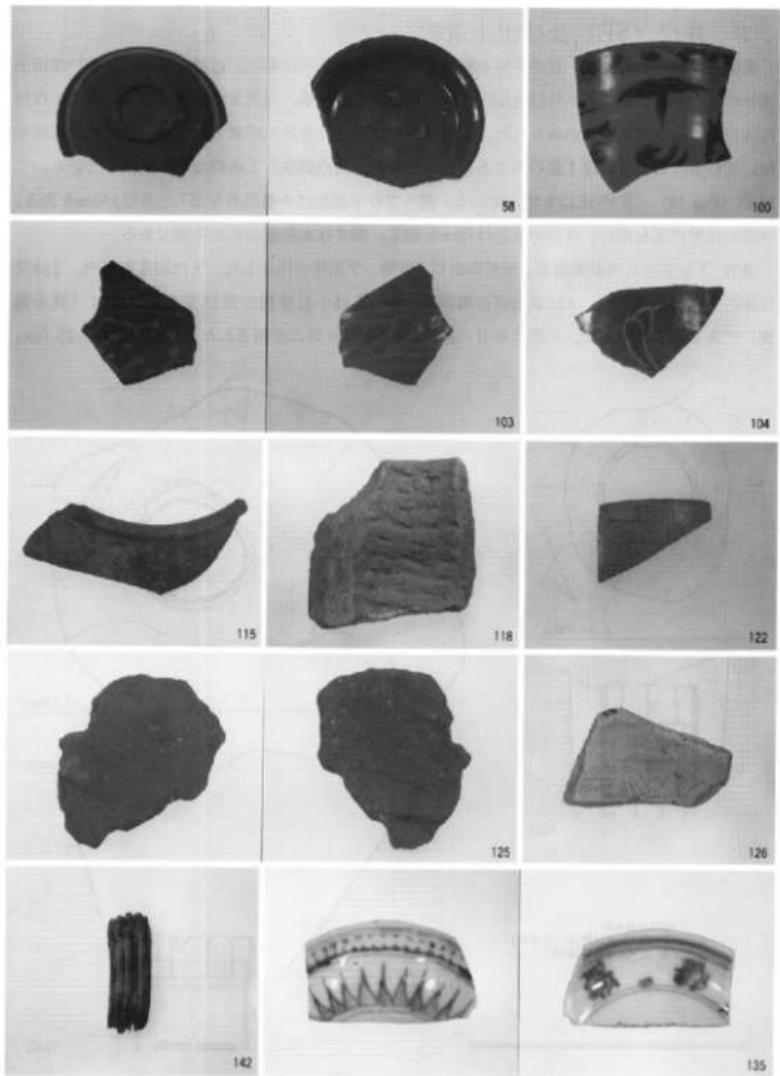


Fig. 18 土壌SK21・22・24出土遺物実測図（縮尺 1/3）



土壌SK02・03・06出土遺物

番号は実測図の番号に一致する
141はSK02出土



土壤SK10・20~22・24出土遺物

番号は著者による
一致する
142:SK22出土

(2) 井戸 (SE) 及び出土遺物

素掘り井戸・石組井戸・瓦井戸等を検出した。特に瓦井戸は多く、11基に及ぶ。瓦井戸は出土遺物により、17世紀初頭から19世紀迄に作られており、一部、現代まで使用されている。年代毎に井戸瓦の大きさに違いがみられた。素掘り井戸は、全て中世の所産であるが、井筒には木桶を用いている。石組井戸は1基のみである。上部を調査前の掘取り工事のために破損している。

SE01 (Fig. 19) 井戸SE15を切っている。掘り方の平面形は不規円形を呈し、長径140cmを測る。井筒には井戸瓦を用い、井筒の直径は73cmを測る。深さは未発掘のため不明である。

遺物 (Fig. 20) には舶載磁器、国産陶磁器、貨幣、平瓦等が出土した。1は国産陶器碗、2は染付杯、3は同安窯系碗、4は筑前産の陶器片口鉢、5は小石原焼の摺鉢である。6は「寛永通寶」である。7は平瓦で、凹部に布目がある。8・9は井筒に使用された井戸瓦で、長さ25.0cm、

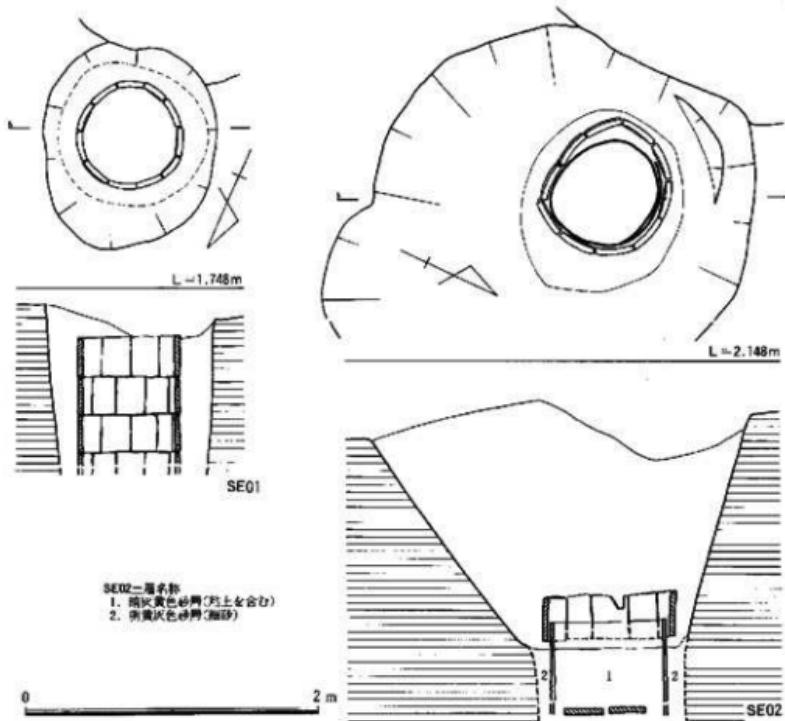
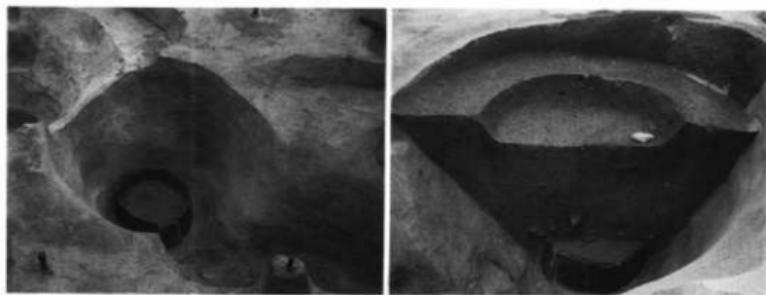


Fig. 19 井戸 SE01・02発掘図 (縮尺 1/40)



井戸SE02(南から)

井戸SE02土層状態(東から)

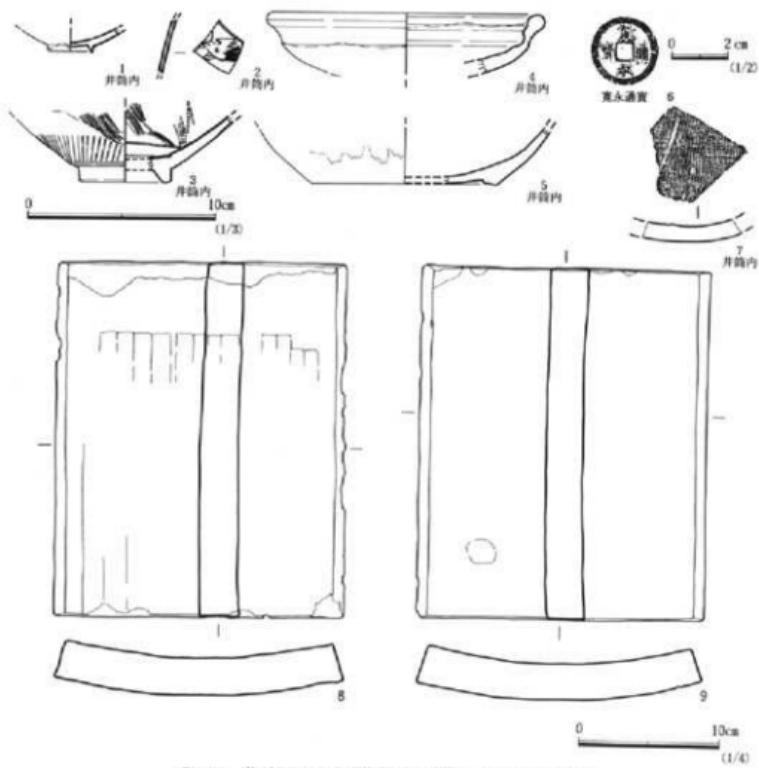
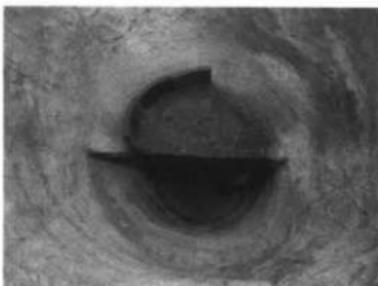


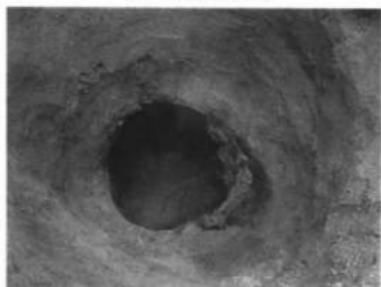
Fig. 20 井戸SE01出土遺物実測図(縮尺 1/2・1/3・1/4)



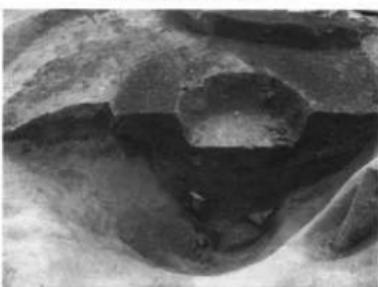
井戸SE03（南から）



井戸SE03底面（南から）



井戸SE04（東から）



井戸SE04土層状態（西から）

幅20.5cm、厚さ2.8cmを測る。

SE02 (Fig. 19) 挖り方の平面形は不整円形を呈し、長径280cmを測る。井筒は井戸瓦を用いるが、底面には木桶を据えている。井戸瓦は最下部の一段目のみ遺存する。井筒の直径は約90cm、桶の直径は74cm、深さ143cm以上を測る。

遺物 (Fig. 23~26) は土師器壺・皿、唐津焼、伊万里焼、瀬戸焼、備前焼、土師質土器、瓦質土器、瓦類、砥石、鉄製品が出土した。11~59は掘り方より出土した。11~18は土師器の皿で、いずれも糸切り底である。19・20は糸切りの土師器壺である。21~33は陶磁器の皿で、28は明の白磁皿、22~26は唐津焼皿で、22は溝縁皿、24は絵唐津である。25の内底には胎土目痕がある。27は内山窯の銅緑釉皿、29は肥前青磁釉皿、30は舶載の白磁皿である。31・33は肥前染付皿、34は染付小杯である。35~44は陶磁器で、35は龍泉窯系青磁碗、36は白磁碗、37は肥前半磁器碗、38は肥前白磁碗、39は青磁香炉、40は肥前青白磁碗である。40の内底には目痕がある。41~44は陶器碗で、41は肥前陶器碗、42は上野焼、43は天目、44は瀬戸天目である。45~49は陶器摺鉢で、45・46は備前焼、47~49は唐津焼である。50は東播系須恵質鉢、51は瓦質土器摺鉢、52は土師質土器鉢、53・54は国産陶器甕、57は唐津焼壺、55・56は朝鮮系の須恵質土器、58・59は瓦質土器

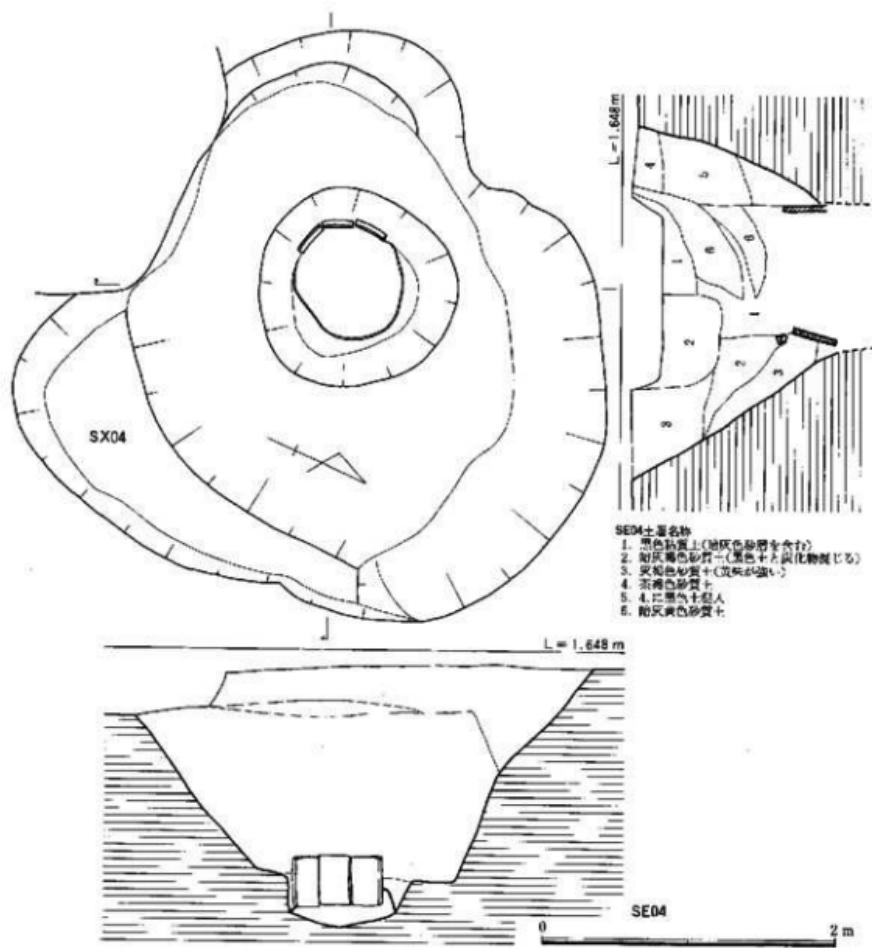


Fig.21 井戸SE04実測図(縮尺1/40)

の火舎である。59の外面には雷文のスタンプがある。

60～82は井筒内から出土した。60は糸切りの土師器皿、61・82は土師壺、63は同産の皿、64・65は香炉で、64は染付、65は小石原産である。66～68は碗で、66は京焼、67は染付、68は唐津焼である。69～73は摺鉢であるが、69は高取焼、70～72は備前焼、73は瓦質土器である。75・76は瓦質土器で、75は火舎で、76は大鏡片であろう。77・78は鉄製品で、78は釘である。79は砥

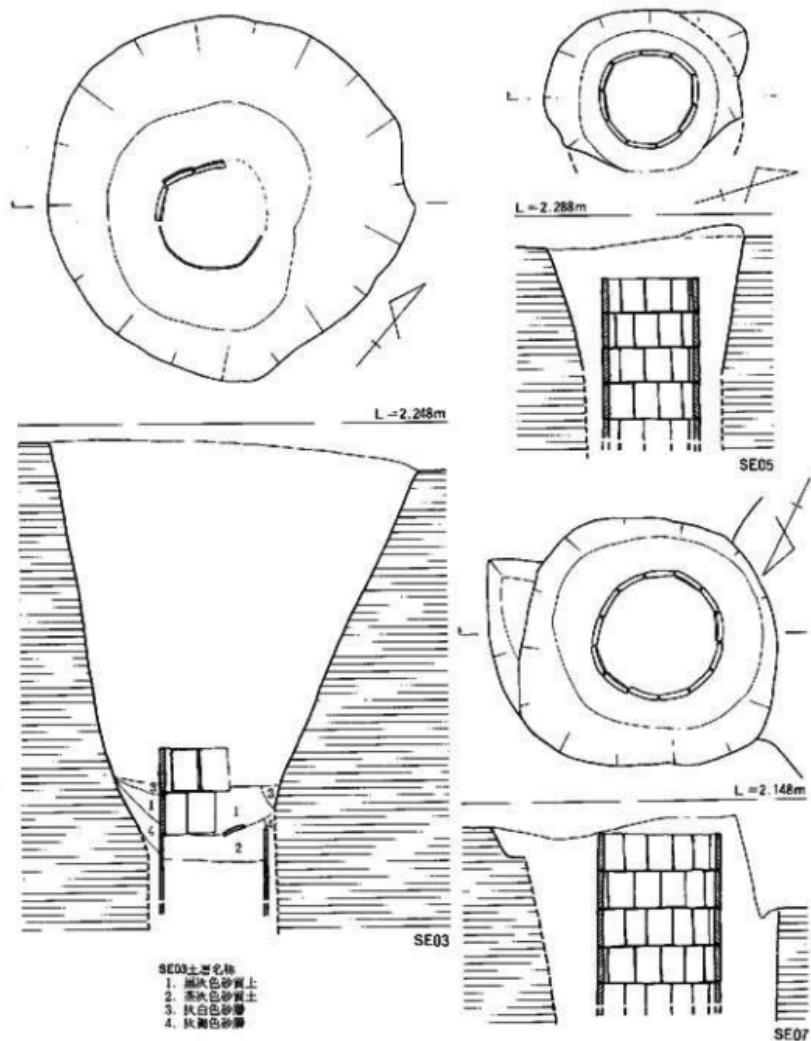


Fig.22 井戸SE03・05・07実測図(縮尺 1/40)

右、80は平瓦である。81・82の井戸瓦は長さ29.8cm、幅25.8cm、厚さ3.0cmを測る。

SE03 (Fig.22) 挖り方の平面形は不整円形を呈する。瓦井戸である。掘り方の深さは約287cm以上で、井筒の直径は75cmを測る。井筒の瓦はほとんど抜き取られており、下から2段分しか遺存していない。底部には木桶を据えており、直径70cm、高さ20cm以上を測る。

遺物 (Fig.27・28) は土師器皿・皿、肥前系陶磁器、船載陶器、備前焼、瓦質土器、瓦類が出土した。16~17世紀の所産と考えられる。83・87・88・90・92~94・100・102・103・105~107は井筒内出土、他は掘り方からの出土である。83~85は土師器の糸切り皿、87・88は土師器皿、86は船載白磁皿、89は唐津焼皿、90は肥前染付碗、91は上野焼薬灰釉の碗、92は李朝陶器碗、93は唐津焼溝縁皿、94は船載陶器盤である。95・96は薄手の陶器で、内面に青海波・同心円状の叩きを施す。胎土は暗褐色を呈しており、李朝陶器と考えられる。97~99は瓦質土器で、97は火舎、98・99は指鉢である。100は唐津系押鉢で、口縁部内外面に施釉する。101は炻器系の甕で、備前焼と考えられる。102は鍋の羽口である。103・104の丸瓦は凸面に縦目叩きがある。105は平瓦、106・107は井戸瓦であるが、この井戸瓦の長さは31.0cm、幅24.7cm、厚さ2.9cmを測る。

SE04 (Fig.21) 井戸SE02に切られる。掘り方の平面形は不整隅丸長方形を呈し、長径336cm、深さ176cmを測る。井筒の井戸瓦は下部の一段のみ遺存しており、底には木桶の痕跡がある。桶の直径は約74cmを測る。

遺物 (Fig.29・30) には土師器皿・皿、李朝陶磁器、明染付、唐津焼、高取焼、瓦質土器、瓦類、鉄製品、石製品、坩堝がある。16世紀末~17世紀初頭の所産であろう。108~110・124・131・133・134・137・139・140は掘り方からの出土で、他は井筒からの出土である。108・109は土師器の糸切り皿、110~114は土師器の糸切りの皿、115は龍泉窯系の葱弁文青磁碗、116・117は李朝陶磁器で、117は白磁である。118は明染付皿、119は唐津焼碗、120は上野・高取系の碗、121~123は唐津焼皿で、121・123は臉唐津である。124~127は陶器の片口で、124は唐津焼、126・127は筑前焼であろう。128は陶器の破片である。129は土師質土器の指鉢、130~133は瓦質土器で、130は指鉢、131~133は火舎である。133の外側には梅花文の刻印がある。134は坩堝、135は石製鋸、136は石臼の受皿の部分である。137・138は用途不明の鉄製品、139・140は軒平瓦、141・142は井戸瓦である。軒平瓦139の中心飾りには三葉文を用いている。井戸瓦の人大きさは長さ30.8cm、幅24.5cm、厚さ3.2cmを測り、SE03の井筒に用いている井戸瓦と同一規格である。

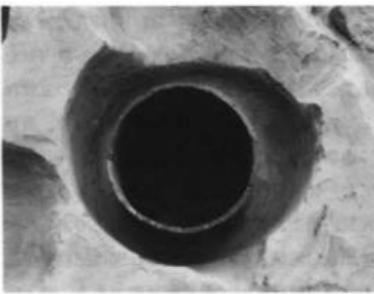
SE05 (Fig.22) 丸井戸である。井戸SE12を切っている。掘り方径は小さく、長径134cmを測る。平面形は不整円形を呈する。井筒は直径68cm、深さは98cm以上を測る。完全に発掘していないため、井戸瓦のみ採取した。

遺物 (Fig.31) には143・144の井戸瓦がある。大きさは長さ24.9cm、幅20.6cm、厚さ2.8cmを測り、SE03・04出土の井戸瓦に比べ小形である。

SE07 (Fig.22) 調査区の東側境界地に位置する。瓦井戸SE14を切っている。瓦井戸で、掘り方



井戸SE05（東から）



井戸SE06（北から）



井戸SE07（西から）



井戸SE05・12（南から）



24



34



45



59



69

井戸SE02出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。

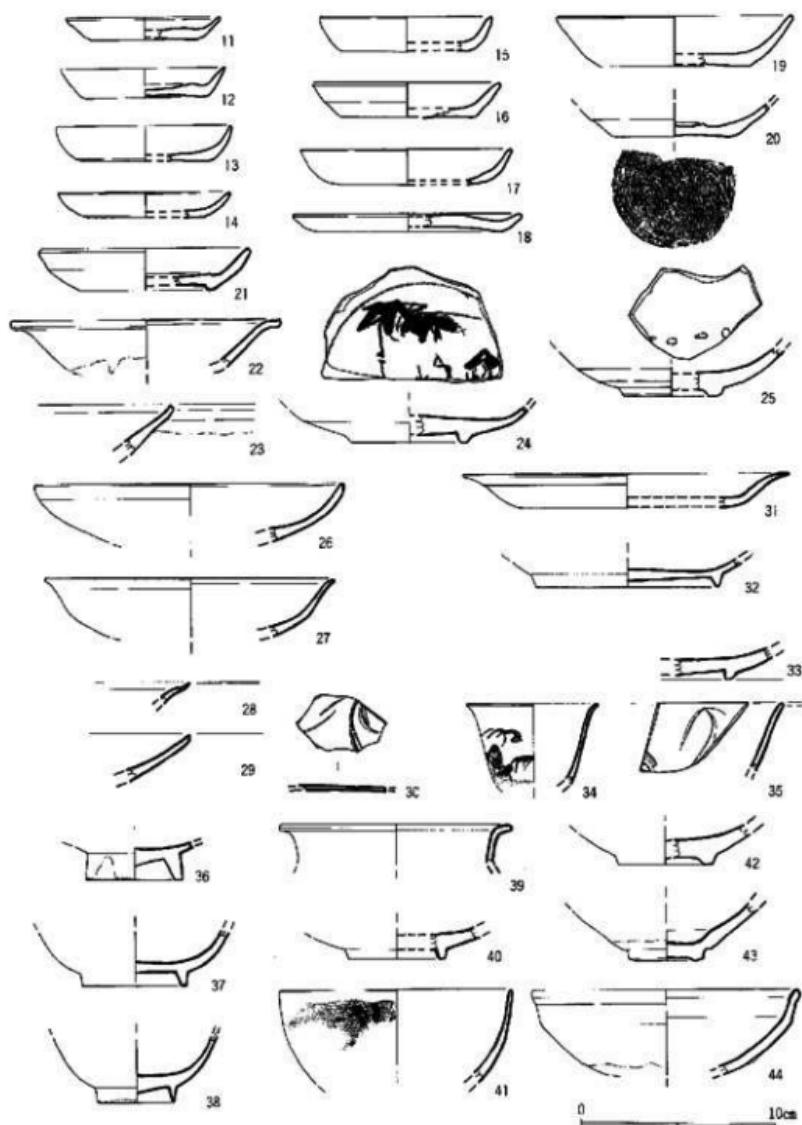


Fig. 23 井戸SD02掘り方山三遺物実測図 ① (縮尺 1/3)

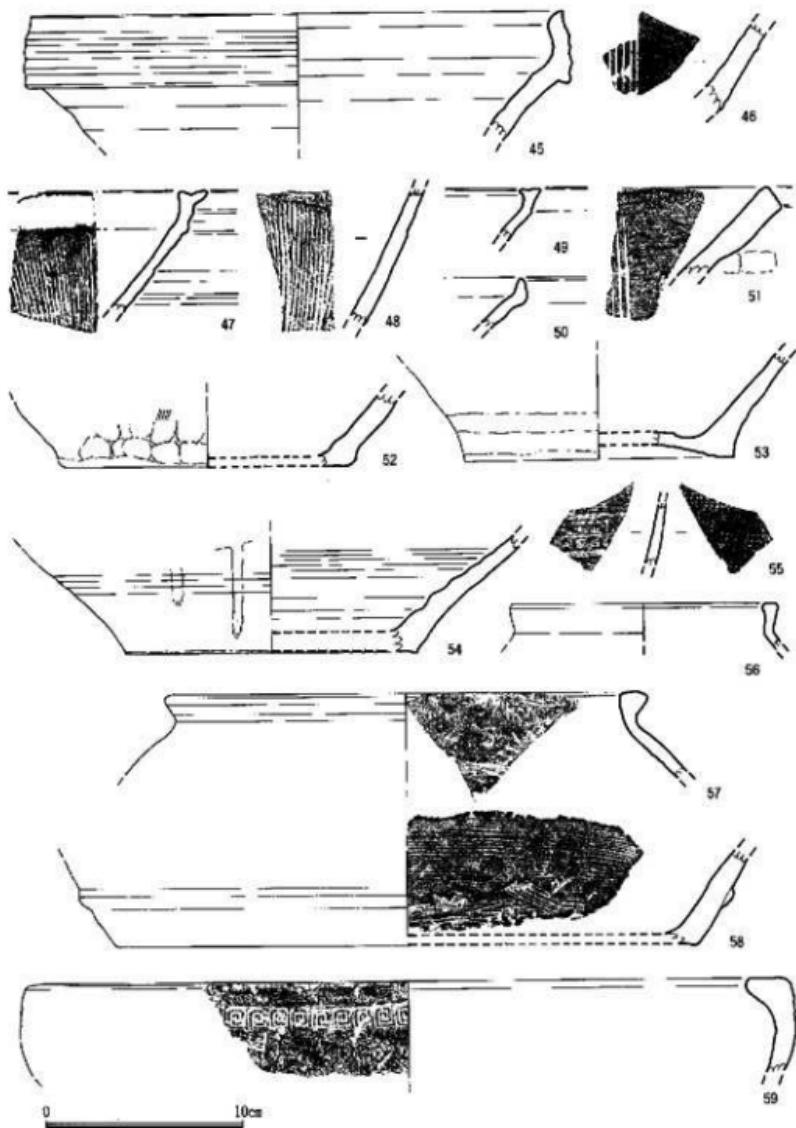


Fig. 24 井戸SE02掘り方出土遺物実測図 ② (縮尺 1/3)

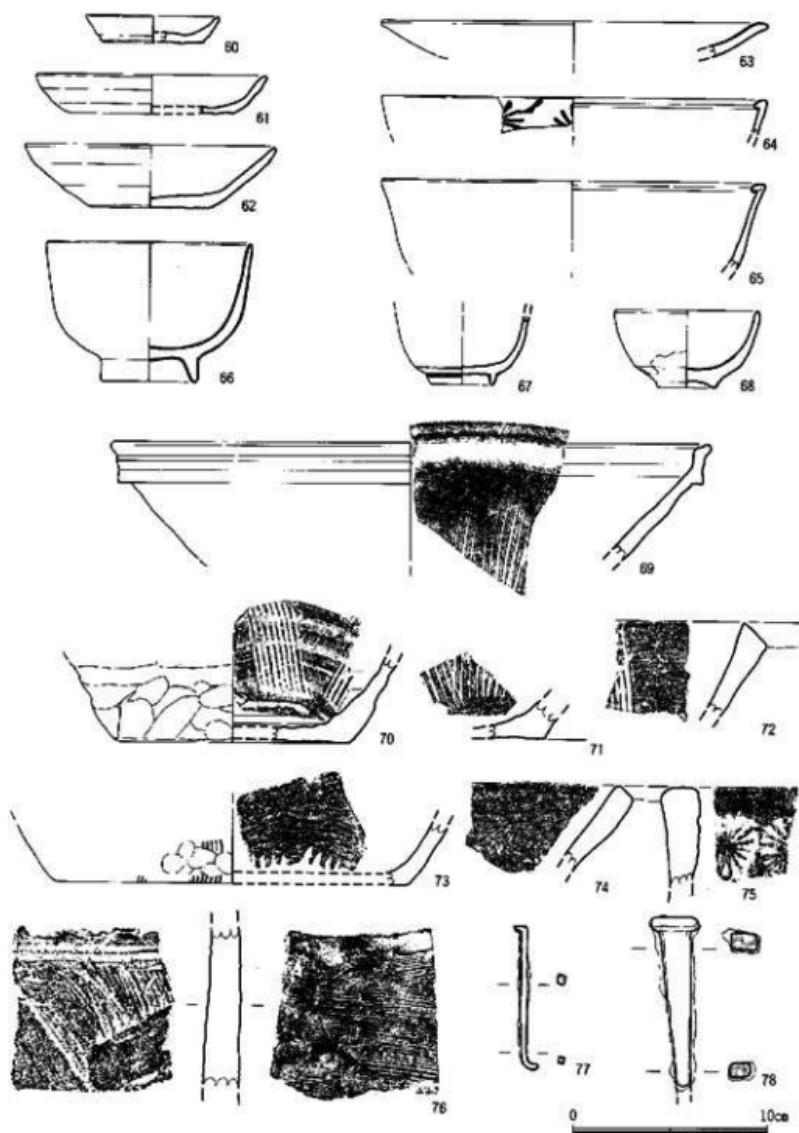


Fig. 25 井戸SE02井筒出土遺物実測図 ③ (縮尺 1/3)

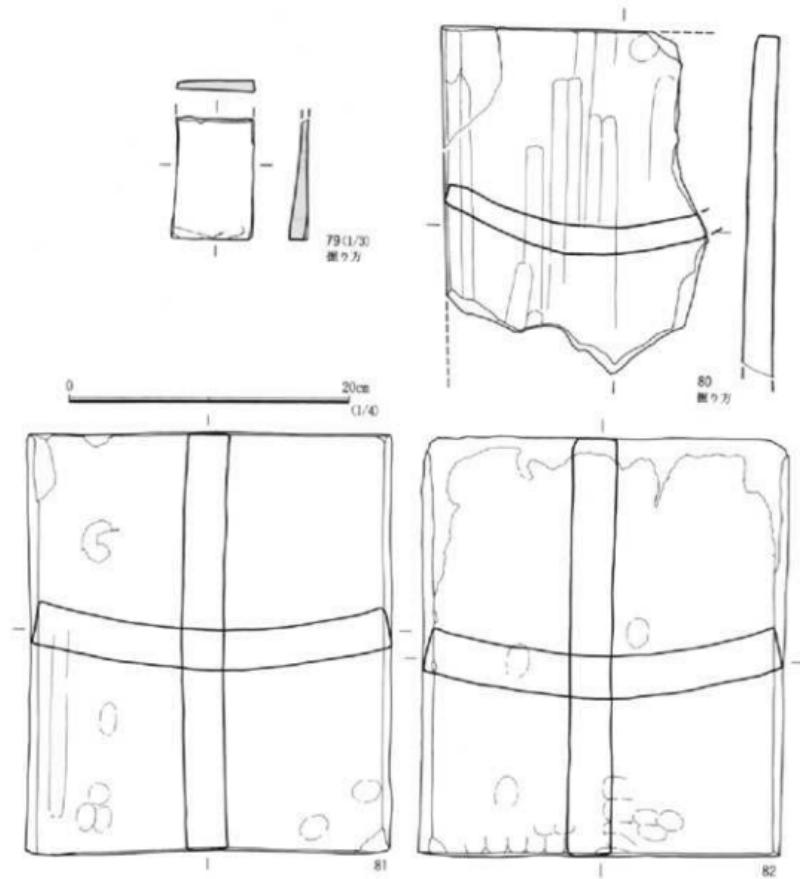


Fig.26 井戸SE02出土遺物実測図 ④ (縮尺 1/3・1/4)



SE02出土遺物

番号は実測図の番号に一致する。

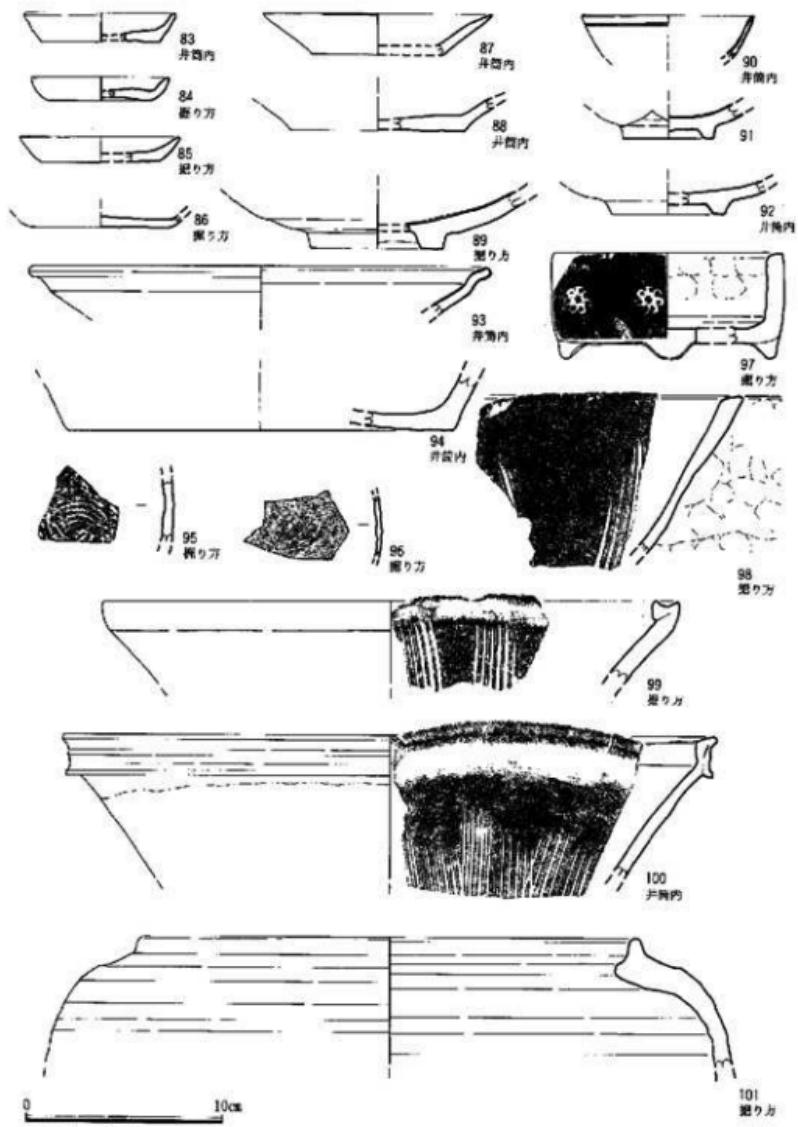


Fig. 27 井戸 SE03山土遺物実測図 ① (縮尺 1/3)

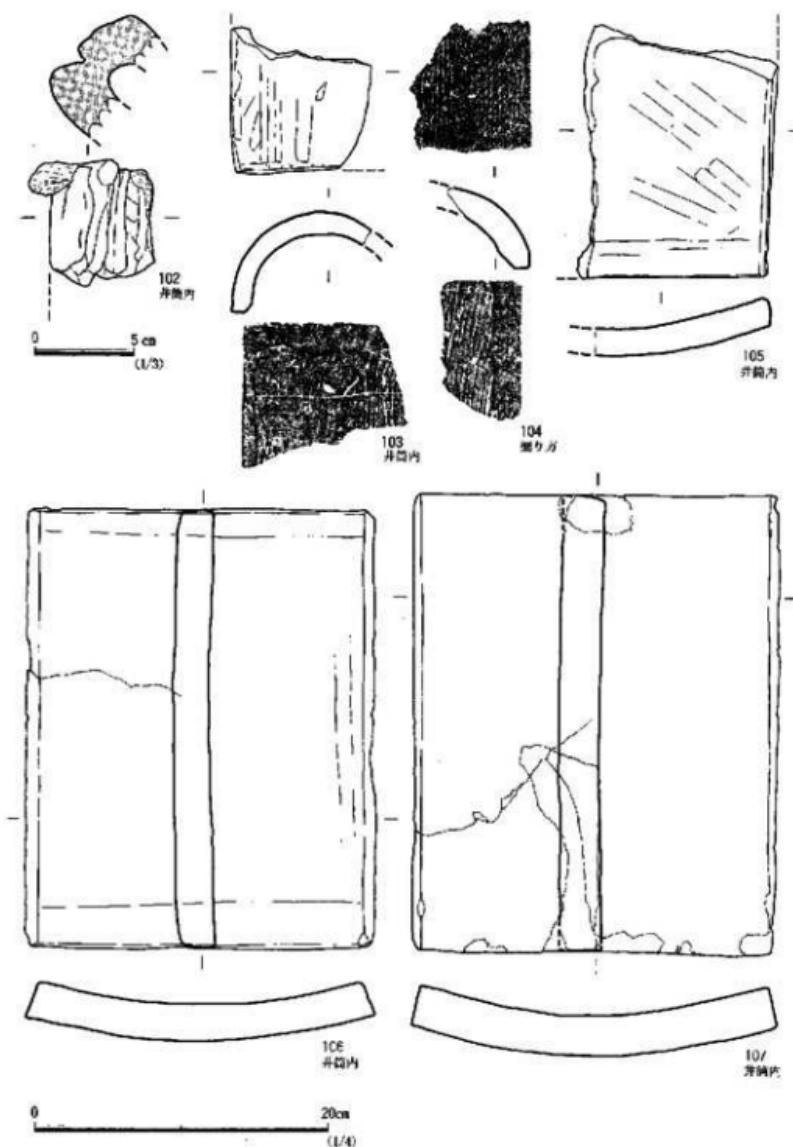


Fig. 28 井戸SD03出土遺物実測図 ② (縮尺 1/3・1/4)

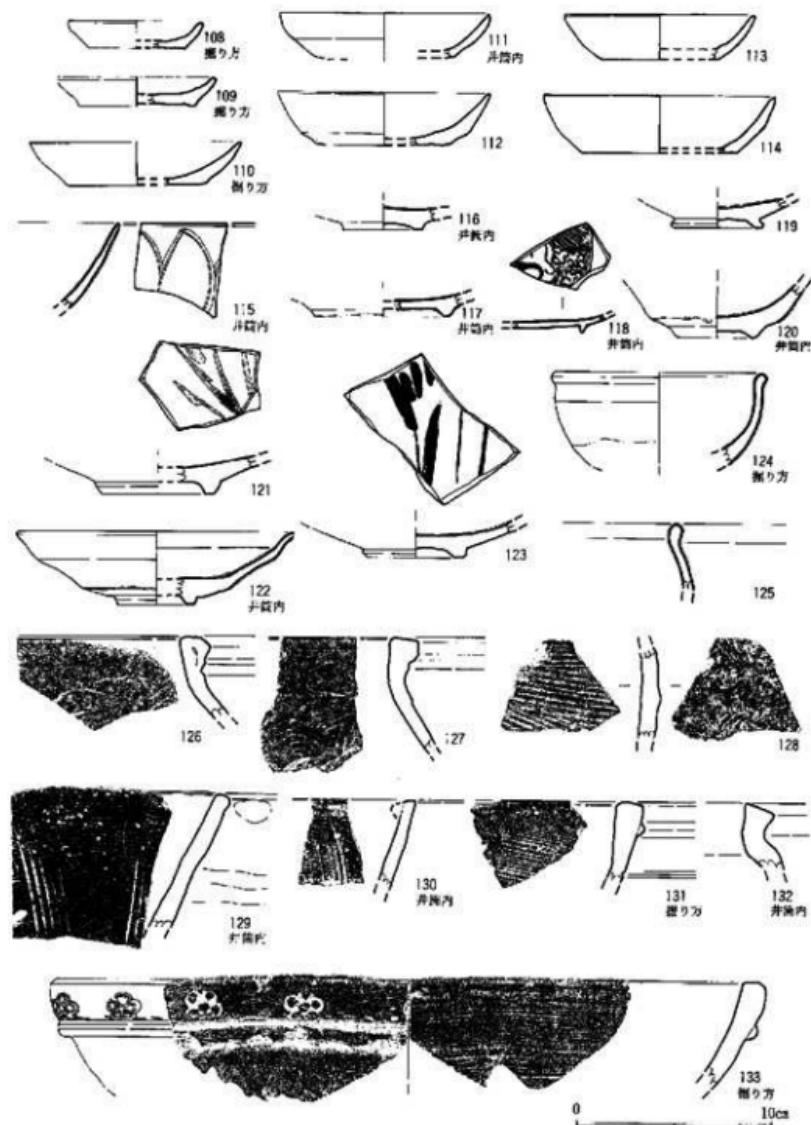


Fig. 29 井戸SE04出土遺物実測図 ① (縮尺 1/3)

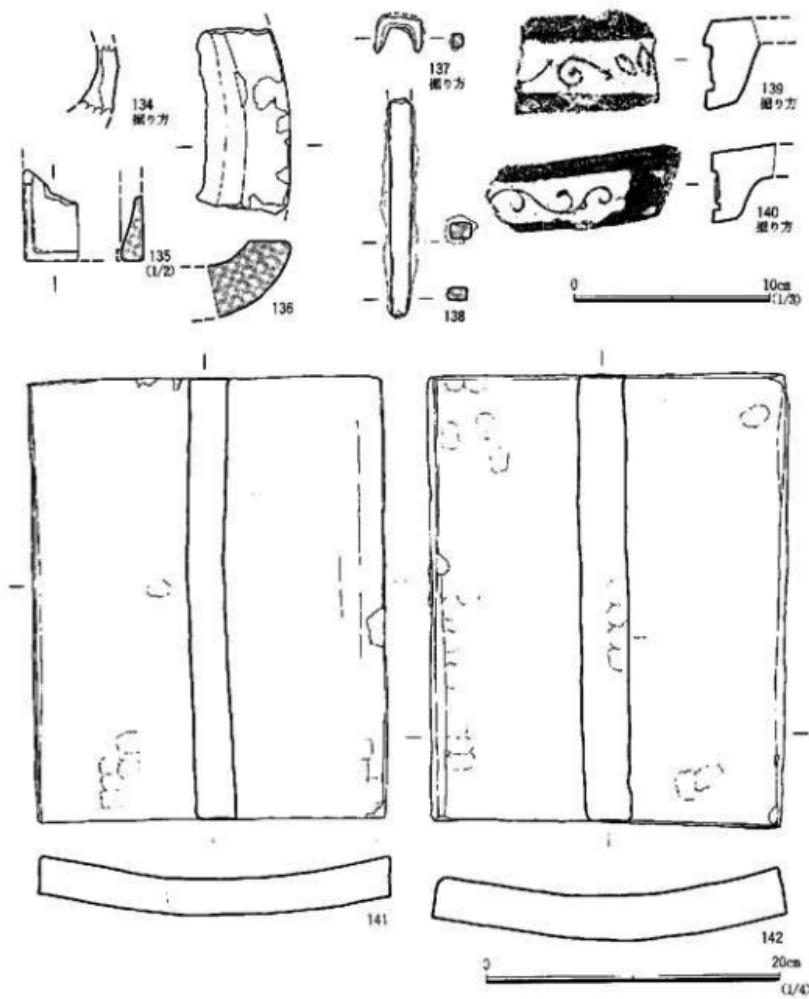
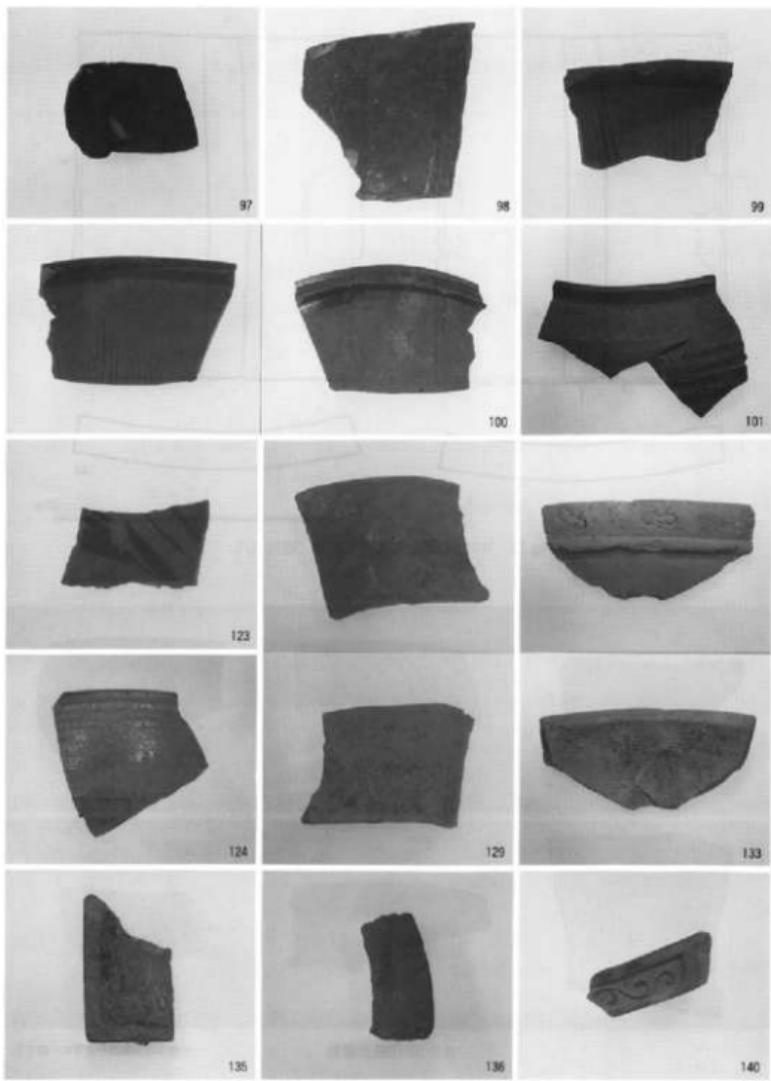


Fig. 30 井戸SE04出土品実測図 ② (縮尺 1/2・1/3・1/4)

は不整円形を呈している。井筒は井戸瓦を用いており、直径84cmを測る。深さは5段目まで確認した。

遺物には近世陶磁器類が出土したが、図示し得ない。



井戸SE03・04出土遺物

※数字は実測図の番号と一致する。

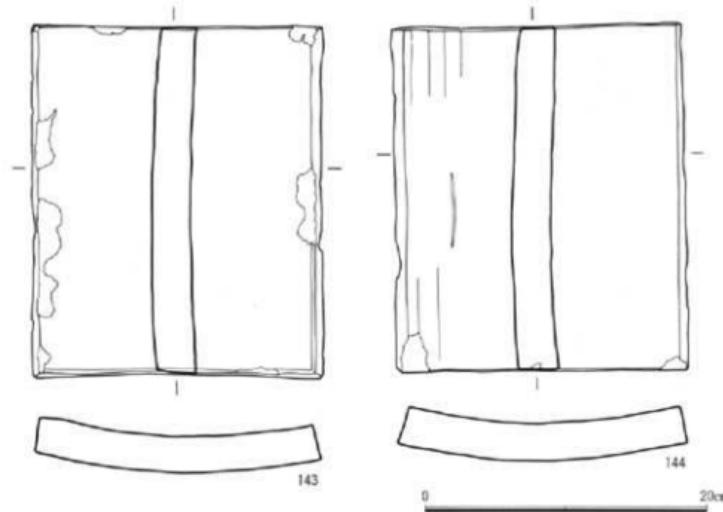
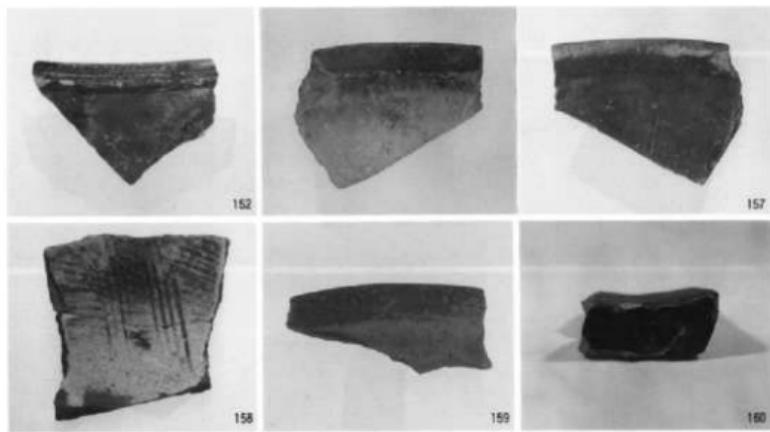


Fig. 31 井戸SE05出土遺物実測図（縮尺 1/4）



井戸SE12出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。

SE12 (Fig. 32) 五井戸である。井戸 SE05に切られる。掘り方の平面形は不整円形を呈し、長径242cmを測る。井筒の瓦は5段以上遺存しており、直径85cm、深さ87cm以上を測る。

遺物 (Fig. 33・34) は土師器坏、肥前系陶器器、瀬戸焼、高取焼、瓦質土器、瓦類、貨幣、上鍵等がある。145～147は土師器坏で、145・146は糸切り瓦である。148は青白磁で、内底は釉ハギがある。149・150は陶器碗で、150は施洋焼である。151は瀬戸焼の波状口縁皿である。152～155は陶器で、152は高取系片口、153も同じく高取系壺鉢である。156～159は瓦質土器で、156・157は壺鉢、159は火舟である。159は備前焼のV期壺鉢の模倣と考えられる。160は軒平瓦、162は「開元通寶」、163は上鍵である。164は井戸瓦である。161は茶臼の破片で、上面に擦り目がある。

SE13 (Fig. 5) 素掘り井戸と考えられる。掘り方の平面形は不整円形を呈し、長径180cm、深さ

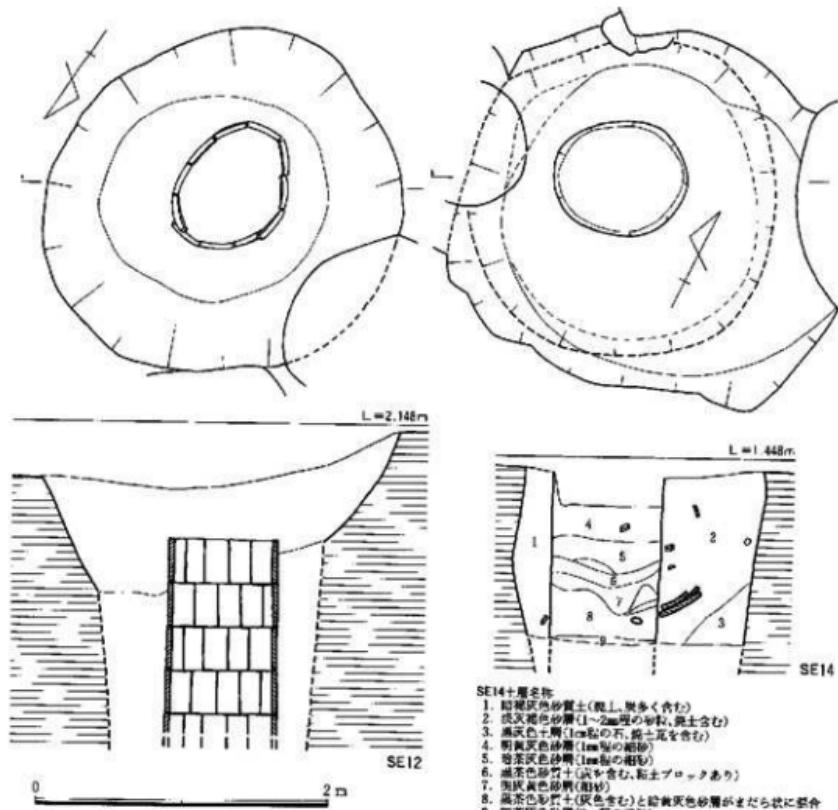


Fig. 32 井戸 SE12・14実測図 (縮尺 1/40)

26cmを測る。

遺物（Fig.34・35）は土師器皿・杯、船載青磁、肥前系陶磁器、土師質土器、瓦類が出土した。167～169は土師器の糸切り皿、170は土師器杯、171は青磁碗、172は肥前染付皿で、内底に菊枝文がある。173・174は肥前染付碗、175は陶器甕で、内面に青海波の叩き痕がある。176は土師質土器の摺鉢である。166は井戸瓦で、165は丸瓦である。

SE14 (Fig.32) 瓦井戸である。SE07に切られ、SX16を切っている。掘り方は大きく、平面形は不整円形を呈する。長径220cmを測る。瓦は抜き取られているが、土層観察により、井筒の直径は75cmを測る。

遺物（Fig.35～37）は土師器皿、船載磁器、肥前系陶磁器、関西系陶器、土師質土器、瓦類、鉄製品、青銅製品、貨幣が出土した。18世紀代の遺物を中心としている。178は船載白磁碗、179～181は龍泉窯系青磁碗、182・183は肥前染付碗、187は肥前染付の蓋物がある。184は唐津碗、185・186・188・189は陶器碗で、186・189は京焼系である。190～194は皿で、190は明の染付皿、191～193は肥前染付皿で、194は唐津焼皿である。195・197は陶器の片口である。195は肥前、197は筑



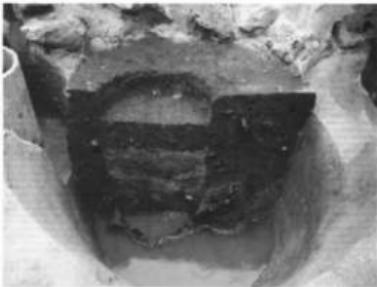
井戸SE12（南から）



井戸SE13（南から）



井戸SE14（東から）



井戸SE14（南から）

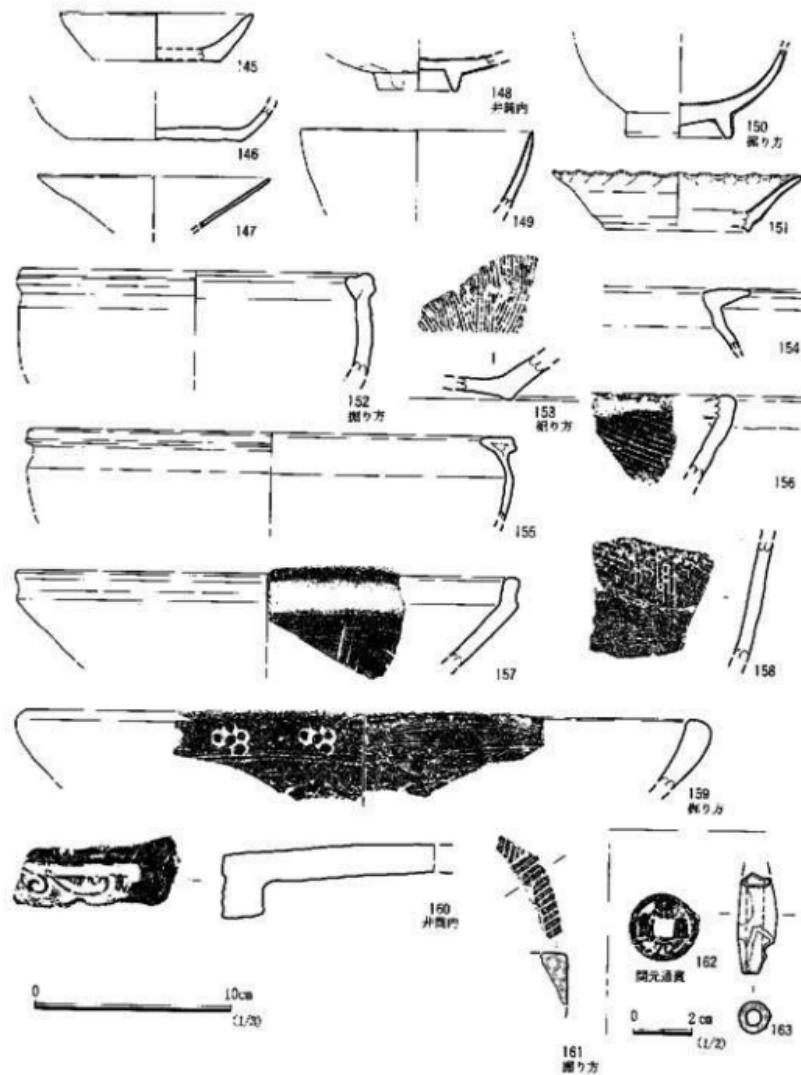


Fig.33 井戸SR12出土遺物実測図 (縮尺 1/2・1/3)

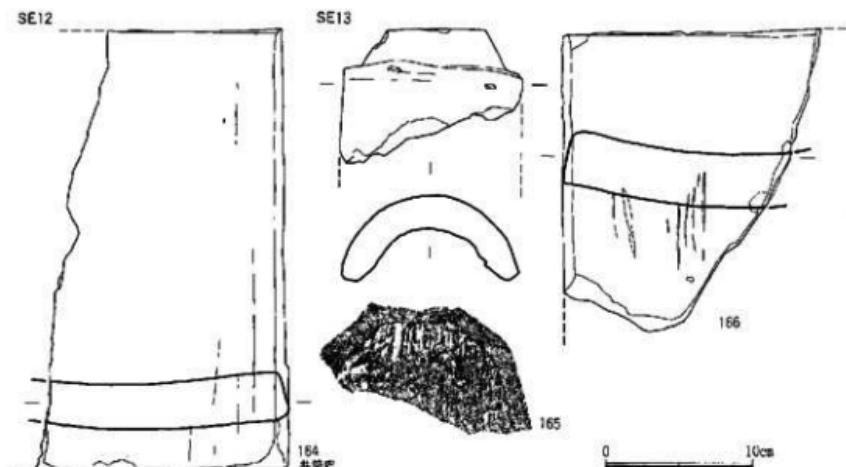


Fig. 34 井戸SE12・13出土遺物実測図(縮尺 1/4)

前段であろう。196は灯明具の秉燭、199・203は国産陶器摺鉢である。198は青磁香炉である。200は土師質土器の焰焰、201・202・205は瓦質土器で、202は火合である。204・206は体部が2重壁の構造になった素焼きの七輪である。207は鉄製釘、208は青銅製煙管の吸口部分、209は「祥符通寶」、210は「寛永通寶」、211・212は井戸瓦である。井戸瓦の大きさは長さ25.2cm、幅20.5cm、厚さ2.8cmを測る。SE05の井戸瓦と同一の規格である。

SE15 (Fig. 38) SE16を切っている。SE02、SX19などと切り合うため、掘り方の遺存状態は悪いが、平面形は不整円形であろう。直径約344cm、深さ190cmを測る。壇底は平坦で、井筒には木桶を用いる。直径82cmを測る。厚さ1.8cm、幅17~21cmの板材を26枚用いている。桶の高さは不明。桶の外間に1条の竹製のタガ旗がある。

遺物 (Fig. 39) は土師器皿・杯、高麗・李朝陶磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦類、鉄製品がある。213・215~222・225~231は全て井戸の掘り方出土である。213~217は土師器の糸切り皿、218~225は糸切り底の杯である。226は高麗青磁皿で、口径11.0cm、器高3.7cmを測る。227は瓦質土器の火合、229は瓦質土器の摺鉢、228は土瓶器の器台脚である。230の軒平瓦は瓦当部を欠しているが、平瓦部の凸部には、斜格子の叩き痕がある。231・232は鉄製の釣針である。

SE16 (Fig. 38) SE02・SE15に切られるため、形状をとどめていない。井筒には木桶を用いており、直径83cmを測る。桶の外面上部に竹製のタガが1条遺存していた。板材は厚さ1.6cm、幅15~

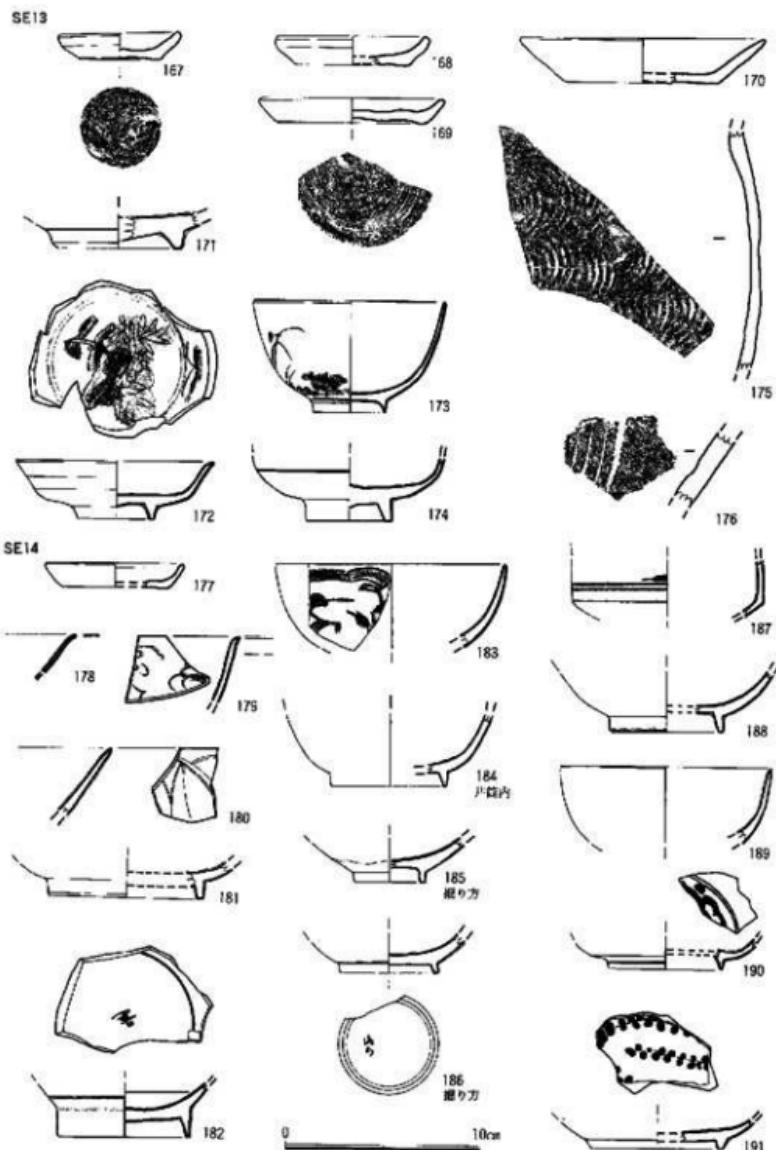


Fig. 35 井戸SE13・14出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

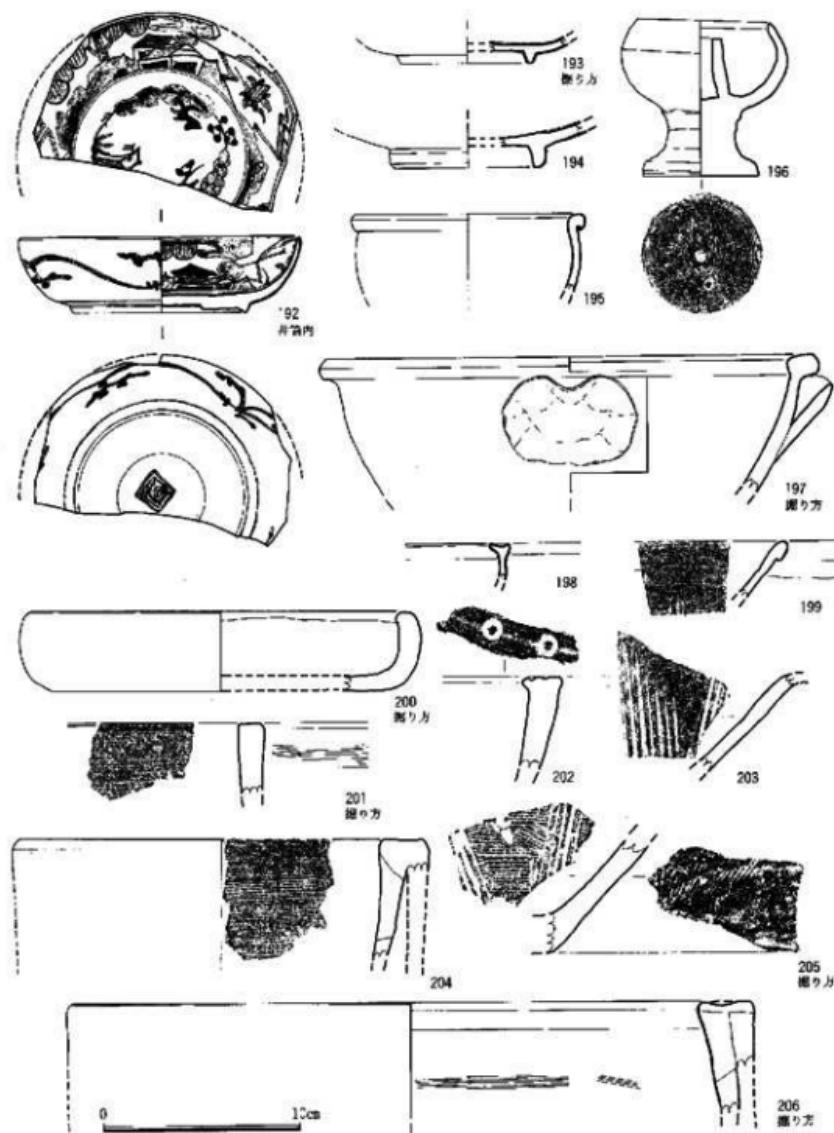


Fig.36 井戸SEI4出土遺物実測図 ① (縮尺 1/3)

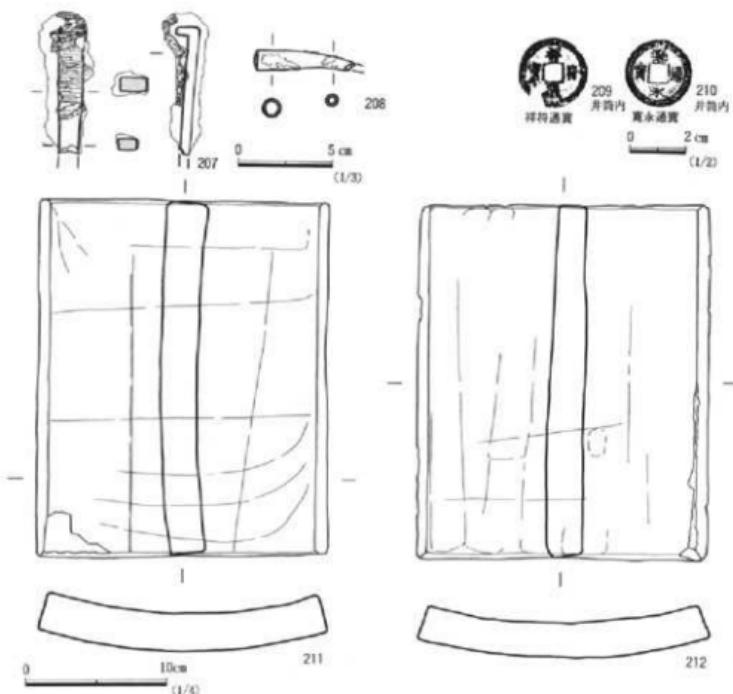
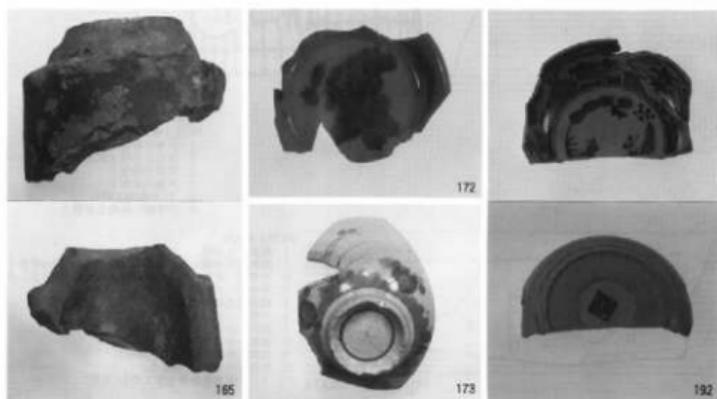


Fig. 37 井戸SE14出土遺物実測図 ② (縮尺 1/2・1/3・1/4)



井戸SE13・14出土遺物

主数字は実測図の番号に一致する。

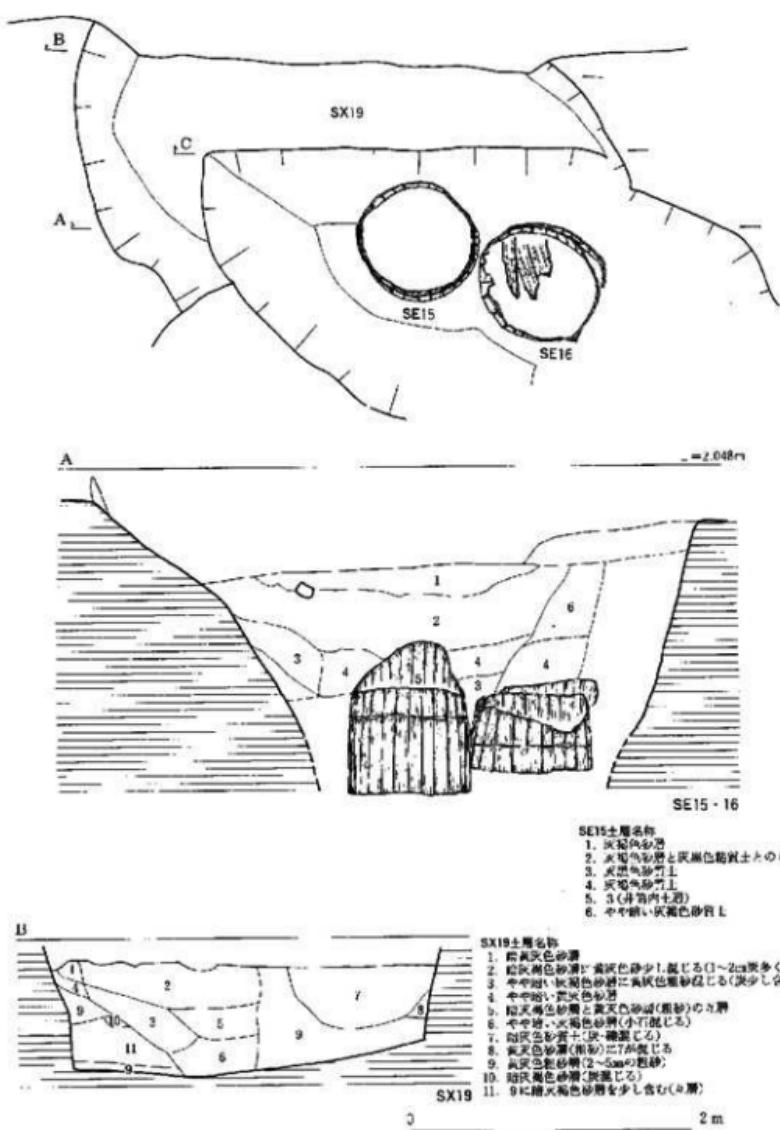
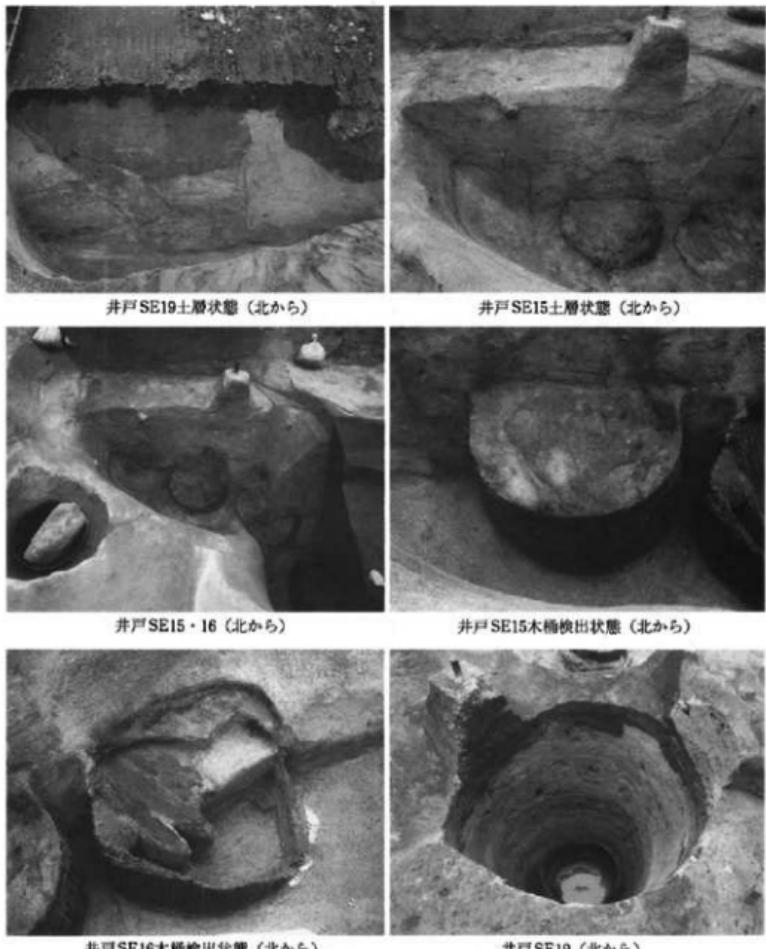


Fig.38 SX19・井戸 SE15・16共測面(縮尺1/40)



22cmを測る。26枚使用している。木桶は2段まで確認した。

遺物 (Fig. 39) は土師器環・皿、船載磁器が出土した。いずれも井戸掘り方の出土である。

233・234は糸切り底の土師器環である。他には青磁碗、白磁碗がある。

SE18 (Fig. 40) 南側境界地にあるため規模は不明。瓦井戸である。掘り方の平面形は不整円形

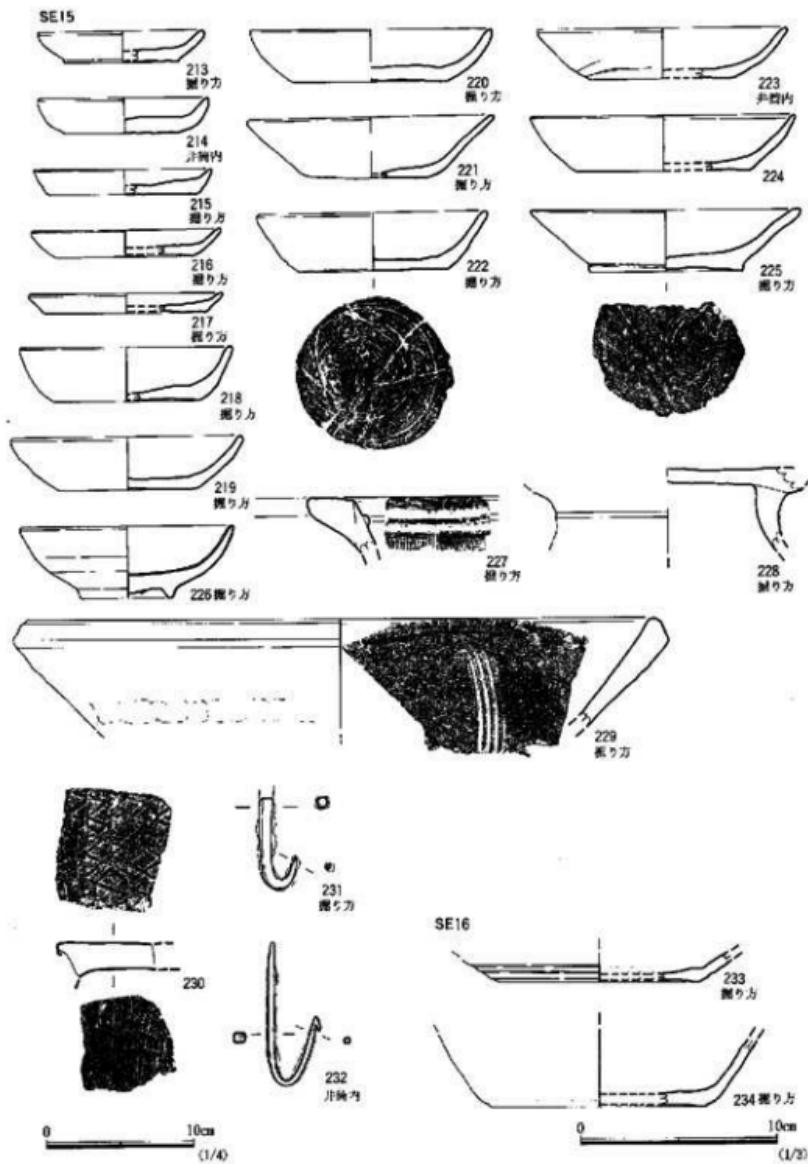
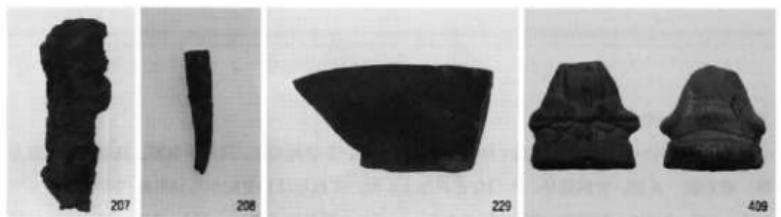


Fig. 39 井戸 SE15・16H上遺物実測図(縮尺 1/3・1/4)



添数字は実測図の番号と一致する。
409はSE14出土

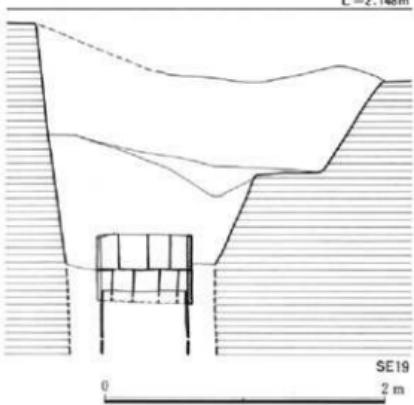
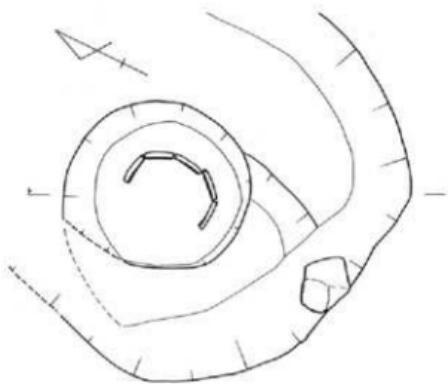
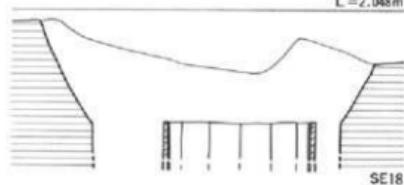
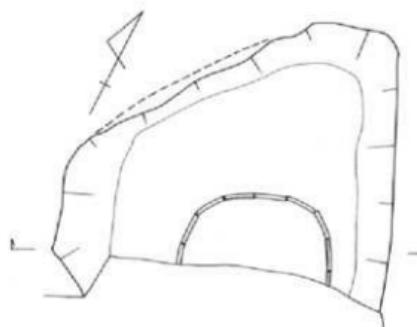


Fig.40 井戸SE18・19実測図（縮尺 1/40）

で、直徑110cmを測る。

遺物（Fig. 41～43）は土師器皿・环、肥前系陶磁器、李朝陶磁器、関西系陶器、高取焼、瓦質土器、備前焼、瓦類、青銅製品、石臼などが出土した。これらは16世紀から18世紀代の幅をもつていて、235～244は土師器皿、245は环である。いずれも板目浪は無い。246～249・252は染付碗で、246～248は明染付、251・252は肥前染付である。250は肥前陶器碗である。252の外面には蓮弁状のヘラ彫りがある。253は肥前産猪口である。254～256は唐津刷毛目碗、257は京焼風碗である。

258～263は皿で、258は明染付、259・260は肥前染付、261は李朝白磁皿、263は唐津焼、262はクロム青磁皿である。264は高取焼の片口鉢であろう。265～267は瓦質上器で265は鉢、266・267は火舎である。268～273は陶器摺鉢で、268は上野・高取系、269・272・273は唐津系、270は備前焼である。276は陶器甕の破片で、内面に青海波の印きを施す。274・275は軒丸瓦で、瓦当面に三巴文を配している。277の軒平瓦の瓦当面には5回転の唐草文を施す。280・281は丸瓦で、背部に網目印き痕がある。282の半瓦には尖切り模を残し、釘穴がある。283は平瓦、284は方形の瓦埠、285・286は井戸瓦である。279は石臼の上口で、復原径34cm、器高10.3cm、上部のくぼみの復原径22.6cm、深さ2.5cmを測る。把手を取り付ける穴は方形を呈し、横2.8cm、縦3.5cm、奥行4.5cmを測る。下面が合わせ面になっており、放射条の条痕を施す。この条痕は8等区分され、区画線の間には基準と平行な条線が8本～9本単位に施される。間隔は不均等である。上・下の口の心棒の軸受穴は中央にあって、直徑2.4cmを測る。又、穀物の供給孔は復原直徑3.8cmを測る。臼の表面仕上げは粗い。材質は凝灰岩である。278は青銅製の匙である。全長16.1cm、柄の幅0.5cm、厚さ0.05cmを測る。首の部分で折れ曲がっている。又、柄の先端も反っているが、これは本来の形状と考えられる。

SE19 (Fig. 40) 瓦井口である。SK21を切っている。掘り方の平面形は不整円形を呈し、長径は約290cmを測る。瓦はほとんど抜かれており、下部の2段分を確認した。井戸底には木桶を据えていた。

遺物（Fig. 44）は明青磁、肥前系陶磁器、東播系須恵器、瓦質土器、土師質土器、瓦類である。16世紀末～17世紀の所産であろう。287・288は唐津燒皿、289は明の青磁碗、290は肥前の白磁皿、291は肥前の青磁皿である。292は瓦質土器の火舎、293は土師質土器の摺鉢、294は須恵質土器である。295は陶器の破片で、内面に青海波の印き模があり、鉄粉を薄く施す。296・297は井戸瓦で、大きさは長さ30.9cm、幅24.1cm、厚さ3.8cmを測る。その他に馬の歯が出土している。

SE20 (Fig. 45) 石組井口である。SE13に切られる。前述した通り、井口の上部は調査前の錆取り工事で破壊されている。掘り方の平面形は不整円形を呈し、長径431cmを測る。石組みの井筒は7段まで遺存しており、深さ228cmを測る。井筒の下部には木桶を据え、更にその内側に刺抜きの木桶を据えている。

遺物（Fig. 46～54）は、掘り方、及び井筒内から多量に出上した。土師器皿・环、明青磁、染

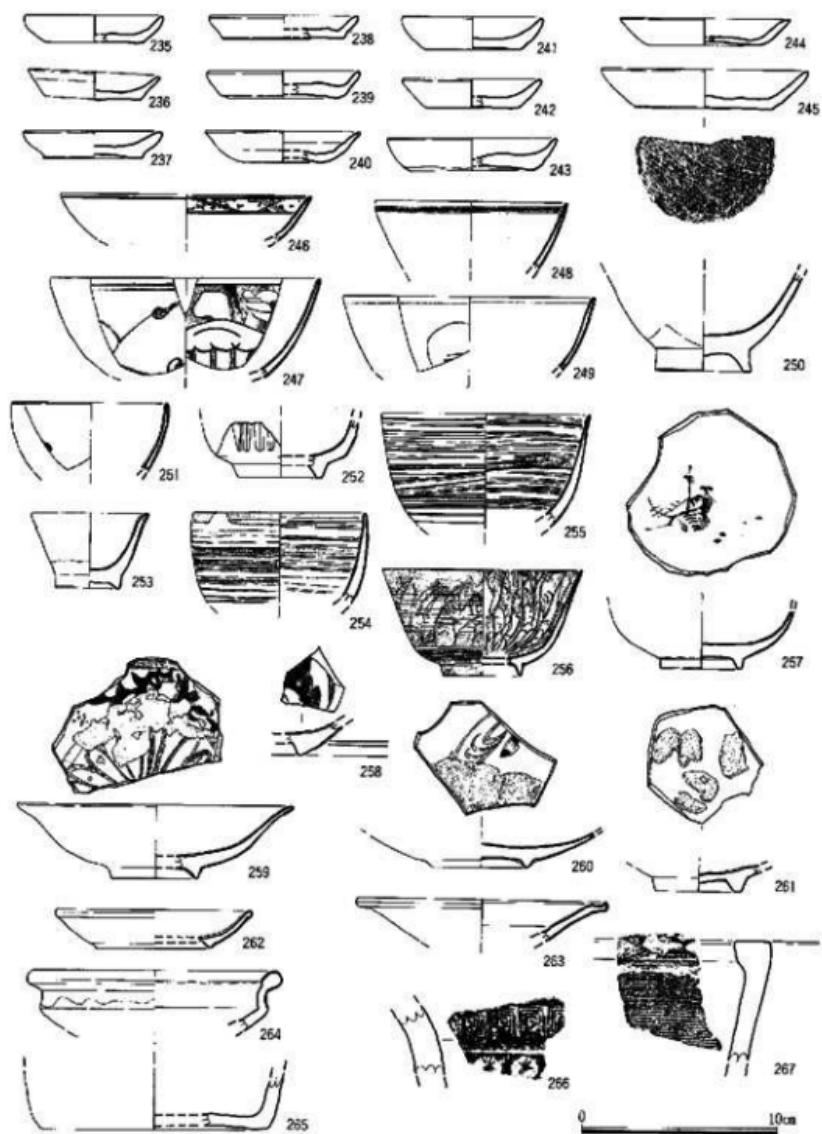


Fig. 41 井1 SEI 18井上遺物実測図 ① (縮尺 1/3)

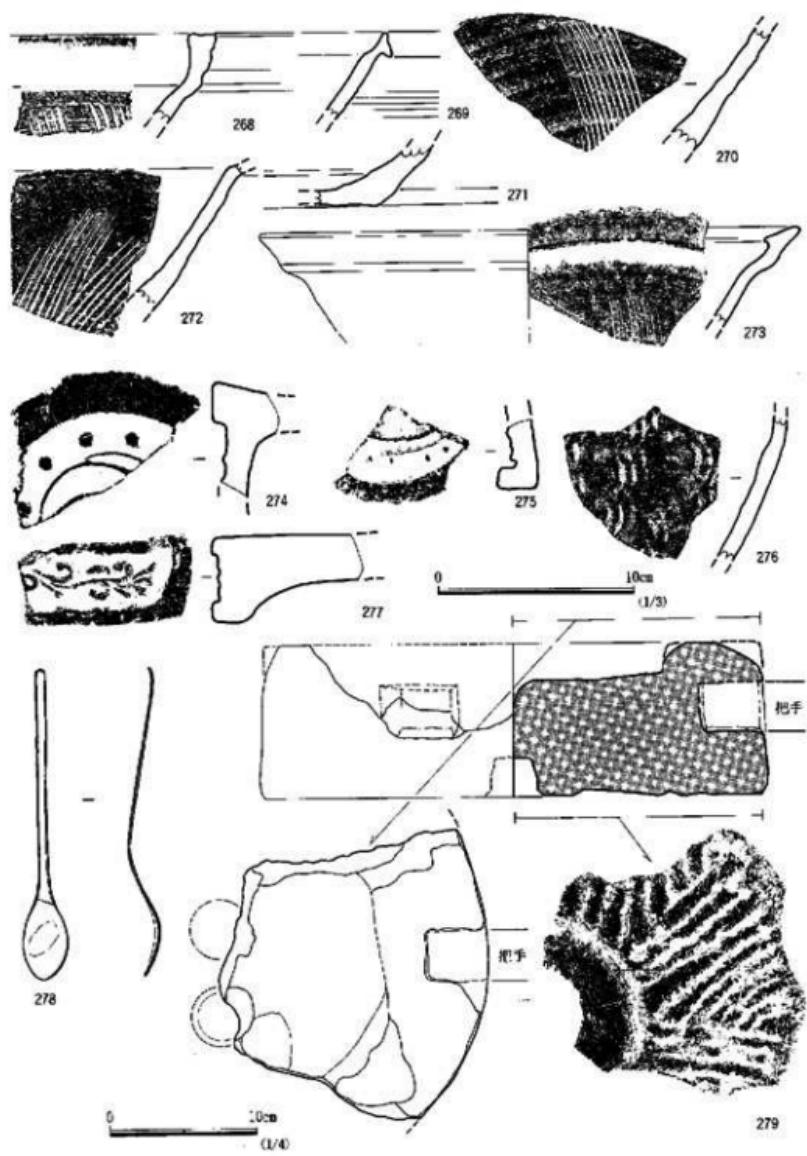


Fig.42 井口SE18出土遺物實測圖 ② (縮尺 1/3・1/4)

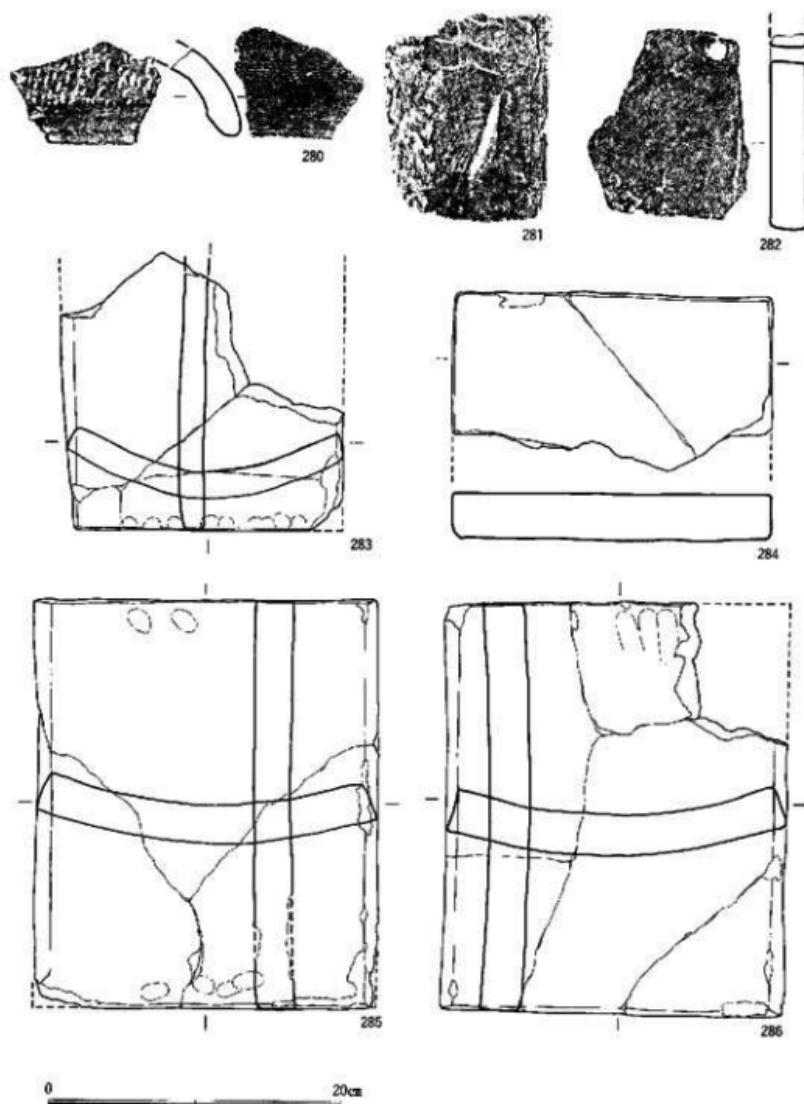


Fig.43 井戸 SE18口上遺物実測図 ③ (縮尺 1/4)

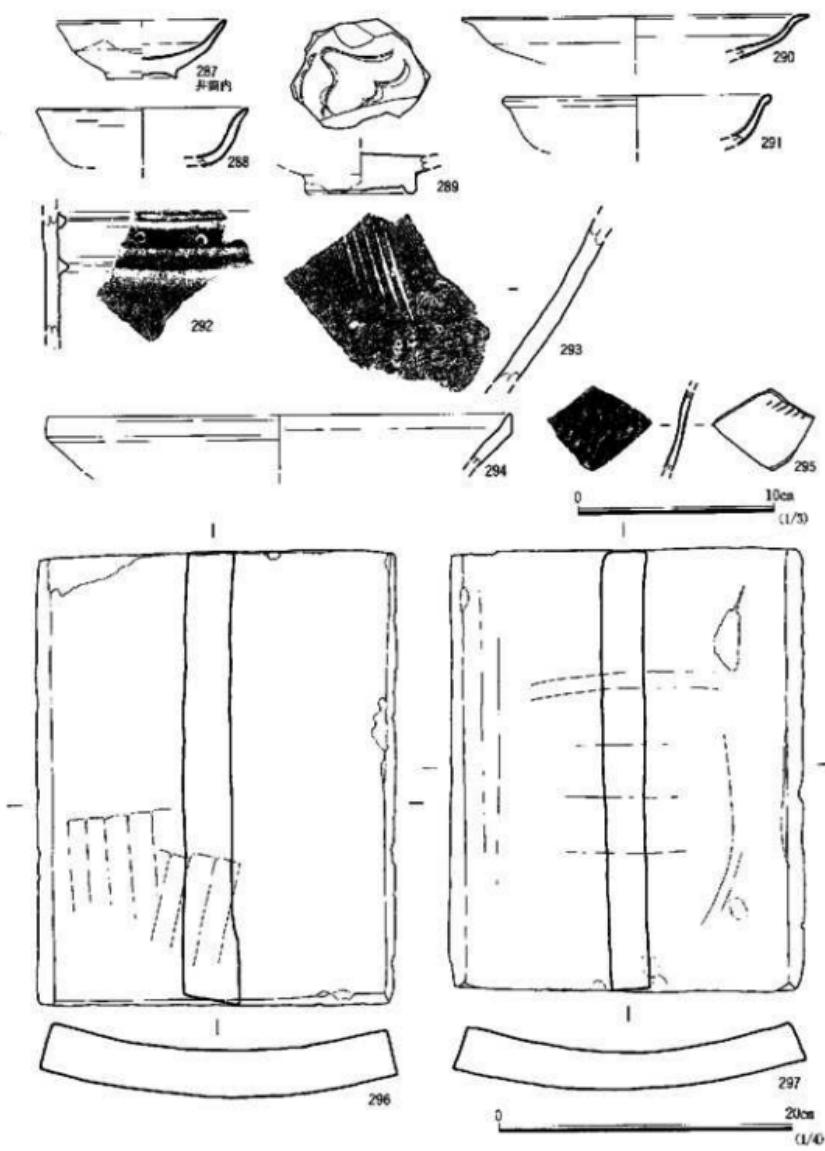
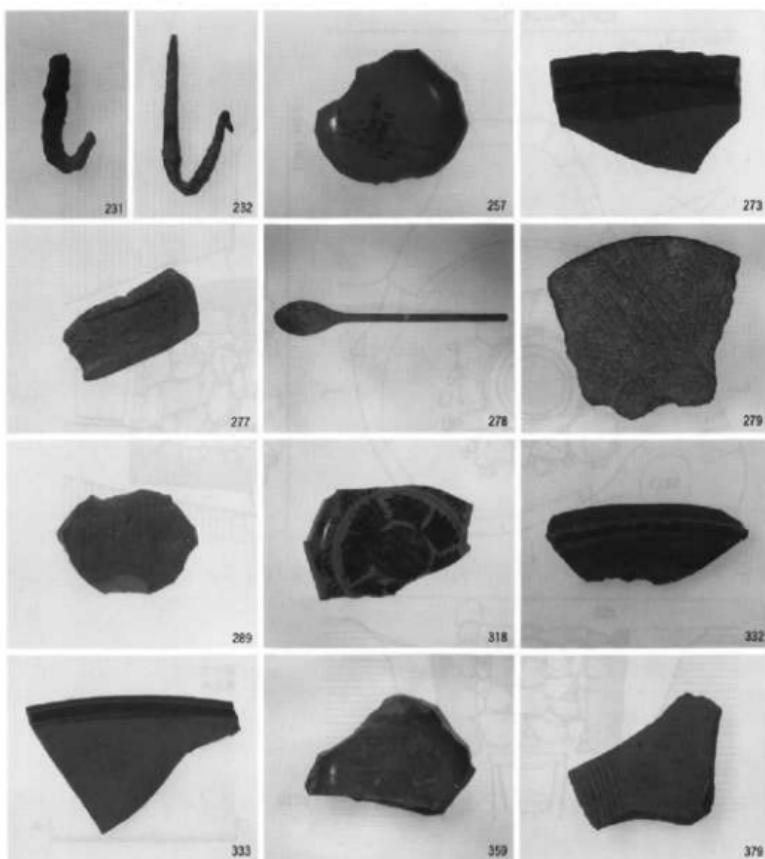


Fig. 44 井4 SR19出上遺物形圖 (縮入 1/3・1/4)

付、白磁、備前焼、常滑焼、瓦質土器、土師質土器、瓦類、石塔類等が出土した。298～350、382～408は井戸掘り方、又は石組みの裏込めから出土した遺物で、351～381は井筒内から出土した遺物である。298～301は糸切り底の土師器皿、302～311は糸切り底の土師器杯、312・313は瓦質の鉢である。312・313は手づくねの瓦質土器で、内面に指圧痕が残るが、外表面はヘラミガキを施しており、平底である。321は龍泉窯系青磁碗、314・315は明の青磁で、314は皿、315は碗である。316は白磁碗、317・318は明の染付で、317は碗、318は皿である。319は陶器碗である。320は土師



井戸SE15・18～20出土遺物

※数字は実測図の番号と一致する。

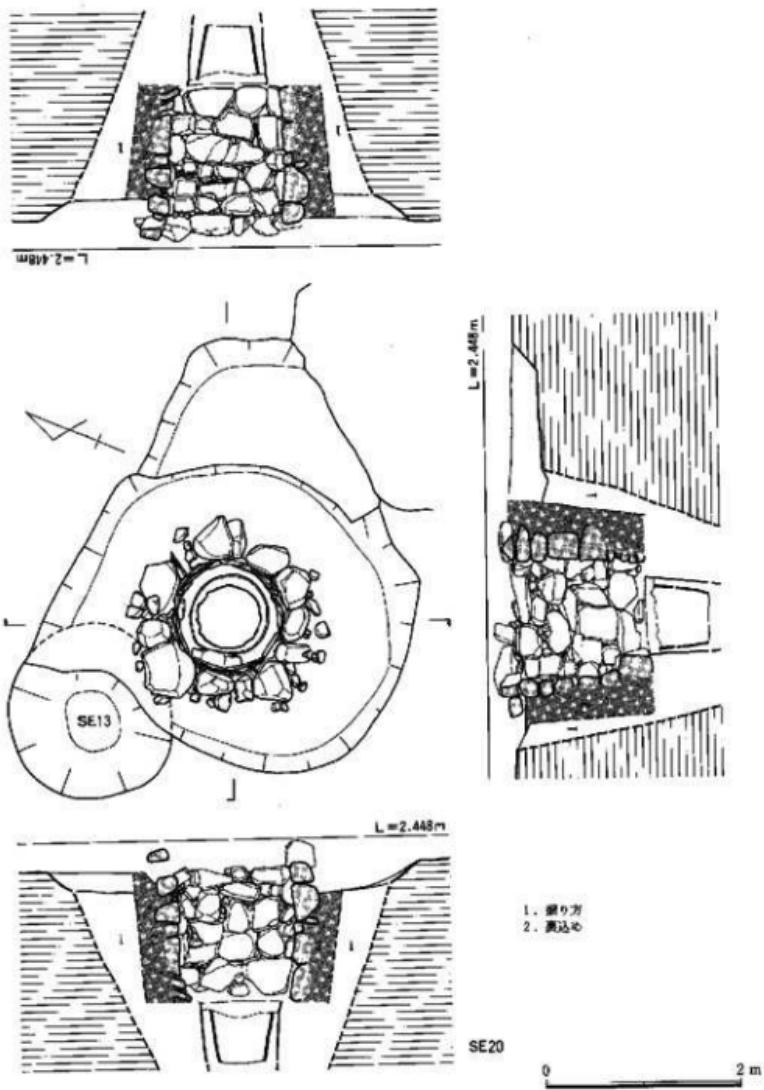
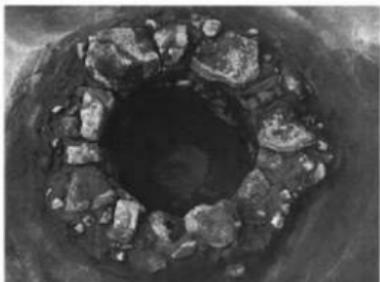


Fig.45 井戸 SE20実測図 (縮尺 1/60)



井戸SE20（南から）



井戸SE20西側石組（東から）



井戸SE20底面（西から）



井戸SE20木桶状態（北から）

質土器で、焼成であろう。322は瓦質土器鍋、323は瓦質土器火舎である。324・325は土師質土器の鍋であるが、324は畿内からの撤入品である。326は常滑焼のⅡ-2期である。327・330～334は陶器摺鉢で、330～332・334は備前焼、333は唐津系と考えられる。331・332は備前焼Ⅳ期である。334はV期である。328・329は陶器臺で、328は筑前産である。337・338は瓦質土器鉢、339～348は土師質土器の摺鉢である。口縁端部を若干肥厚させている。下し目の単位は340が4本、344・347・348が5本単位である。349は瓦質土器の火舎で、完形に近い。外面に黒色研磨を施し、内面は刷毛目調整である。外面の上下位に2重の突帯を貼り付け、その間に印刻の文様を施す。脚は3脚である。350は板碑の頭部である。額以下を破損している。頭頂部は元来三角形を呈するものである。背面にはノミの成形痕がある。現存長17.8cm、幅15.2cm、厚さ6.5cmを測る。351は宝篋印塔の塔身に相当する。上下面の中央に、直径3.5cm、深さ0.5cmの突起が作り出されている。塔身の大きさは長さ15.5cm、幅15.6cm、高さ14.0cmを測り、大略正方形に近い。側面の4面には各々の中央に梵字を一字ずつ刻んでいる。金剛界四仏で、A面は「モウーン（阿闍梨）」、B面は「タタラク（宝生）」、C面は「キリック（阿彌陀如来）」、D面は「アクト（不空成就）」である。

平瓦は総数2,012点、丸瓦は総数449点出土した。この内、平瓦の672点、丸瓦の48点が二次的に焼けている。380～383は軒丸瓦である。381は鳥食瓦で、瓦当面径18.5～20.0cmを測る。「卍」字の文様を施す。他に2点凹十している。382・383の瓦当面には左巻きの三巴文を配している。三巴文の尾は別の巴文の地に接しており、圓線状を呈する。頭部は左巻きであるが、382の頭部は尖っている。珠文は382・383は16個である。384～397は軒半瓦である。中心飾りは宝珠形で、左右に唐草文を配している。唐草文の回転や、配置から8種類に分類することが可能である。

A類(381・387～390) 中心飾りは円形に近い宝珠形で、唐草の先端が上向きと下向きがあり、8回転する。唐草は4本派生する。

B-1類(385・386) 中心飾りはA類と同形の宝珠形で、3回転の唐草文は中心飾りから独立して派生する。唐草の先端は上向きである。

B-2類(394) B-1類の文様を裏返した文様形状を示す。最後の唐草文は上向きである。

C類(391・395) 中心飾りは宝珠形で、3回転の唐草文を派生させる。3回転目の唐草の上に独立した蔓草がある。

D類(392) 中心飾りは不明である。3回転の唐草文を配するが、蔓草が2回転目の唐草から派生する。

E類(393) 中心飾りは不明である。唐草文は3回転以上で、各々独立している。最後の唐草文は右巻きである。

F類(396) 中心飾りは不明である。最後の唐草文の先端は左巻きで、上に蔓草を派生する。

G類(397) 中心飾りは不明である。唐草は独立しており2重になった唐草文が3回転する。唐草文の先端の巻きが弱い。

398～403は丸瓦である。背部に網目の凹き痕がある。又、凹部には布目痕の他に繩縫痕がある。400には糸切り痕が残る。405は方形瓦塊、406は三角瓦塊である。404・407は平瓦で、407の凸面には糸切り痕が残り、404の凹面には同心円の叩き痕がある。408は道具瓦の伏間瓦である。

351～381は井筒内の出土遺物である。352は土師器糸切り皿、353～357は环である。これらの环は法量は小さく、皿との判別がつけ難い。358・359は能泉窯系青磁碗、360は白磁碗皿類、363は明の白磁皿、361・365は明染付で、365は皿、361は碗である。366は唐津焼、又は李朝の皿、362は天目碗の底部である。367・368・370・371は土師質土器の擂鉢で、367・368・370の下し目は使用による磨滅が著しい。372～374は瓦質土器の火舌で、372・373の外面には変形文、筋交いの三瓣形文を施す。374は脚である。高さ5.3cm、最大径6.5cmを測る。376～379は備前焼で、376は壺、377は瓶、378・379は擂鉢である。

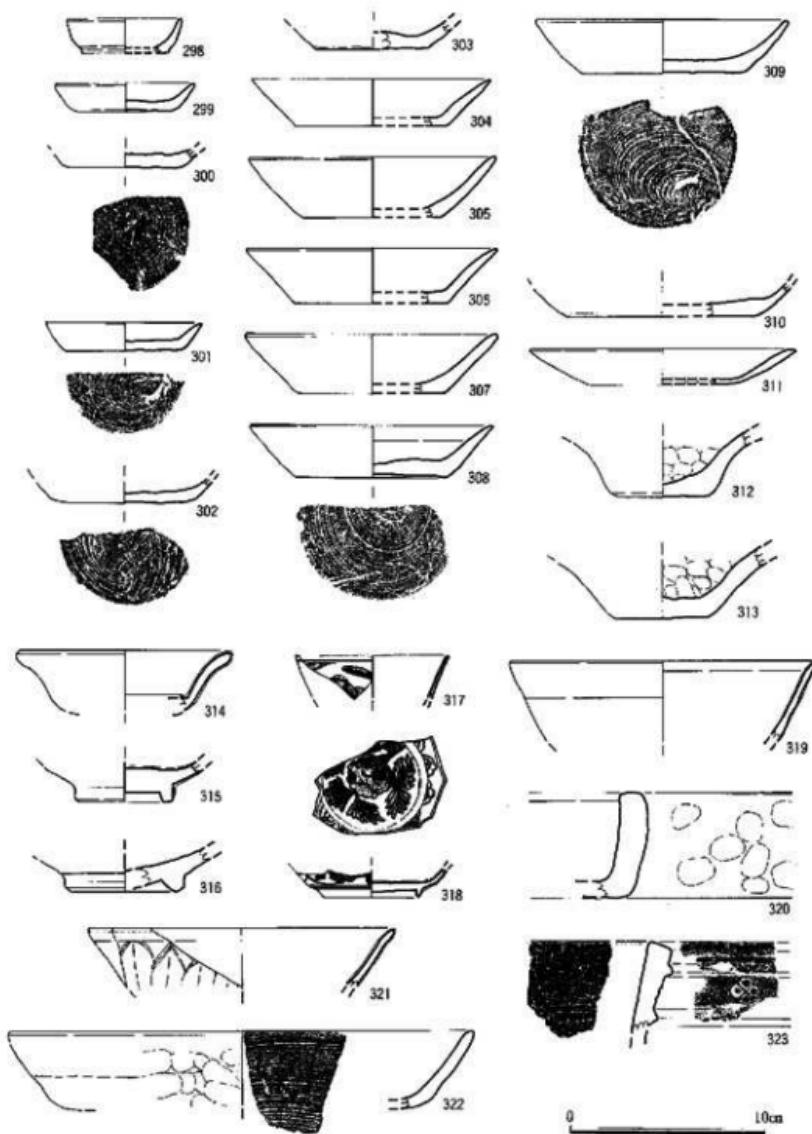


Fig. 46 井戸 SE20掘り方出土遺物実測図 ① (縮尺 1/3)

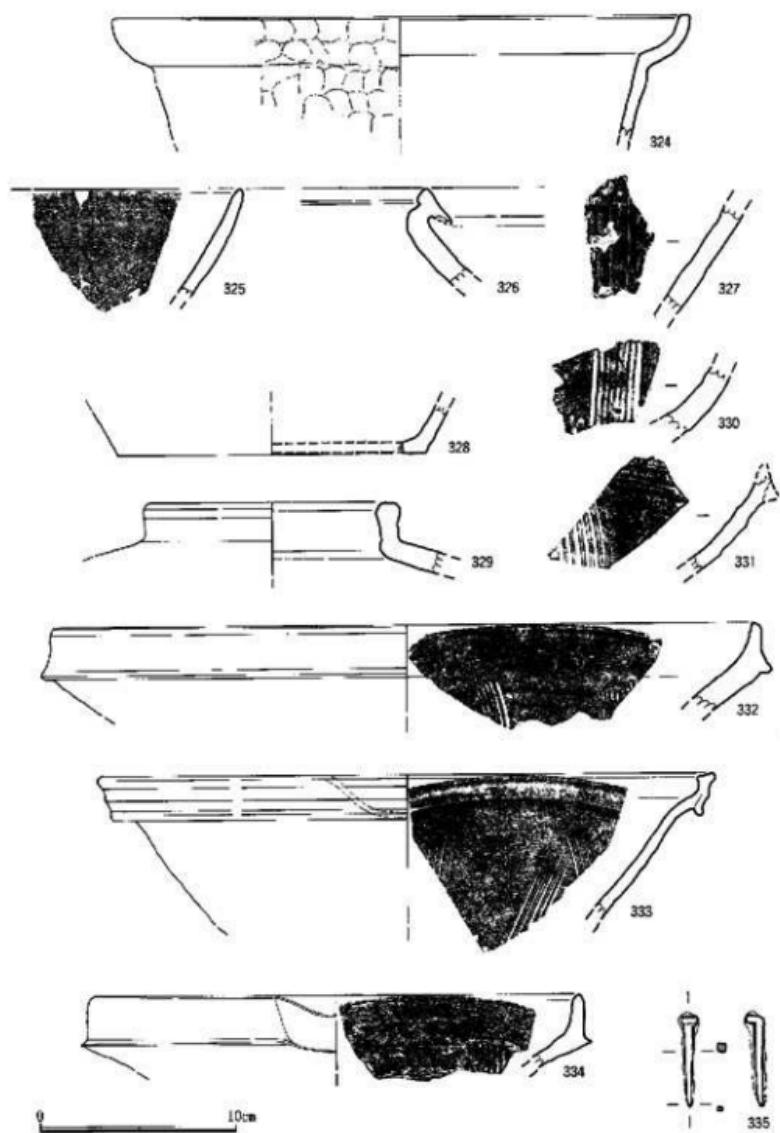


Fig.47 井戸 SE20断面における出土遺物実測図 ② (縮尺 1/3)

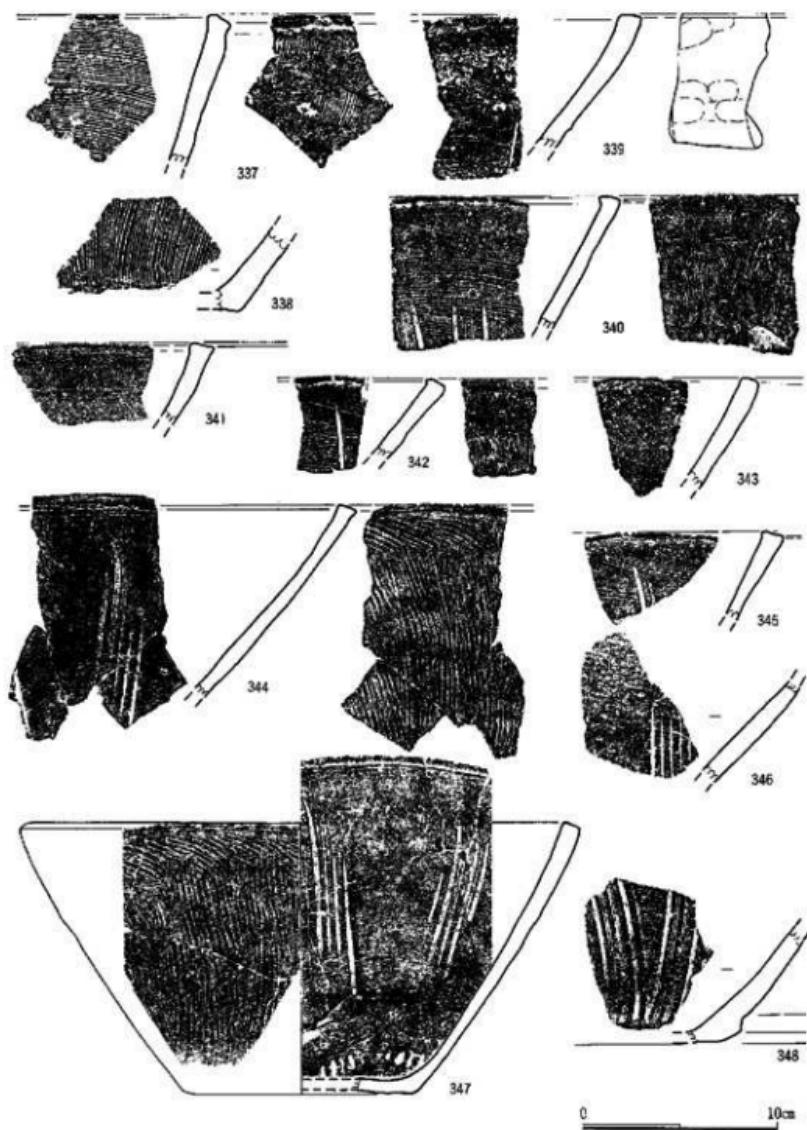


Fig.48 小戸 SE20掘り方出土遺物実測図 ③ (縮尺 1/3)

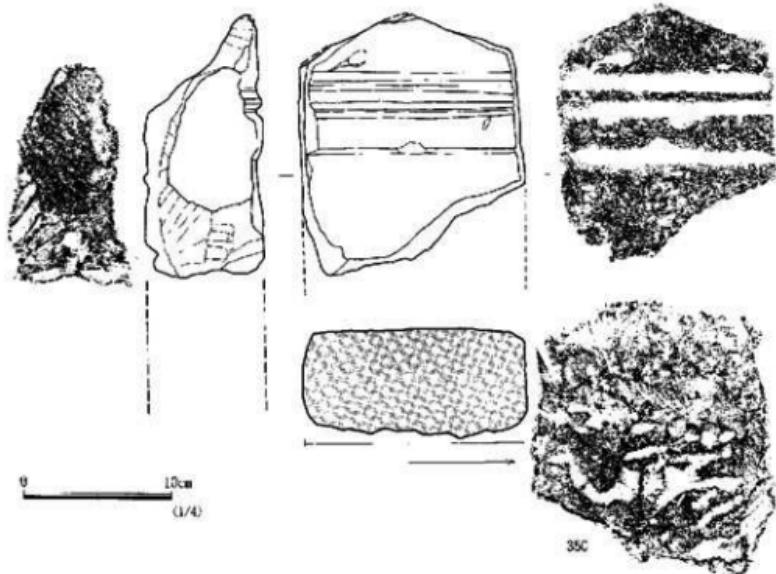
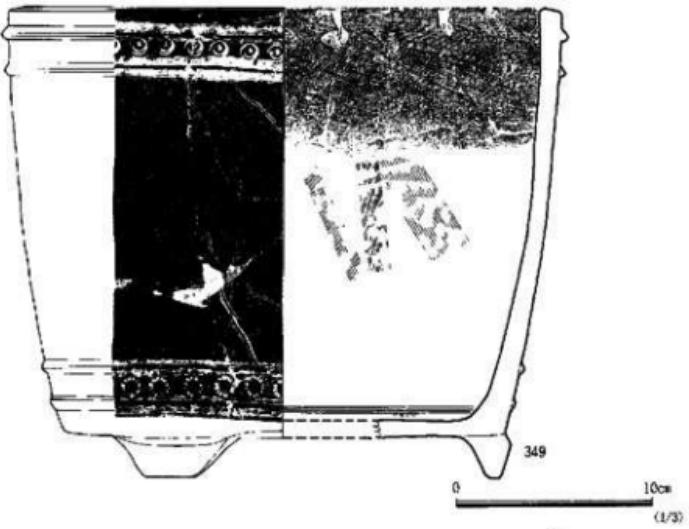


Fig.49 戸口SE20層り方出土遺物実測図 (④) (縮尺 1/3・1/4)

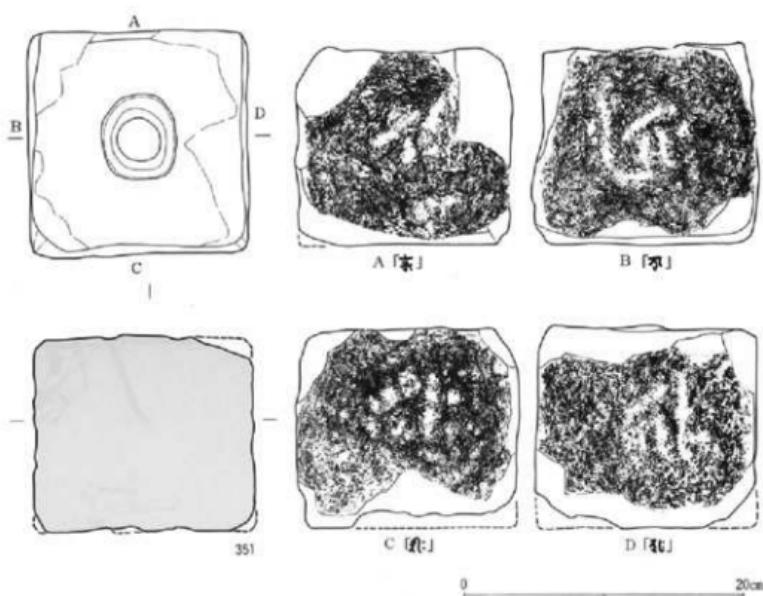
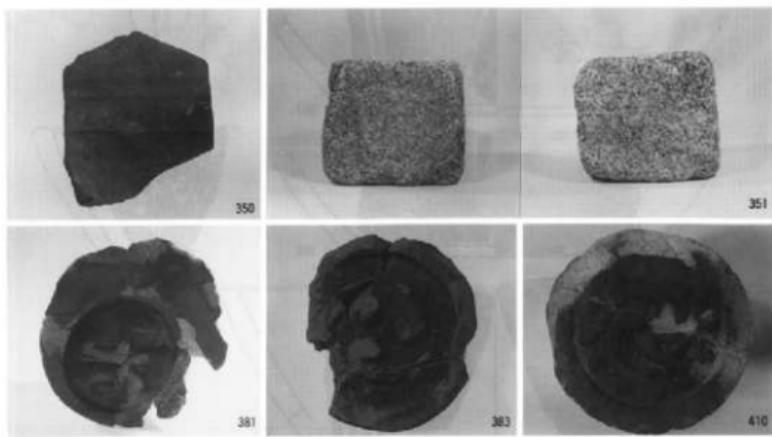


Fig. 50 井戸SE20出土遺物実測図 ⑤ (縮尺 1/4)



井戸SE20出土遺物

番号は実測図の番号に一致する。
410はSE20出土

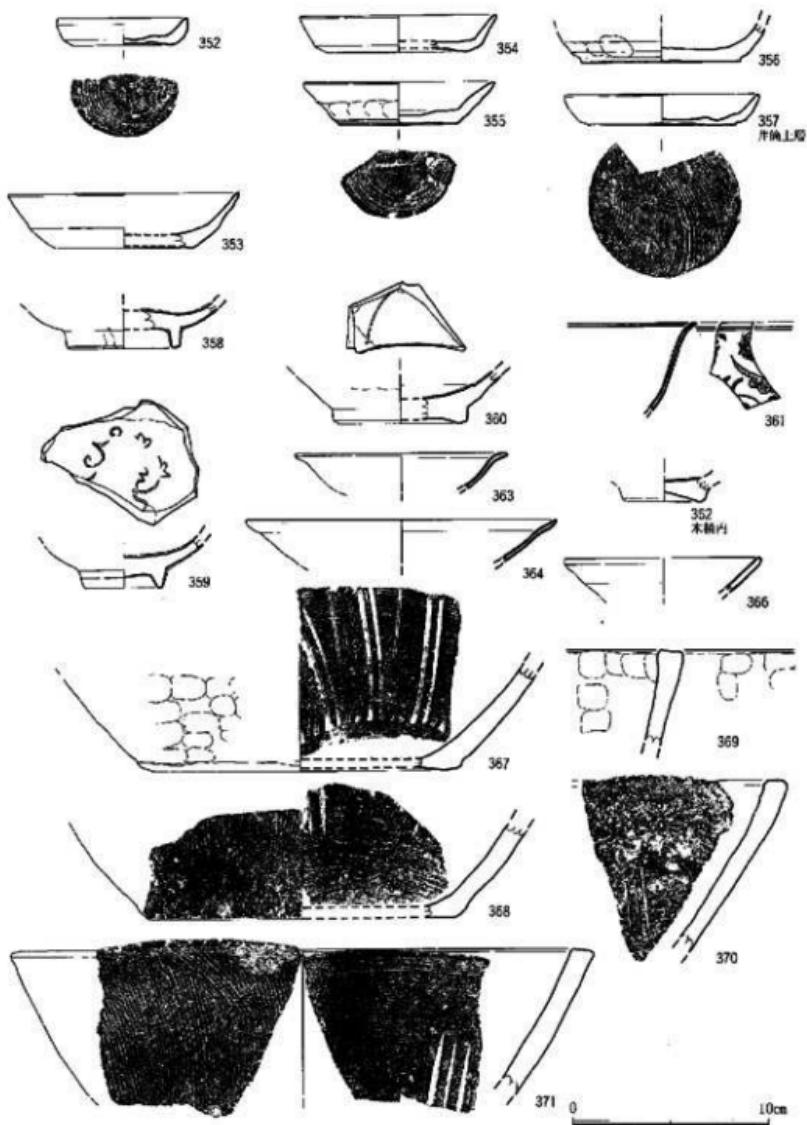


Fig.51 井戸SE20井筒出土遺物実測図 ⑤ (縮尺 1/3)

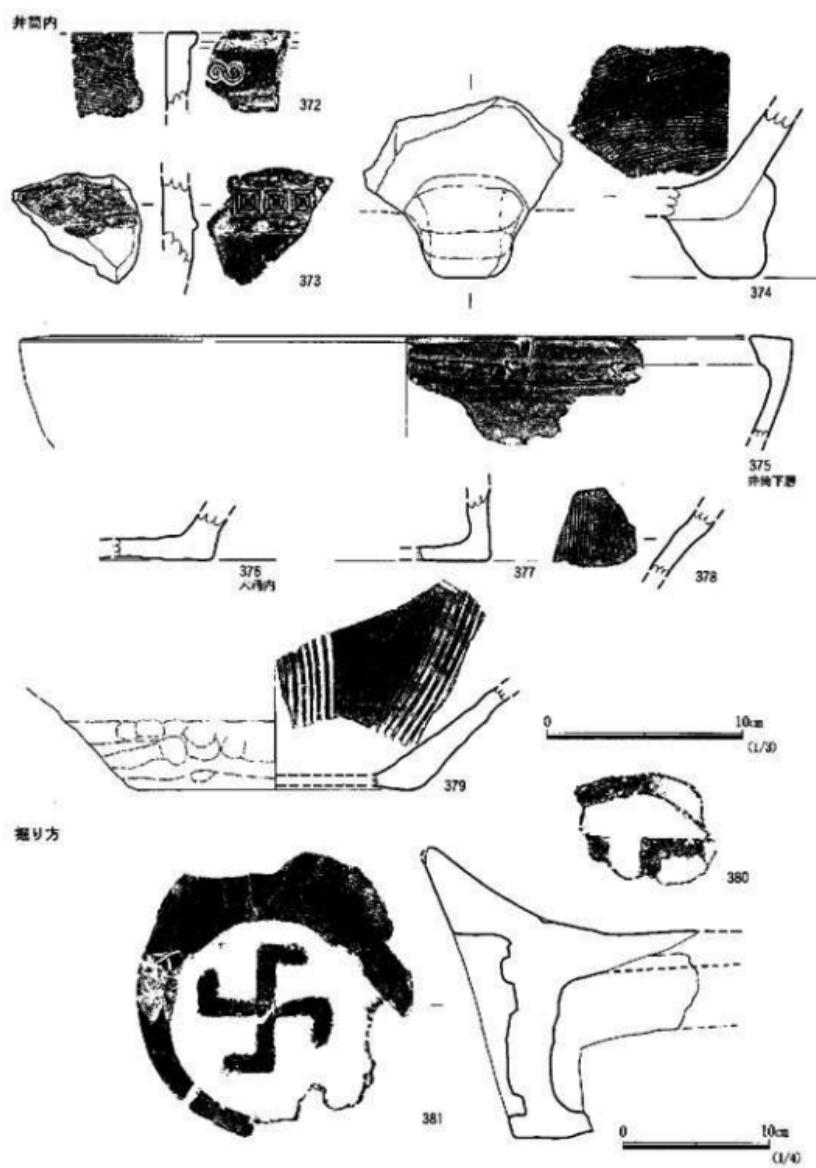


Fig.52 井戸SE20出土遺物実測図 (7) (縮尺 1/3・1/4)

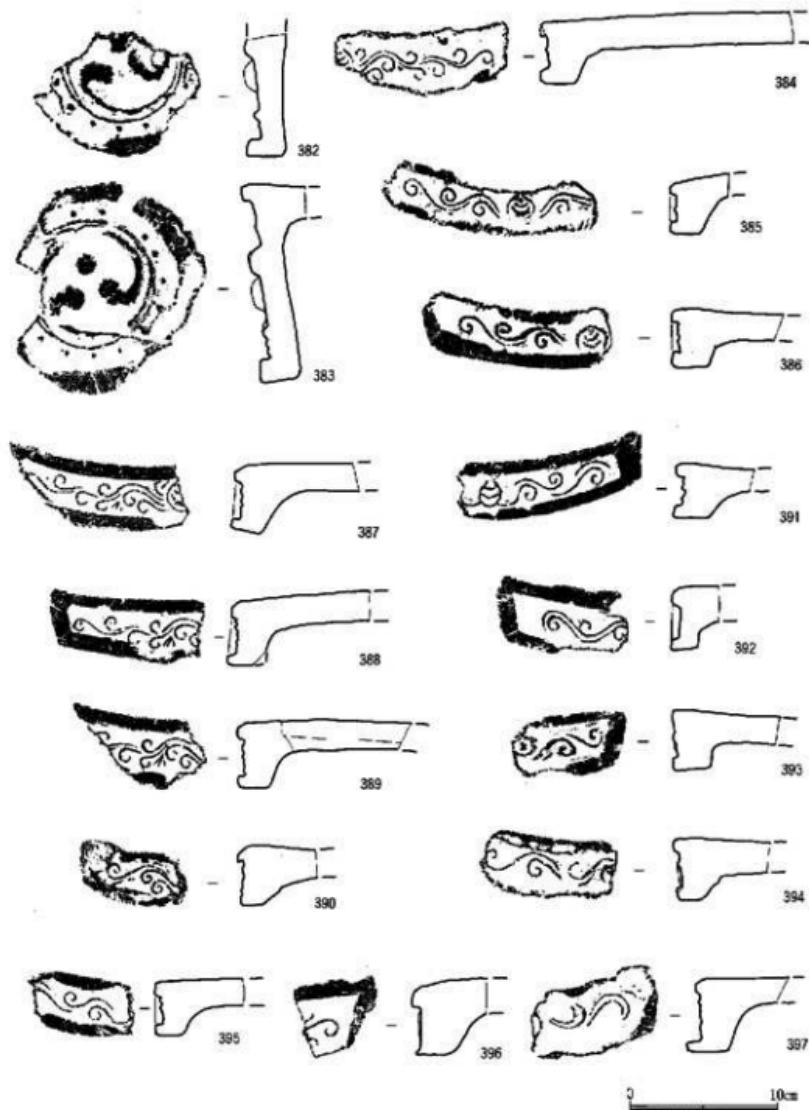


Fig.53 井戸 SF20掘り方出土遺物尖頭叉 ③ (縮尺 1/4)

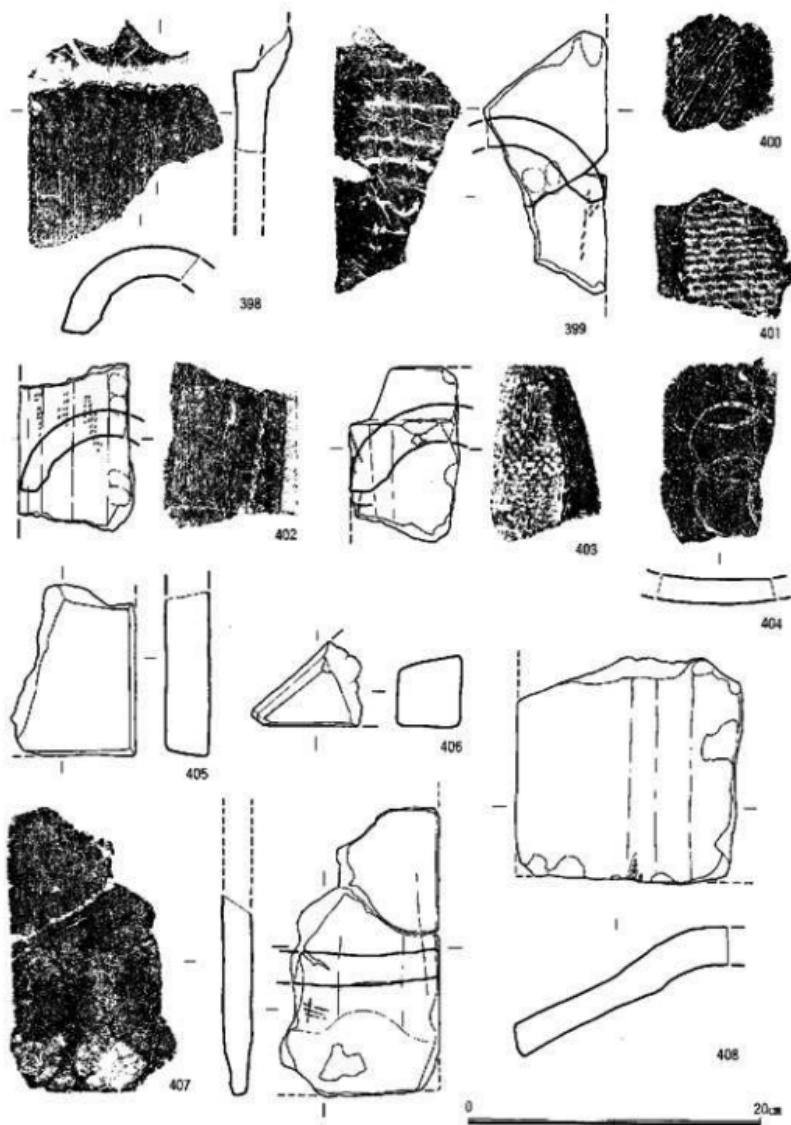
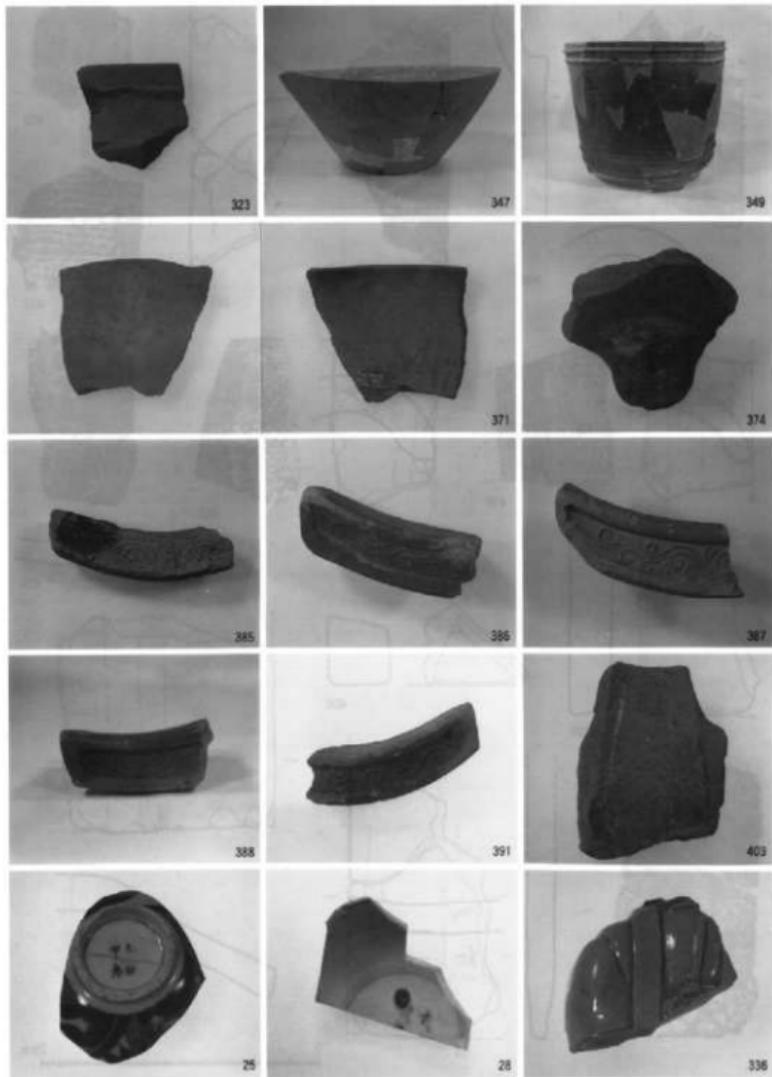


Fig. 54 片付SE20掘り方出土遺物実測図 ⑤ (縮尺 1/4)



井戸SE20・SX02出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。

25-28・336: SX02H:上

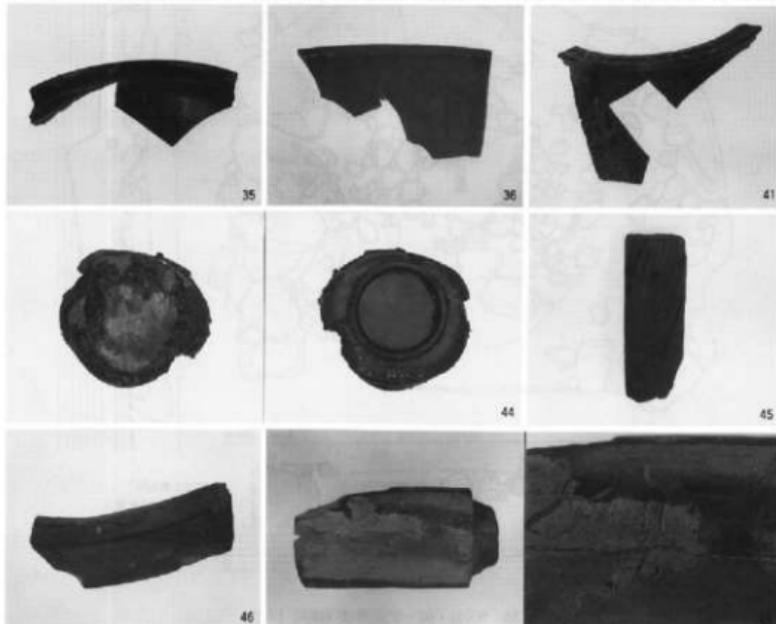
(3) 不定形土壙・墓・構築物 (SX) 及び出土遺物

用途が不明な遺構をSXと称したが、これらには墓、石積遺構、又は内部に石積みや配石を有している土壙、或いは室状の板廻いを有する土壙の他構築物が含まれる。

SX01 (Fig. 55) 平面形は不整椭円形を呈す。底面は不定で、特に壁は荒れている。土壙上部に長さ18~60cm大の石が環状に配置されている。土壙中央部は径60~70cmの空間があること、一部に炭化した木の根があることから、庭木の植栽跡と考えられる。覆土から唐津焼碗、伊万里染付碗、皿などが出土した。

遺物 (Fig. 56) の内、1は唐津焼碗で、内外面に細かい貫入がある。2は17世紀後半代所産の肥前系碗である。3はクロム青磁皿で、釉は厚い。4・5は肥前染付で、4の皿は内底に龍文を描く。5の碗の外面には唐草文、内面には飛龍文を施す。

SX02 (Fig. 55) 平面形は不整椭丸方形を呈し、断面形は2段掘りになっている。SX03に切られてしまい、現存長362cm、深さ76cmを測る。土壙上部には大きさが10cm~22cm程度の礫、及び長さ56cmを測る大石が環状に2重に配置されている。内部の環状列石の内径は58cmを測る。当初はこの空間部分を井筒の痕跡とみて、これらの列石を充填のための石と見做していたが、井筒を確認



SX02出土遺物

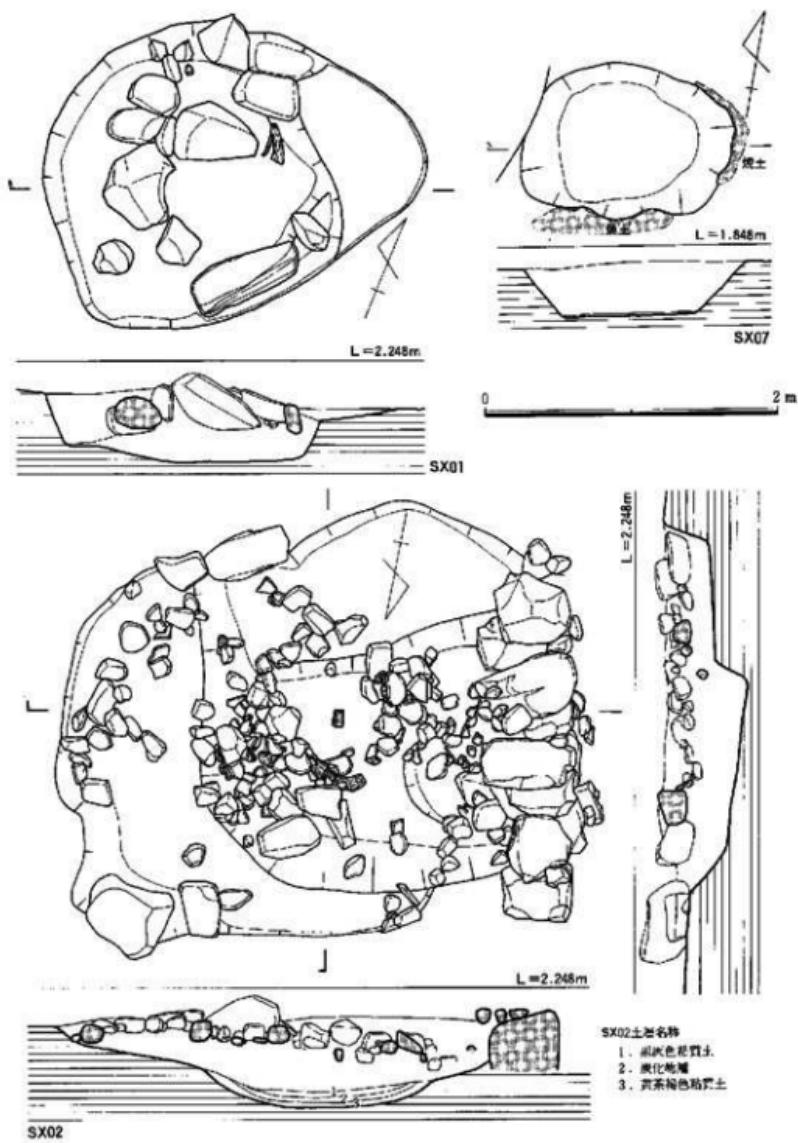
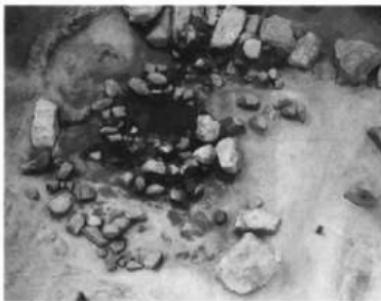


Fig. 55 SX01 · 02 · 07 实测图 (比例尺 1/40)



SX01～03・21全景（東から）



SX02全景（東から）



SX02中央部の状態（東から）

することは出来なかった。

遺物 (Fig. 56・58・59) は江戸時代を中心としており、17～18世紀の肥前系陶磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦類、漆器碗などが出土した。6～14は陶器碗である。9・12は唐津焼で、9の内底には胎土目痕がある。疊付は擦り消している。12は刷毛目碗、13は肥前系の碗で、内外面の釉は薄く、白色を呈する。高台疊付に目痕がある。李朝の系統を引いている。6・7・11・15・16は筑前産で、6・7の内底見込み、及び15の外底は輪状の釉ハギを行っている。胎土が良く似ている。18～22は白磁で、18・22は小杯である。19は糸切り底で、高台は貼付である。内面の文

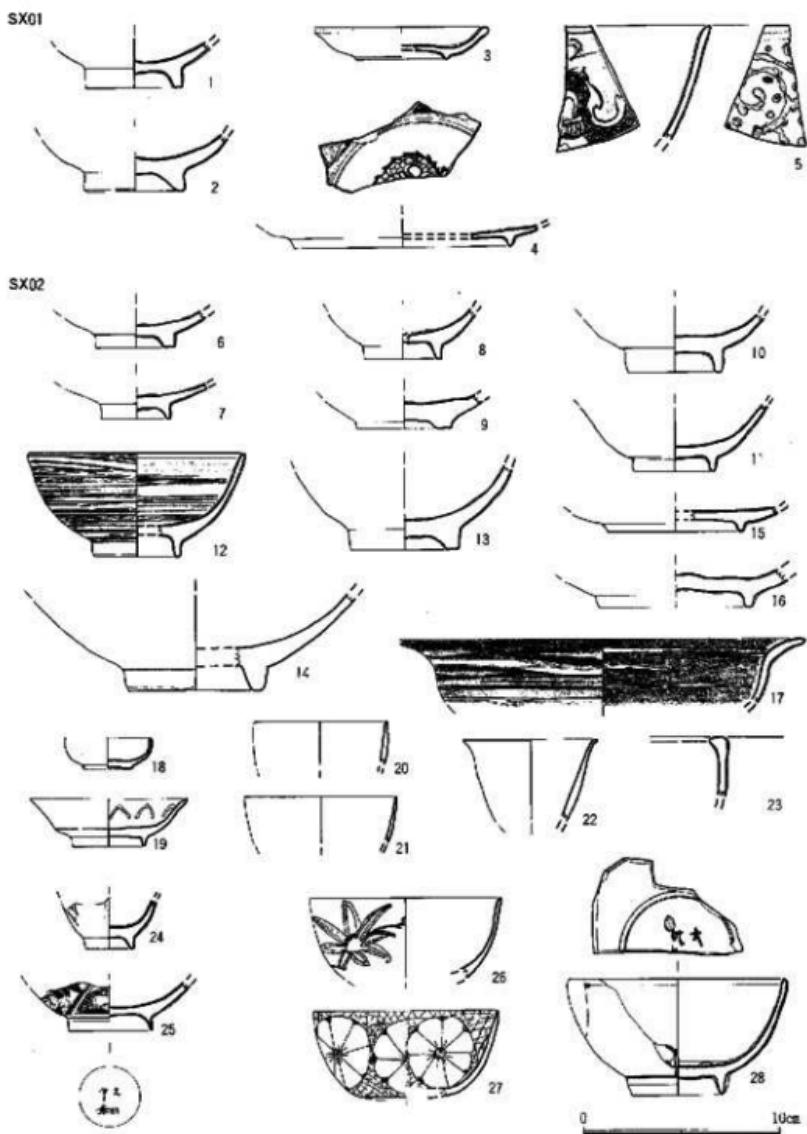


Fig. 56 SX01・02出 I: 遺物実測図 (縮尺 1/3)

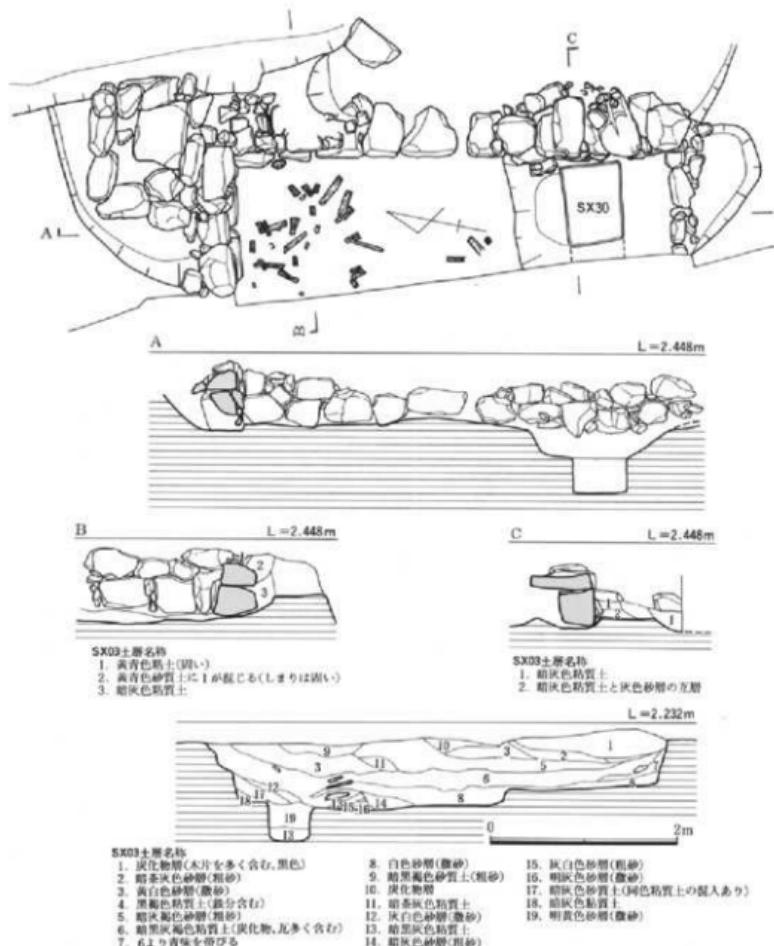
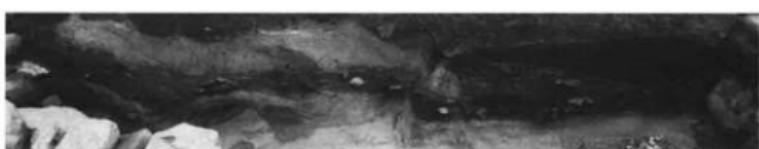


Fig. 57 潛樹 SX03実測図・土層図(縮尺 1/60)



潜樹 SX03 土層状態(東から)



画鋲SX03・SX21発掘状態（東から）



画鋲SX03（西から）



SX03内遺物出土状態（西から）



SX03内発出土状態（南から）



SX03内貝殻出土状態（西南から）



画鋲SX03裏込め状態（東から）

様は型紙摺りである。15～17は皿で、15・16は筑前産、17は唐津刷毛目皿である。23は青磁香炉である。これらは17世紀～18世紀後半の所産である。24～30は肥前染付で、24は小壺、25～29は碗、30は皿である。25の外底と28の内底には「太明年製」の文字がある。これらは、17世紀前半～18世紀後半の所産である。31・32は土師質土器で、31は小鉢、32は鍋又は、焙烙であろう。

33・34は瓦質土器で、33は摺鉢、34は押鉢である。35・36・38～40は陶器の摺鉢で、35・38は高取系、36・39・40は唐津系である。37・43は陶器甕で、37は備前系、43は唐津甕である。42は唐津焼壺、41は筑前系の壺である。41の口縁半生部には貝目痕がある。44・45は木製品で、44は漆器椀である。45の下位には釘穴がある。46・47は軒平瓦で、46の中心飾りは宝珠形である。48・49は丸瓦で、背部に刻印がある。48は「利右衛門」、49は「六郎右衛門」である。50は平瓦で、厚さは1.7cmを測る。51は「寛永通寶」である。

SX03 (Fig. 57) 江戸時代の溜柵である。西側境界地に位置しており、平面形は方形又は、長方形を呈するものと考えられる。壁面は石垣になっているが、還存状態は悪く、1～2段しか残っていない。特に、南壁は石材が転落している。破損の大部分は調査前の鋤取り工事によるものである。溜柵の内法は長さ443cm、現存の深さ74cmを測る。底は平坦で、粘土を薄く貼っていた。南側の床には後出する土壙SK30が切り込んでいる。石垣は不整形に面取りした石を用いており、石の大きさは不揃いである。石の大きさは21～64cmを測る。掘り方では、石垣の面から幅60～100cm程度で、裏込め石を充填している。断面形は逆梯形である。石材は玄武岩、礫岩、変成岩を用いており、砂岩は少ない。SX03の北西側に接して、石組造構SX21が構築されている。SX03に後出する時期の構築物である。

遺物 (Fig. 59～66) は溜柵内部に堆積していた黒色砂質土、又は泥炭質土から多量に出土した。特に泥炭質の上からは木製品、竹製品、歯骨、魚骨、貝殻、漆器椀が出土した。他には土師器、肥前系陶磁器、瓦質土器、土師質土器、備前焼、土瓶、貨幣、鉄製品、瓦類等が出土した。この内、52～75は層位的な取上げをしていない遺物である。52は土師器皿、53～62は肥前系の染付である。53～55は小甌、60～62は皿である。57は外腹にコンニャク判、62の外底には文字がある。63は小石原焼碗、64は京焼風碗、65も同じく京焼風の皿、66は鉄輪碗である。以上、これらは17世紀後半～18世紀前半の遺物である。67は18世紀前半の府津焼皿、68は府津焼汁口、69・70は陶器摺鉢で、69は17世紀代の備前焼、70は唐津焼である。71・72は唐津焼甕、73は備前焼、74・75は瓦質土器の火舍で、同一器形である。内面にはヨコ方向のカキ目を、外面上位には牡丹唐草文をスタンプする。

76～160は層位的に取り上げた遺物で、土器番号を遺物番号の側に付与している。76～78は土師器糸切り皿、79～81は甌、81は丸底甌である。82～88、90～102は染付で、82～88は皿、90～101は碗、102は蓋である。82～84は同一器形、同一文様のセット品で、内底にコンニャク判がある。87は17世紀後半の皿で、土壙SK12川土の皿と接合した。碗の内、98は京焼風を呈している。染付碗の年代は18世紀代である。102は八角形を呈した蓋である。105～108は伊万里系の白磁で、105は猪口、107・108は碗である。107の口縁部は菊花状である。89は陶器で、瀬川窯である。103・104・109は陶器碗で、103・104は京焼、109は小石原焼の天目碗である。110～112は瓦質土器の火舍で、脚は110・111が3脚、112は不明である。内面はナデ調整である。113～117は十脚質土器

である。113は外耳の鍋で、培培かもしれない。114・115は焼塩壺の蓋、116・117も蓋である。118～121は陶器で、118・119・121は唐津系指鉢、120は壺である。122は素焼きの七輪で、内面に鐵支えの突起がある。体部の壁は2重構造になっている。口縁部に圓形の抉込みが4ヶ所ある。123～126は鉄製品で、123は鏡、124は庖丁、126は釘であろう。

瓦類は多數出土したが、この内、127～129が軒丸瓦、130～137が丸瓦、138～142が平瓦、143が鬼瓦である。軒丸瓦の瓦当面には二巴文を配し、巴文はいずれも左転している。丸瓦の130～132の背部には刻印がある。130は「一〇〇左衛門」、131は「一〇〇右衛門」、132は「了三郎」、又は「郎三郎」であろう。131は崇福寺山門の屋根瓦に同例の刻印瓦がある。^{註1} 133・137には釘穴がある。134の背部は網目の叩き痕があり、他の瓦より年代的に古い様相をもっている。135の内面はヘラケズリ痕がある。138の平瓦はいわゆる枝瓦である。139はヘラナデ痕、140は糸切り痕が認められる。142には釘穴が、141には「利右衛門」銘の刻印がある。143は鬼瓦の外縁部に相当する部分である。その他には、144の土鏡、145・146の「寛永通寶」がある。147～158の木製品の内、147～155は樽の木栓である。157は木栓か。158は漆器椀、156は直取りは丁寧であるが、半折しており、器形は不明。159・160は筆の柄で、尻骨部分である。柄の竹骨の径は各々0.9cm、1.1cmである。竹製品は他に劣が19点出土している。その他に自然遺物として獸骨、魚骨、貝類がある。貝類にはナザニ1点、ツメタガイ37点、コロモガイ2点が出上している。

SX04 (Fig. 5) 井口SE02・04に切られている。平面形は不整円形を、断面形はレンズ状を呈する。最大の長さ152cm、深さ25cmを測る。

遺物 (Fig. 67) は中世後半期を主体にしており、土師器壺・皿、中国陶磁器、染付、備前焼、瓦質土器、軒丸瓦、硯等が出土した。161～164は土師器糸切り皿、165は糸切りの壺である。166は唐津焼碗で、内外面に鉄釉を施す。167は明代の青磁壺の脚であろう。168は青磁碗で、同安窯系と考えられる。169は明代末の染付小碗である。170・171は備前焼で、171は瓶、170は指鉢である。170はⅣ期に属する。174は筑前系要の洞部片である。172・173は瓦質土器で、172は指鉢、173は湯釜で、外面に菊花文のスタンプがある。175は軒丸瓦で、瓦当面に簡略化した8弁の蓮華文を施している。瓦当面径は10cmである。176は長方瓶で、裏面は一部がスリ上げされている。表面の海部と両部の境は明瞭な区別がつかない。材質は砂岩である。

SX07 (Fig. 55) 平面形は不整圓丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。長辺の長さ143cmを測る。壁面は粘土が貼付けられており、固く締まっている。緑灰色に汚染されている。

遺物 (Fig. 69) は江戸時代の陶磁器を主体としており、土師器壺・皿、肥前陶磁器、備前焼指鉢、瓦質土器、土師質土器、瓦類が出土した。179・180は糸切り底の土師器皿、181は壺、182は染付の猪口である。183は瀬戸・美濃系の皿で、外底部に輪状の日痕がある。184は高筒瓦の皿で、16世紀代の明染付である。内底は露胎である。185はヘラ描きの蓮弁文の青磁碗、187は白磁碗で、墨付と内底に砂目痕がある。釉は全体に施している。188・189は唐津系陶器で、189は高

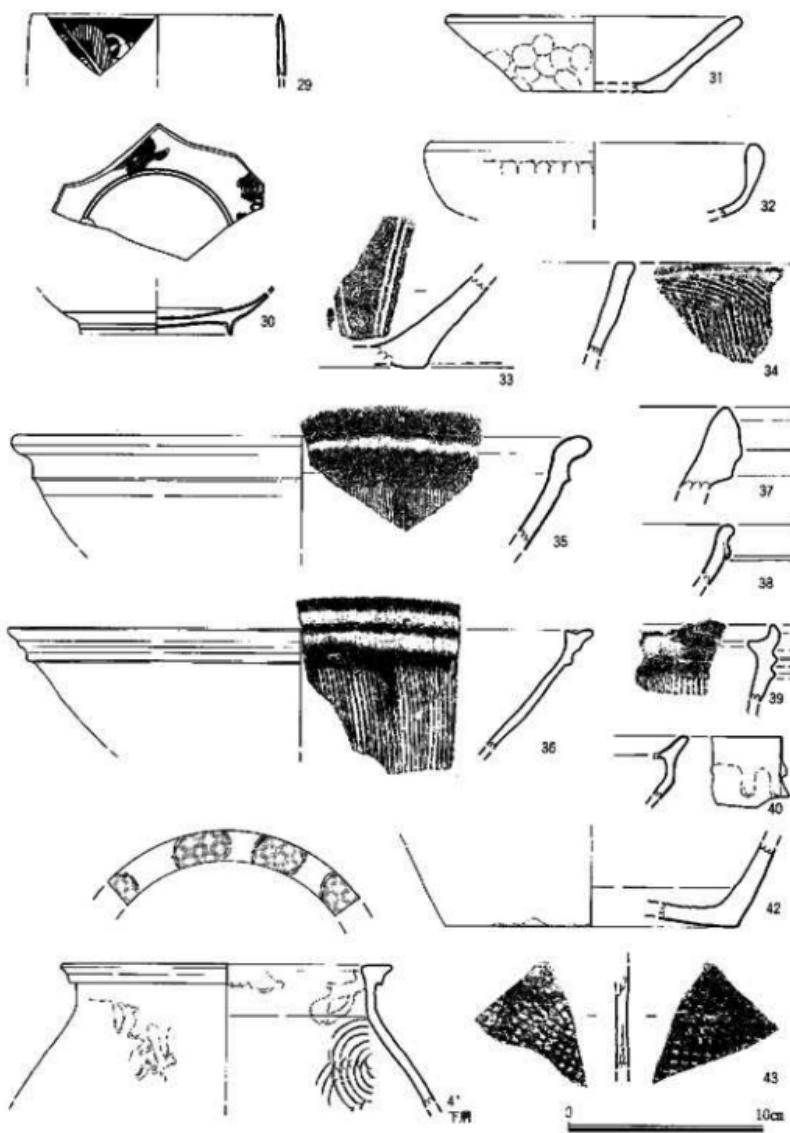
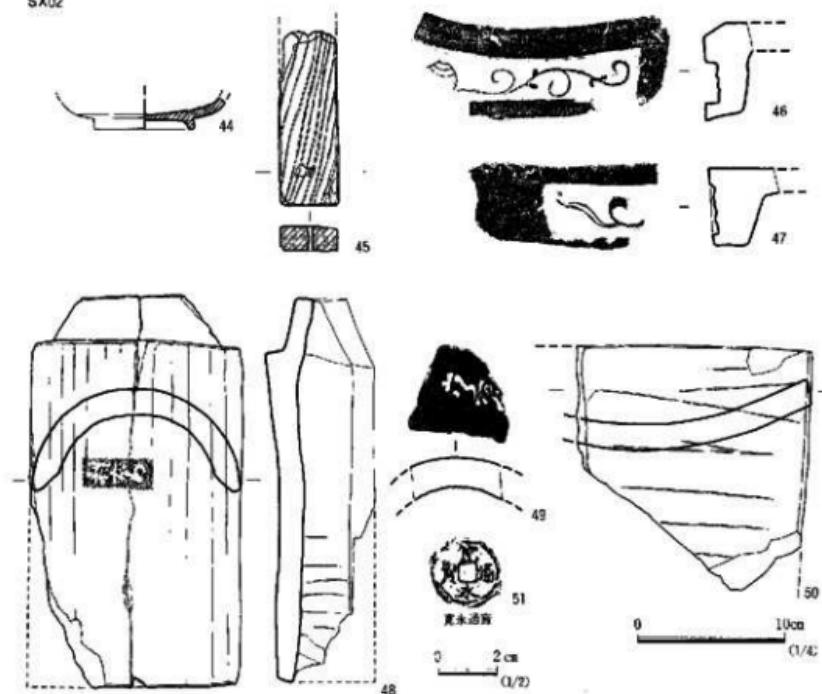


Fig. 58 SX02出土遺物実測図 (第八 1/3)

SX02



SX03

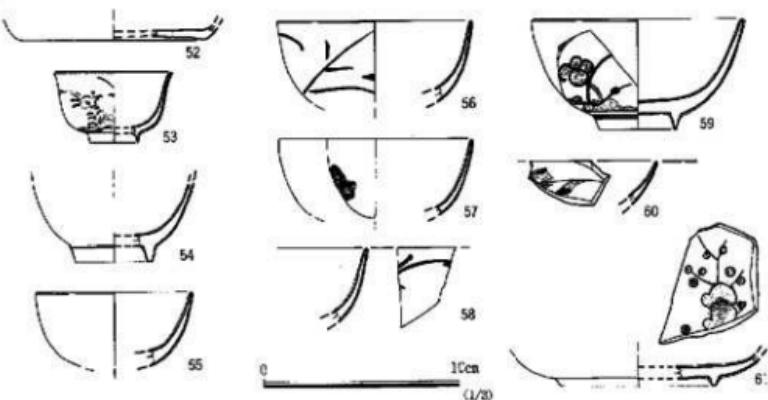


Fig. 59 SX02・03出土遺物実測図 (縮尺 1/2・1/3・1/4)

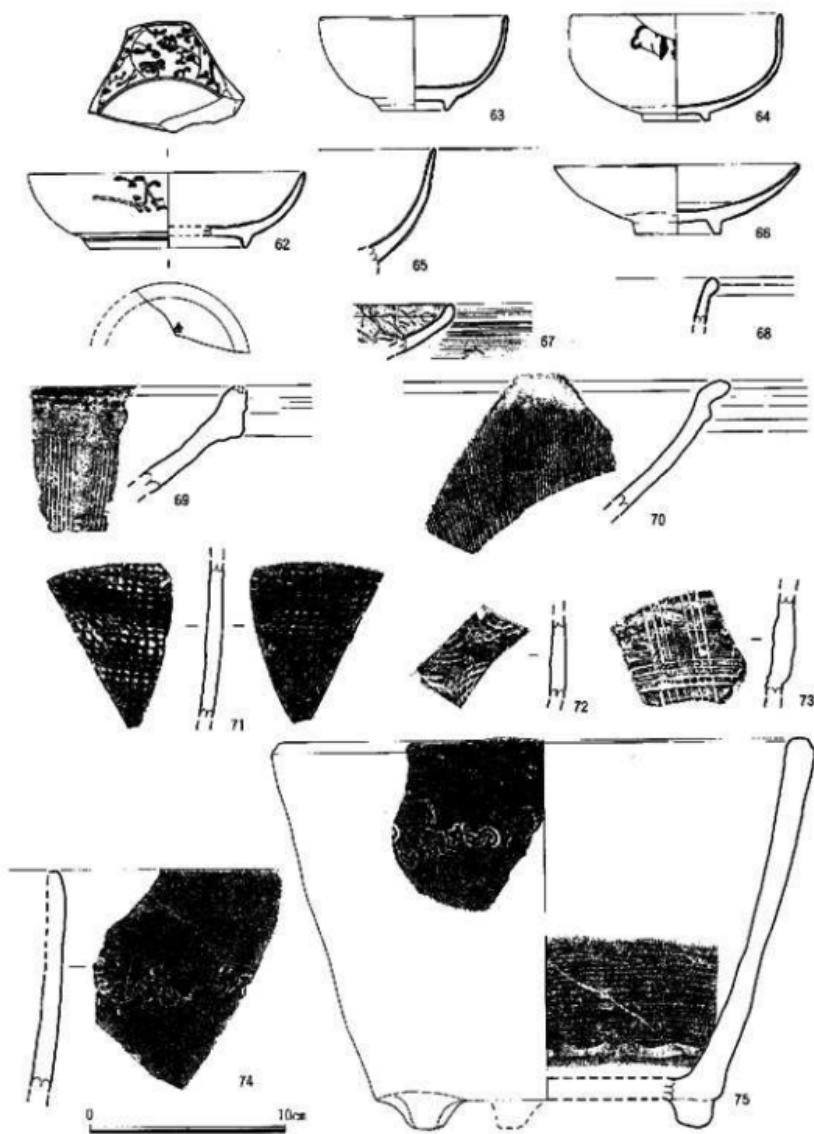


Fig. 60 湘阴 SX03出一遗物实测图 (1) (缩尺 1/3)

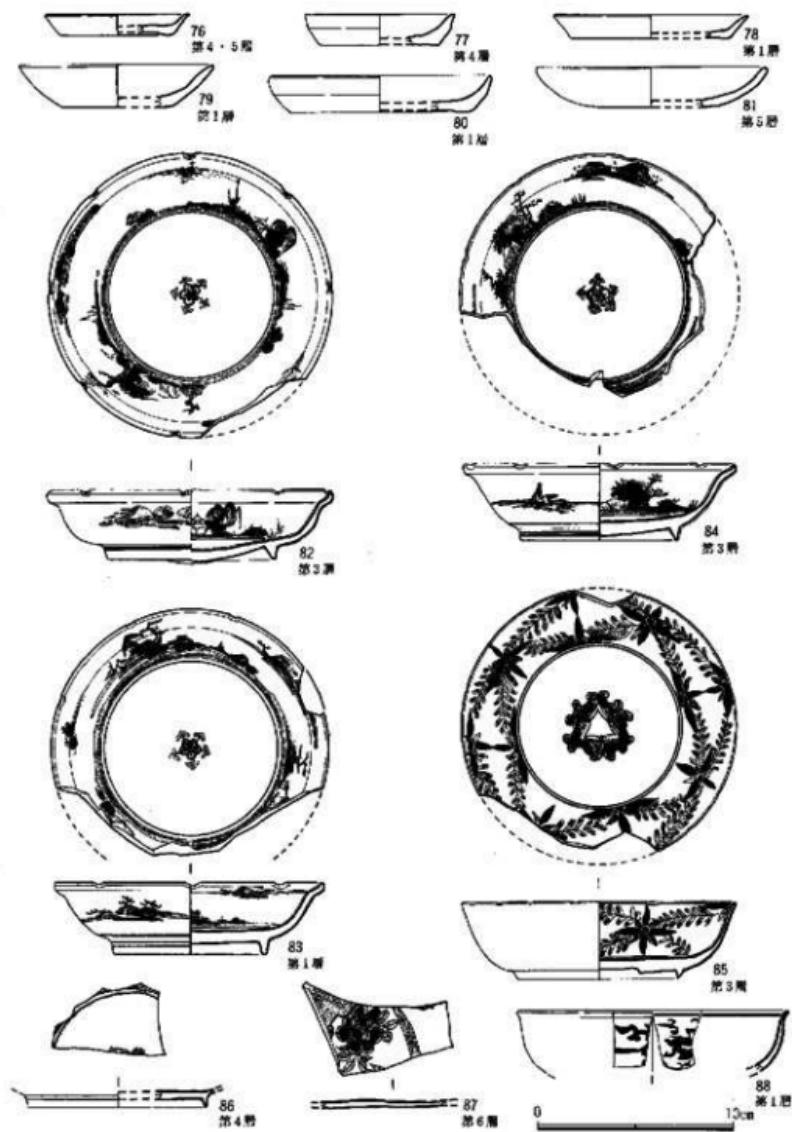


Fig. 51 潛井 SX03层上遺物実測図 ② (縮尺 1/3)

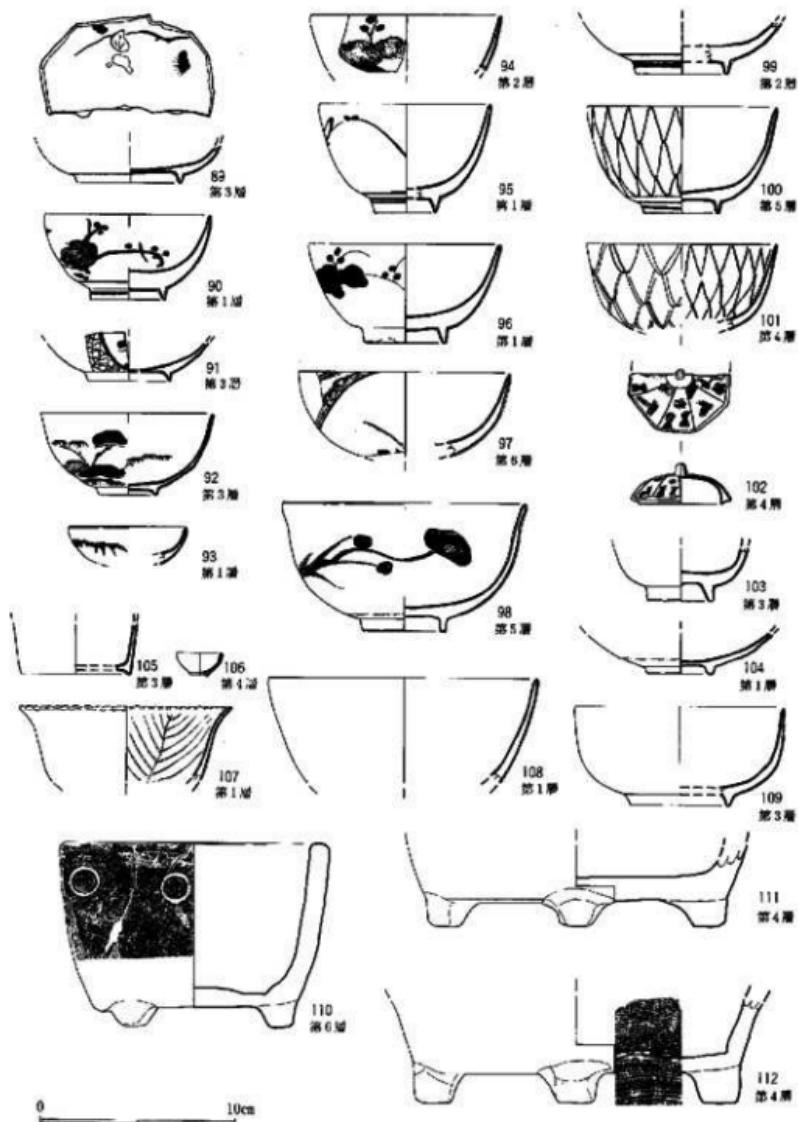


Fig. 62 湖州 SX03出土遺物実測図 ③ (縮尺 1/3)

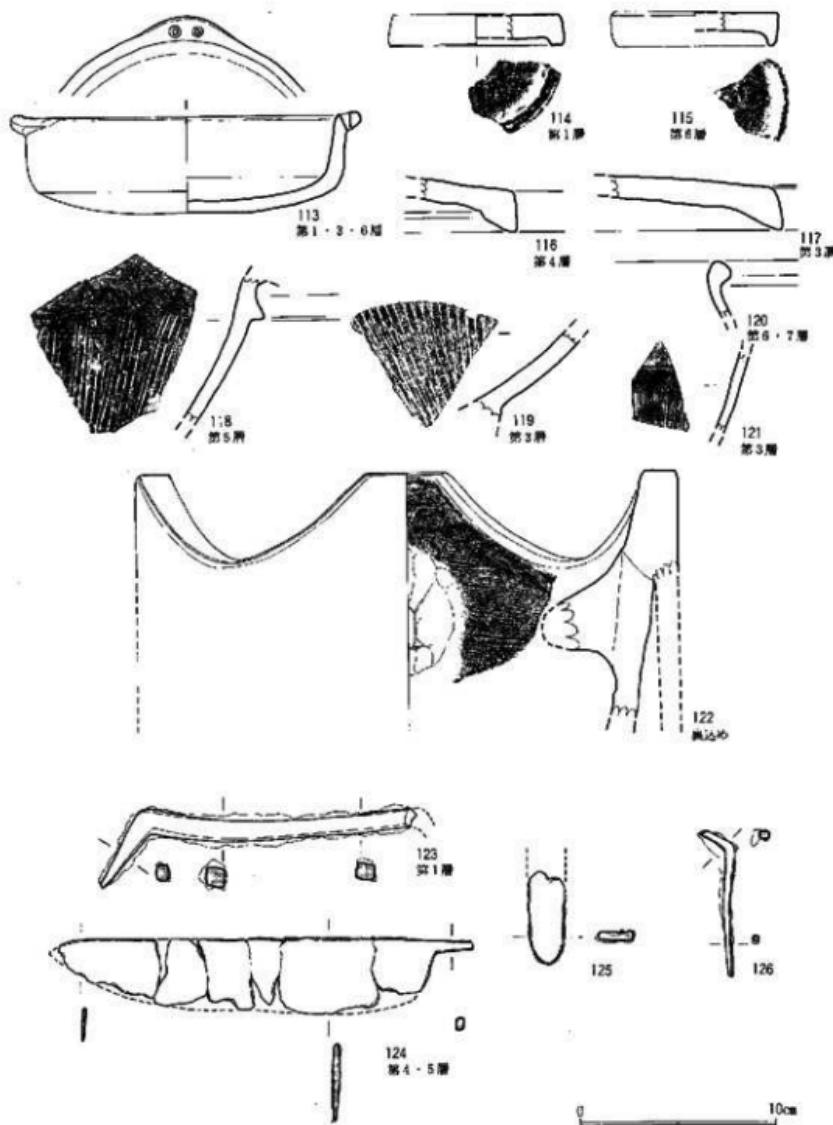
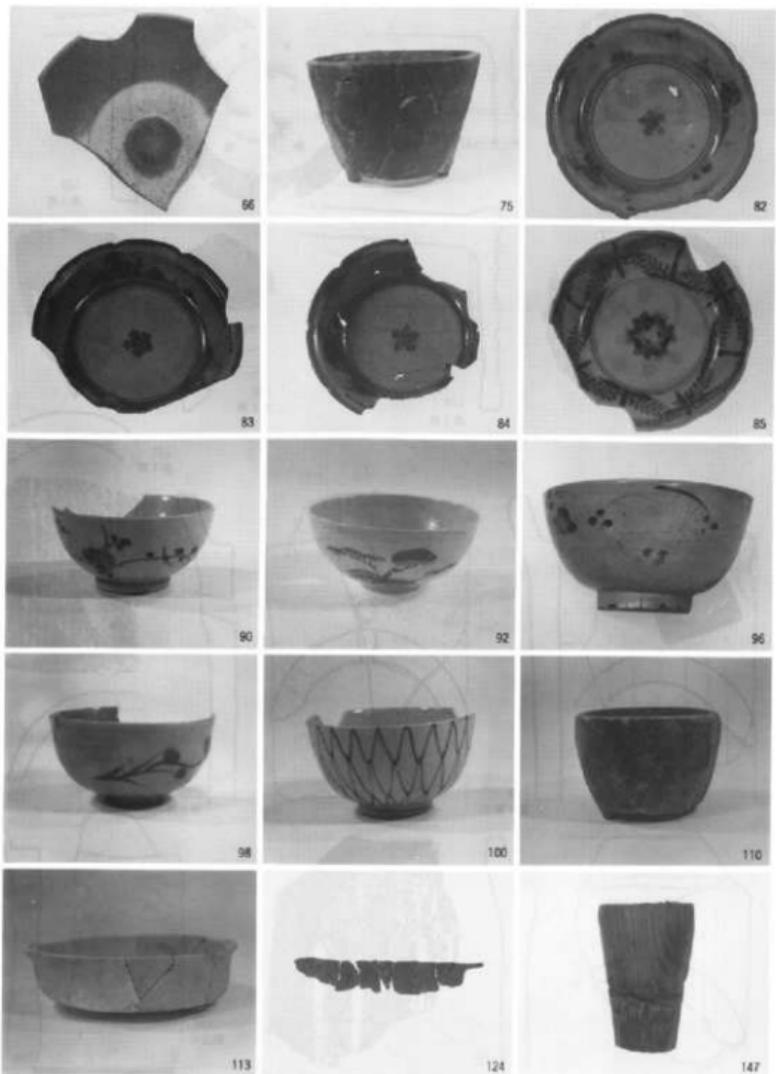


Fig. 53 深井 SX03出土遺物実測図 ④ (縮尺 1/3)



瀬戸SX03出土遺物

示数内は史跡図の番号に一致する。

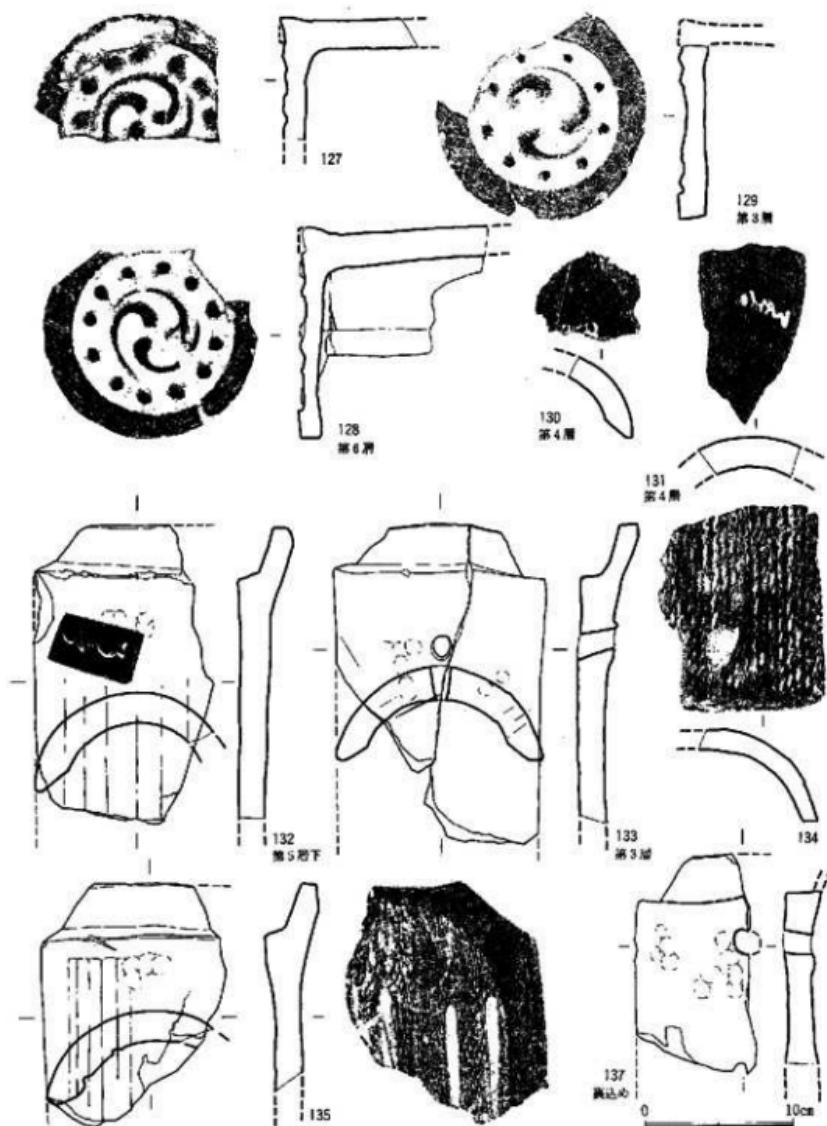


Fig. 64 漢代 SX03出十遺物実測図 ② (縮尺 1/4)

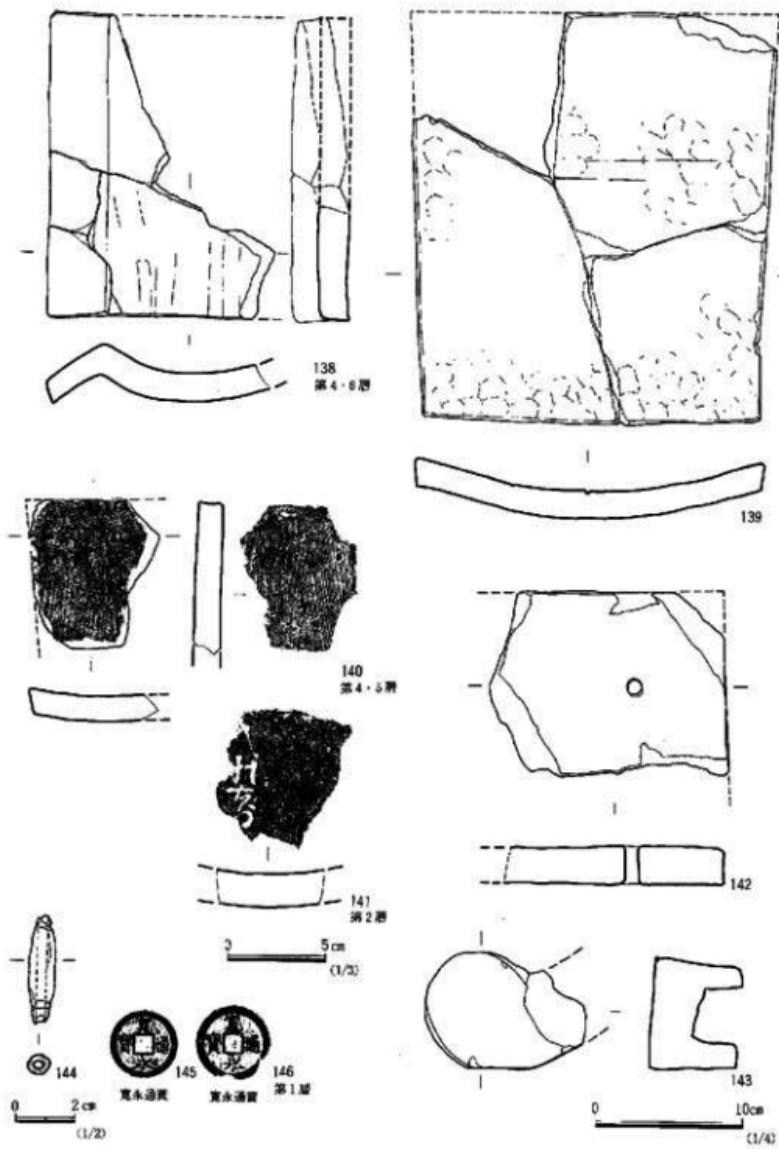
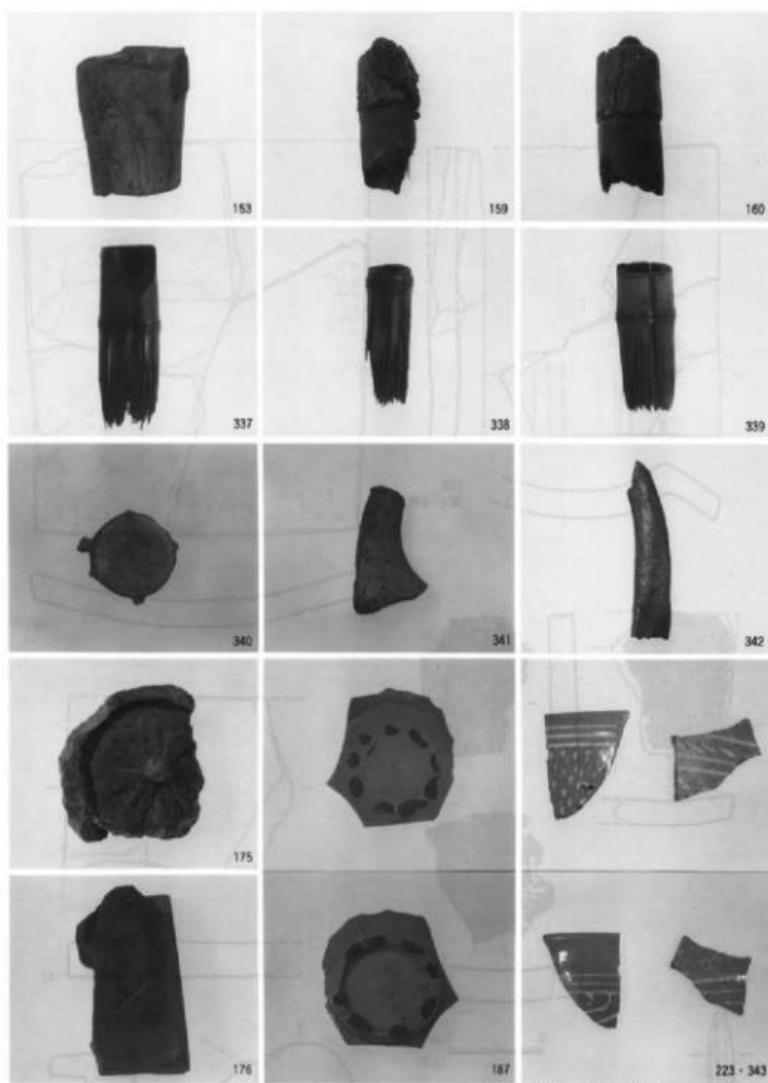


Fig. 65 湘湖 SX03出土遺物実測図 ⑥ (縮尺 1/2・1/3・1/4)



SX03・04・07・16出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。
337~342はSX03, 175・176はSX04, 187はSX07H土
223・343はSX16出土

縁の大皿である。内底に目痕がある。186は須恵質土器の瓶で、外面に格子目の叩き痕がある。朝鮮半島からの搬入品である。191・192は瓦質土器の火舎、190は土師質土器の鍋、193~196は擂鉢で、193は備前焼、194・196は肥前系、195は瓦質土器である。195は内外面に粗いカキ目状のヨコハケを施す。197は軒平瓦、198は道具瓦である。198には焼成前に穿孔した釘穴がある。

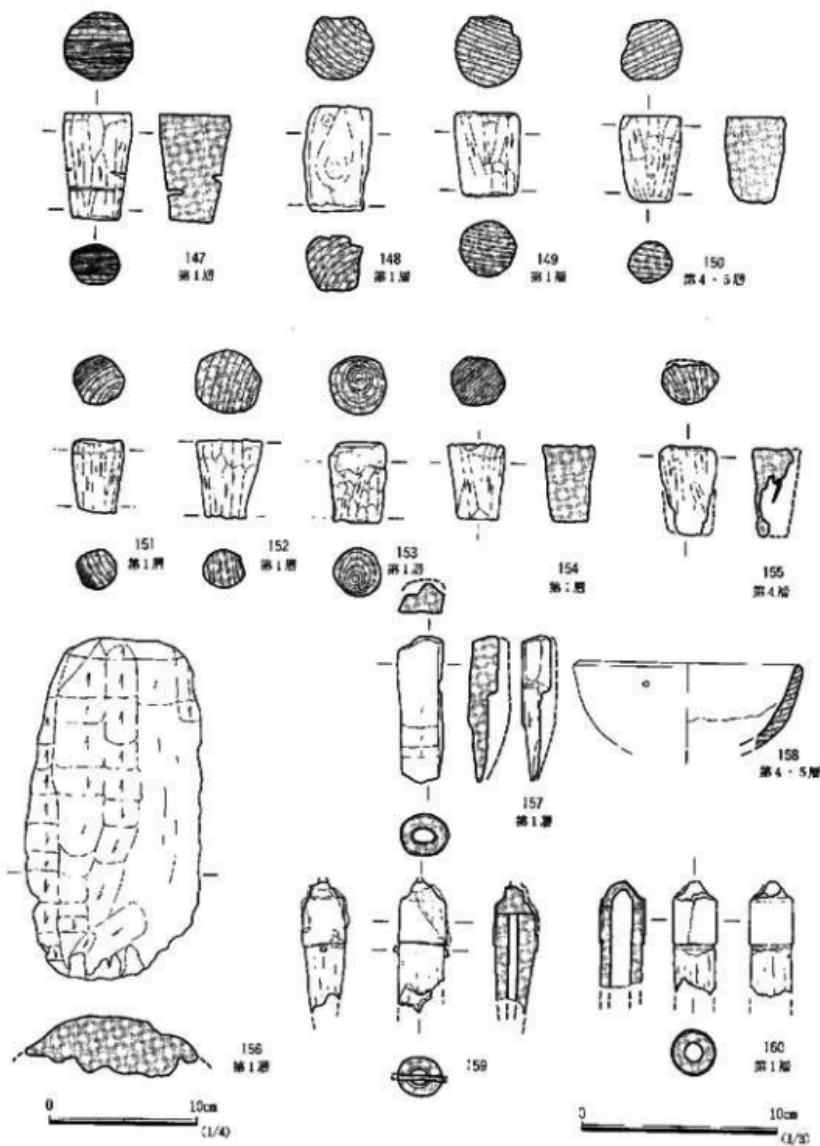


Fig.66 潛樹 SX03出土遺物実測図 ⑦ (縮尺 1/3・1/4)

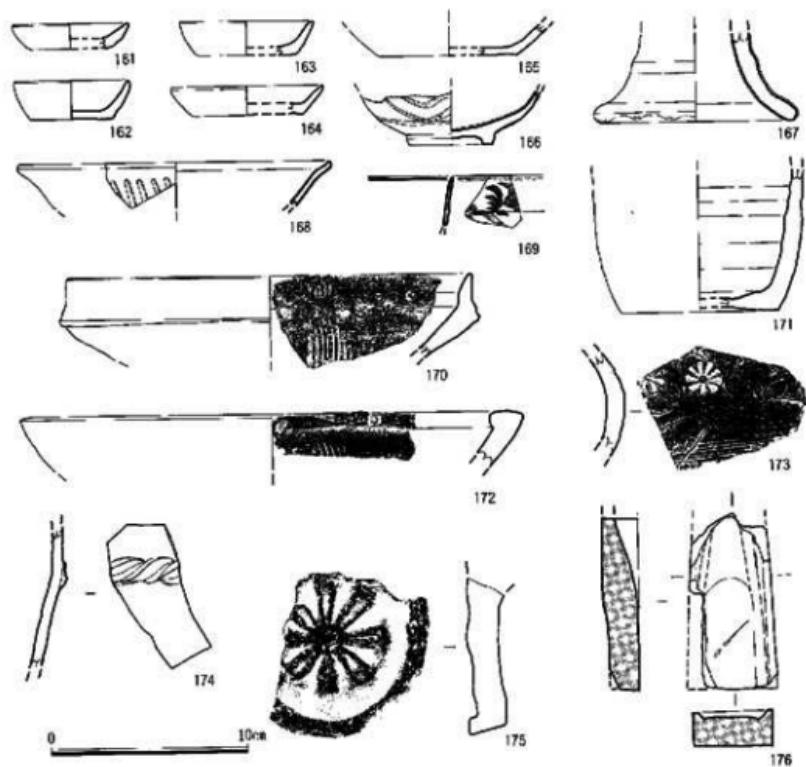


Fig. 67 SX04出土遺物実測図(縮尺 1/3)

SX10 (Fig. 5) 北側境界地にあるため全形は不明である。境界地の斜面が崩壊する危険があつたため発掘は一部にとどめた。

遺物 (Fig. 70) は土師質土器、土師器皿片、舶載青磁碗が出土している。199は土師質土器の擂鉢で、内外面はナナメ方向のハケ調整である。下し口は磨滅している。

SX11 (Fig. 5) 平面形は不整長方形を呈するが、底面は不定で、凸凹が著しい。SE12・19、SX07に切られる。壁面、及び床面は粘土質の土で固く縮まっており、緑茶を含んだ褐色を呈している。

遺物 (Fig. 70) は中世後半期を主体としている。200～202は土師器の糸切り皿、203～206は糸切り底の杯である。204の外底には板目痕がある。207は明染付碗、208は瓦質土器の擂鉢である。

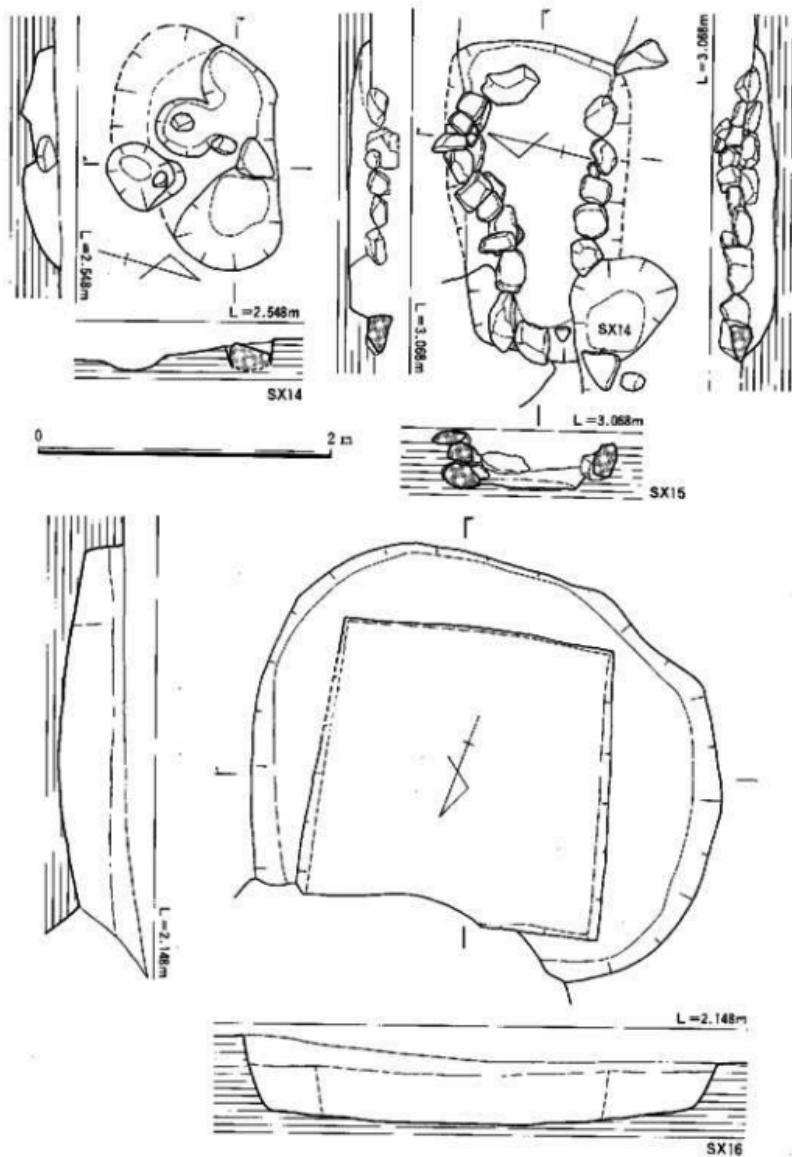


Fig. 68 SX14 · 15 · 16 史洞圖 (縮尺 1/40)



SX15（南から）



SX16（東から）



SX19（南から）



SX20（南から）

209は備前焼V期の摺鉢である。

SX14 (Fig. 68) 土壙の崩壊が著しいため形状をとどめていない。平面形は不整楕円形を呈しており、底は不定で、凸凹が著しい。礎が数個存在する。

遺物 (Fig. 70) は瓦質土器の鉢、瓦類が出土した。211・212は丸瓦で、内面に布目痕がある。

210は瓦質土器の捏鉢で、内面はヨコハケ調整である。

SX15 (Fig. 68) 北側境界地に位置し、他の造構と切り合うため、全形は遺存していない。掘り方の形状は不明。現存長218cmを測る。土壙の内側に、円礎、又は角礎を用いた石室状の石積みがみられる。この石積みは1～3段遺存しているが、土壙の小口部分は石積みの破損が著しい。この石室状造構の内法は最大長190cm、最大幅65cmを測るが、東側の小口が広くなっている。底面は平坦であることなどから墓と考えられる。

遺物は土器器皿片、磁器片がある。

SX16 (Fig. 68) 井戸SE14に切られる。江戸時代の室と考えられる。掘り方は不整円形を呈し、最大長323cmを測る。内部に一辺187～198cmを測る板廻いがある。四隅に角材を打ち込んで、板材

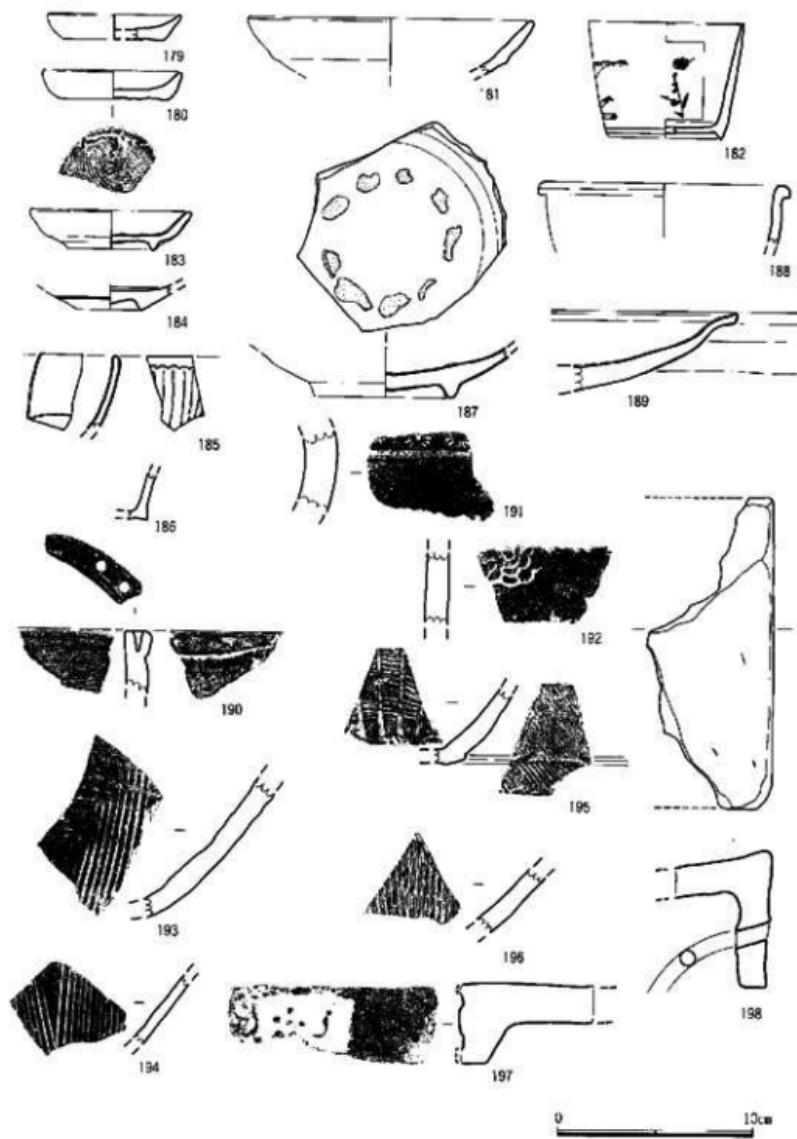


Fig. 69 SX07山上遺物実測区(縮尺 1/3)

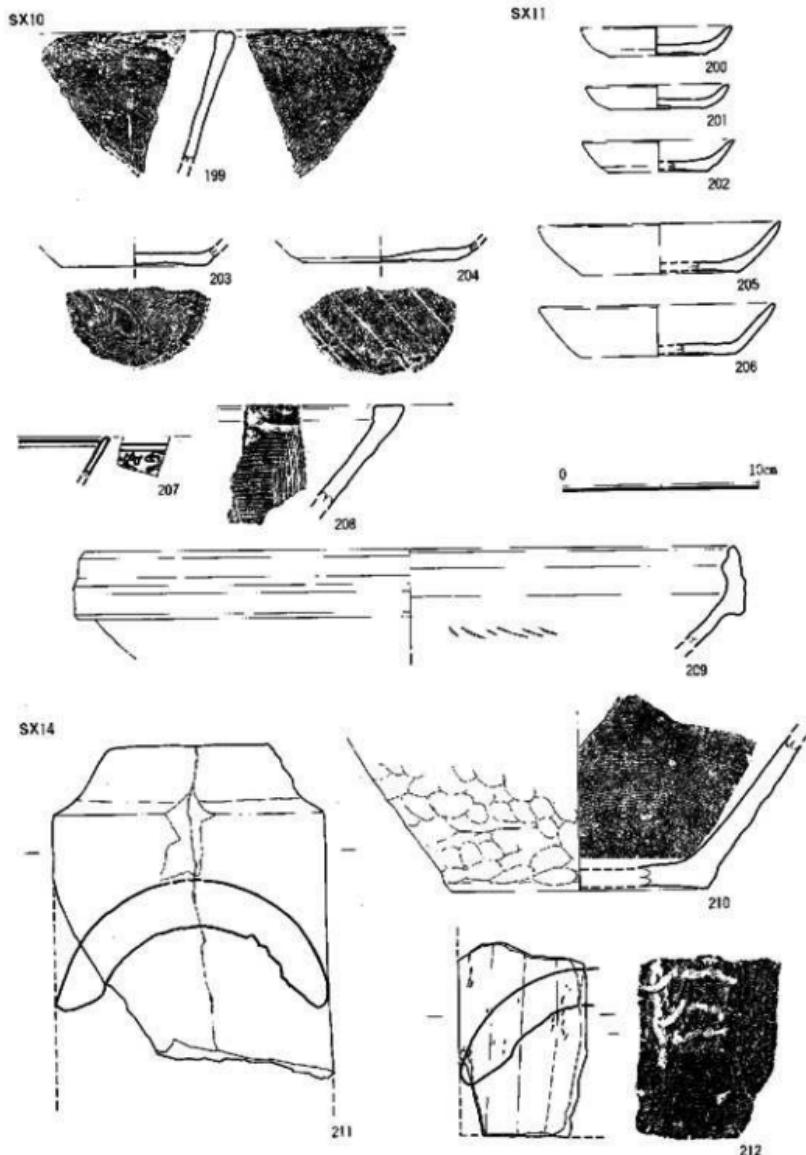


Fig.70 SX10・11・14出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

を横に用いたものと思われる。板材の厚さ、幅は不明である。

遺物 (Fig. 71・72) は上部器皿・皿、中國陶磁器、肥前系陶磁器、土師質土器、瓦質土器、備前焼、鉄製品、瓦類がある。214～216は上部器の糸切り皿、217～219は糸切りの碗である。220は明末の白磁皿で、内底は輪状の輪ハギがある。224は明染付皿で幕筒底である。225は白磁の輪花皿で、型作りである。内面に花文がある。肥前系の白磁である。227・229～234・239・240は唐津焼で、227・230～233は皿、229は碗、239は鉢である。230は鉄絵皿、231・232は溝縁皿である。229の内底には砂目痕がある。239は内面に刷毛目を施す。240は朝鮮唐津の瓶で、外面に薺灰鉄釉を施す。外底に砂礫が付着している。234は唐津片口鉢である。238は肥前系の刷毛目皿、237は瀬戸・美濃系の碗である。222は17世紀中頃の青磁碗、221・226は白磁碗、228は筑前産の陶器碗である。228は磁器手である。235・236は染付碗、223は高麗の象嵌青磁碗である。241は船載陶器の壺である。242は土師質、243は瓦質土器の櫛鉢で、243の下し目は7本単位である。244・245は土師質土器の鉢、247は土師質土器の鍋、248は東播系の須恵質土器鉢、250は二彩刷毛目の唐津焼鉢である。251は筑前産の壺で、口縁部平坦部に貝口痕がある。249・252～254は陶器櫛鉢で、249・252は備前焼、254は唐津焼、253は高取系と考えられる。255は平瓦、256は丸瓦である。257は鉄製品である。現存長5.9cm、現存幅1.9cm、厚さ1.4cmを測る。中空になっており、内法は縱幅1.5cm、横幅0.3cmを測る。刀子類の鞘であろう。

SX18 (Fig. 5) 北側境界地に位置し、且つSK20に切られるため、其壙形状は不明。発掘は完了していない。現存長136cmを測る。

遺物 (Fig. 74) は上部器皿・皿、平瓦、鉄製品（釘）が出土している。258は土師器皿、259は碗で、いずれも糸切りである。

SX19 (Fig. 5) 井戸SE15・16と切り合っており、形状、深さ共に不明である。15世紀から16世紀の土壙である。

遺物 (Fig. 74) には上部器皿・皿、陶磁器碗、瓦質土器、瓦類、鉄製品などがある。260・261は土師器糸切り皿、262は須恵器蓋、263は同安窯系青磁碗、264は青磁瓶の口縁部片、265は瓦質土器の角火鉢である。外面には丁寧な焼研磨が施される。外面上位に四方津文を刻印する。268も同じ火鉢で、外面に菊花文を刻印する。内外面は丁寧な作りである。266・267は瓦質土器の鉢で、266は櫛鉢である。269は道瓦で、焼成前に穿孔した釘穴がある。形状は三角形を呈しており、隅丸であろう。270は丸瓦で背部に繩目印痕がある。271は鉄製釘である。

SX20 (Fig. 73) 平面形は不規格円形を呈し、底面は舟底状を呈する。現存長177cm、最大の深さ45cmを測る。底面に長さ22～35cmの角縁が3個存在する。

遺物 (Fig. 74) は17～18世紀代の國産陶磁器、瓦類、鉄製品が出土した。272は肥前染付碗、273は焼成良好の陶器櫛鉢で、小石原系である。18世紀前半代の遺物である。

SX21 (Fig. 73) SX03の北東隅に接している。SX03の裏込めを損傷しており、SX03より後出す

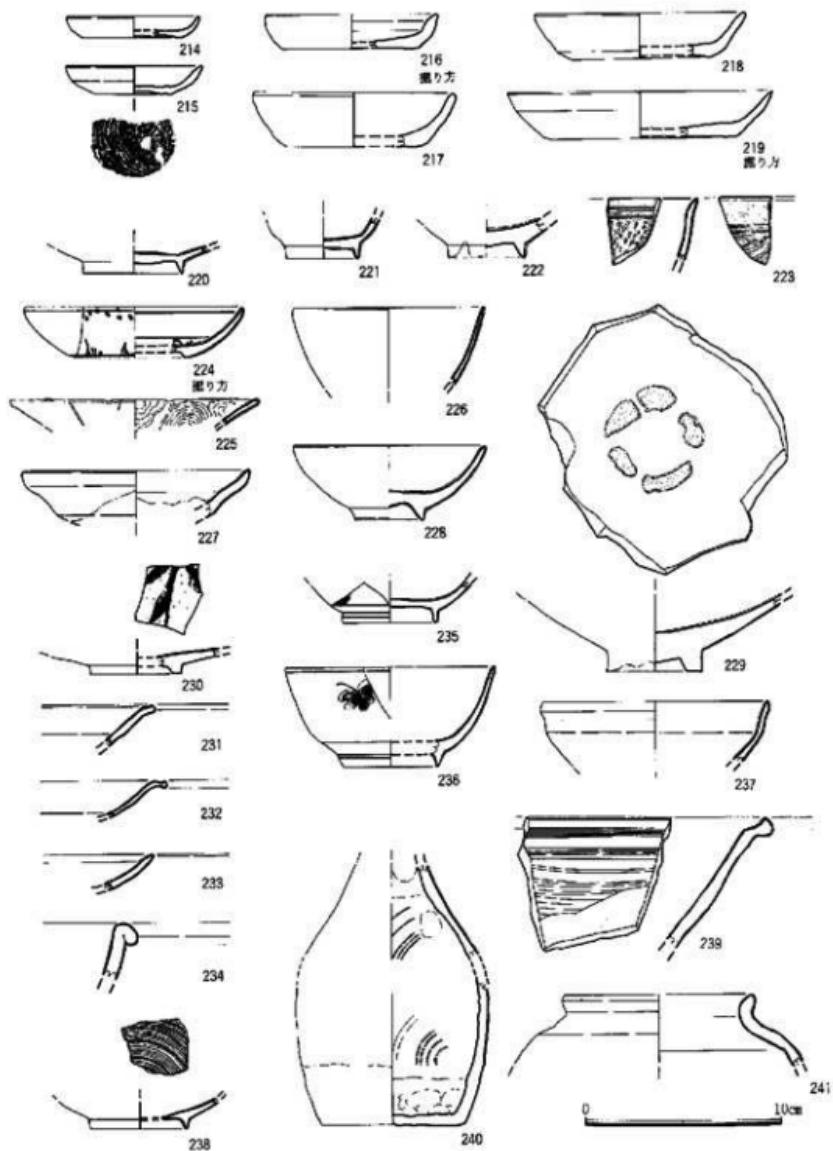


Fig. 71 SX16出土遺物実測図 ① (縮尺 1/3)

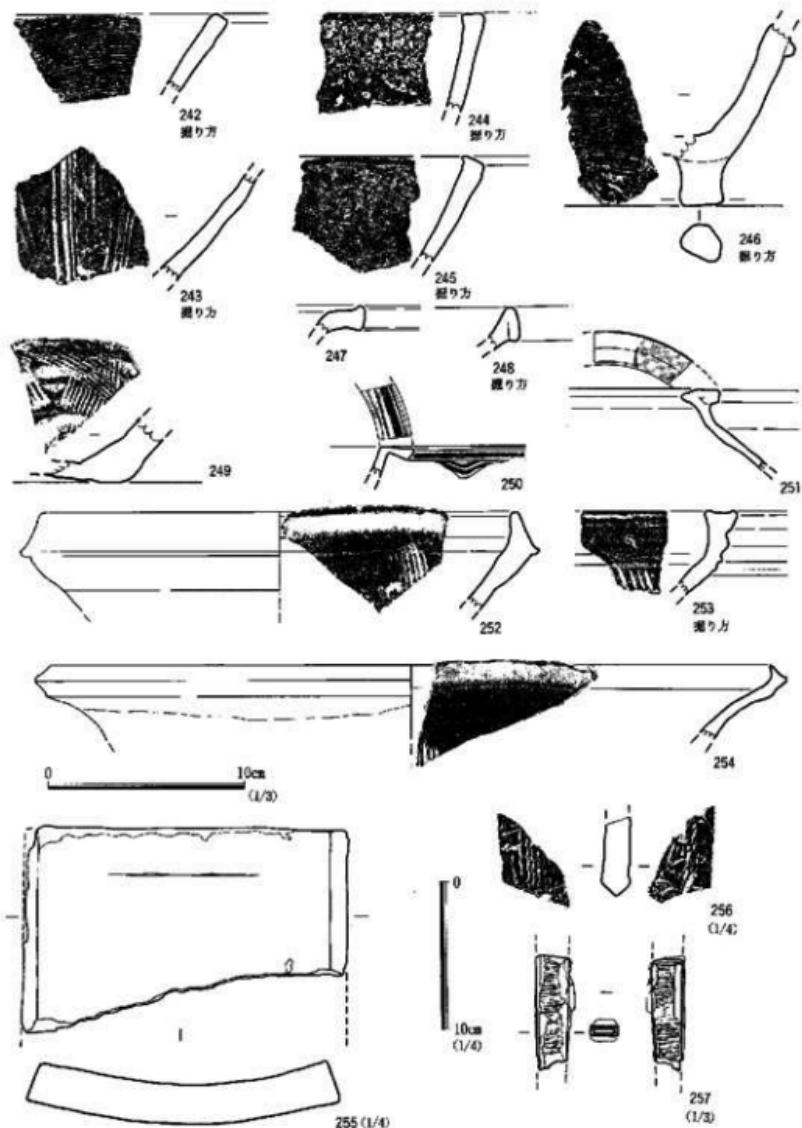


Fig.72 SX16出土遺物実測図 ② (縮尺 1/3・1/4)

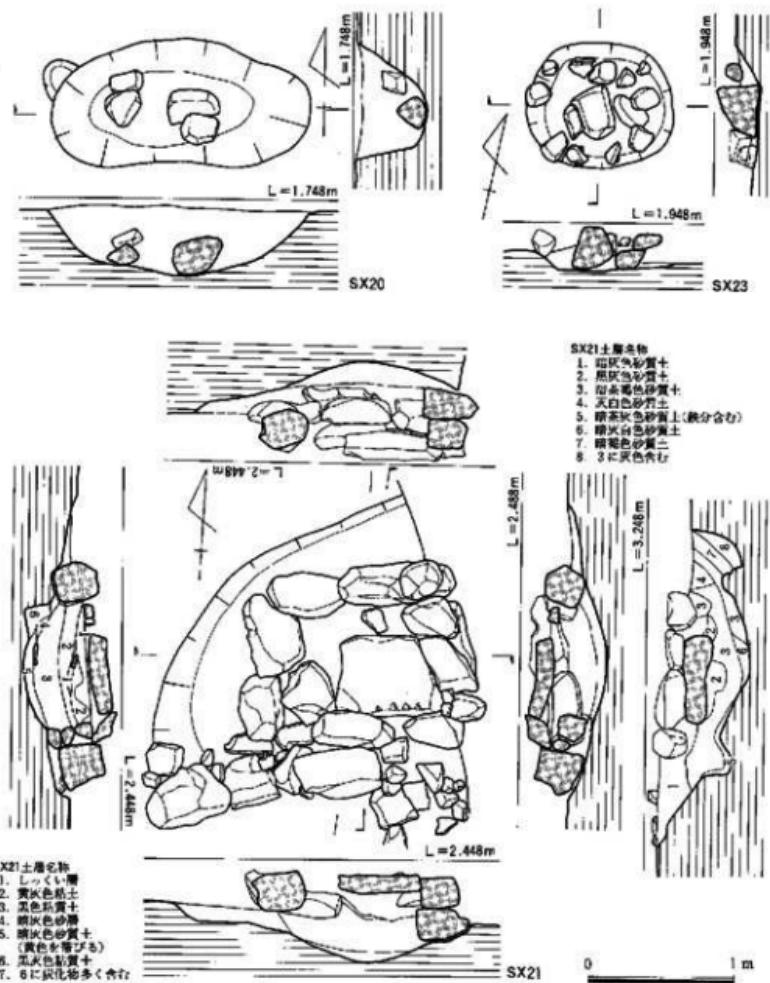


Fig.73 SX20・21・23実測図 (縮尺 1/40)

る遺構である。東側を擾乱に切られる。掘り方の形状は不明。墳底は2段掘りで、下部底面は摺鉢状である。掘り方内部には箱形の石室状の石組みがある。石組みは1段～3段で、長さ30～58cmの石を用いるが、SX03に接する南面のみは1段積みである。内法は東西83cm、南北74cm、石組みの高さ43cm、石組み最上段の上端から土壤の底面までは59cmを測る。この石室の天井部には長さ70cmを測る砂岩質の扁平な石が乗っており、旧位置をとどめるものと考えられる。石室内の土層には3層にヘドロ状堆積物があった。石材は礫岩、変成岩、砂岩を用いている。砂岩には虫穴を有するものがあり、又、上部の扁平石には矢穴が存在する。

遺物（Fig.75）は土師器皿、肥前系陶磁器、関西系陶器、瓦類が出土した。江戸時代の18～19世紀代である。274は土師器糸切り皿、275は肥前系白磁碗、276・278～281は肥前系染付で、281は葵合子の蓋である。282は関西系の土瓶蓋、284は唐津、又は筑前産の陶器摺鉢、285は国産の水甕、286は丸瓦片である。これらの遺物は、18世紀～19世紀代の軸をもった遺物である。

SX23 (Fig.73) 平面形は隅丸長方形を呈する。長さ100cmを測る。墳底は平坦で、中央に長さ35cm大の角礫を置き、その周間に円礫を配している。土壤形状からみて、建物の礎石の可能性を



石室状遺構SX21(西から)



石室状遺構SX21完掘状態(西から)



SX21南側壁(北から)



掘坑内土壤SX30(西から)

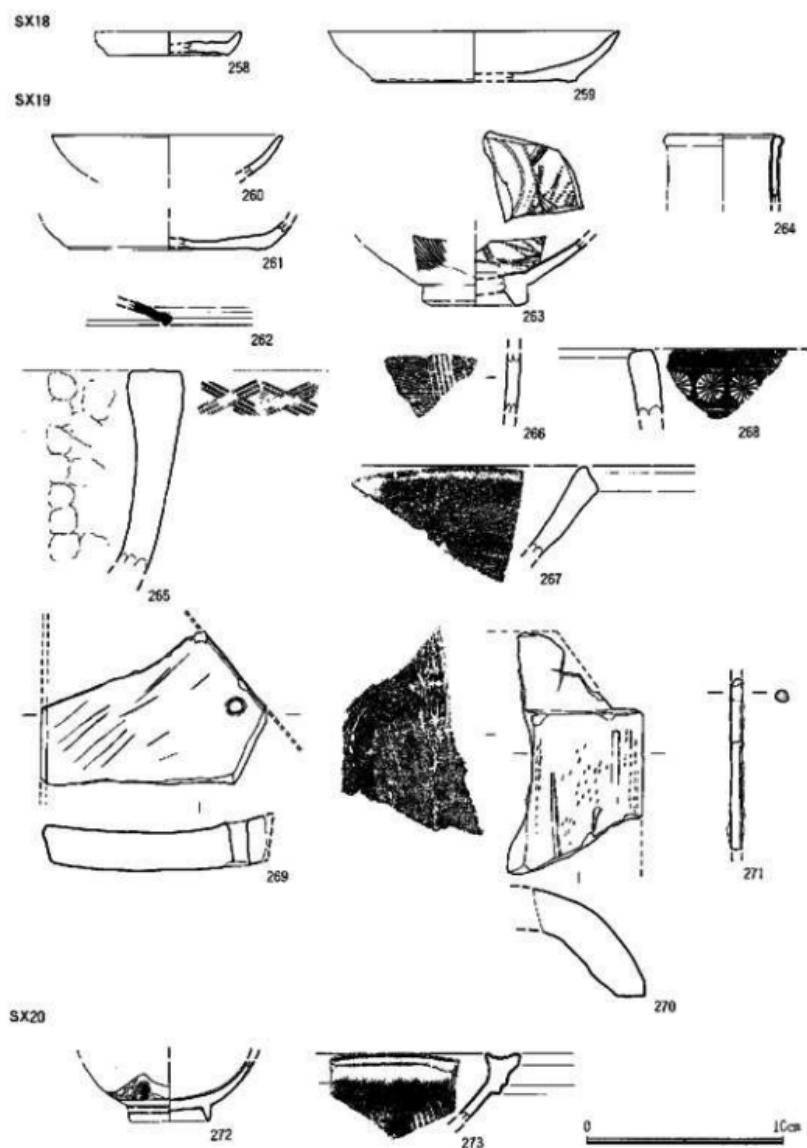


Fig.74 SX18~20出十遺物実測図 (縮尺 1/3)

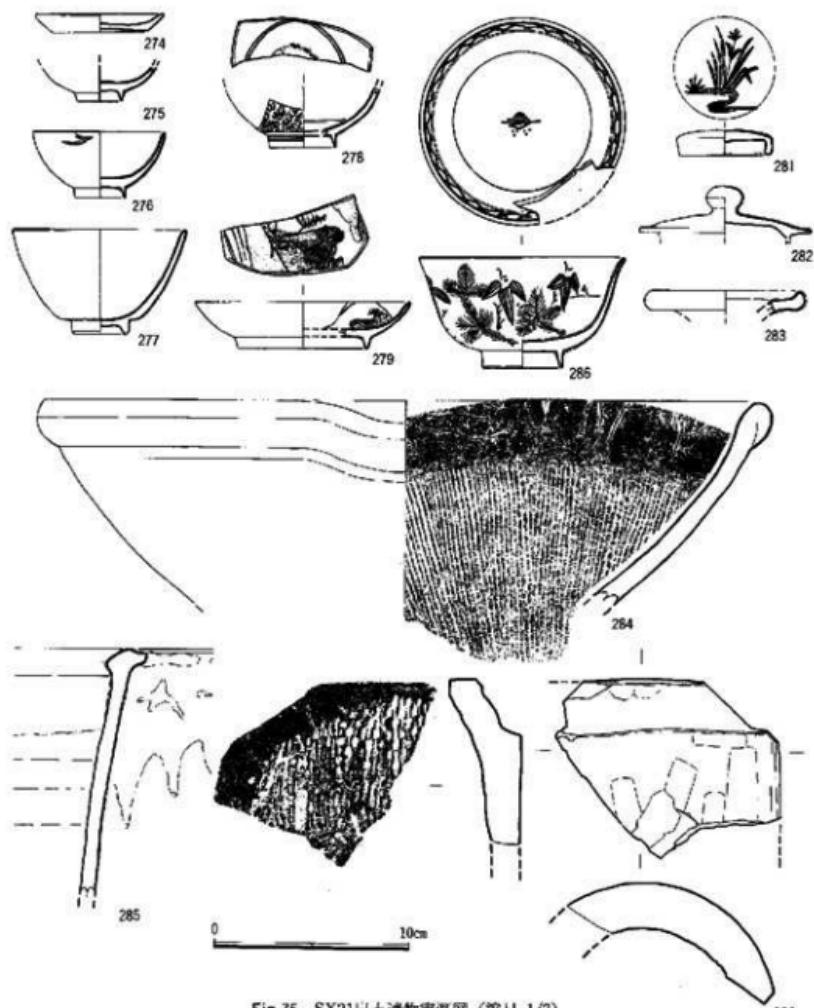


Fig. 75 SX21出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

もっている。

遺物は木炭片が出上した。

SX30 (Fig. 57) 漆樹状遺構SX03の南側床面に掘り込まれた土壙で、SX03を切っている。境界

地に位置するため全形は不明だが、現存長87cm、現存の深さ38cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は箱型である。周壁は褐色粘土を貼っている。

遺物(Fig. 76)は江戸時代を主体としている。287・289は伊万里染付皿、288は唐津焼皿、290は肥前青磁の角皿、291は唐津焼甕である。292は素焼きの七輪で、内側下位に底受けの突帯を貼付けている。295は瓦当面に三巴文を配した軒丸瓦である。293は鉄製の釘で、幅3.1cmにタテ方向の木質が残っている。294は滑石製の石錘である。石錘の最大長は3.6cm、最大幅1.9cm、厚さ1.4cmを測る。長軸方向の中央に紐掛けの溝を施している。

土壙墓SX31 (Fig. 77) 遺構面としては第3面に相当する。第1・2面の中・近世面を撤去し、土層観察のために砂層を削平中に発見した。墓壙は平面形が隅丸長方形を呈する。長さ170cm、幅134cmを測る。墓壙内に木棺等の痕跡はなかった。墓壙内には南側に青磁碗が伏せた状態で1個と、墓壙上部より人骨片が出土した。

遺物(Fig. 77)の青磁は龍泉窯系青磁碗1-1類に相当する。口径16.6cm、器高7.4cmを測り、

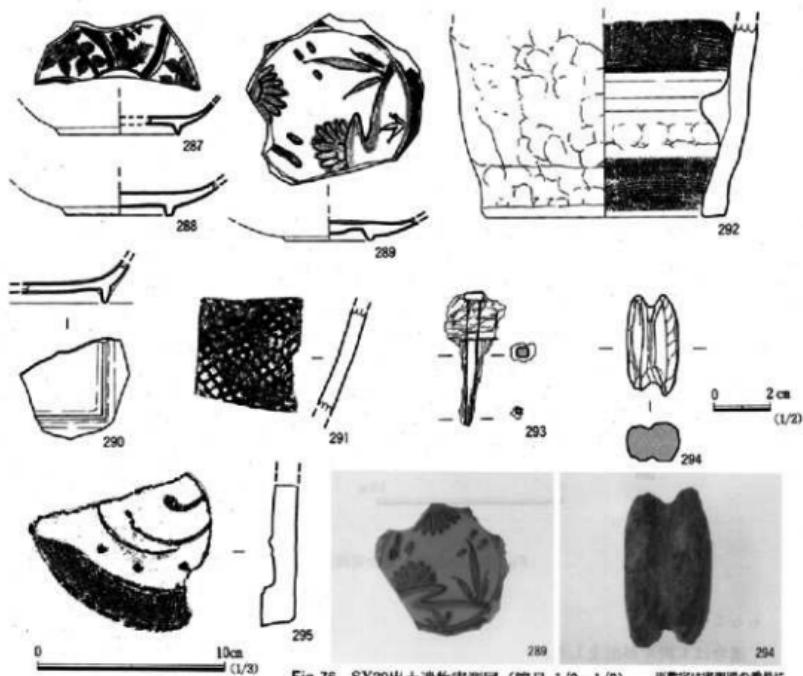


Fig. 76 SX30出土遺物実測図(縮尺 1/2・1/3) 番号は実面図の番号に一致する。

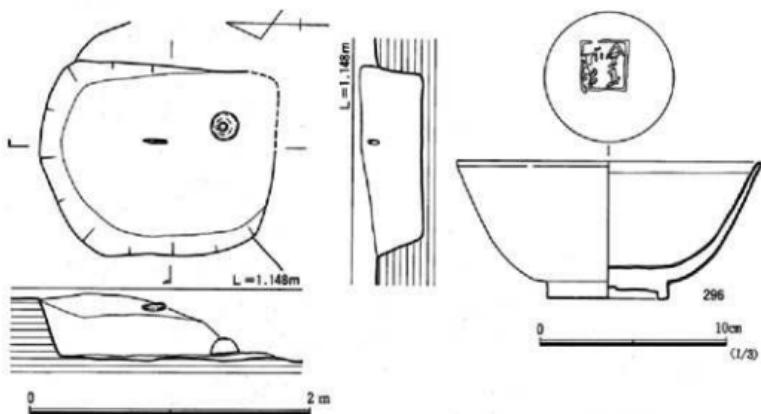
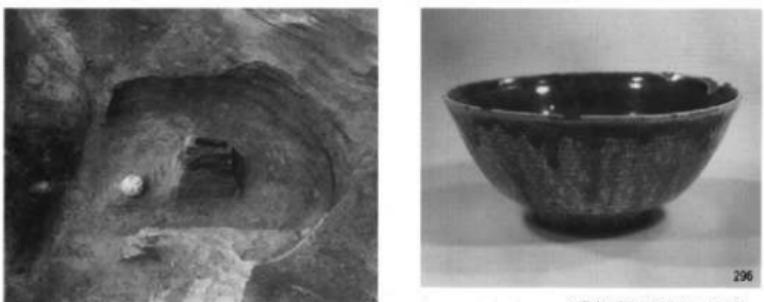


Fig. 77 土塚墓 SX31実測図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/3)



土塚墓 SX31 (南から)

※数字は実測図の番号に一致する。

内外面に暗緑灰色の釉を施す。外底面は露胎である。内底見込みに「金玉滿堂」の刻印がある。12世紀後半～13世紀代の所産であろう。

石積遺構SX32 (Fig.78) 調査区の北側境界地に位置しており、全容は明らかではないが、東西方向に延びる。中世後半期、又は近世の遺構に切られ、更に上部の削平等を受けているため遺存状態は悪い。遺構の現存長は約20m、最大幅6.5mの規模である。この石積遺構は砂浜汀線部の傾斜面に形成されており、この傾斜角度は45°を測る。石積み（又は礫群）の最上端の高さは標高2.45m、最下部の標高は0.77mを測り、視覚的には強い落差を感じる。礫・岩の大きさは様々であるが、長さ13～65cmまでの幅がある。元来、角礫や切り石を用いたものと思われるが、斜面下半の礫群は丸味をもつものが多い。最上部の礫及び石は一部しか遺存していないが平坦面を形成

しており、長さ60～70cm大の角石が1.5mの間隔で、2列に配置された状況を示している。この2列の石の間には、小礫を充填しており、長さは5.1mまで確認した。この石列は1段しかない。石列の下には粘土等の整地事業の痕跡はなかったが、石列の上段には幅1.5m程度の堤防状の石墨があった可能性がある。傾斜面の礫・石の堆積の厚さは65cmを測る。用いられている石の種類は砂岩、玄武岩、礫岩、花崗岩などで、礫岩が最も多く、波に洗われたものが多い。これらの石は旧博多部には存在しないことから湾内の海岸部等から搬入したものであろう。砂岩は姫浜、玄武岩は能古島、今津等に産出する。石積遺構の北側の砂堆積の状況をFig.80の土層図で観察すると、下半は浜砂の堆積で、上部は約60cmまでの深さが風成層であることが判明した。又、石積遺構の南側（石積遺構の裏側に相当）に設けたB・Cトレンチ（Fig.81）では礫群の下部に堆積した第Ⅲ期の砂層中から、龍泉窯系青磁皿（314）、鏡運弁文青磁碗、同安窯系青磁碗（312・315・316）、口禿の白磁碗、土師器坏（311・318・319）・皿（309）、瓦器皿（310）、瓦質土器、土師質土器



石積遺構 SX32 (東から)

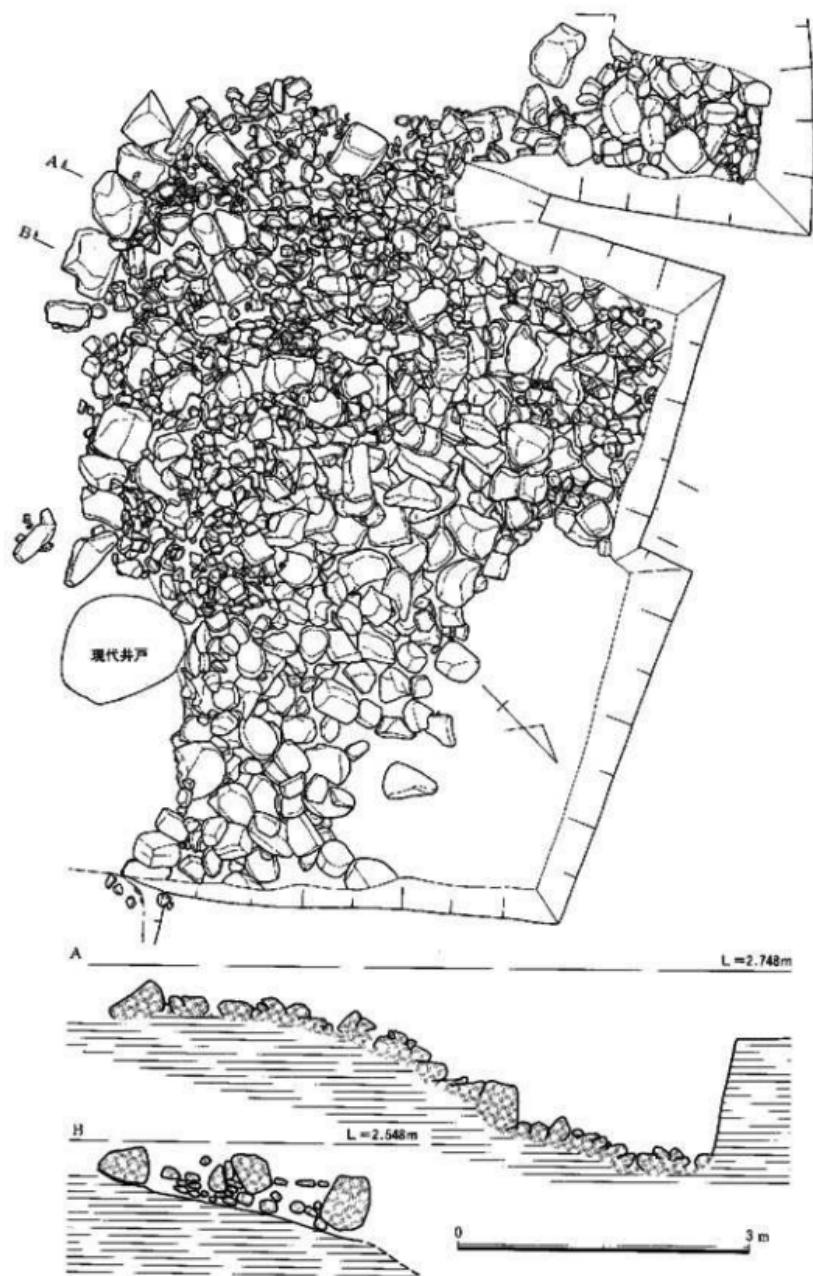


Fig. 78 右岸堤壙SX32斜側図 (縮尺 1/60)

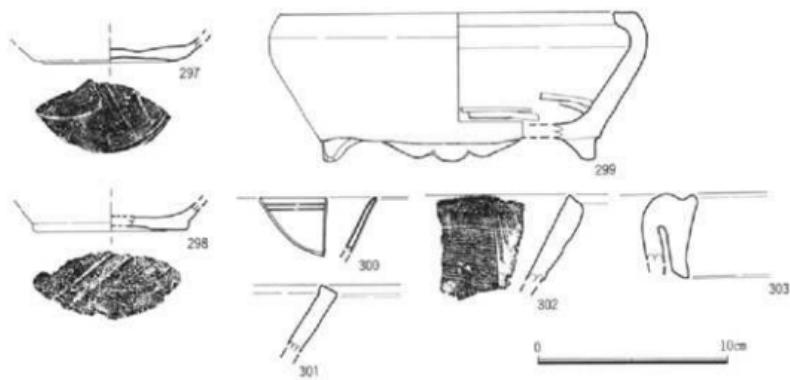
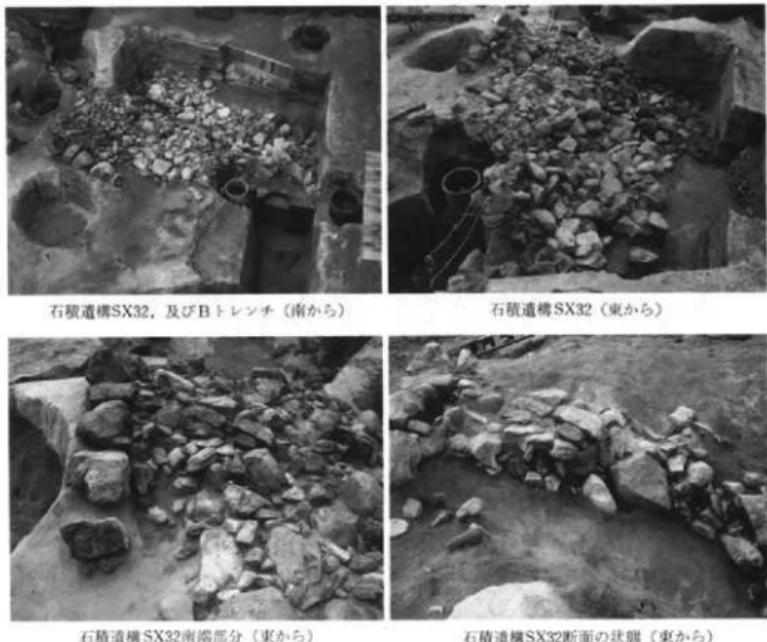
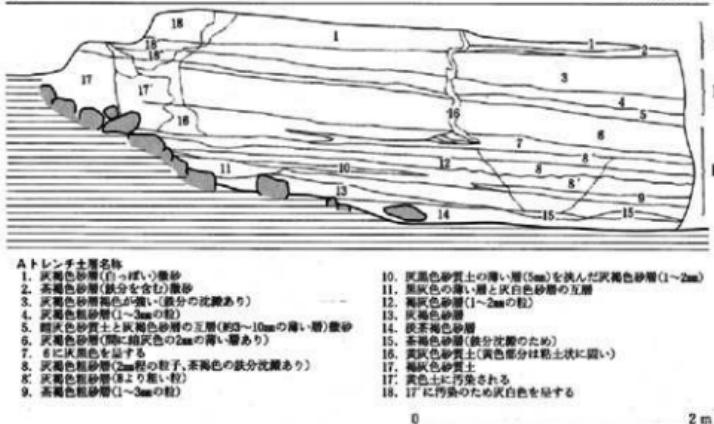


Fig. 79 石積造構SX32出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

S

L = 2.296 m N



0

2 m

Fig. 80 A トレンチ西壁土層図 (縮尺 1/40)



石積遺構SX32、及びA トレンチ（南から）

A トレンチ西壁土層状態（東から）

(313) の他貨幣等が出土した。又、砾群前面の A トレンチの砂層からは、白磁碗 (304)・土師器皿 (305)、瓦質土器 (307・308) がある。299は火舎で、ほぼ完形品である。石積遺構の砾群上面に密着して出土しており、時期判断の手懸かりとなる。石積遺構内からは、土師器皿 (297・298)、瓦質土器 (299・302)、青磁碗片 (300)、常滑焼片 (303) がある。

(4) トレンチの調査

A トレンチ (Fig. 80) 石積遺構の北側に設けたトレンチで、ここに図示する土層図は、砾群前面の土層である。土層実測図では第1・2層は風成層、第3層以下は浜砂の堆積である。第3～

$L_s = 2.40 \text{ m S}$

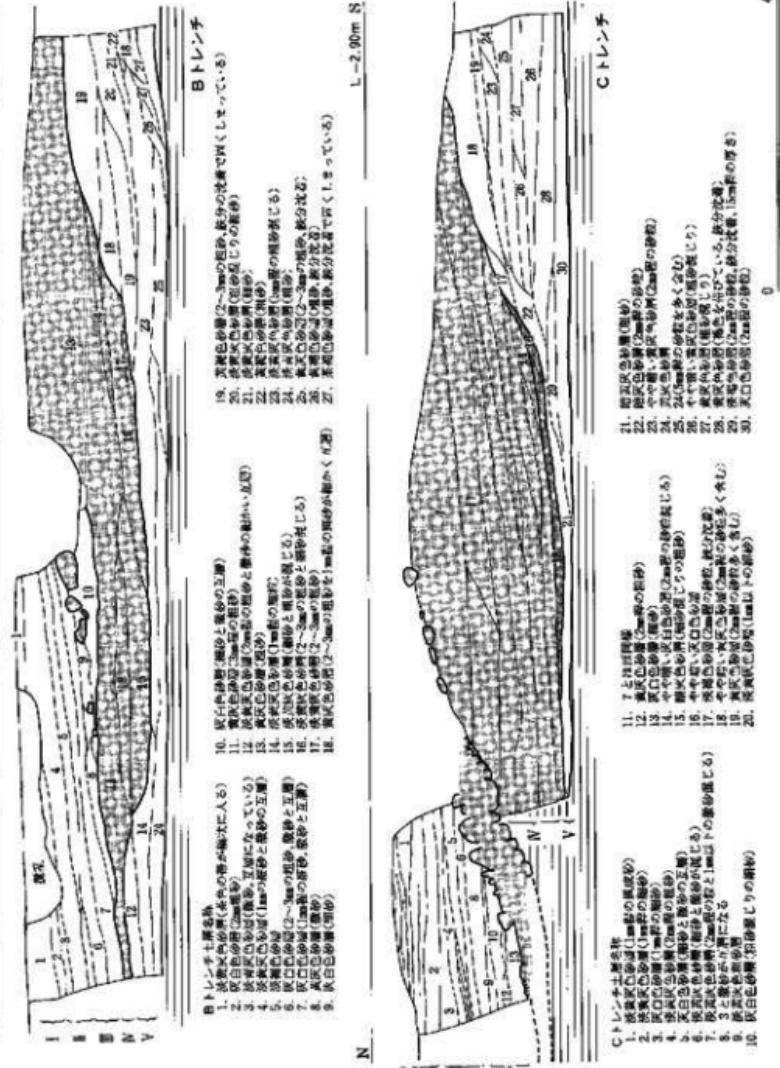


Fig. 81 B-C トレンチ断面図 (縮尺 1/80)



B・C トレンチの状態（南から）



B トレンチ土層状態（西南から）



B トレンチ土層状態（西南から）



C トレンチ全景（南から）



C トレンチ土層状態（西北から）

7層は漸移層で、この砂層には、暗灰色砂質土の薄い層が互層を形成している。第8層以下は2~5mmの大粒砂層の堆積状況を示しているが、この内にも第10・11層のように黒灰色砂質土と灰白色砂層が互層を成している層も存在している。第14・15層は茶褐色又は、淡い茶褐色砂層であるが、鉄分の沈殿が認められる。第17~20層の砂層には黄色土又は、鉄分が沈殿しており、非常に締まりが良い。遺物は石積み礫群の表面から瓦質土器の鉢(307・308)が出土している。

Bトレンチ (Fig. 81) 石積構造SX32前面のAトレンチを石積構造の南側に延長したトレンチで、長さ約10mを測る。ここでは石積構造SX32の前面と裏側の砂層の堆積状況及び、相関関係を確認できた。大きくはⅠ~Ⅳ期の砂層に分けることが可能である。SX32の前面の上層には第Ⅴ期の風成層第1層が堆積しているが、第3~5層は第Ⅰ期への漸移層で、第Ⅱ期砂層である。鉄分含有層を挟んだ下層の第6~9層は第Ⅲ期の浜砂堆積層で、1~3mmの大粒白色粗砂層を形成している。第11~17層はSX32の裏側(南側)につづく層で、第Ⅱ期の砂層を形成する。この第Ⅳ期砂層は3mmの大粒黄色土を呈する粗砂層によって形成されている。又、この層は第13・15・18~20、24~26層を著しく浸食・削平しているところから波による浸食後に堆積した砂層と考えられる。第13・15・18~29層は第Ⅳ期の砂層形成以前に海浜に継続的に形成された浜砂層である。これらの層は粗砂によって形成されているが、第24~28層は鉄分の沈殿が認められ、第28層は固く締まっている。これを第Ⅴ期砂層とする。この層中には薄い灰黑色砂質土と風化土の層が互層になって入っており、海浜の漸移的な堆積状況を示している。この第Ⅰ期層には幾つかの文化面があるものと考えられるが、その一面より、土壤基SX31を検出した。堆積層の下層からは白磁、土師器等が出土した。

遺物 (Fig. 82) は第Ⅴ期の砂堆層から土師器皿(309)、第Ⅳ期層からは杯(311)、瓦器皿(310)、龍泉窯系鏡蓮弁文碗、同安窯系青磁碗(312)、口禿白磁碗、土師質土器鍋(313)が出土している。

Cトレンチ (Fig. 81) 基本的な層序はBトレンチと大略変化は無いが、第Ⅴ期の風成砂層が石積構造前面の上層に顕著に認められる。第7~14層は第Ⅰ期の砂堆層を浸食した後に堆積した層であるが、第21・22層の様に急激な堆積のために圧力のかかった層が存在する。第Ⅰ期の形成層は、Bトレンチに比べると水平堆積しているのが特徴である。

遺物 (Fig. 82・83) は土師器杯(318・319)、瓦器碗(320)、同安窯系青磁碗(315・316)などが出土している。



Cトレンチ土層北側の状態(西から)

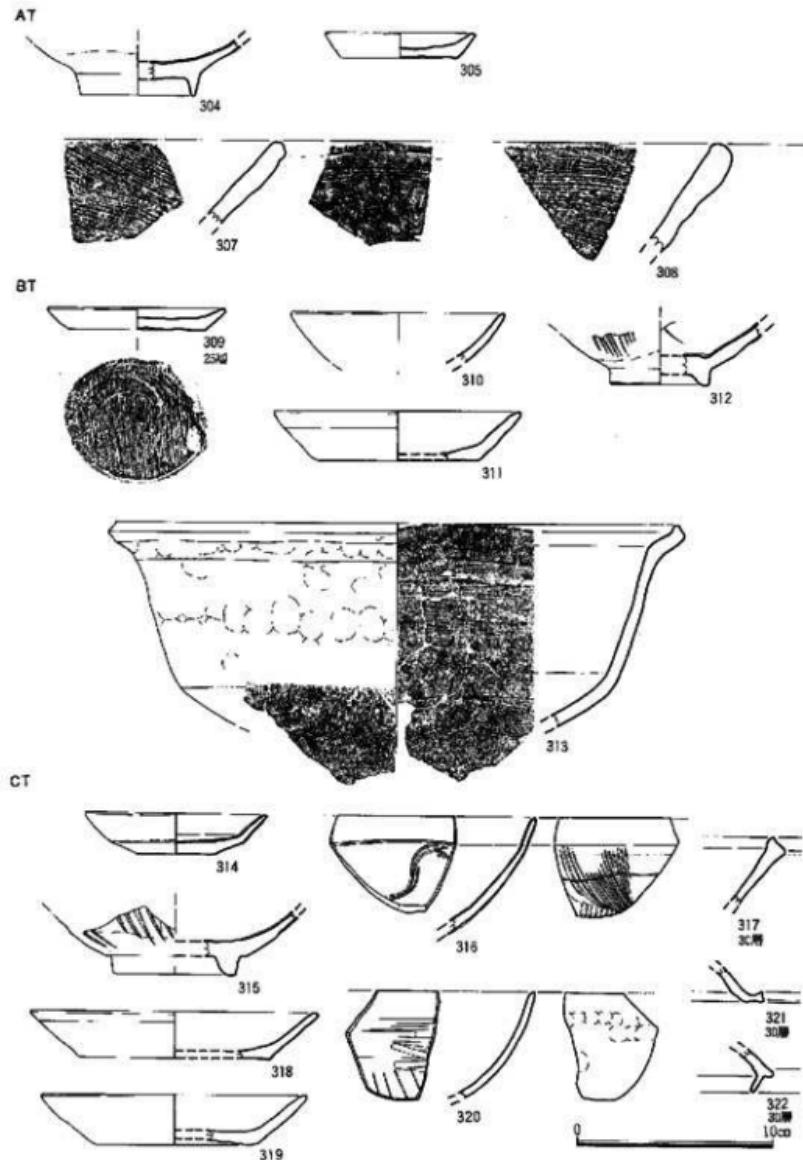


Fig. 82 A・B・C トレンチ出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

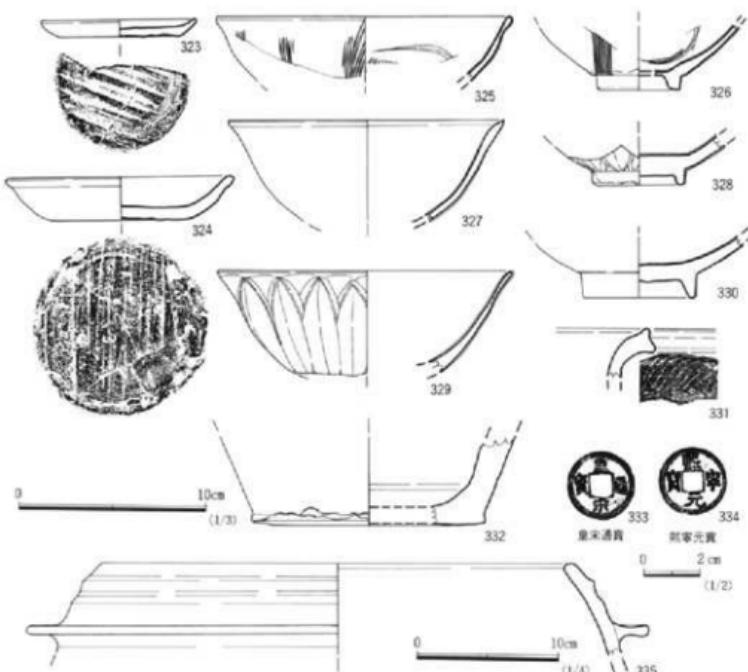
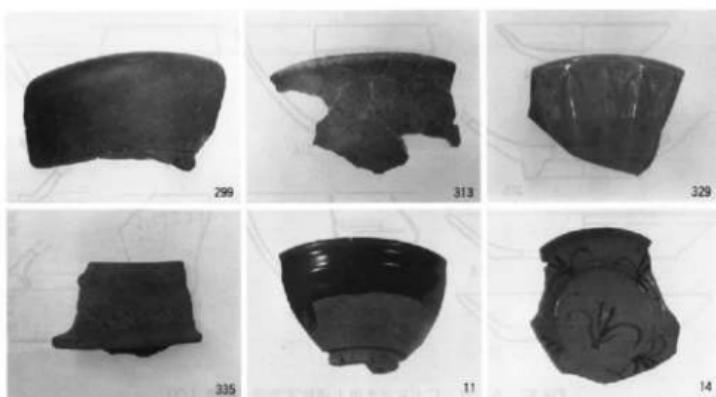


Fig. 83 第N期砂堆層出土遺物実測図 (縮尺 1/2・1/3・1/4)



石積遺構SX32、Bトレンチ、第N期砂層、遺構面出土遺物

番号は実測図の番号に
該する。
11・14は遺構面出土

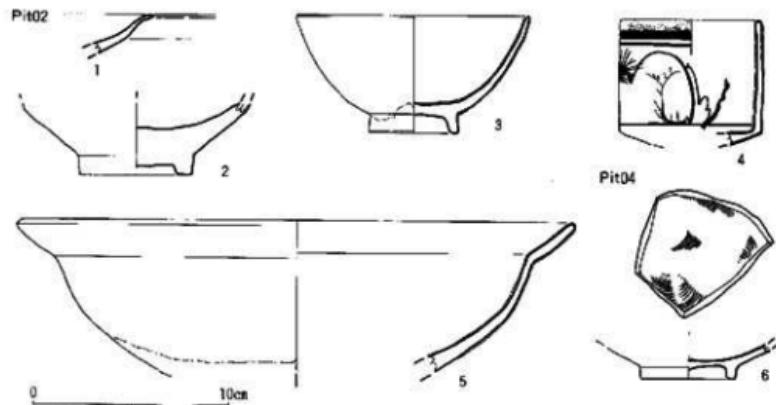


Fig. 84 Pit 02・04出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

第IV期の形成層出土遺物 (Fig. 83) 出土した層を確認出来なかったが、石積邊縁南側の第V期を侵食した後に堆積した層より出土している。324は土師器皿、323は皿、325・326は同安窯系青磁碗、327は口禿の白磁碗、328・329は鎮遠弁文碗、330は白磁碗である。332は柘器質の甕で、備前焼と思われる。335は土師質土器の羽釜で、畿内より搬入した上器である。331は瓦質土器、333・334は貨幣の「皇宋通寶」、「熙寧元寶」である。

(5) Pit 出土遺物

Pit 02出土遺物 (Fig. 84) 1・2・5は唐津焼である。1は皿、2は碗、5は二彩の鉢である。3は小石原焼の碗で、口径12cm、器高6.1cmを測る。釉は鉛色を呈し、体部内外面に施す。4は絵唐津の碗である。

Pit 04出土遺物 (Fig. 84) 6は船載の白磁碗である。内側に描撰文が施されている。

(6) 遺構面出土遺物 (Fig. 85~87)

1~8は土師器皿で、8を除いて、糸切り底である。板目痕はない。8は口縁部を外反させており、復原口径14.0cmを測る。10・11は天目碗、12は白磁碗、19は龍泉窯系青磁碗！類である。13・14は鉄輪の唐津皿で、13の内底には日痕がある。16・17・20・21は唐津焼の皿であるが、17・21は古唐津で、砂目痕がある。16・20の内底には細かい胎土目がある。18は唐津焼碗で、外面に鉄輪がある。22は肥前焼の甕である。内底に貝須による唐草状の文様がある。17世紀前半代である。23は備前焼の鉢で、赤褐色を帯びる。24は船載胸器の甕である。26・29は李朝の雜釉壺で、29の内面には叩き痕がある。25は土師質土器の鉢、27・28・30・31は瓦質土器の火舍である。32は瓦質土器の壺鉢で、下し目は5本単位である。33~35は軒丸瓦で、33の瓦当面には三巴文、34には帆掛け舟、35には扇文を施す。36・37は軒平瓦である。36の中心飾りには宝珠形を施す。

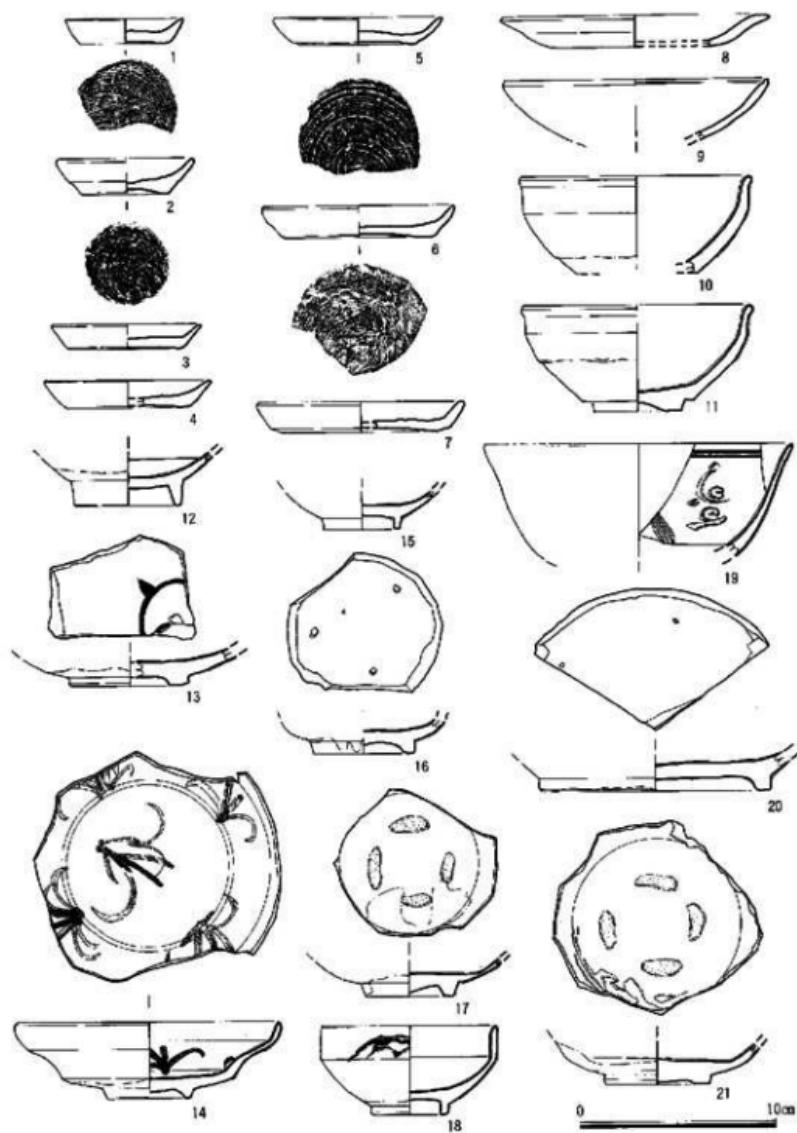


Fig. 85 遺構山遺物実測図 ① (縮尺 1/3)

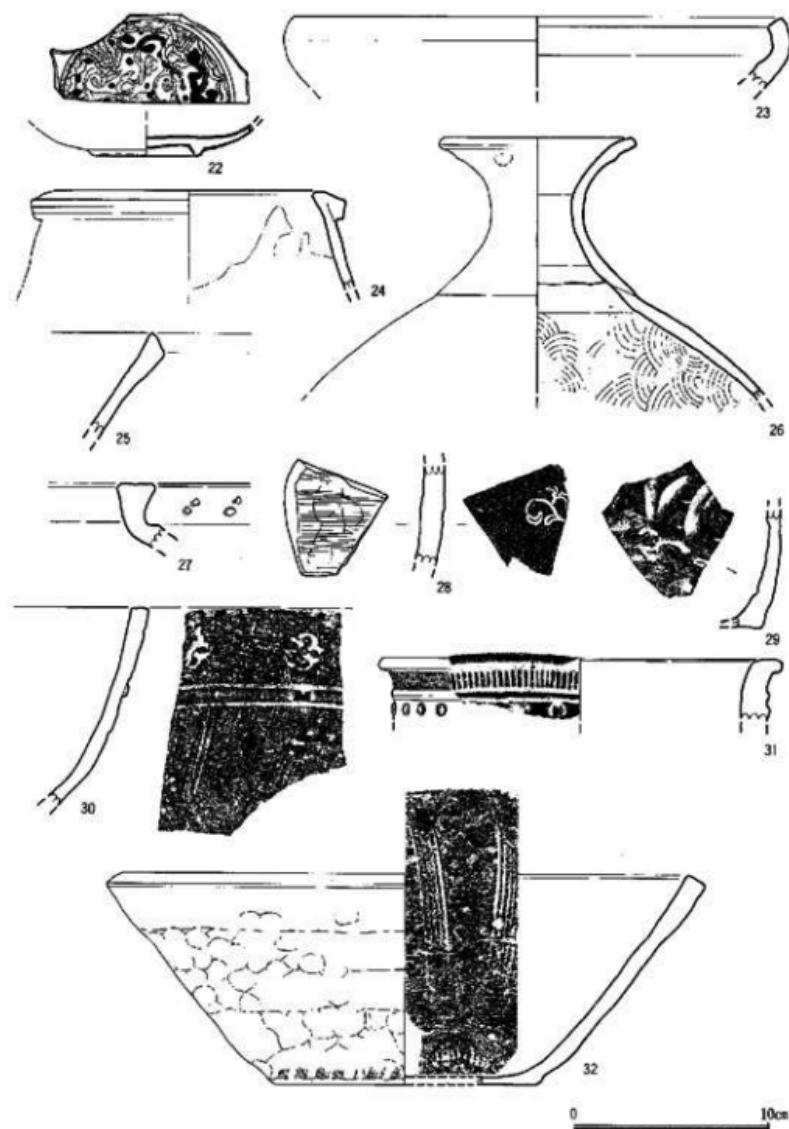


Fig. 86 流淌而出上遺物之測圖 ② (縮尺 1/3)

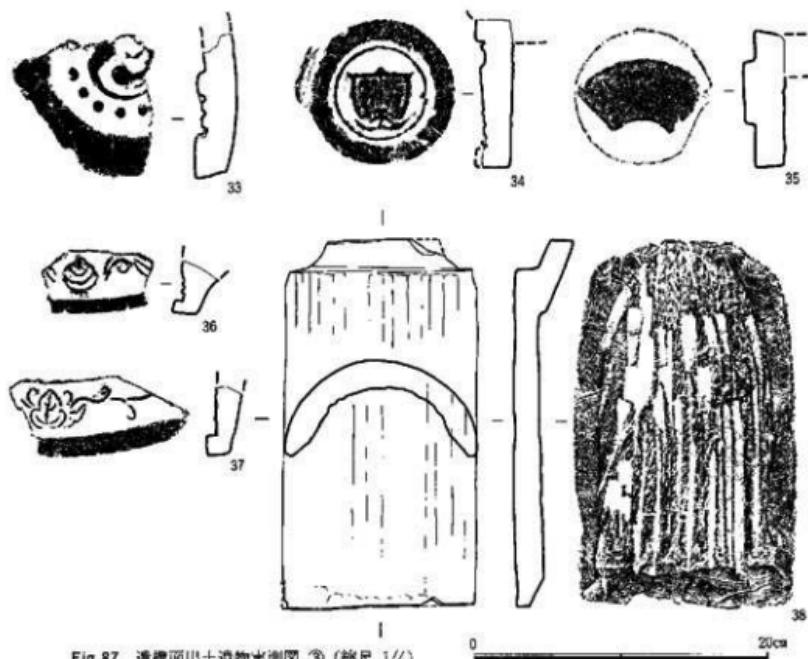


Fig. 87 造構面出土遺物火測図 ③ (縮尺 1/4)

20cm

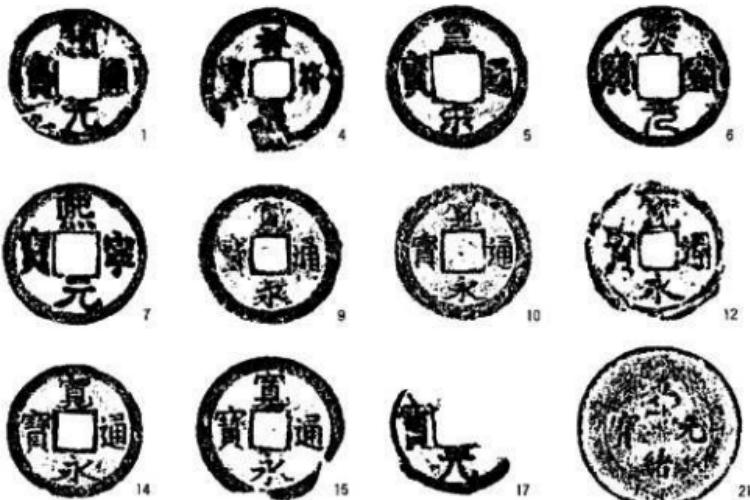
し、左右に唐草文を配する。37は高麗瓦の一部で、中心飾りに三葉文（柏葉文）を、左右に唐草文を施す。38は丸瓦で、江戸時代の所産である。背部は丁寧なヘラナデを行う。内側は布目痕を粗くヘラケズリしている。焼が顯著である。



「利右衛門」 48 「六郎右衛門」 49 「右衛門」 131 「利右衛門」 141 「利三郎」 344 「了三郎」 132

Fig. 88 文字瓦拓影 (縮尺 1/1)

*数字は実測図の番号に一致する。
344はSX03出土



※数字は貨幣一覧表の番号に一致する。

Fig. 89 第58次調査出土の貨幣 (縮尺 1/1)

第58次調査貨幣一覧表

登録番号	地図番号	測量番号	出土地点	銘文名	外 周 (cm)		初鑄年	時代	備 考
					水平	垂直			
1 33	162	SE12	圓元通寶		2.35	2.32	0.11	621(武德4年)	唐
2		SE04	大始通寶		2.42	2.32	0.12	595(中興元年)	後晉 統化のため夷街不可
3		SE04	淳化元寶		2.38	2.36	0.15	990(淳化元年)	北宋
4 37	209	SE14井筒	祥符通寶		2.48	2.45	0.09	1005(大中祥符元年)	北宋
5 83	333	N 鎌抄門	皇宋通寶		2.52	2.42	0.09	1039(皇宋2年)	北宋
6 11	69	SK12	熙寧元寶		2.42	2.39	0.11	1068(熙寧2年)	北宋
7 83	334	N 鎌砂羅	熙寧元寶		2.44	2.42	0.12	1068(熙寧2年)	北宋
8		SF02振り方	元豐通寶	計測不可	計測不可	0.13	0.09	1078(元豐元年)	北宋
9 13	73	SK15	不 明	計測不可	計測不可	0.17	不 明	不明	
10 20	6	SE01	寛永通寶		2.43	2.43	0.13	1636(寛永13年)	江戸
11 37	210	SE14井筒	寛永通寶		2.43	2.41	0.11	1636(寛永13年)	江戸
12		SE18	寛永通寶		2.42	2.44	0.10	1636(寛永13年)	江戸
13 59	51	SX02裏込め	寛永通寶	計測不可	2.37	0.13	1636(寛永13年)	江戸 外縁一部欠損	
14 65	145	SX03	寛永通寶		2.32	2.32	0.09	1636(寛永13年)	江戸
15 65	146	SX03 1番	寛永通寶		2.50	2.52	0.12	1636(寛永13年)	江戸
16		SK10	不 明	計測不可	0.09	六 刻	不明	破片	
17 14	92	圓元通寶	計測不可	計測不可	0.10	621(武德4年)	唐		
18		SX03 1番	祥符通寶	計測不可	計測不可	0.09	1006(中祥符元年)	北宋	
19		SX04	不 明	計測不可	計測不可	0.12	不 明	不明	
20		Pit01	不 明	計測不可	2.46	0.12	不 明	不明	
21		櫻丸	□諸元寶		2.82	2.82	0.18	不 明	不明

第4章 まとめ

1. 遺構・遺物の時代・時期について

当該地は「筑前国統風土記」に於いては十勝流・濱小路町に相当している。昭和初めの旧町名^{注2}・町界では濱小路町に属し、西側に妙楽寺町、妙楽寺新町、北側に西方寺前町、南は行町に接している。

本文中に述べた通り、発掘調査に先立って地表面から深さ2.3mまで鋤取り工事が行われたことや、山留工事によって上層観察が不可能であったため、時代毎の遺構面を把握することはできなかった。しかし、出土した遺物の時期により、少なくとも3面以上の文化層が存在したことが推定できる。すなわち、大略では4期—江戸時代、3期—室町時代後半～戦国時代、2期—鎌倉時代～室町時代、1期—鎌倉時代である。今回、検出した遺構を時代毎に列挙すると以下の通りとなる。

1期 鎌倉時代	土壤墓SX31、石積遺構SX32
2期 鎌倉時代～室町時代	SE15・16、SX18
3期 室町時代後半～戦国時代	SK01・04・06・16・17・20・21・22・24 SE19・20、SX10・14・15・19
4期 江戸時代	SK02・05・07～13・18・19、SE01～03・12・13・18 SX01～07・16・20・21・30

2～4期の遺構は鋤取り工事の関係により、同一面調査で検出したことは調査概要の項で述べた通りである。現地表面は標高約4.6mを測る。4期の江戸時代の遺構面は一部に遺存した土層観察では、現地表面から-1.3m（標高3.5m）の深さに位置するものと考えられ、上部には近代の客土層などが存在する。3期の戦国時代の生活面の推定にはSX15が参考になる。この遺構は標高2.3mを測る位置にあり、石室状の心積みを有しており、配石墓と考えられる遺構である。この石室状遺構の遺存状態が悪いことや標高2.15mに位置するSE20の遺存状態からみて、3期の生活面は少なくとも標高3.0mの高さが想定できる。2期の生活面は井戸SE15・16が参考となる。SE15・16はSX19と切り合い関係にあるが、SX19の土層観察では、SE15の掘り方が標高2.0mの位置まで遺存していることが判明しており、この高さよりも上位に生活面があることが伺える。

1期の鎌倉時代は更に2小期に細分できる。第1小期は石積遺構SX32が構築された面である。SX32の天端石は標高2.4mの高さに位置しており、又敷下部は標高0.8mを測る。この遺構は浸食を受けた海岸傾斜面に構築されたもので、護岸状に捨石されたものである。この遺構の下層の砂層からは12～13世紀後半までの遺物が、又、遺構北側の浜砂堆積層中からは14世紀後半までの遺

物が出土しており、1期第1小期の時期については13世紀後半～14世紀前半までが考えられる。第2小期は土壙墓SX31を検出した面である。標高1.5m前後を測るもので、第1期の砂堆層に相当する。この面の北側は波の浸食を受けており、第N期の砂堆層が形成されていることは先述の通りである。土壙墓には副葬品として能泉窯系青磁碗1-1類が1個出土している。内外面は無文であるが、内底部分に「金玉満堂」の印刻が施されている。一般的にこの印刻は13世紀代に認められるが、無文の青磁碗が12世紀後半から出現する状況からみて、この土壙墓については12世紀後半～13世紀前半までの時期幅を考えたい。よって、この期の生活面は土壙墓の時期を前後するものと考えたい。第2小期の文化層の下では残念ながら遺構を検出することは出来なかったが、B・Cトレンチの最下層からは白磁碗や土師器が出土している。この層はN期砂堆層が形成されている以前の層で、つまり、全く浸食を受けていない浜砂堆積層である。Bトレンチ25層川土の土師器系切り皿(309)は、口径が9.2cm、器高1.1cmを測るが、この土師器皿の法量は大字府編年ではSK1204、SE225に相当するもので、12世紀前半代が比定できる。又、遺構からの出土ではないが、楠葉型の瓦器碗も出土していることから、少なくとも11世紀後半代にはこの調査地点南側周辺に於いて町屋が形成されていたことを物語っている。しかしながら、集落や町屋が繁栄を始めるのは少なくとも12世紀後半期と云える。

江戸時代に属する遺構には十塙・井戸・溜柵状石組遺構・室状遺構・配石遺構等がある。これらの遺構の時期は遺物により、17世紀前半～幕末までの幅をもっている。土壙は平面形状が不整円形・隅丸長方形等を呈するが、形状や深さなどに規則性は認められない。いざれも廃棄物処理用の土壙と考えられるが、その下限は18世紀中頃までである。

井戸¹は全てが、井筒に平瓦を用いる瓦井¹である。井筒の瓦は再使用のため抜き取られているものが多く、遺存状態が良いのはSE01・05～07など新しい時期の井戸¹であった。井戸の掘り方や井筒内より、17世紀前半から19世紀前半までの土師器、陶磁器、瓦類などが出土している。井戸¹の掘り方平面形は不整円形を呈し、直径は140cm～362cmを測る。SE02～04・12の掘り方は、井筒に対して掘り方規模が大きく、径250～336cmを測る。SE01・05～07の掘り方は井筒の直径に対して約2倍の大きさで、径120～166cmを測る。SE14・18の掘り方は前二者の中間の規模をもち、井筒の直径に対して3～3.5倍の大きさで、径220～240cmを測る。井筒の直径は外径で、68～95cmを測る。SE01・05～07は68～84cm、SE02～04・12は80～95cm、SE14は75cm、SE18は110cmを測る。井戸瓦を用いた井筒の下部には木桶を据えていることが、SE02～04・14・19で判明した。井戸瓦は木桶の外側を巻く様に築かれている。井戸の深さは現存値で、110～187cmを測るが、基底面の標高は0.19m前後を測る。又、井筒に用いられた平瓦は厚さが2.8～3.2cmを割り、屋根瓦よりも厚みをもっている。長さは28.8～30.1cm、幅は24～25.5cmまでの幅がある。井戸¹瓦の長さ、幅、反りなどの規格には時期的な変化が認められるが、これは井筒の直径や、一巡りに用いられる枚数に影響されるものと考えられる。1段に用いられる瓦の枚数は10～16枚で、SE01・05・07は11

・13枚、SE02・12は10枚、SE18は16枚である。以上について、整理すると3グループに分けられ、時期的な変遷の状況を把握することができる。井戸の掘り方径や井筒径はⅠ類ほど大きく、Ⅲ類は減少する傾向があり、又、瓦の規格も同様に大から小へ変化していることが読みとれる。

分類名	井戸名	時期	掘り方径 (cm)	井筒径 (cm)	瓦枚数	瓦規格(cm)
Ⅰ類	SE02~04・12	17C前~後	250~336	60~95	13	30.1×24.8
Ⅱ類	SE14・18	18C前	220・240	75~110	15~16	27.8~25.1×23.2~20.5
Ⅲ類	SE01・05~07	19C前	120~166	68~84	11, 13	24.7~25.1×20.5

且井戸については、最も古い時期を17世紀前半に位置づけることができたが、SE03・04などの川土遺物については初期唐津、備前焼Ⅳ・V期、瓦質土器鉢、16世紀末の内ヶ磯窯、或いは17世紀初頭を示す陶磁器類が多量に出土しており、且井戸の出現時期を16世紀末までさかのぼらせることが可能である。近世瓦の出現は云うまでもなく、1581年(天正15)秀吉の九州平定に起因するもので、博多復興を町割りの整備等の事業や、1588(天正16)から始まった小早川隆景の名島城や黒田長政による福岡城の普請によって近世瓦の導入及び瓦職人の移住があったものと考えられる。よって井戸瓦の初現は、16世紀末に川現するもので中世的名残りである石組井戸とは時代を離るものである。

瀬川遺構SX03は現存長4.5mを測り、方形又は長方形状を示すものと考えられる。石垣上部は削平を受けているが、少なくとも1m以上の深さを有していたと考えられる。この溜井内には多量の遺物が投棄されており、堆積物には当時の生活用品、しいていえば、この地点の居住者の生業や食生活を示す遺物が存在した。例えば、木栓や筈などは数多くの木樽を必要とした酒又は醤油等の産業・商売であること、又、筆・漆塗或いは鬼瓦を含む多量の瓦の出土は、豪商の存在が想像できる。又、食用にした貝類や動物の骨、或いは庖丁・七輪・陶磁器などは18世紀中頃にこの土地に居住した博多商人の生活ぶりを示す好資料である。寛政11年(1799)に福岡藩が長政の入国200年を記念して、藩に功労のあった町人を表彰した時に、浜小路に練酒の石橋次右門(島羽屋)とある。又、明治18年発行の「筑前国名所豪商案内記」には、清酒醸造所の石橋源治郎とある。戦前迄、石橋家は造り醤油屋として全盛を極め、その敷地は西側の博多川の岸辺まで達していたと云われることから、江戸時代の状況が推測出来る。

中世の遺構には土壙・土壙墓・配石墓・石積遺構・井戸等がある。これらは12世紀後半~17世紀初頭の遺構が多く、遺物においても備前Ⅳ・V期、或いは明代の白磁皿などが多量に出土する。この時期には海岸線が後退し、砂丘の形成によって大規模な町屋が整備されていたことが考えられる。

井戸は3基検出した。井戸SE15・16は井筒に大柄を用いており、SE20は石組井戸である。SE15出土の遺物には高麗青磁などが出土しているが、I類器皿は、Ⅰ類(213, 214)のグループとⅡ

類（215～217）のグループに分かれる。Ⅱ類の法量は口径9.2～10.0（9.3）cm、器高0.9～1.3cmの間にあり、この法量は12世紀代に比定できる。Ⅰ類は口径に対して器高が高く、口径は8.7、器高1.7cmを測る。SK641に同じく14世紀前半～中頃である。环はⅠ類（218～220、222～224）とⅡ類（221・225）に分けられる。Ⅰ類の口径は11.0～13.6cm、器高は2.6～3.0cm、Ⅱ類の口径は12.8～14.0cm、器高は3.2cmである。いずれも明瞭な版口がない。环の法量は大宰府史跡のSK735、SD605（SX1200新）に相当するが、且Ⅰ類はSK641よりも口径が大きい。よってSE15は13世紀後半～14世紀中頃の間に位置するものと考えたい。SE16はSE15に先行する井戸で、遺物が少ないと、土師器の法量が大きく、糸切りであることから13世紀後半までに位置づけられる。

井戸SE20は上部の削平を受け遺存状態は悪い。石組みは裏込めがしっかりしており、この裏込めより多量の遺物が出土した。土師器の法量は皿が口径7.3～8.0cm、器高1.5cm、杯は口径12.4～14.0（12.8）cm、器高2.4～3.1（2.8）cmを測る。明染付は318が皿C群、317は碗E群で、16世紀中頃～後半に位置づけられる。その他の16世紀末の国産陶器摺鉢、備前焼のV期後半からV期初頃の摺鉢が出土している。

井筒内出土の土師器はすべての口径10～11.8（10.5）cm、器高1.6～2.8（2.0）cm、皿は口径6.6cm、器高1.4cmを測る。この法量は裏込め出土の土瓶器よりも口径、器高とも減じている。白磁皿（C群）（363、364）は15世紀後半～16世紀後半の軸をもっている。又、366の胸器皿は李朝又は唐津である。土師器の法量等から、16世紀末～17世紀初頃が考えられる。この石組井戸は前述した通り、秀吉による博多の復興に伴って、博多の近世町割りの基準となった井戸と考えられる。焼失前の博多の屋敷にあったのであるが、瓦井戸の出現によって淘汰されてゆく中世的遺構である。特筆すべき事は、この井戸の裏込めより多量の瓦類が出土した事である。これらの瓦類は軒丸瓦、軒半瓦、平瓦、丸瓦等が出土したが、いずれも火を受けている。軒半瓦の文様は中心飾りに宝珠形を用いており、軒丸瓦の瓦当面の三巴文は尾が長く、珠文の数が多い。又、丸瓦の背には繩目印き痕を残しており、整形手法又は燃手法等に中世後半期の特徴を残している。軒丸瓦の内、瓦当面に「H」形の文様を施す瓦が出土していることから、今回の調査地点が中世後半期に於いて寺院境内に相当したことが推測できる。昭和初めの地名では、当該地点は浜小路に相当し、北に西方寺前町、北西側に妙楽寺町、妙楽寺新町が所在する。妙楽寺は現在、御供所町の聖福寺の南側に移転しているが、妙楽寺町にあったと伝えられる。筑前國統風土記によれば「此所にむかし異賊襲来の防ぎのため、石垣を築けり。此寺基所にありし故に、石城川と號す。外門を瀬音闇と云。二門を看音樓と云うと、日華人が人境線に見えたり。是皆海濱にのそめる寺なる故、名付するならし。」又、天文7年（1538）には博多の火災にて、焼失していることを記している。石城志（卷之四）では「大正14年、薩摩の軍兵博多を焼亡せし時、當寺一字も残らず炎上せり。其後十六、七年が間は、假に庵を結びて辟居す。」とあって、1586年の兵火による焼失後、黒川長政によって慶長5年頃に今の場所に移されたことが記されている。



Fig.90 石積遺構SX32（点線部分）と調査地位置図（縮尺 1/8,000）

井戸SE20から出土した遺物の時期は16世紀中頃から17世紀初頭までの幅があり、これは上記の大文7年から慶長5年頃までの状況に合致するものと考えられる。よって、当該地は旧字名の「妙楽寺町」に接していることや、13～14世紀頃の井戸や、15～16世紀末の遺構を中心とするごと、或いは高麗・李朝陶磁器片の出土や寺院を示す古文様の瓦当瓦他多量の軒瓦の出土などから、石城山妙楽寺の境内一帯に位置するものと考えられる。

2. 石積遺構（SX32）について

SX32は45度の傾斜をもつ浸食された砂丘斜面に築かれており、最高所の標高は2.45m、北側の下部は標高0.77mを測る。この遺構の南側の砂堆状況はB-Cトレンチの結果、長さ13～15mに亘って浸食を受け、約30度の傾きをもった地形に、一過性の急激な砂堆があったことが判明した。又、SX32の前面の砂堆は下部に引き波による堆積層、上層部に風成層を形成している。A～Cトレンチによって、SX32の南側の急激な砂堆層（N期層）からは12世紀後半から13世紀後半までの遺物が、最下層の第25層、或いは浸食を受けた層からは11世紀後半の遺物や、12世紀後半の土壙壁SX31が存在している。SX32の前面からは13世紀から14世紀前半までの遺物が出土したことから、石積遺構SX32は13世紀後半から14世紀前半までの時期が推定される。

この遺構は東西方向に築かれており、最大幅6.5m、現存長20mを測る。当該調査（△地点）か

ら西側約100mの地点（B地点）に於いても「事中に同様な礫群を検出しているので、現状では總延長約160mを測ることになる。このA地点は旧町名の対馬小路町と妙楽寺町の境に位置している。又、これらの地点の南側には11世紀の汀線が、又、北側260mには1646年（正保3）の絵図に描かれた汀線が推定されている。この山積造構SX32については単に13世紀後半頃の護岸とする評価もあるが、ここでは元寇の役の時期に相当することから、元寇防壁との関連をも考え合わせて検討してみる。

- (1) 木下謙太郎は1915年（大正4）「元寇史蹟の新研究」に於いて、「博多に於いては往時沖ノ瀬の外方海岸と認むべき横町筋の少しく上方を通過したものと思はる」と述べる。今回の調査地点の北側の東西方向の道路を横町通りといい、これを沖ノ瀬の海岸線と見なしている。又、川上市太郎は「元寇史蹟」（地之巻）の中で、『もと石城山妙楽寺の所在現今妙楽寺前町を根基として千代松原所在防塁線の位置との連絡関係より考定し妙楽寺前町の道路所謂横町筋を防塁線の所在とす長さ約五百間に達す。』と述べ木下謙太郎と同様な見解を示している。
- (2) SX32の西側延長線上には妙楽寺の拠定地であるところの妙楽寺町が位置する。妙楽寺は石築地の付近に在ったため、石城山と号した。海辺に望める寺のため、外門を潮音闇、山門を香碧橋と称した。この寺は正和5年（1316）に創建され、貞和2年（1346）に仏殿が完成しており、^{註2}1316～1346年頃の寺は海辺に近いところに立地していたことになる。
- (3) 石築地は建治2年（1276）の構築後、弘安9年（1288）8月27日、筑後守護武藤貞經、筑後の住人友清又次郎人道に、博多庄浜石築地の勤任を命じている他、文献上では承永元年（1342）に足利尊氏が大友氏泰を促して大宰小使武藤頼尚とともに、鎮西要害の石築地を修理させており、^{註3}石築地の修理及び異国警固番役が推定的に行われている状況に於いては、石築地の前面に妙楽寺が築かれる事は考えられない。妙楽寺は1316年の創建時に於いては石築地の南側に位置していたと思われる。
- (4) SX32の北側の砂堆に於いては、上層部には15～16世紀の遺構が存在することや、砂堆下層内から13～14世紀代の遺物が出土することなどから、SX32の前面の砂堆は急速に進み、汀線が後退するところから少なくともSX32の捨石状の礫群は14世紀には浜砂堆積層内に埋没すると共に15世紀にはSX32の上端部も埋まっていたと考えられる。
- (5) 沖ノ瀬の海岸線の前進速度は市小路付近に於いては11世紀～13世紀中頃までは1年間に約40cm、13世紀中頃～1699年迄は1年間に約60cm進んでいると云われる（Fig.90）。(4)項で述べたようにSX32の北側の汀線は比較的早く後退したことが云える。聖福寺古図には承永元年（1558）以前の境内の様子を描いたものとさせているが、この図には海岸汀線よりずっと浜側に防塁らしき石築地があり、浜では大工達が仕事をしている様子が描かれている。道具小家様の建物以外には恒久的建物はみられない。制作年は不明であるが、石築地と砂浜の様子は、まだ外寇に対する緊張感のある時期の状況を示すものであろう。

- (6) SX32の石積みの状態は浸食を受けた急傾斜に構築されており、大規模な浸食や砂堆を繰り返す不安定な海岸線に護岸を施工したものと考えられるが、この急激な浸食・砂堆がどのような気候或いは海流や地下水等の状況で起こったのかが注目される。又、護岸工事は部分的な施工では新たな海流による浸食を招くことになるから、当然のこととして博多川の河口右岸から現石堂川の河口左岸（古くは人江状）まで施工されたものと考えなければならない。
- (7) 石積造橋の構造は砂丘汀線の急斜面に捨て石を行い、最上端部には大きな切り石が1.6mの幅で2列に配石されている。この列石の間には10~30cmの大石が充填されており、このことはSX32の上端部に堤防状の石壁があった可能性が考えられる。早良区や西区で発掘されている元寇防壁には構築方法や使用した石材の種類、或いは規模に各々に違いがあることが報告されているが、これらの石壁とSX32を比べると類似する点もある。
註6
- 今津地区では海側に傾斜する砂丘上にそのまま石積みが行われ、基底部の幅3~4.3m、上面幅2.5m、前面の高さ3m、後面の高さ2.5mを測る。石材は花崗岩と玄武岩を用い、使い分けを行っている。玄武岩を用いた地区は、完全に石積みであるが花崗岩の構築区は前面と後面に石積みを行い、内面には砂を充填するという工法をとっており、「石材の種類に応じた築造工法の相違は今津地区の一つの特徴と言える。」と云われる。
 - 生の松原地区の防壁は東側を砂岩、西側はペグマタイト（巨品花崗岩）を主な石材として構築している。A・B区では石積みが砂丘上に直接行われ、幅は1.2~1.3mを測り、後面から1~3.7m幅を粘土で補強している。基底部の高さは同一ではない。又、後背面には砂堤を盛った構造が遺存しており、その幅はA~6~B区までは3.4mある。D区では石積みの幅1.5~2mで、前面・後面に人石を用い、内側には小砾を詰め込んでいる。裏側は茶褐色粘質土で補強している。石積み後方の構造は確認出来ていない。又、A・B両区の前面には1~2段の石積みがあり、修理・補強するための構造と考えられている。
 - 丹波地区の防壁は基底部の幅3.5mを測り、前面から1.1mの間は砂層上に直接石を積み上げるが、この石積みの内側には砂を充填している。後背には砂まじり粘土や粘土まじりの砂を厚さ20~40cmに整地した後に、後面の石積みを行う。前面の石積みとの間には砂まじりの粘質土、砂を互層に充填している。
 - 姪浜脇地区は砂岩を用い、全体を石積みしている。基底部の幅4.0mである。石材は砂岩が多く、礫岩・玄武岩・変成岩が少量見られる。姪浜向浜に石上混築の構造であると云われる。
- 以上のように防壁には高さに対しては一定の基準があったものと考えられるが、構築方法には多様性があり、「防壁の負担した分担個ごとに独自の築造法が採用された」と考えられる。又、これらは海岸汀線から50m内陸の標高3m前後を測る砂丘傾斜面の上位に立地する特徴をもっていると云われる。当該調査地点を13世紀後半の海岸線とするならば、南側約50mの位置に防壁が存在することになるが、この推定線上に位置する第55次調査では、石壁に関する遺跡^{註7}

構は検出されていない。

- (8) SX32に用いられた石材は礫岩が最も多く、次に変成岩・花崗岩・玄武岩・砂岩の順である。これらの石材は博多湾岸で採集できるものと云われるが、時に龍占島では一括して集めることができると云われる。護岸とすれば最大の延長80~900mに及ぶもので、一豪商や有力な官人の力量では無理な事業であることから、国家的事業と考えるのが妥当である。
- (9) SX32を13世紀の護岸遺構と考えた場合、沖ノ瀬の砂堆は年々進んでいることや、或いは地下水による海岸浸食に対応した護岸であるとみれば、海岸線の後退に付随して、各年代、時期毎に護岸状遺構が発見されねばならないが、推定される11世紀の護岸、或いは1646年の護岸も現在までに検出していない。
- ⑩ 元禄16年(1703)の以原益軒「筑前国統風土記」(博多石壁)には『いにしえより此地は商船来着の要津なれば、民家多し、繁栄の地にして、殊に異賊襲来の防衛のため、屯兵を多くをさせしとかや。されば其に要害の備敵重にして、北一面は皆石垣なり。是上古より有し石壁にて、弘安戦歟の來りし時、再補修せるなり、此石壁ありし故に、博多を名はて、石城府と云。』とある。石城府については「世宗実錄」応永26年(1419)や「源東諸國紀」文明3年(1471)にも記されている。当該調査地点は著しい浸食を受けており、市街地のために他の地域とは地形の環境が異なることから防壁は町屋の外側に設置しなければならず、工事は非常な難工事であったと考えられる。第46次調査では12世紀後半から15世紀まで、第55次調査では14世紀を中心とした12~15世紀の遺構・遺物を検出している。又、町屋の広がりが海岸線間近におよんでいたことは土塙墓SX31、井口SE15・16の検出によっても推測できる。石築地の大部分は「筑前国統風土記」の「博多古眾」の中で、『…博多・箱崎・福岡の海辺に石壁所々残りて有しが、慶長六年福岡城の石界を築くために取用て、今はなし。』とあり、福岡城築城の際に石垣の用材として利用されたため、砂地内に埋没していた部分のみが遺存したものと考えられる。
- ⑪ 博多の石築地役に関しては、建治3年から弘安3年にかけて、肥前守護武藤經資が出した博多勤番の異国警固番役履歴状が三通残っており、相川二郎は「蒙古襲来の研究」(昭和33年)の中で『石築地の築造が始まってからは、その分担場所が異国警固番役の分担場所である。』として異国警固番役は石築地役と表裏一体のものと考えた。川添昭二氏は「歴代領西要略」の記事から、「弘安3年(1280)9月、筑前国の住人某が博多袖浜の石築地二丈五尺を築造している。築造開始から弘安3年末までは、筑前・肥前がともに博多の石築地築造・修理にあたっていた……」と述べている。
注8
- ⑫ 石築地築造は建治2・3年で終了したのではなく、修理と新たな構築を併行して行っている。例をあげると
注9
・弘安9年(1286)8月には友清义次郎入道が筑後國役所としての博多庄浜に石築地を築造。

- ・比志島文書 正応6年（1293）4月12日笠崎右築地破損檢見注文では、笠崎地域の石築地の破損箇所の修理を薩摩国に命じている。
- ・広瀬文書 乾元2年（1303）4月17日筑前守護武藤貞經施行状に於いて末弘名中村弥二郎（続）に対して、博多前浜行策地加佐並びに修理を命じている。
- ・納文書 正和5年（1316）2月12日筑前国守護武藤貞經施行状では、早良郡地頭祐定禪に対して、博多前浜石築地と加佐の修理を命じている。

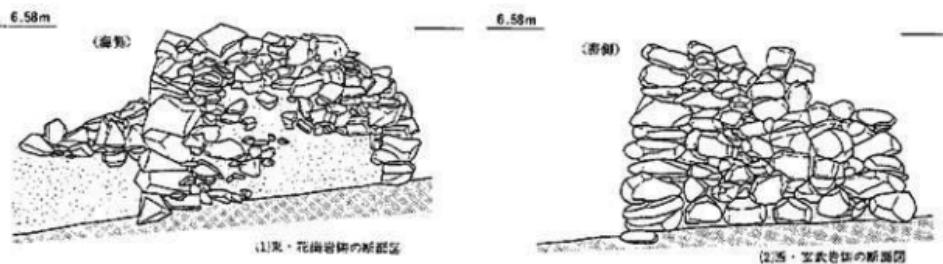
以上のことから、急造の石築地であったために、加佐、高、真芝の追加工事の必要性及び補修工事が断続的に行われている。当該地に於いても、斜面上位には20~30cmの礫岩が捨石の上部に被った状態で散乱していることや、これらの礫中に14世紀代の遺物が存在したことの実は、満潮時、嵐等に護岸が波の浸食を受け、その損傷などから度々の補修がなされているものと考えたい。

(3) 石築地の築造についての史料の初見は建治2年3月に肥前守護武藤經資が肥前国高米東郷深江村の地頭安富氏（深江氏）に宛たるもので「異国警固の間、要害右築地の事、高麗発向の裝の外、奉行に謀し、國中平均に沙汰を致し候所也。今月20日以前に、人夫を相見し、博多津に向かい、役所を詣け取り、沙汰を致さるべき候、恐々謹言」とあり、『同年8月に鎌倉幕府の命令と武藤經資の同命令の下達を受けて、大隅國の国衙と守護とが、大隅國中に石築地築造の謀役を分配し、同月中に完成せることを命じている』ところから、石築地は建治2年8月中に完成させることを目標にしていたことが知られる。^{註10}

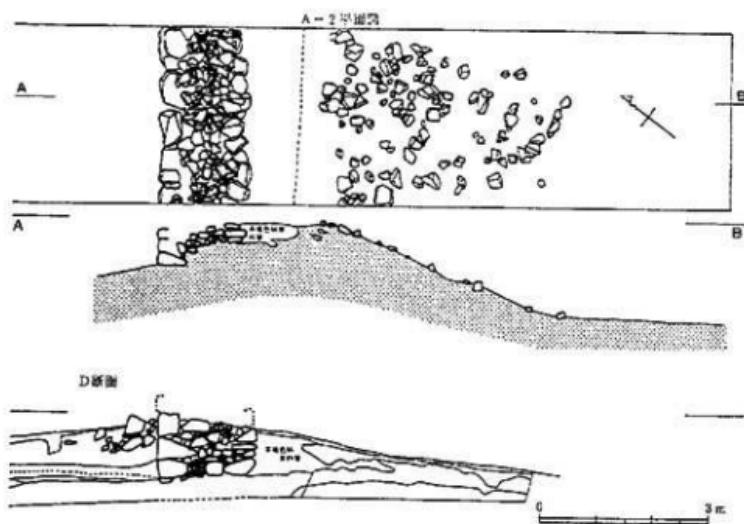
(4) 石築地役賦課の基準は所領一段（991.7m²）について石築地一寸（3.0cm）の割合であったと云われる。この異国警固番役の謀役を御家人層は惣領の統制のもとに所領の分限に応じて庶子も含めて分担（寄合勤仕）しており、石築地役の賦課を、庶子の中には割り当てを拒むものもでてきた。（比志島文書 嘉元4年-1306）

又、補修、或いは裏加佐、加佐等の追加工事は断続的に行われており、当時の工事が、御家人の負担の上に成り立つものであって一元的に行われていないことから、町屋を撤去して防壁を築くことは築造期間や費用負担（御家人住民の滞在費、旅費、材料費）から考えて、物理的に無理がある。海岸汀線に捨石を行い、舟と人馬の上陸を不可能にすることが優先したであろう。

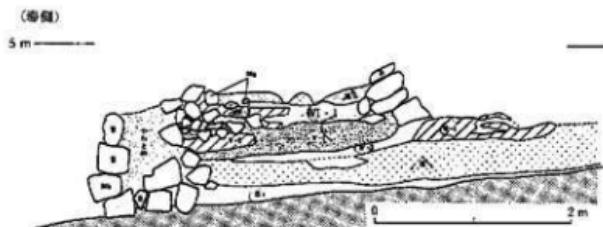
以上の(i)～(4)により、石積造構SX32は13世紀後半から14世紀の海岸汀線を示すものであり、護岸としての機能があったものと考えられる。捨て石の上端部には石壘状の堤防があったものと推定したい。石築地の側にあったといわれる石城山妙楽寺は貞和3年（1346）に仏殿が完成しているが、この頃までは異国警固番役が行われていることから妙楽寺はまだ石築地の南側にあったものと考えられ、後世には海岸線の後退に伴う砂堆の進行によって北側に伽藍の展開を計ったものと推測できる。当該地が山妙楽寺町に接して位置すること、更にはこの地点から西側約80mの地



今津・長浜の防風実測図

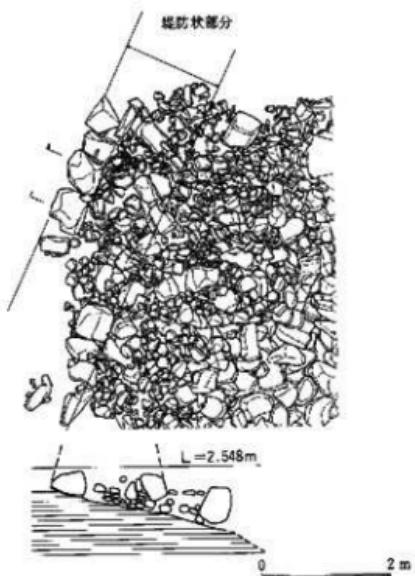


生の松原地区元寇防風実測図（上A-2区・下D区）



西新地区元寇防風実測図(石材：B-玄武岩, Mb-黒色変成岩, Mg-緑色変成岩、無記名は砂岩、層位：I-基盤砂丘, II-IV-2・VI-1 砂まじり粘土, III-V-1 粘土まじり砂, IV-1・V-2・VI-2 粘土)

Fig. 91 西区・平良区の元寇防風実測図



国別分担地区一覧表

9	8	7	6	5	4	3	2	1
大	日	多	肥	筑	筑	築	築	古
隅	向	後	前	後	前	後	前	後
國	國	國	國	國	國	國	國	國
今	今	生の松原	蛇	西	鷲	鷲	鷲	青
津	(筑後)	宿	浜	新(包道原)	多(前浜・袖浜・庄浜)	崎(小包原・浦野)	椎(佐賀・鍋島)	(鍋島)
		(青木・漁浦)						
三	〇							一
km								km
一	・	一	二	二	二	三	三	一
七	km	七	〇	〇	〇	〇	〇	〇
km		km	km	km	km	km	km	km

Fig. 92 石積造橋SX32上端部の状態 (縮尺 1/90)

点でも同様の遺構が見つかっていることから海岸線に沿ってこれらの護岸状の捨て石が施工されたことは疑いがないことである。立地条件が西区・早良区所在の元寇防塁とは異なることは先に述べた通りであるが、防壁構造や築造方法が分担區の裁量の中で行われており、一定の築造基準が認められない以上、従来の元寇防塁の構造上の所見をもってSX32が石築地ではないことを否定できるものではなく、むしろ可能性があると思える。早良区・西区所在の防壁との立地条件の違いでいえば、当該地に於いては汀線から約50m内陸の位置に防壁を設置することは、第46・55次調査でも明らかのように既に12世紀代から展開した町屋を撤去しなければならない。更には、政治・経済の中心地であるところの博多の市街地と周辺郡部に於ける石築地の立地的環境・条件を同一視することはできない。又、半年間という短期間で石築地を完成することを至上命令としていたことや、石築地役を含めて異国警固役が、御家人の所領分担に応じて行われたことは、結果的に御家人役に於ける勤仕の負担が、これを命じた鎌倉幕府の文配体制をゆるがすほどの影響をもつに至ったことから、財源的にも町屋の撤去を行うことは到底できる状況ではなかったと考えられる。元寇防塁の構造・構築方法については、博多地区的分担國が筑前・筑後國と考えられており、且つ、これらの国々の分担を知り得る史料では弘安9年(1286)以降に博多を分

担していることが知られる。石築地の築造当初から弘安3年（1280）までは肥前国が博多地区の前浜を分担していたと考えられているが、姪浜駅・向浜地区も同じく肥前国の分担であり、SX32の後背地が削平を受けている現状では定かではないが、SX32の上部の石塁構造は姪浜向浜地区と同様の石土混合築造か、もしくは1.6m幅の石壁を想定すれば駅地区の防壁と同様の構造が考えられる。

博多地区的元寇防壁の考古学的資料はこれまで全くと云つていい程、出土しておらず、今回の調査によって結論が得られた訳ではない。今後の資料の増加を待つと共に、防壁研究の一助となれば幸いである。

- 註1 福岡市教育委員会崇福寺山門修理に伴うもので屋根瓦の調査を行った。三木隆行氏教示
- 註2 貝原益軒「筑前國統風土記」元禄16年（1703）
- 註3 「長政公御入賀から二百年町家由来記」寛政12年（1800）
井上精一「福岡町名散歩」章書房有限公司 1983年
- 註4 川添昭二「注解 元寇防壁編年資料—與岡吉田番役史料の研究」福岡市教育委員会
- 註5 福岡市博物館「よみがえる黄金の日々」堺と博多城図録所収 1992年
聖福寺古国は永保元年（1558）以前の境内を描いたものである。
- 註6 福岡市教育委員会「生の松原元寇防壁発掘調査概報」1968年
福岡市教育委員会「今津元寇防壁発掘調査概報」1969年
福岡市教育委員会「西新元寇防壁発掘調査概報」1970年
九州大学出版会「古代乃博多」1984年
- 註7 福岡市教育委員会発掘調査、現在整理中。小林義彦氏教示
- 註8 川添昭二「蒙古襲来研究史論」雄山閣 1977年
- 註9 阿部征寛「蒙古襲来」教育社歴史新書 1980年
- 註10 川添昭二

(付編1)

調査地点の地形および地質

西南学院大学 磯 崇
九州大学 下山 正一

調査地の地形

博多遺跡群は、福岡平野を流れる那珂川河口部の低地に位置する。この低地は、繩文海進期以後に形成された沿岸州と、これと核として成立した砂丘列、および、砂丘間低地などの地形要素から構成され、那珂川の流路変遷の影響も受けた、多成因的地形を示す。現在の博多の地表は、自然状態で形成された地表面を2m前後の厚さで人工的に盛り土して形成されたものであるが、その起伏は、自然堆積で形成された原地表の起伏形状を比較的よく反映していることが確認されている（磯ほか、1991）。

調査地点周辺の現在の地表の起伏を、図1に示す。調査地点は、昭和通り付近を頂点とする微高地（微高地Ⅲ）から、北西の海側方向に緩やかに下った海拔4m前後の高さにある。この図から、調査地点の近傍にみられる微高地Ⅲの高まりは、昭和通り方向（北東—南西方向）よりも須崎方向（東西方向）に曲げられていることがわかる。微高地Ⅲの高まりは11世紀末には陸化し、「息浜」（おきのはま）の主部を形成するようになった（福岡市教育委員会、1992、博多30）。調査地点はこれより海側にあたり、その陸化は11世紀末より少し遅れたと推定されるが、今回の調査によって、その年代がほぼ特定された。

「息浜」の北西側の箱崎砂層（地山層）の上限高度の分布については、従来確実な資料が得られていなかった。しかし、博多遺跡群第46次・第55次・第68次・第69次の調査が実施された結果、埋没地形の上面の形態の詳細が明らかになりつつある。図2は、息浜北西側の砂層の高まりを2mの等高線で示している。なお、第46次調査地点付近は、その断面から低地が湾入していたものと判断された。さらに、第5次・第46次・第60次の発掘調査結果などを総合し、11世紀末の海岸線の位置を推定した。また、今回の調査で明らかになった石積みの位置から、13世紀末の汀線の位置が特定された。近世では正保図（1646年）などの絵図から、海岸線の位置が特定できる。これらの旧汀線の推定位置を図3としてまとめた。石積みの位置と年代は磯ほか（1991）の推定結果とよく一致していたことになる。

調査地の地質断面

図4はほぼ大持通りにそって引かれた線に沿う地質断面である。本遺跡の地質の概要をこの図

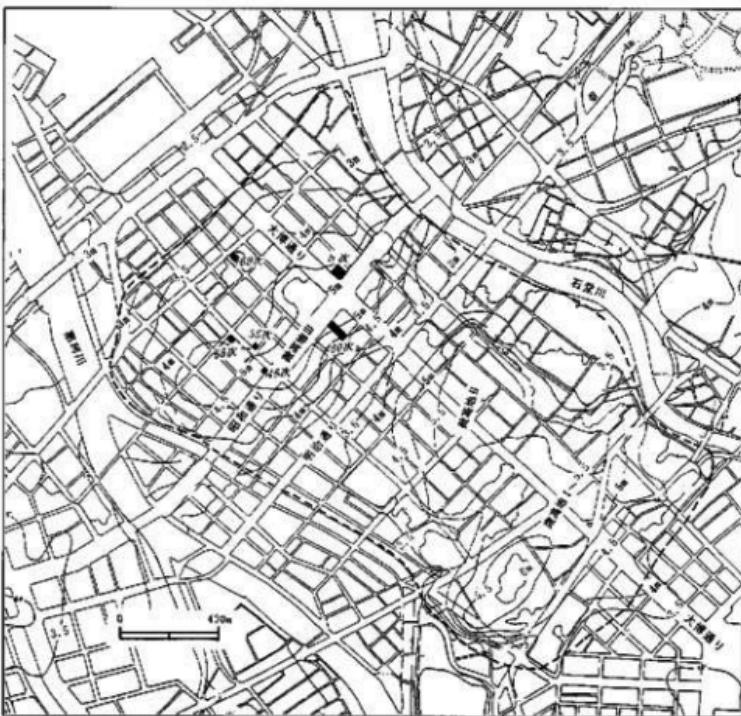


図1 博多遺跡群関連等高線および息沢周辺調査関係遺跡位置図

を用いて説明する。石積みの地山の砂層と石積み本体を海側から覆っている砂層は共に箱崎砂層（下山、1989）である。図1の地質断面図を見ると、試掘番号13、14付近で箱崎砂層の上限が大潮低潮線付近までせり上がっている。博多遺跡周辺の海岸線は海岸砂の堆積により、時代と共に、断続的ながら博多湾方向に前進している。本遺跡は11世紀の推定海岸線よりわずかに北側にある。

本遺跡の自然層（文化層の地山）は標高2.1m付近以下にみられる。その最上部には海岸砂丘砂層が見られ、15世紀の遺物が混入している。砂丘砂層には海岸砂と風成塵が交互に重なる、チリメンジワ状の堆積構造がみられる。これは、磯ほか（1991）によって、「トラ綱」と呼ばれているもので、風成層の季節的な堆積速度の変化と考えられる。トラ綱の発達する部分は、かつての砂丘表層部を占めていたと考えられ、その下にある砂丘砂層主部を覆って発達している。砂丘砂層主部は石積みの北側の、海拔0.5mから2.1m付近にみられる中粒砂層で、15ないし30cm単位の平行葉理が発達している。この平行葉理は單斜構造をしており、その走向傾斜は、ほぼ東西方

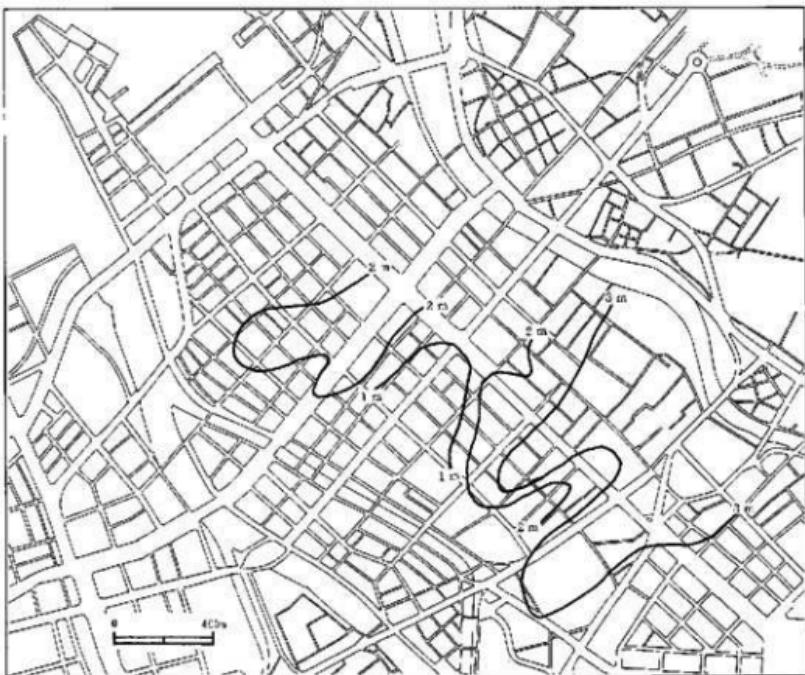


図2 息駄と博多沢の埋没自然地形等高線図

向、12°北落ちである。砂層の淘汰はよく、この砂層の上限と石積みの上限は一致している。砂丘層主部の中粒砂層は海浜の砂が波浪と冬季の卓越風によって吹き上げられて運ばれ、石積みの前面に急速に堆積したと考えられる。この砂層の上には妙楽寺が1316年に建立されており、このころには既に陸化していたことが確実である。海拔1m付近の石積みの基部以下には砂鉄の多い薄層が認められる。砂鉄薄層の存在は、波浪による砂層の侵食と砂鉄の残留堆積を示唆している。この付近が大潮高潮線付近と見られ、海浜砂が波の作用で後浜部までおしあげられ、堆積したことと示している。

石積みの背後の砂層は2つの部分に区分される(図5)。石積みのすぐ南側かつ下側には細粒混じりで淘汰の悪い粗粒砂層が発達している。堆積構造が消されていることから、この粗粒砂の堆積後に何等かの擾乱が生じたと考えられる。砂層同士の境界には、しばしば馬蹄形の削り込み構造が認められることから、石積みの背後では高潮時と低潮時における間隙水圧の変化による部分的な液状化や地下水のしみ出しによる侵食がしばしば生じていたと考えられる。石積みの一つ

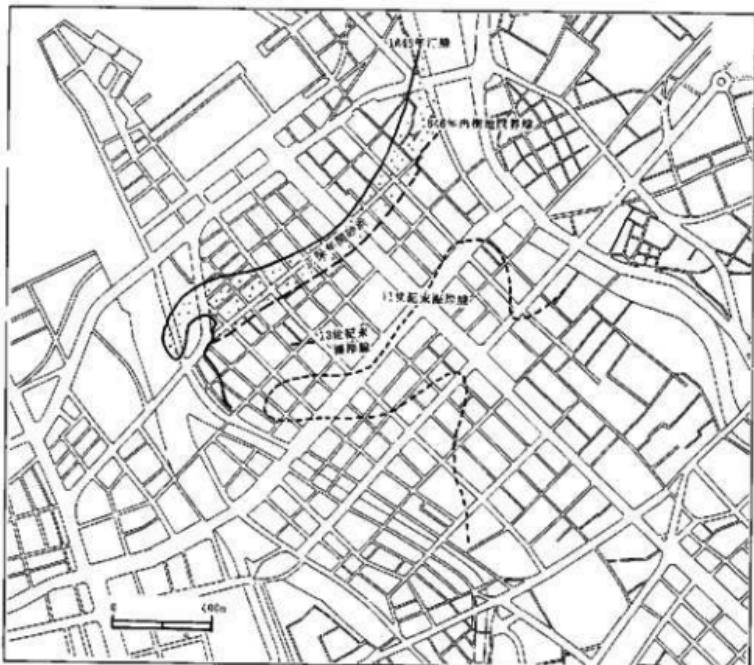


図3 息浜（おきのはま）の海岸線の年代別推定位置図

の効果として、このような海岸砂層の崩壊を抑え、砂の堆積を促進する効果が期待できる。石積み背後の地層中には、13世紀中頃の遺物が自然堆積している。石積みの築造年代は13世紀後半と判断されるので、この時期までには陸化していたものとみられる。

石積みの背後の砂層よりさらに陸側部分の箱崎砂層はN70°E, 12°Nの面を境に一部斜交して接している（図5）。この部分には井戸が開削されており、その年代は、井戸中の遺物から13世紀中頃であると判断されている。このため、この部分の陸化は13世紀中頃までには完成していたことになる。同様の層相を示す箱崎砂層は、博多46次調査で海拔0.5～1.8mの範囲で観察されている。この部分の下部では、12世紀前半期以前の白磁片などが、自然堆積した砂層中に混入している。したがってこの砂層は、12世紀前半以前までは陸化せず、海浜砂を構成していたが、13世紀中頃以前には陸化したことになる。

石積みの岩石は角のとれた直角礫から亜円礫の巨礫を主体としている。礫の種類は古第三紀層の砂岩、砾岩を主体に、玄武岩と花崗岩類をともなっている。石積みに使われているこれらの巨礫

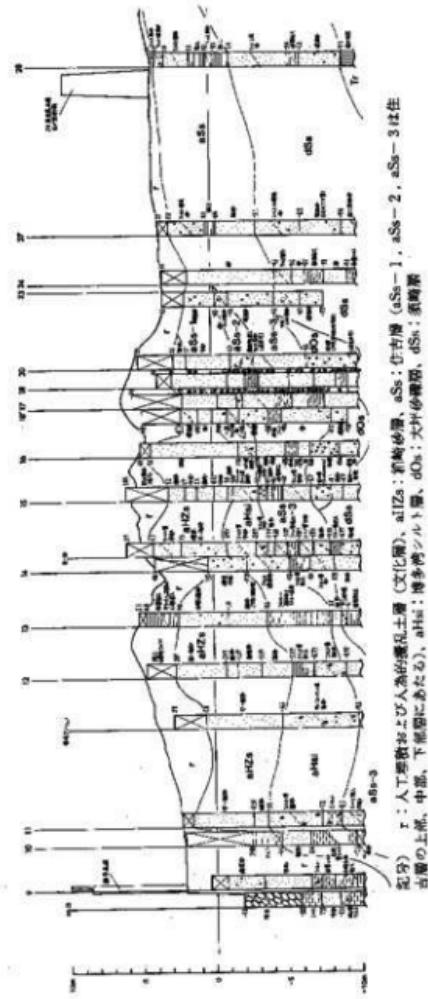


図4 博多港跡周辺の地質性状図とボーリング資料の位置

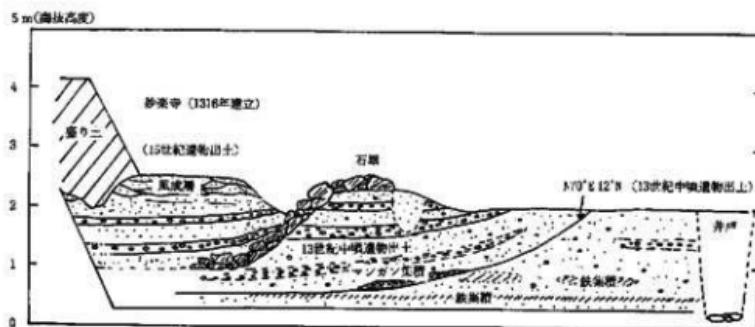


圖 5 横多道跡群第68次發掘調查的白沫點斷面圖

のうち、砂岩の礫にはまれに穿孔貝の開けた浅い穴が認められる。これらの状況から石積みの材料に使われた岩石の少なくとも一部は、どこかの海岸の汀線付近にあった転石が採集されて運ばれたものと思われる。これらの礫種は博多湾岸の岩石海岸に普遍的にみられるが、仮に、これらの転石が一ヶ所の海岸で採石されたとすると、上記の全ての岩石種を採石しうる最寄りの海岸は能古島の周辺に限られる。これらの岩石が波打ち際に護岸状に積まれていること、海岸の石が運ばれてきたと考えられることから、これらの石は陸路よりは海路を船で運搬されてきたと考えるのが合理的である。

参 考 文 献

- 穂 堅・下山正一・大庭康時・池崎謙二・小林 茂・佐伯弘次(1991)：博多遺跡群周辺における遺跡形成環境の変遷、横山治一先生追悼記念事業会「口人における初期弥生文化の形成」、文獻出版株、506-552頁。
 福岡市教育委員会(1992)：博多26-博多遺跡群第46次調査報告書一、福岡市埋蔵文化財調査報告書第281集、50pp.
 福岡市教育委員会(1992)：博多30-博多遺跡群第60次調査報告一、福岡市埋蔵文化財調査報告書第285集、144pp.
 福岡市教育委員会(1992)：博多33-博多遺跡群第69次調査報告一、福岡市埋蔵文化財調査報告書第288集、21pp.

(付編2)

博多第68次調査出土遺物岩石薄片作製鑑定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

博多遺跡群は、福岡平野の博多湾岸に形成された砂丘上に立地する。これまでの発掘調査により弥生時代から近世にわたる遺構・遺物が検出されている。

今回、第68次調査（博多区古門町98-1内所在）が実施され、鎌倉時代（13世紀後半～14世紀前半）に構築された護岸状の石積みが検出された。この護岸状石積みは調査区の北側で確認され、規模は東西方向に最大幅6.5m、長さ約20mを測る。石積みは調査区西側に約50m離れた地点でも確認されており、その規模はさらに拡大するものと推測されている。この護岸状石積みは、元寇防壁の推定線に一致することから、当初は元寇防壁のために構築された可能性が強いと判断されたが、遺構の構造や立地などから汀線護岸のために形成された石積みと考えられている。

1. 試 料

薄片作製鑑定試料は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課により選択された合計17点（試料番号1～17）である。SX13から検出された試料番号13は15世紀～16世紀に属し、SE14から検出された試料番号15が江戸時代に属するかは、全て14世紀～15世紀に属するものである。各試料は福岡市教育委員会埋蔵文化財課により岩石の肉眼観察を行った結果、それぞれ岩石名が異なると思われるものを中心に選択されたものである。岩石薄片作製鑑定試料の一覧表を表1に示す。

2. 方 法

試料をダイヤモンドカッターで切断し、研磨機で研磨し、薄片を作製した。これを偏光顕微鏡下で鉱物組織を観察し、岩石名を決定した。

3. 能古島・福岡県周辺の地質と岩石試料の関係

(1) 変成岩類

北九州地方は中国地方の三郡帶の西方延長に当たり、広い面積にわたって各所に三郡変成岩類が露出している。能古島中部には三郡帶に属する各種変成岩類と角閃岩（変斑れい岩）の露出が知られている。試料番号7（砂岩）、試料番号8（黒雲母縞泥石層長石英片岩）、試料番号13（粘板岩）、試料番号16（角閃岩）、試料番号17（角閃岩）は、いずれも三郡帶に

属する岩石である。試料番号4（黒雲母角閃石ホルンフェルス）は、三都帯の斑れい岩が花崗岩の貫入により熱変成作用を受けて、ホルンフェルスした岩石である。

(2) 花崗岩類

北九州地方には広く花崗岩類が露出しており、15以上の多数の岩体に区分されているため、試料番号3（向雲母花崗岩）の1点で产地を推定することは困難である。糸島半島・能古島・志賀島・新宮・福間などに分布する花崗閃緑岩類は、糸島型または北崎型に区分され、片状組織を有する含輝石-角閃石黒雲母花崗閃緑岩であるが、試料番号3は両雲母花崗岩で弱い片理を有する特徴があり、岩相的には典型的な糸島-北崎型と異なっている。糸島半島では糸島型化閃緑岩体を貫いて小規模な岩体を作る深江聖花崗岩と呼ばれているものがあり、鉱物組成と岩相は類似するようである。能古島においても同様の岩体が存在する可能性について検討の余地がある。

(3) 赤色岩

北九州地方の赤色岩は、夾炭層となる古第三系の下部に産出し、分布範囲は広い。試料番号15（赤色泥岩）もそのひとつである。

能古島南部に分布する古第三系福岡層群残島層（臼井層）の基底礫岩の上方約40mには、紫赤色岩層が存在する。また、月隈丘陵北端の粕屋地区臼井の同層では、最下部の基底礫岩の直上と約15m上方に、2層の紫赤色岩層が存在することが知られている。

残島層の上部層となる野間層の下部層にも、1～2層の紫色頁岩層が含まれている。同層の分布は、香椎丘陵（粕屋地区海岸部）の南部や宇美盆地である。したがって、赤色砂岩や赤色頁岩はその起源を必ずしも遠隔地に求める必要はないと思われる。

(4) 堆積岩類

試料番号1（ガラス質凝灰岩）、試料番号2（凝灰岩）、試料番号14（火山礫凝灰岩）は、いずれも火山岩起源の碎屑岩である。古第三系福岡層群残島層は、火山岩起源の碎屑物を多く含むことが知られている。また、広域的には津屋崎町に分布する古第三系津屋崎層が多量の火碎岩を著しく伴うことで知られる。おそらく試料番号10（砂岩）、試料番号12（シルト岩）とともに、古第二系として堆積したものであろう。試料番号9（黒雲母デイサイト）も一連の火山作用で生成されたものであろう。

(5) 玄武岩

北九州地方北部地区には、後期中新世～鮮新世にわたる玄武岩の活動がみられ、糸島郡芦屋大岳・那島・可也山・福岡市今山・昆布門岳・能古島・宗像郡津屋崎などに分布する。いずれもアルカリ岩系の玄武岩とされている。今回の試料では、試料番号5（変質玄武岩）、試料番号6（単斜輝岩かんらん石玄武岩）、試料番号11（玄武岩）がこれに属すると考えられる。

表1. 岩石薄片作製鑑定試料および鑑定結果

試料番号	遺構	時代	岩石名
1	SX32 石積み	13~14世紀	ガラス質凝灰岩
2	SX32 石積み	"	凝灰岩
3	SX32 石積み	"	閃雲母花崗岩
4	SX32 石積み	"	黒雲母角閃石ホルンフェルス
5	SX32 石積み	"	透質玄武岩
6	SX32 石積み	"	半斜輝石かんらん石玄武岩
7	SX32 石積み	"	砂岩
8	SX32 石積み	"	黒雲母級簾石緑泥石曹長石右英片岩(緑色片岩)
9	SX32 石積み	"	黒雲母ディサイト
10	SX32 石積み	"	砂岩
11	SX32 石積み	"	玄武岩
12	SX32 石積み	"	シルト岩
13	SX13	15~16世紀	粘板岩
14	SX32 石積み	13~14世紀	火山性凝灰岩
15	SE14	江戸時代	赤色泥岩
16	SX32 石積み	13~14世紀	角閃石
17	SX32 石積み	"	角閃石

4. まとめ

福岡市教育委員会埋蔵文化財課によれば、今回岩石薄片作製鑑定を行った試料は、能古島産と福岡市内産(香椎または今津)と推測されている。今回の鑑定結果では、いずれの試料とも能古島あるいは福岡市内に分布する岩類であり、調査所見と調和的な結果と言える。

今回の分析調査目的は、石積みの各岩層の産地を推定することにあった。今後は、今回の鑑定結果を基礎資料として、1) 推定産地の岩石試料について鑑定し、比較検討を行うこと、2) データを蓄積し、周辺地域の地質図を用いて岩石の産地の分布図を作成すること、3) 推定産地の露頭調査などが必要と考えられる。また、試料の大きさ・重量および石積みの構築技法などを考慮して、岩石の特徴を意識して石積みに用いられているのか否かを検討することが重要と思われる。さらに、岩石の元素組成を知るために、X線回析による分析方法も岩石の産地を調査するひとつの手法と考えられる。

Tab. 1 第68次調査遺構一覧表①

遺構名	遺構名	遺構類	形 品			出土 遺物	時 期	備 考
			中面形	断面形	長			
SK01		土 壁	圓丸長方 形	逆傾形	194*	158	18	土師器(瓦・軒)、十脚支上器(火炎)、中国青磁(鏡)、瓦(斜丸瓦)、板張瓦(鏡)、木炭
SK02			不整円形	塊状形	128	118	73	土師器(鏡)、須恵器(直)、十脚支上器(火炎)、瓦(斜丸瓦)、板張瓦(鏡)、木炭
SK03			小整円形	逆傾形	190**	73*	17	土師器(鏡)、土師質土器(瓦錐)、船形陶器(鏡)、灰陶陶器(鏡)、滑石(鏡)、把手(手鏡)、瓦(平瓦)
SK04	SK04A		不整円形	逆傾形	152**	94**	25	土師器(直・耳)、十脚支上器(鏡)、圓底陶器(鏡)
SK05			不 整 形	逆傾形	188	122	64	十脚器(直・凹)、土師質土器(鏡)、圓底陶器片、把手(直・鏡)、瓦(平瓦・斜丸瓦)
SK06			不整円形	逆傾形	111	97	42	十脚器(直)、瓦質土器(火炎)、中国青磁(鏡)、手鏡(鏡)、把手(鏡)、瓦(平瓦・斜丸瓦)
SK07			圓丸長方 形	逆傾形	155	137**	41	把手(鏡・鏡)、中国白磁(加)、土膏、瓦(軒手・瓦)
SK08			不 整 形	逆傾形	168	60**	33	土師器(直・斜)、中國青磁(鏡)、少万瓦(鏡)、肥前系白磁(直)、板張瓦(鏡・瓦)、瓦(平瓦)
SK09			不整橢円 形	逆傾形	118	92	52	土師器(直・斜)、板張(鏡)、唐津系(鏡)、大内瓦(鏡)、瓦(平瓦)
SK10	高架物 上 標		小整丸長 方 形	—	210	140	—	上野器(鏡・鏡)、圓底陶器(鏡・鏡)、扁錐(直・鏡)、瓦(鏡)
SK11	欠							
SK12			小整方形	逆傾形	132	113	35.5	土師器(直)、圓底陶器(鏡・盤)、灰陶(直・鏡)、高取器(鏡・盤)、有孔(直)、圓底陶器片(直・鏡)、板張(鏡)、把手(直)、少万瓦(鏡)、肥前系白磁(直)、板張瓦(鏡)、明治村(鏡)、中國青磁(鏡・直)、李朝白磁(鏡)、白磁(鏡・猪口)、古鏡(照字元音)
SK13			不整円形	逆傾形	138	92**	12	上野器(鏡)、中國青磁(鏡)、板張陶器(鏡)、把手(鏡)、灰陶陶器(鏡)
SK14			不 整 形	逆傾形	45**	90	35	土師器(直)、十脚支上器(鏡)、瓦(平瓦・瓦瓦)、板張品(鏡)、灰陶
SK15			小整円形	逆傾形	127**	83**	17	中國青磁(鏡)、中國青磁(鏡)、中國白磁(鏡)、瓦(平瓦)、青銅鏡片、古鏡
SK16	SK16B		不 整 形	逆傾形	183**	57*	37	土師器(直・凹)、須恵器十脚(直)、瓦(平瓦)、15C~16C
SK17			小整橢円 形	逆傾形	225**	130**	35	土師器(直・凹)、須恵器(外蓋)、上野門土器(直)、瓦質土器片、把手(直)、納實陶器(鏡)、把手(鏡)、圓底陶器(鏡)、瓦(平瓦)
SK18	SK05		不整橢円 形	逆傾形	203**	148	29	土師器(直・斜)、板張(鏡)、把手(直・斜)、少万瓦(直)、中國青磁(鏡)、瓦(斜丸瓦)、江戸
SK19	SK06		不整円形 レゾンズ 状	—	232	126**	38	土師器(直)、瓦質土器(火炎)、把手(鏡)、板張品(直)、板張品(直)、板張品(直)、板張品(直)、瓦(斜丸瓦)、板張品(鏡・リチ・鏡)、灰陶、日本式遺物(骨)
SK20	SK08		不整橢円 形	シングル 状	192*	187	42.5	土師器(直・斜)、上野門土器(鏡・盤)、板張陶器(鏡)、把手(鏡)、圓底陶器(鏡)、板張品(鏡)、把手(直)、瓦(斜丸瓦)、板張品(鏡・リチ・鏡)、灰陶、日本式遺物(骨)

Tab. 1 第68次調查酒樽一覽表 ②

遺物名	旧 遺 物 名	遺 物 類	形 状		規 格(cm)		出 土 場 所	時 期	備 考
			平面形	断面形	長	巾			
SK21	SX12	井戸?	楕丸長方形 窓	逆梯形	188	165	21.5		上部縦(直・斜)、底窓器(鉢)、土加賀土器(鉢)、瓦質一筋(鉢・火鉢)、底窓(直・斜・火鉢)、二野(窓口)、廻戸・美濃系(直)、底窓(直)、鉄製陶器(鉢・器)、加茂白磁(直)、中國青磁(鉢)、福建白瓷(直)、曉白磁(直)、李朝青磁(直)、瓦(平瓦・丸瓦)、鐵製品(鉢)
SK22	SX13A		不整丸 方形	逆梯形	200	91	53		土加賀(直)、土加賀土器(直)、瓦質土器(直・斜)、萬葉系(直)、象嵌(直)、二野(窓口)、中華白磁(直)、李朝三字款(直)、瓦(平瓦・丸瓦・斜瓦)、鐵製品(鉢)、青銅製品、自然遺物(竹)
SK23	SX16		小楕円形	逆梯形	162	127	41.5		十輪脚片
SK24	SX13B	井戸	不整円形	逆梯形	183	156	83.5		土加賀(直)、瓦質土器(鉢)、底縫(鉢)、四邊 脚付(木板の把手)、曉白磁(直)、曉青磁(直)、 中華白磁(直)、瓦(平瓦)、鐵製品(鉢)、土加賀 土器(直)
SK25	SX10他		不 整 形	逆梯形	98	66	10.5		十輪脚片
SE01	瓦井戸	不整円形	H筒型	140	120	66		(西より) 土加賀(直・斜・圓)、瓦質土器(鉢)、石器(直)、 鐵製品(鉢)、瓦(平瓦)、古銅(瓦承置物) (矛身)、土加賀(直・斜)、燒付(直)、小石瓶(青 銅)、下部陶器(鉢・盤・直)、紀前奈村(直・斜) 窓、鐵製陶器(鉢)、古墳遺物(骨)	
SE02	瓦井戸	不整円形	把鉢形	260 井筒9C 幅 74	240 井筒9G 幅 74	66		(西より) 土加賀(直・斜)、瓦質土器(鉢)、土加賀土 器(直・火鉢)、瓦質土器(鉢・斜)、燒 付(直)、鐵製陶器(鉢)、土加賀(直・斜)、小石瓶 (鉢)、京焼(直)、參戶・笠置(直)、福前 (直)、福岡系(直・斜)、肥前與牛(小平・ 直)、中田吉左(直・斜)、1番陶器(直・斜)、瓦 (平瓦・丸瓦・斜瓦)、鐵製品(鉢)、灰土塊	
SE03	瓦井戸	不整円形	載縫円 盤形	250 井筒75 幅 73	215 井筒75 幅 70	287		上野(直) (西より) 土加賀(直)、土加賀土器(直)、花葉 土器(直・斜)、燒付(火鉢)、南洋(直・斜・火鉢)、 野系(直)、海貝(直)、巴形舟(直)、中阿育塔 (鉢)、白磁(直)、中國青磁(直)、瓦(平瓦)、鐵 製品、剪刀的刃口 (井身) 土加賀(直・斜)、瓦質土器(鉢)、店舗 (直・斜)、紀前奈村(直・斜)、土加賀(直・斜)、 中阿育塔(直)、鐵製品(直)、古銅製品	
SE04	瓦井戸	小楕丸 方形	逆梯形	236 井筒80 幅 74	324 井筒80 幅 74	176		土加賀(直・斜)、十輪脚片(鉢)、瓦質土器(火 鉢)、燒付(直)、鐵製品(直)、海貝(直)、中 阿育塔(直)、巴形舟(直)、白磁(直)、燒付(直)、 瓦(平瓦)、鐵製品(鉢)、土加賀(直)、瓦 (平瓦)、鐵製品(鉢)、古銅製品、底窓(直)、 (火鉢)、二野(直・斜・火鉢)、須恵器(直)、 土加賀土器(直)、瓦質土器(直)、燒付(直)、鐵 製品(直)、福岡系(直)、燒付(直)、中國青 磁(直)、中田吉左(直)、高麗青磁(直)、李朝 青磁(直)、瓦(平瓦・丸瓦)、鐵製品(鉢・斜)、 鐵製品	

Tab. I 第68次調査遺物一覧表(③)

遺物名	出 處 標 名	形 態 構 造	形 状 (cm)			日 本 土 產 物	時 期	備 考
			平 面 形	側 面 形	高 度			
SE05	瓦井戸 不整円形 円筒形	134	110	98+		上層器(直・外)、瓦(平瓦)		近世
SE06	瓦井戸 不整円形 円筒形	125	120	65+				
SE07	瓦井戸 小整円形 円筒形	197	168	83+	井筒84	馬頭飾片		
SE08	瓦							
SE11	瓦							
SE12	瓦井戸 不整円形 線筒形	242	232+	87+		土師器(直・外)、瓦質土器(鉢)、高取系(方口・深鉢・盆)、上層(直)、横須系(直・板戸(直)、板戸(直)、李朝陶器(直))、上(丸瓦・瓦)、鐵製品(鉗・鍔)、古鉄(「唐瓦」遺物)、青銅製品(鉢・鉢)、土製器(土鍋)、自然遺物(米)、鐵(鐵力)、土鉢(直・外)、瓦質土器(直・板戸)、瓦質土器(直・板戸・火舟)、唐津(直・外)、瓦質土器(直・板戸)、中古青磁(碗)、石製品(石刀)、瓦(平瓦・丸瓦)、(井物)、土加藤(鉢)、田字(碗)、寺白窯(香炉)、瓦(平瓦)、板製品(鉢)	16C末 i 17C初	SE05に切られる
SE13	湯桶タ 井戸 不整円形 逆錐形	180	160	26		上層器(直・外)、土師質土器(鉢)、瓦質土器(直)、圓筒形器(碗)、灰瓦(直)、壓搾瓦(直)、中古青磁(碗)、白磁(直)、瓦(丸瓦)、鐵件	17C～ 18C初	SE20に切られる
SE14	瓦井戸 不整円形 円筒形	220+	220	115+		上層器(直)、瓦質土器(直)、瓦質土器(直)、鐵製品(鉢)、青銅器(直)、圓筒形器(碗)、灰瓦(直)、內山(碗)、京燒(直)、壓搾(直)、壓搾瓦(直)、白磁(直)、中古青磁(直)、中國白磁(直)、七輪、焰爐、瓦(丸瓦)、(下部)上層器(直)、下層器(器)、瓦質土器(直)、瓦質土器(直)、泥瓦(直)、瓦(直)、七輪、瓦(平瓦・丸瓦)、古鏡(荷葉式鏡)、瓦水道渠、地主塔	17C後 i 18C初	他の辺井戸に 切られる
SE15	木桶井 戸 不整円形 逆錐形	344+	240+	190.5		土師器(直)、薄青(直)、灰瓦(直)、高麗青磁(直)、石製品(鉢)、瓦(丸瓦・尖端丸)、鐵製品(鉗)、(鐵力)、上層器(直・杯)、上層器(器)、壓搾(直)、圓筒形器(直)、瓦質土器(直)、中古青磁(直)、李朝陶器(直)、瓦(丸瓦)、鐵製品(鉗・鍔)、火舟、火舟上器(火舟内筒器)、上層器(直・外)、李朝陶器(直)、瓦(丸瓦・板戸)、鐵製品(鉗・鍔)	14C後 ～15C	隣接と共通の 上場を有する
SE16	木桶井 戸 不整円形 逆錐形	344+	240	168.5		上層器(直)、壓搾(基盤)		SE15と共通の 上場を有する SE20・18C切 られる
SE17	瓦							
SE18	瓦井戸 不整円形 逆錐形	240	168+	94+	井筒83 井筒110	土師器(直・外)、土師質土器(鉢・碗)、瓦質土器(直・火鉢・四脚)、唐津(直・板・直)、上層(直)、壓搾系(器底)、圓筒形(直)、壓搾(直)、火舟(直)、內山(直)、灰瓦(直)、京燒(直)、壓搾(直)、壓搾瓦(直)、中古青磁(直)、李朝陶器(直)、火舟(直・板)、焰爐(直)、增輪、瓦(平瓦・丸瓦・斜瓦)、青銅製品(直)、鐵製品(鉗)、三輪(瓦)、瓦水道渠、青銅製品(直)、石製品(直)、瓦白(直)、木炭、自然遺物(米)、(井筒)、鐵製品(鉢)、傾倒(直)、美濃系(直)	17C後 i 18C初	埋葬地にある SE20に切られる 16C後～17C 前の遺物も含む

Tab. 1 第68次調査遺構一覧表④

遺構名	附送 品名	遺構 種類	各層 厚(㎝)				出上遺物	時期	備考	
			平面形	断面形	長	巾				
SX19	SX09	立井戸	不規円形	造形物	290*	200	195*	土器器(目・耳)、束縛系(鉢)、上部質土器(鉢・瓶 類)、瓦質土器(火炎)、灰陶(焼)、肥前(燒)、備前 (燒)、伊万里(直)、瓦質器(目・耳)、余韻輪器 (直)、瓦(平瓦・丸瓦)、鉄製品(鉗) (骨董)、青瓷(小杯)	16C末 ~17C	境内地にある 木橋を有する
SX20	SX17	石敷戸 戸	不規円形	円筒形	431 井筒 120 桶 63	332 井筒 120 桶 65	228**	土器器(目・耳)、瓦質土器(鉢・瓶類)、唐津(直 ・圓錐)、中國青磁(直)、瓦(丸瓦・九瓦・斜平瓦) (燒)、灰陶(片口)、國產陶器(直・燒)、西岡 (直)、備前(直・燒)、肥前(丸瓦)、灰陶柴柱(直)、肥 前(燒)、瓦(平瓦・丸瓦・斜平瓦)、瓦質器(直・耳)、灰陶 (直)、灰陶(直・耳)、瓦(平瓦・丸瓦・斜平瓦)、 灰陶(直)、灰陶(直)、自然遺物(骨) (高込み)、士師器(直・耳)、上部質土器(鉢・瓶 類)、瓦質器(直・耳)、肥前(燒)、灰陶(直 ・耳)、瓦(平瓦・丸瓦・斜平瓦)、鐵製品(鉗・鑿)、灰陶 石桶(直筒形)、自然遺物(骨)	16C末 /17C初	SX19に切られ る 主修は16C末
SX01	植栽跡 ?	不整楕円 形	梯段形	263	206	80	土器器(直)、瓦質土器(燒)、唐津(直)、高取系 (直)、肥前輪器(燒)、肥前柴柱(直・燒)、クリム 青磁(直)、五(平瓦・丸瓦)、鉄製品(鉗)、灰陶 (直)、土器器(直)、瓦質土器(直)、石桶(直筒形) (燒)、土器器(直)、瓦質土器(直)、唐津(直) (燒)、肥前(燒)	17C後		
SX02		不整圓丸 形	造形物	2段	362*	280	76	唐津(燒)、高取系(直)、肥前輪器(燒)、灰 陶(燒)、輪胎柴柱(直)、中國青磁(直)、瓦 (平瓦・丸瓦・斜平瓦)、赤陶(木炭) (燒)、一輪器(外)、土器器(燒)、瓶(直)、正 質土器(直・西岡)、唐津(直・耳・垂・耳・目口 ・火炎)、上野(高取系(直・耳・垂・耳・筒体)、西岡 (直))、肥前(直)、瓦質土器(直)、唐津(直) 七輪、瓦(丸瓦・斜平瓦)、鐵製品(鉗)、灰陶 (直)、古物(吉永造費)、瓦(平瓦・斜平瓦)、 灰陶(直)、土器器(直)、瓦質土器(直)、唐津(直) (燒)、高取系(直)、肥前(直・燒)、肥前系(直)、 柴柱(燒)、青磁(直)、瓦(丸瓦)、鐵製品(鉗)	17C後 /18C後	SX01に切られ る
SX03	高脚 柱	刀形又は 長方形	造形物	内法 443	555** 内法 124	175** 内法 71**	土器器(直・耳)、土器質土器(直・瓶・瓶の把手・耳 ・直・七輪・燒)、瓦質土器(燒・火炎)、唐津(直 ・耳・瓶・耳・片口)、京焼(高足)、肥前(直)、 肥前輪器(直)、灰陶(直)、高取系(直)、伊万里(直) 、肥前柴柱(直・小町)、有田白磁(直)、中國青磁 (直)、高梁(直・小町)、灰赤陶(直)、土器器 (直)、瓦(平瓦・丸瓦・斜平瓦)、鐵製品(鉗 ・直)、古物(吉永造費)、祥符通寶、自然遺物 (魚骨・貝)、日一ワタヨモシオガイ、人頭、木製 品(柱・基盤) (2層) 土器器(直)、唐津(直・耳)、高取系(燒) 、輪胎(直)、瓦(平瓦・丸瓦)、鐵製品、白磁 遺物(直)	18C前 ? / 18C中	境域地にあ る SX19に切られ る 構成は土器 (SX01)に沿 れる	

Tab. I 第68次調査遺構一覧表 ⑤

遺構名	記号名	高さ 標高	歩道		幅・深さ(cm)			上部 遺物	時期 調査
			平土形	斜面形	長	幅	深		
SK03								<p>(3層) 土器類(瓦), 土質實土器(消滅者), 瓦質上蓋(火合), 遺構(火, 灰, 烧跡), 小穴系(窓), 瓦川(瓦), 遺構(瓦), 伊万里(瓦), 茶前焼(瓦), 開口燒(瓦), 有田燒(瓦), 白梅(瓦), 瓦(瓦), 大正(瓦), 風鈴石(瓦), 青磁製品片, 自然遺物(貝)</p> <p>(4層) 上西番(瓦), 青磁(瓦, 灰, 烧跡), 上西番(瓦), 遺構(茶, 小穴), 有田(瓦), 中西番(瓦), 青白梅(ニニチアラ), 瓦(瓦), 大正(瓦), 烧跡, 野九瓦(瓦), 瓦(瓦), 遺構, 自然遺物(骨, 灰, フノタガイ), 木炭, 木製品(竹, 雜物)</p> <p>(5層) 土器類(瓦), 唐津(唐津), 京焼(灰), 遺構(瓦), 阿波燒(瓦), 上西番(瓦), 瓦(瓦), 大正(瓦), 瓦(瓦), 自然遺物(瓦ツメタガイ, ココセガイ)</p> <p>(6層) 上西番土器(焼跡, 銀板型の瓦), 瓦質土器(瓦, 灰合), 遺構(指跡), 遺構(瓦), 遺構(瓦), 遺構(瓦), 有田燒(瓦), 中西番(瓦), E. (瓦), 丸瓦, 野九瓦, 伏見瓦, 自然遺物(瓦)</p> <p>(7層) 遺構(瓦, 灰), 阿波燒(瓦), 瓦(瓦), 大正(瓦), 大瓦</p> <p>(8層) 中西番青磁(瓦)</p> <p>(裏込) 五郎助(瓦), 七輪, 瓦(瓦)</p>	
SK04			小林門形 式	レンズ 状	152 ⁺	82 ⁺	25 ⁺		SE02・04に切 られる
SK05	欠								17C後
SK06	欠								
SK07	不整構丸 長方形	逆傾形	143	106	30.5				SE12Cに切 れる 軸上がある
SK08	欠								
SK09	欠								
SK10	—	—	73 ⁺	24 ⁺	16				16C後 空堀地にある SK10に切られる
SK11	不整構丸 形	逆傾形	324 ⁺	305 ⁺	37				SK07・SK12・ 18Cに切られる
SK14	不整構門 形	逆傾形	153	117	32				16C木の一層 がある
SK15	幕	木壁形	逆傾形	218 ⁺	120 ⁺	35			SK14Cに切られる

Tab. 1 第68次調査遺構一覧表 ⑥

遺構名	旧遺構名	遺構種類	形態		規模(cm)		出土遺物	時期	備考	
			平面形	断面形	長	巾				
SX16	SX16A	室	不整円形	逆梯形	323	270**	48.5	土門櫓(瓦・瓦)、土器質土器(陶・焼鉢)、瓦質土器(瓦・墨跡)、泡吹(瓦)、瓦戸、瓦盤系(瓦)、肥前染付(瓦)、瓦(平瓦・瓦丸)、鉄製品(鉗)(鋸り刃)、土器器(瓦・鉢)、束縛系(瓦)、土器質土器(瓦・瓦)、瓦質土器(瓦・鉢)、泡吹(瓦)、瓦戸(瓦)、瓦(平瓦・瓦丸)、石製品(瓦)、内窓(瓦)、土器器(瓦)、芯体(瓦・瓦・瓦・骨)、鐵製品(瓦)、上野(瓦)、高取系(瓦)、肥前(瓦・瓦・瓦)、九条系(瓦)、御戸(瓦)、燒青(瓦)、肥前燒器(瓦)、肥前染付(瓦・瓦)、和歌燒器(瓦)、中國青器(瓦)、中國白器(瓦・瓦)、高麗青器(瓦)、瓦(平瓦・瓦丸)、鐵製品(鉗・鉗)	13C後～14C 17C前 18C前	S814に見られる 16C後～18C 本の遺物も含む 廃置いを有する
SX17	久									
SX18		—	—	136	117**	35.5	土門櫓(瓦・瓦)、瓦(平瓦)、鉄製品(鉗)	13C～14C?	次第にある 30mに切られること	
SX19		—	—	350	196**	—	土門櫓(瓦・瓦)、須恵器(瓦)、瓦質土器(瓦・片口・片口・角火鉢)、燒青(瓦)、御戸青器(瓦)、中國青器(瓦)、中國白器(瓦)、高麗青器(瓦)、瓦(平瓦・瓦丸)、鐵製品(鉗)、鉄錠	15C～16C S801-15-16C	邊界地にあら り切られも	
SX20		不整円形	舟底形	177	85	45	御戸青器(瓦・焼鉢)、小瓦(焼鉢)、肥前染付(瓦)、瓦(平瓦・瓦丸)、鉄製品(鉗)	17C末 18C初		
SX21		—	指輪状	160** 内径83 内径74	124** 59	—	土門櫓(瓦)、燒青(瓦)、福岡系(瓦)、肥私(瓦)、七輪、瓦(平瓦・瓦丸)、燒 (内窓)、十石器(瓦・瓦)、土門櫓上器(瓦・七 輪)、燒青(瓦・燒鉢)、福岡系(瓦・瓦)、國西系 (瓦)、瓦(瓦・瓦)、燒青(瓦)、燒青(瓦)、有田色 (鉢)、肥前染付(瓦・瓦・瓦・墨合子の墨)、瓦(平 瓦・瓦丸)、鉄製品(鉗)、木炭、自然遺物(竹 ・丸・ササ)、ハマグリ、フジシボ、ミガキ ガニシ	18C後 19C 後		
SX22	久									
SX23		腰石?	腰丸瓦方 形	逆梯形	100	85	33	木炭		
SX25	久?									
SX29										
SX30	上	横 溝 瓦	船 形	87**	62	38	土門櫓(瓦・土器器(瓦)、有田(瓦・瓦・瓦)、肥前染付(瓦)、七輪、瓦(平瓦・瓦丸)、燒青(瓦)、鉄製品(鉗)、石製品(瓦)、石質古石器(瓦)、木炭	18C後 18C中	S803内にある	
SX31	土器裏	横 溝 瓦	逆梯形	170	134	45	土門櫓(瓦)、赤土質土器(瓦)、瓦質土器(瓦)、土 器青器(瓦)、自然遺物(人骨)	12C後 13C初	3面で検出	
SX32	右腰石			2000**	650		二泊器(瓦・鉢)、瓦質土器(瓦・焼鉢・火鉢)、燒 青(瓦)、中國白器(瓦・鉢)、鉄製品(鉗)	12C後 半		
P101		不整円形	逆梯形	72	68	43	土門櫓(瓦)、鉄製品(鉗)、古鐵			
P102		不整円形	逆梯形	98	80	40	土門櫓(瓦)、土器質土器(瓦)、燒青(瓦・燒 鉢・植物)、二泊燒青(鉢)、小正原(鉢)、燒青陶器 (鉢)、國西白器(瓦)、瓦(瓦丸)、鉄製品(鉗 (鉗)、古鐵製品		半面倒支張八 可	
P103		腰丸瓦方 形	逆梯形	92	66	21.5	土門櫓(瓦)、御戸青器(瓦)、肥前染付(瓦) 瓦(瓦丸)	中後		
P104		不整円形	逆梯形	45	42	12.5	土門櫓(瓦)、燒青系(瓦)			
P105										

Tab. 2 第68次調査遺物一覧表 ① 土墳山ト遺物

遺物番号	遺物名	器種	法量(㎤)				形態の特徴	文様・施物・色調・裏地等	出土遺物	備考
			口径	底径	高さ	(高台径)				
8 1	土師器	小皿	7.0	5.0	1.45		糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好、淡茶褐色。	SK01	
# 2	"	"	7.1	5.8	1.35		糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成不良、淡灰褐色。	"	
# 3	"	"	7.6	5.0	1.3		糸切り底、その横に付着	胎土に細砂粒を含み、焼成良好、淡茶褐色。	"	
# 4	"	"	7.2	5.0	1.5		糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好、黄褐色。	"	
# 5	"	"	8.0	6.2	1.0		糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成やや良、茶褐色。外側は灰褐色。	"	
# 6	"	"	8.8	7.6	0.9		糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成は良好、淡茶褐色。	"	
# 7	十郎黄上器	火盆	—	—	—		口縁部は直い、底面外周に1条の突出	胎土は暗灰色やや紺色を含み、焼成良好。外側は茶褐色。底部外周に楕円花文のスタンプ。	"	
8	青磁: 茶	碗	—	—	—		端部り底、輪花	裏地は淡灰色、淡褐色。外面に織目文。	羅馬美術 平安時代	
# 9	十郎器	小皿	6.2	4.6	0.95		糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。茶褐色。	SK02	
# 10	"	"	6.5	5.2	1.35		ヘラ切り底、底部が厚い	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡灰褐色。	"	
# 11	"	"	7.0	4.6	1.05		糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。茶褐色。	"	
# 12	白磁: 茶	碗	6.0	—	(2.3)		口縁部はやや外反、膨脹底	裏地は淡緑、白色。淡白色釉。	肥前18C~	
# 13	"	"	—	4.0	(0.9)		直口縫口、尖る 直脚底	裏地は桔梗、白色。青白色釉。	有田	
# 14	陶器: 瓢	—	6.9	(1.6)	上付底		焼成悪い。茶褐色。		国産	
# 15	"	碗	—	4.2	(2.6)		内側に低い、削出し、 底部は丸突をもつ	裏地は淡茶褐色、暗緑灰色釉。焼成良好。見込み脂へだ。かいたぎ。	唐津焼	
# 16	青磁: 瓢	—	—	—	内面にケズリ		裏地は灰緑、細砂粒を含む。暗灰色釉。貫入。			
# 17	"	碗	—	—	—		口縁部リム	裏地は暗緑、暗茶褐色。オリーブ色釉。内面にヘラド形。	龍泉窯	
# 18	陶器: 香炉	—	—	—	—		体部はやや膨脹 上縁落つい	体部外周に貫入。赤絵で、梅花文。	有田 古伊万里	
# 19	七郎寅上器	高足	18.0	厚1.1	—		正四角、中心に幅3.5mmの 縫穴	胎土は2mm前後の砂を含み、焼成良好。淡 褐色から灰褐色。	酒井家	
# 20	高麗土器	壺	28.0	—	(3.0)		口縁部内面に一舟突付 6本半径の下し目	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡褐色。	大内系	
# 21	"	火盆	—	—	—		網脚片	胎土に2mm前後の砂を含む。内外に三色印刷。 焼成良好。暗緑青色。外面に楕円花文のスタンプ。	"	
# 22	一郎曾: 罐	—" "	—	—	—		体内部内面はヨコハケ	胎土は1mm前後の砂を含む。内面墨色研磨。 焼成良好。茶褐色。体部外周に削出。	"	
9 26	"	泡鉢	—	—	—		口縁部は丸突をもつ 内面ヨコハケ	胎土に細砂粒を含み、焼成良好、淡黄褐色。	SK03	
# 27	青器: 把鉢	—	—	—	—		頭部の最大幅は32.8mm 内面に7本半径の下し目	裏地は明茶褐色、細砂粒を含む。	備前焼	
# 28	上部器	小皿	8.1	6.2	1.05		糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。茶褐色。	SK01	
# 29	"	"	7.0	5.6	1.4		糸切り底、板口儀	胎土に砂粒含み、焼成良好。茶褐色。	"	
# 30	"	"	7.0	5.0	1.5		糸切り底	胎土に2mm程度の砂を含み、焼成良好。淡 褐色。	"	
# 31	"	甌	11.0	8.0	3.0		糸切り底	胎土に1~2mmの砂を含み、焼成良好。淡 褐色。	"	
# 32	"	"	—	9.6	(1.8)		糸切り底	胎土に2mmの細砂粒を含み、焼成良好。淡 褐色。	"	
# 33	紀伊陶器	甌	—	—	—		体底脚、内面ヨコハケ、 外側ヨコハケ方向のカギ目	裏地に砂粒を含む。外面は暗緑灰色釉。内 面は露胎。	唐津窯	
# 34	東村窯	甌	7.0	2.6	3.1		体部半球形	内底と体部外周に菊文花。青灰生。	SK05 肥前焼	
# 35	"	皿	—	6.4	(1.3)		底脚部、高台断面は三角 形状	最外は脚へだ。見込みは2条の脚筋。貫入。 見込みに砂粒。	"	

発掘場所	遺跡番号	種類	法量(cm)				形態の特徴	文様・馬頭・色調・素地等	出土遺構	参考
			幅	口径	底径	高さ(高さ)				
9	36	土器質土器	鉢	39.0	14.3	24.6	口縁部に渋くの字形に出立、口縁部は内側に肥厚	胎上は砂粒多い。表面は灰黄褐色。施成歟。	SK05	江戸時代
"	37	瓦質土器	大口	37.8		(6.5)	体内外、口縁部は肥厚し、平底	胎上に砂粒を含み、施成良好。褐色。	SK06	
10	38	土器質	小皿	7.0	5.0	1.65	糸切り底、縁付着	胎上を含み、施成良好。褐色。	"	灯明塗か
"	39	青磁	碗	—	5.0	(2.7)	高台は連続形状	裏地は灰白色。薄灰色の厚い施物。見込みに朱の墨跡。青入。	"	網
"	40	一輪器	环	11.6	7.2	2.6	糸切り底。板状正真、高	胎上に砂粒が多い。施成良好。茶風色。	"	
"	41	"	"	13.4	9.4	2.7	糸切り底	胎上に細砂を含み、施成良好。淡黄褐色。	"	
"	42	瓦質土器	火盆	—	—	—	外に張り出した脚を耐り付ける	胎上に砂粒を含み、施成良好。灰褐色。脚	"	
"	43	陶器	燃鉢	22.8	—	28.6	口縁部は折りかえして平底形成。外縁に「1」字の凹溝、口方に「へ」字縫きの下し口	裏地は淡灰色褐色。施成灰色釉。	"	字縫
"	44	二輪器	皿	—	8.0	(1.3)	器脚は薄い。	裏地に細砂粒含む。白色、灰色を帯びた白色。	SK07	原
"	45	陶器	虎	—	15.8	(4.5)	平底、器肉薄い。外縁に「1」字縫	裏地は細砂粒を含む。暗い灰色。施成灰褐色。	"	唐津焼、李朝に近い
"	46	"	鉢	—	14.8	(6.5)	平底。内底足込みに砂目	裏地に砂粒を含む。灰褐色。施成灰色釉。	"	唐津焼
"	48	白磁	皿	—	4.5	(2.1)	体部は周縁的に聞く	裏地に細砂粒を含む。灰褐色。青色を含む乳白色の釉。見込みは割れ。	SK08	
"	49	象付	瓶	—	3.8	(3.0)	輪高台、体底は丸味をもつが腰が無い。	裏地は高台に2条。見込みと体部下段に各1条。体部外面に不規の凹槽。	"	伊万里 1600年代
"	50	"	"	—	3.8	(4.7)	納高台、腰が無い。	高台から高台間に4条の凹槽。外面に不規の凹槽。	"	"
"	51	土器質	小皿	6.8	4.6	1.2~0.7	糸切り底、状状足底	胎土に砂粒を含み、施成灰。暗茶褐色。	SK09	灯明塗か
"	52	陶器	皿	—	—	—	口縁部内側先端に外反	裏地は淡灰褐色。精緻。暗褐色。	"	唐津系
"	53	土器質	环	11.6	5.2	2.0	糸切り底、体部の外反強	胎土に砂粒を含み、施成良好。淡灰褐色。	"	
"	54	"	"	14.6	8.6	—	体部は周縁的に聞く	胎土に砂粒を含み、施成良好。暗褐色。	"	大内系
11	55	陶器	碗	12.8	—	(5.2)	腰が高く、体縁は直線的	裏地は灰褐色。細砂粒を含む。灰褐色の黒入。	SK10	唐津焼
"	56	二輪器	高杯	—	—	(6.0)	腰部	胎土に砂粒多い。施成良好。淡灰褐色。	"	
"	57	陶器	燃鉢	—	—	—	体部分、内面に6本以上の下し口	裏地に細砂粒を含み、灰褐色。淡褐色。	"	近世系
"	58	"	皿	13.2	5.0	3.4	口縁部外反、内底と側付	胎土は暗褐色。施成灰褐色。	"	油津焼
"	59	土器質	小皿	7.0	5.2	1.7	糸切り底、板状足底	胎土は暗褐色。施成灰褐色。	SK12	
"	60	白磁	高口	9.0	—	(3.1)	器脚落い、体部に細砂	裏地は暗褐色。白色、青味を帯びた白色。	"	17C末~18C中
"	61	象付	瓶	9.8	—	(4.5)	器脚は薄い、体部は丸味をもつ	裏地は白色。細砂粒を含む。外部に刷毛又と花文。	"	伊万里 18C前~中
"	62	陶器	皿	9.0	—	(2.6)	口縁部はくの字形に外反、耳は欠損	裏地は發灰灰褐色。細砂粒を含む。透明釉。	"	宋代
"	63	象付	皿	—	—	—	絞部	裏地は灰褐色。精緻。見込みに花文。象付は灰色。	"	右田 1650~1790年代
"	64	陶器	瓶	—	(3.9)	(1.7)	腰高台、体底は直線的	裏地は灰褐色。細砂粒を含む。見込みに暗色。内底部ハゲ。	"	近世系か天目
"	65	"	蓄	12.8	—	(2.0)	口縁部部をつき上げる	裏地は灰褐色。精緻。透明釉。	"	肥前系 17C後~18C初
"	66	"	燃鉢	—	—	—	体部は玉瓶形、外向に突筋1条	裏地は茶褐色。砂粒を含む。精茶褐色。	"	唐津焼 18C
"	67	"	"	—	—	—	駆出片、内底の下し口は5本以上	裏地は灰褐色。砂粒を含む。暗茶褐色。	"	高配系 17C後~18C初

測定番号	測定場所	種類	基準	法量(cm)			形態的特徴	文様・施物・色調・素地等	出土遺物	備考	
				口径	底径	厚(高台径)					
11	68	陶器	壺	18.0	—	(3.7)	肩裏部口縁部で、底部は平底、肩が弧形	素地は淡灰褐色、細砂粒を含む。黒褐色、鉛色斑。	SK12	筑前瓦 18C	
13	70	土師器	小皿	6.8	4.8	1.35	赤切り底	胎土に砂粒多い。淡灰褐色。	SK13		
#	71	#	#	6.8	5.6	1.8	赤切り底	胎土上に砂粒を含み。焼成良好。淡灰褐色。	#		
#	72	白磁	碗	15.4	—	(2.2)	口縁部内反	素地は淡灰白色、細砂粒を含む。淡灰褐色。	SK15	白一蘭	
#	74	土司器	小皿	7.8	6.0	1.5	赤切り底	胎土上に細砂粒を含み。焼成良好。淡灰褐色。	SK16		
#	75	#	#	8.2	5.6	1.4	赤切り底、板状底	胎土に砂粒を含み。焼成良好。灰褐色。	#		
#	76	#	杯	11.8	—	6.5	3.2	赤切り底	胎土に砂粒を含み。焼成中軟。茶褐色。	#	
#	77	#	小皿	—	6.9	(1.0)	赤切り底	胎土に細砂粒を含み。焼成良好。淡灰褐色。	SK17		
#	78	#	#	—	6.5	(1.3)	赤切り底	胎土に砂粒を含み。焼成良好。茶褐色。	#		
#	79	須志器	環壺	10.0	—	(2.8)	内側にかえし	胎土に砂粒を含み。焼成良好。暗灰青色。	#		
#	80	土器	杯	—	8.0	(2.6)	赤切り底	胎土に細砂粒を含み。焼成良好。淡灰褐色。	#		
#	81	二脚質 三足	押鉢	34.4	—	(6.3)	体型は内側突出に開く。 口縁部膨大し、内面リコ ハウ、外因に張付有	胎土に砂粒を含み。焼成良好。	#		
#	82	土器	杯	—	8.2	(1.3)	赤切り底	胎土に精緻。焼成良好。淡茶色。	SK18		
#	83	#	#	—	—	—	赤切り底	胎土に1~2mmの見石を含む。焼成良好。淡黄褐色。	#		
#	84	茶碗	皿	—	(9.8)	(4.6)	高台は高く、内腹。外形 内凹	高台は隆起。焼成良好。淡灰茶色の白色地。 内凹は馬蹄形。胎土2~3枚。休部に1枚。	#	伊万山	
#	85	陶器	#	—	(6.0)	(3.6)	高台は低い。体部は直壁 の型く	高台に砂粒を含み。灰色。焼成良好。透明白。見込みに鉄鉢。	#	清瀬燒	
#	86	#	損鉢	—	—	—	体部膨大。内面に長いヨコ ハガ。トシ日は帽子日状 に乱れ	胎土に砂粒を含み。灰色。焼成良好。外側 に兩足器。内面は小豆色。	#	備前燒	
#	87	#	瓶	—	3.8	(1.5)	一日月高台。高台蓋付に 砂呑	高台は隆起。焼成良好。淡灰茶色。灰褐色 の透明白。かいらぎ。	#	唐津燒	
14	89	土器	小皿	8.0	5.4	1.3	赤切り底	胎土は精緻。焼成良好。茶褐色。	SK19		
#	90	須志質 三足	壺	—	—	—	外側に輪郭状引き	胎土に砂粒含み。焼成度。外向は暗灰色。 内面は淡褐色と黃褐色。	#		
#	91	瓦質土 器	火舟	—	—	6.7	平面形は長方形。四脚付 き。内因にヨココマヘテ。脚 外因のスミコマヘテ	胎土は精緻。焼成良好。黑色。	#		
#	93	土器	皿	7.5	6.4	1.2	赤切り底、板状底	胎土に砂粒を含み。焼成良好。茶褐色。	SK20		
#	94	#	#	6.8	4.4	1.3	赤切り底	胎土に細砂含み。精緻。内面深灰褐色。外 面灰褐色。	#		
#	95	#	#	9.6	7.8	1.1	赤切り底、底に懸付脚	胎土に砂粒含み。精緻。焼成度。内面灰茶 色。外周深灰褐色へこむ茶色。	#		
#	96	#	#	11.6	8.0	2.1	赤切り底	胎土は砂粒含み。精緻。焼成良好。内面灰 褐色。外周深灰褐色。底は黒色。	#		
#	97	#	#	12.0	6.6	2.5	赤切り底、底に懸付脚	胎土に細砂含み。粗い。焼成良好。外灰茶 色火。	#		
#	98	古器	鏡	—	7.0	(2.0)	萬字は丸味を持つ。底部 は弓形	底部は淡灰色。微輕に歪む。焼成良好。銀 色地。外周深灰褐色へこむ茶色。	#	明。鶴來窯	
#	99	磁器	#	11.6	—	(3.3)	端反り口縁。器壁薄い。	底部は明灰白色。精緻。焼成良好。内面透 明白。外周深灰褐色。底は黒色。	#		
#	100	茶碗	#	12.0	—	(4.7)	壓子碗	内側表面に朱漆をもつた 外反する。二次火を受け る。	素地白色。精緻。焼成良好。底に施された白 色釉。壓子は口縁部に1枚。外側に文様。	#	明。龍泉窯
#	101	雪器	#	15.8	—	(3.0)	口縁部は角張る。内面 リニアヒンハイ。	素地は微砂を含む。翠色を帯びた茶褐色地。	#	# #	
#	102	土質質 土器	擂钵	—	—	—	口縁部は角張る。内面 リニアヒンハイ。	胎土に砂粒を含み。焼成良好。淡茶色。 はる木半透	#		

体因数 番号	造物 番号	種類	寸 寸 寸 寸 寸			形態の特徴	文様・施點・色調・葉地等	出土 遺跡	備考
			口 径	底 径	高 さ (底台高)				
14	103	青磁	碗	—	—	体部片	裏地は灰褐色、開口部、内面再びた透明白釉。内外面に白色點上の象嵌。	SK29	高麗
"	104	"	瓶	—	—	体部片	裏地は灰褐色。内面は茶褐色、外側は灰綠色釉。外面に口沿部上と瓶口三の象嵌。	"	"
"	105	陶器	擂鉢	33.0	—	(4.7)	口盤部を上、下につまみ出す。内面の下し目は5本立て。	裏地に砂粒含み、灰褐色。内面は小豆色。外側は茶褐色へ小豆色。	備前燒瓦窯
"	106	口 瓶	新口	3.4	(1.0)	1.3	高台は無い。外面に条痕。	裏地は白灰褐色で、削輪、燒成良好、快活銀色。	伊万里 19C後水
"	107	陶器	口	—	(3.6)	(1.1)	割り出し高台。内底、界引に沙引脚。	裏地に茶褐色砂粒含み、燒成良好。暗灰褐色。	李坂 16C
17	109	土器器	皿	6.8	4.5	1.4	糸切り皿	胎土に砂粒含み、燒成良好。茶褐色。	SK21
"	110	"	"	8.6	5.4	1.0	糸切り皿、板状立脚	胎土に砂粒含み、燒成良好。茶褐色。	"
"	111	"	杯	10.6	7.2	2.2	糸切り皿	胎土に砂粒含み、燒成良好。内面明茶褐色、外側暗茶褐色。	"
"	112	"	"	12.6	9.2	2.4	糸切り皿、板状立脚、内面保付合	胎土に砂粒含み、燒成良好。内面明茶褐色、外側暗茶褐色。	"
"	113	"	"	7.8	12.0	3.0	糸切り皿	胎土に砂粒含み、燒成良好。内面茶褐色、外側暗茶褐色。	"
"	114	陶器	瓶	—	—	—	平底。胎壁が薄い。	裏地は小豆色と灰褐色。削輪。内面頭輪状、外側頭輪状。自然釉。	"
"	115	"	甕	23.5	—	(4.2)	口盤部には大きく外反、唇が無い。	裏地は大きな粒の砂粒含み、燒成良好。内面小豆色、外側小豆色。付着物多い。	高麗 海上より品
"	116	瓦筒土器	火盆	—	—	—	口盤部片	胎土に砂粒含み、燒成良好。茶褐色。体部は墨書き文のスタンプ。	"
"	119	土器	皿	7.4	8.0	1.5	糸切り皿、板状立脚	胎土は赤褐色。砂粒含み多い。燒成良好。	SK22
"	120	"	杯	12.1	8.4	2.6	糸切り皿	胎土は砂粒少ない。精緻。内面明茶褐色、外側暗茶褐色。燒成良好。	"
"	121	瓦筒土器	擂鉢	—	—	—	脚部片、外腹にタナハケ、内面の下し目は3本以上。	胎土は灰褐色。内面灰褐色、外側灰褐色。	"
"	122	陶器	瓶	—	—	—	割れ片	二口子。裏地頭輪状。内面は頭輪状。外側茶褐色。外腹灰褐色。	予頭輪状 腰掛沙器
16	126	土器	杯	12.4	7.8	2.3	糸切り皿	胎土に砂粒含み、燒成良好。茶褐色。内面に墨書き文と朱書き。	SK21 22 船岡上原 美濃系
"	127	陶器	皿	—	(5.7)	0.8	高台は低い	裏地は削輪含み、茶褐色。削成良好。黄褐色。高台内腹灰褐色。	"
"	128	白磁	"	20.0	—	(2.3)	口盤部外反し。器壁薄い	裏地は白茶色。燒成良好。灰色透明白釉。内面に墨書き文。	"
"	129	陶器	"	28.0	—	(4.0)	体部は丸足をもつ。内面は頭輪状。外腹は2口外反。	裏地は砂粒含み、茶褐色。燒成良好。灰褐色。	波津坂 15C 末~17C初
"	131	"	擂鉢	—	—	—	割れ片、内面に水引き痕、下し目は6本半	裏地は大きな粒の砂粒含み。内面は消灰色。外側は頭輪状。	備前燒
"	132	"	片口	18.0	—	(3.6)	口盤部は玉盤状	裏地に砂粒含み。淡茶色、白灰褐色。	上野燒 17C前半
"	133	土器	皿	—	4.6	(0.6)	糸切り皿	胎土は細砂粒多。内面燒火痕。外腹は灰褐色。燒成良好。	SK24
"	134	"	杯	—	4.5	(1.4)	糸切り皿	胎土に砂粒含み。精緻。灰褐色。燒成良好。	"
"	135	妻付	皿	8.8	—	(2.2)	裏地は器壁が厚い。体部内面灰褐色、外腹灰褐色。	高筋は淡白灰褐色。燒成良好。烧成色釉。胎土灰褐色。	明
"	136	青磁	皿	—	—	—	体部は内腹	裏地は淡白灰褐色。烧成良好。烧成色釉。胎土灰褐色。	高麗窯系
"	137	陶器	"	—	(4.4)	(3.5)	割り出し高台	裏地は淡白灰褐色。燒成良好。茶褐色。体部下位にテグス。	高麗天目
"	138	瓦筒土器	擂鉢	—	—	—	裏地片、内面にヨコハケ、下し目は3本以上。	胎土は淡灰褐色。砂粒を含み、燒成良好。内面は灰褐色。外腹灰褐色。	"
"	139	青磁	水注	—	—	—	水注の把手	裏地は青茶褐色。精緻。内外面に天目色。	"
"	140	"	擂鉢	—	—	—	口盤部は器壁に立つ内面に割れいヨコハケ	裏地は砂粒含み多い。燒成良好。暗灰褐色。	備前燒瓦器

Tab. 2 第68次調査遺物一覧表 ② 井戸出土遺物

横四番号	遺物番号	種類	基盤	法量(cm)			形態の特徴	文部・地質・色調・質地等	出土遺物	備考
				高	幅	厚				
23	1	陶器 瓶	—	—	2.3	(1.1)	体部は強く凹く	表面は淡灰白色で、輪郭、淡秋茶色地。高台部分は黒褐色、長辺に筋が付着。	S001 井戸	
#	2	象牙 破	—	—	—	—	体部片	表面は灰白色で、輪郭、乳白色地。足付は藍色で、鳥文(風呂文)。	# 肥前 18C後 ～19C前	
#	3	青磁 瓶	—	—	4.5	(3.2)	体部は強く凹く、輪ノ目	表面は淡灰白色で、輪郭地を含み、淡灰白色。側面文を内外面に有す。内底見込みに花文。	同上	
#	4	陶器 片コ	14.7	—	—	—	玉縁に縁、体部の墨折無い	断面上に細灰白色で、砂粒を含む。淡茶色地。	肥前 17C	
#	5	々 瓷片	10.0	—	—	—	足付有り、体部は強く凹く、内面に2本並の下し口	断面上に淡灰白色、輪郭。外表面の一部に藍灰色地。	小石原 17 C後～18C前	
23	11	土器器 盆	—	7.8	5.5	1.2	系切り底。底部が厚い	断面上に新砂粒を含み、底成はやや軟、淡灰白色。	S002 井戸	底うわ
#	12	々	—	8.6	6.3	1.5	系切り底	断面上に細砂粒を含み、焼成良好。淡灰黄色。	#	
#	13	々	—	9.0	8.6	1.0	系切り底。体部は丸味をもつ	断面上に砂粒多い、焼成良好。淡茶灰色。	#	
#	14	々	—	8.8	8.0	1.3	系切り底。裏面出版、体部丸味をもつ	断面上に細砂粒多い。焼成は軟、茶灰色。	#	
#	15	々	—	8.8	8.6	1.8	系切り底。体部は丸味をもつ	断面上に細砂粒を含む。焼成はやや軟、灰褐色。	#	
#	16	々	—	9.4	8.0	1.8	系切り底。底部端部にヘタケズギ	断面上に2組大の移行を含み、粗い。焼成度好。淡灰褐色。	#	
#	17	々	—	10.7	8.0	1.8	系切り底	断面上に砂粒を少し含む。焼成はやや軟、淡灰褐色。	#	
#	18	々	—	—	9.7	(0.9)	系切り底	断面上に砂粒を多く含み、焼成良好。淡褐色。	#	
#	19	々	—	—	9.0	2.6	系切り底	断面上に砂粒を多く含み、焼成良好。茶灰色。	#	
#	20	々	—	—	6.4	(1.5)	系切り底。横状圧痕	断面上に砂粒を含み、焼成良好。茶灰色。	#	
#	21	陶器 壺	—	10.6	7.0	2.2	高台無い。底部端部に丸い	断面上は淡灰白色で、砂粒合み、肩の、断面茶褐色。足込みは無ハザ、背付に隙ガレ。1条の比較。	鹿戸・美濃系	
#	22	々	—	—	14.9	(2.5)	両端の口縁部	実地は茶褐色で、輪郭。淡灰白色。	鹿津丸 1650	
#	23	々	—	—	—	(2.5)	口縁部は内側弧張り形状	実地は淡茶色で、砂粒を含む。淡灰茶色地。	初期油滴 16C後～17C	
#	24	々	—	—	8.0	(1.7)	伝呪文口盆、蓋付に砂目	実地は淡灰褐色で、透明感。内底に砂粒。	経済津	
#	25	々	—	—	5.0	(2.4)	伝呪文口盆 内底に船底土印	実地は淡灰褐色で、輪郭地を含む。淡茶褐色。底面下位は白。	赤堀丸 16C 木～17C前	
#	26	々	—	—	15.8	—	体部に丸味をもつ。口縁端部は丸い	実地は灰褐色で、輪郭。輪砂粒合む。淡灰褐色の輪。	鹿津丸	
#	27	々	—	—	15.0	—	器底が圓く、口縁部外反	断面上は淡褐色で輪郭。断面輪。	内田翠丸 17C中～末	
#	28	白陶 壺	—	—	—	—	口縁部は内側弧張りに外反	実地は白灰白色で輪郭。透明輪。	柄木	
#	29	白陶 壺	—	—	16.0	(2.4)	体部は内側弧張りに開く	実地は灰褐色で、輪郭。透明輪。	肥前 17C代	
#	30	白陶 壺	—	—	—	—	器壁が薄い。	実地は白灰白色で、輪郭。透明輪。口縁部外向に丸。足込みに2条の西程。	新規	
#	31	染付 壺	—	—	18.0	—	(1.8) 器底低い。口縁部は外反	断面上は淡白色で、輪郭。透明輪。口縁部外向に丸。足込みに2条の西程。	肥前 17C前	
#	32	陶器 壺	—	—	9.5	(0.7)	高台に断面二角形	実地は灰褐色で、輪郭。白～淡茶色地。	肥前 17Cまで	
#	33	象牙 付	—	—	—	—	山台は低く、内側気泡	実地は淡灰白色で、輪郭。背付を均びた透明輪。足込みに2本の輪縁。象牙付は藍色。	肥前 17C前	
#	34	々 小舟	7.0	—	—	(4.2)	増段り形	断面上は灰白色で、輪郭。半透明輪。外側に墨花文。	#	
#	35	青磁 瓶	—	—	—	—	L型窓口は小さく外反する	実地は灰褐色で、輪郭。淡灰褐色地。外側に輪郭。内底に1片割り文。	鹿津丸	
#	36	口磁 フラ	—	—	5.0	(1.7)	數口台	実地は白灰白色で、輪郭。淡灰褐色地。	#	
#	37	半漆器 フラ	—	—	5.4	(2.8)	体部は丸い。蓋付に砂目	実地は灰白色で、輪郭。淡灰褐色地。外側は輪郭。	肥前 17C前	

遺物番号	種類	器種	性 量 (cm)			形態の特徴	文様・施釉・色調・裏地等	出土	備考	
			口 径	底 径	高 度					
22 38	白版	瓶	—	4.0	(3.4)	高台は高く細い 体部は筒体円	裏地は乳白色、精緻。青朱をあわした透底釉。 外底部は施釉。	SE02 蓋り方	肥前 17C後	
23 39	片 磁	香炉	13.0	—	(2.0)	口部器はくの字形	裏地は乳白色、施釉。底足灰色釉、内面無 施釉。	—	17C後	
24 40	青白磁	瓶	—	5.0	(1.1)	高台は低い、壁間に横筋、 内面に筋土目	裏地は乳白色で、精緻。淡青色釉、青入。 外底無施釉。	肥前產 17C後		
25 41	青 磁	瓶	12.0	—	(4.7)	体部は下端形	裏地は淡灰褐色、細砂粒を含み、施釉。透 底で、外底一辺に施釉物。	肥前產17C後		
26 42	—	—	—	4.8	(1.5)	高台は低い	裏地は淡灰褐色、堆の紋を含む、施天地。	上野美 濃口 (1500~ 1614年)		
27 43	—	—	—	3.6	(2.4)	高台はケツリ出し	裏地は灰褐色で、細砂粒を含む、黑色釉を 施す。施釉部は削茶褐色。	大皿		
28 44	—	—	—	14.0	—	(4.5)	口部器は内凹	裏地は灰褐色で、細砂粒を含む、茶色釉。	御江天目 16C	
29 45	—	—	—	27.6	—	(5.7)	口部は近くの半形に凸 通	裏地は小豆色で、精緻。外側は暗灰褐色。	龍田燒 V 須 通	
30 46	—	—	—	—	—	測量記、内底に 5 本木 の下に置	裏地は施釉。外側は暗灰褐色。内底は茶褐 色。	櫻井燒		
31 47	—	—	—	—	—	口部器は内凹、 内底の下し日は 8 本木置、否 ち本年位	裏地に施釉を含む。淡茶褐色で、細い茶色。	奥津燒		
32 48	—	—	—	—	—	脚折口、内底の下し日は 8 本木置、否 ち本年位	裏地に施釉を含む。茶褐色で、青釉は小豆 色。	—		
33 49	—	—	—	—	—	口部器の内側をつまみ山 にして、平底面を形成す	裏地に暗灰褐色で、砂粒を含む。細い小豆 色。	—		
34 50	灰質 土器	鉢	—	—	—	玉筋状縦線で、内側する	裏地に砂粒を含み、焼成はやや軟。淡褐色。	東屋系		
35 51	灰質 土器	鉢	—	—	—	口部器は内凹、外側に 前頭部は内凹、内底はヨコナ ド、下部は 3 本以上	裏地に砂粒を含み、焼成良好。灰灰褐色。	—		
36 52	土質 質 土器	鉢	—	17.5	(3.4)	外曲口はテラハケ後ケナ、 内側が直	裏地は砂粒多い。焼成はやや軟。	—		
37 53	青 磁	壺	—	14.0	(5.0)	底部はくびれ、体部は直 基部に窪く	裏地は小豆色で、施釉。外側は青い小豆色 で、内面は茶褐色。底部に窓。	九郎		
38 54	—	—	—	15.2	(3.9)	体部は直基部に窪く	裏地に砂粒を含む。焼成はやや軟。淡褐色。	吉原系		
39 55	灰質 質 土器	並	—	—	—	外面は身子ヨリ突き張 ナ、内側は身口引き風	裏地に砂粒を含み、焼成軟。灰褐色。	足野		
40 56	—	—	—	13.1	—	(2.4)	口部器は身口し、肥厚する	裏地に砂粒を含み、焼成軟。暗灰色。	—	
41 57	陶 器	—	—	24.0	—	(4.2)	口部器は玉筋状で、半型 型を形成、身心の印き底	裏地は暗灰褐色で、砂粒を含む。底部分は茶 褐色、肩部は小豆色。	唐津系	
42 58	灰質 土器	火鉢	—	30.0	(4.5)	体部は 1 条の火鉢の 内面カタ目	裏地に砂粒を含む。内面は灰褐色、外 面は茶褐色。焼成やや軟。	—		
43 59	—	—	—	29.6	—	(4.8)	体部は丸底をもち、口部 器は手形	裏地に砂粒を含む。茶褐色。外側に口脇部 に「口」字の跡。	—	
44 60	十輪器	瓶	7.0	5.0	1.4	各切り底	裏地は淡茶褐色で、砂粒を含み、焼成良好。淡 茶色。	SE02 万葉		
45 61	—	—	12.0	8.4	2.1	各切り底	裏地は淡茶褐色で、砂粒を含み、外底は淡 茶色、内面は淡灰色。	—		
46 62	—	—	13.0	6.3	3.2	糸切り底、体部は直縫的 に開く	裏地は暗褐色、焼成良好。赤朱をあわした露茶色。	—		
47 63	白 磁	瓶	20.0	—	(1.8)	脚部は大きい、外反	裏地は白色で、精緻。乳白色。	17C後 四產		
48 64	紫 付	香炉	19.0	—	(1.9)	体部は筒形で、口部器は 内側に折れる	体部外側に、口脇による輪郭、底地は灰白 色、内底は直底。	—		
49 65	白 磁	瓶	—	19.0	—	(4.4)	体部は弧形で、口部器は 内側に折れる	裏地は灰白色で、精緻。透明釉。口脇外 部に露茶色。	櫻井小石承 17C後	
50 66	青 磁	瓶	10.5	5.0	7.2	体部は丸底をもち、腹高 台	裏地は淡茶褐色で、精緻。透明釉。外底 下位に 2 本の脚部。	京燒 17C後		
51 67	紫 付	—	—	3.2	(3.6)	体部は丸底をもつ。	裏地は白色で、底沙粒を含む。淡茶色。	17C後		
52 68	青 磁	瓶	—	7.5	3.0	4.0	体部は下端形 高台は低い	裏地は淡茶褐色で、底沙粒を含む。淡茶色。	櫻井燒 16C~17C初	

標 記 符 号	性 別 年 齢	法 量 (cm)	口 徑 (底 (台 盤)) 及 其 存 在	形態の特徴	文様・施飾・色調・素地等	出土 遺物	備 考		
25	69	男	31.3	一 (6.0)	口盤部外正を肥厚させ、直口とする	地には青茶褐色、細砂粒を含む。口盤部外周に小豆色条、内面に6本以上の單位の下し口。	SE02 古墳時代 17C前		
#	70	〃	11.8	(4.1)	底部の底盤部は、少し口を広げて、口部に9本程度の、体部外正は底盤部正直	粘土は暗赤色で、細砂粒を含む。精緻。	# 縫合焼		
#	71	〃	—	—	平底で、内面の下し口は8本以上。	粘土は暗赤色で、精緻、焼成良好。外面はくすんだ茶色、内面はくすり透明白。	#		
#	72	〃	—	—	口盤部の底面には、舟形状に肥厚し、内面の下し口は4本以上の底盤部。	地面上に隙縫を含み、焼成良好。淡褐色へ褐色。	#		
#	73	瓦質上 器	無算	— (17.6) (3.3)	口盤部はタテハケ、内面はメタハケ、下し口は2本以上との半位。	粘土は暗赤色で、蒸褐色、焼成良好。	#		
#	74	〃	鉢	—	口盤部は肥厚し、内面はヨコハケ。	粘土は暗赤で、焼成良好。灰茶褐色。	# 内面にヶ目。		
#	75	〃	火盆	—	—	口盤部底は丸をもつ	粘土に砂粒を含み、焼成良好。淡茶褐色。		
#	76	〃	大甕	—	—	鉢形片、外面ヨコハケ、内面丸いタテナデ。	粘土に砂粒を含み、焼成良好。淡茶褐色。		
27	83	上器類	皿	7.8	6.0	1.5	手切り底	粘土に細砂粒を含み、焼成良好。淡茶褐色。	SE03 井筒
#	84	〃	—	6.9	—	1.2	手切り底	粘土に細砂粒を含み、焼成良好。明茶褐色。	SE03 撫り方
#	85	〃	—	8.2	6.0	1.3	手切り底	粘土に隙縫を含み、焼成良好。淡褐色。	#
#	86	白 磁	—	—	7.0 (0.5)	平底	地には粗砂粒を含み、焼成良好。淡乳褐色。	# 深井中工船塗	
#	87	十尋器	杯	11.9	—	2.1	底座を欠く	粘土に細砂粒を含み、焼成良好。淡褐色。	SE03 井筒
#	88	〃	—	—	9.0 (1.7)	手切り底	粘土に砂粒を含み、焼成良好。淡褐色。	#	
#	89	陶 器	皿	—	6.3 (2.6)	底盤は四角形に凹む。足部に斜めに立てる。底座に漆器が残る。	粘土に粗砂粒を含み、焼成良好。淡褐色。	SE03 西津燒	
#	90	第 什	碗	8.7	—	(2.2)	端及び 底盤が残る。	粘土に粗砂粒を含み、焼成良好。淡褐色。	SE03 井筒
#	91	陶 器	—	—	5.0 (1.4)	高台は低い。足部はケズ	地には淡茶褐色で、細砂粒を含み、焼成良好。淡褐色。	SE03 上野板 17C前	
#	92	〃	—	—	5.9 (1.2)	高台の断面に舟形形見台に漆器が残る。足部に漆器が残る。	地には淡茶褐色で、細砂粒を含み、焼成良好。淡褐色。	SE03 李朝	
#	93	〃	皿	25.5	(2.5)	内面の口縁部	地には灰茶色で、砂粒多い。灰茶褐色。	# 悲忠院 1600~1630年	
#	94	〃	蓋	—	26.2 (2.5)	底座下部が底盤。	地には暗灰色で、縦縫、縦黄色。	# 無款南	
#	95	〃	小片	—	—	内面に青茶色のさき痕	地には灰茶色。	SE03 李朝	
#	96	〃	—	—	—	底盤に白いさき痕	地には暗灰色で、焼成良好。内面に暗茶色。	#	
#	97	瓦質上 器	火盆	12.6	10.6	5.4	如伽は瓦質。3脚付	地には細砂粒を含み、焼成良好。淡褐色。	#
#	98	〃	黑鉢	—	—	—	口盤部は底に1.5cm、底盤外側に舟形底盤、内面ヨコハケ、3本以上の單位の下し口。	粘土は細砂粒を含み、焼成良好。内面は暗茶褐色。外面は茶褐色。	#
#	99	〃	—	30.0	—	(4.0)	口盤部内側に三角突起、下し口は5本单位。	粘土は砂粒を含み、焼成良好。細灰色。	#
#	100	陶 器	—	33.6	(7.4)	口盤部は外側に肥厚し、1本の突起、内面の下し口は10本单位。	粘土は暗茶褐色で、砂粒を含む。口盤部外周は濃茶褐色。	SE03 西津燒 井筒 17C前	
#	101	〃	甕	25.0	—	(6.5)	口盤部はヨコハケ、内面は水引き状。	粘土に砂粒を含み、褐色。焼成良好。外面に小豆色。	SE03 無款燒 撫り方
29	108	上器類	皿	7.0	6.0	1.4	手切り底、内面に漆器が残る。	粘土に粗砂粒を少し含み、焼成良好。淡茶褐色。	SE04 撫り方
#	109	〃	—	8.0	—	1.5	手切り底。	粘土に細砂粒を含み、焼成良好。淡茶褐色。	#
#	110	〃	杯	11.0	6.6	2.2	手切り底。	粘土は暗褐色。焼成良好。淡褐色。	#
#	111	〃	—	11.0	—	(2.3)	口盤部が	SE04 井筒	

地図番号	種類	面積	法面 (cm)			形態の特徴	文様・風貌・色調・墨跡等	出土遺物	備考		
			口	高	基						
29	112	上断面	仄	12.0	7.3	2.7	糸切り底 側面下部へラケヅリ	地土に砂粒を含み、焼成良好。灰褐色。	SE04		
"	113	"	"	12.0	—	2.3	底面を仄く、内面に横付 溝	地面上に細砂粒含み、焼成良好。灰褐色。	"		
"	114	"	"	13.0	—	3.0	糸切り底	地土に砂粒を含み、焼成良好。灰褐色。	"		
"	115	青 磨	削	15.0	—	—	口縁片	裏地は灰褐色で、稍暗。板灰色調。外向に 底付。	SE04 井筒	中間層泉窯系	
"	116	白 磨	"	—	4.0	(1.2)	高台は低い。一日口高台	裏地は細砂粒を含み、焼成良好。灰褐色。	"	今朝	
"	117	"	"	—	7.0	(0.7)	高台は低い。内面の足込 と底面に目皿	裏地は白灰色。青色帯びた透明白。	"	李朝 16C後	
"	118	金 村	仄	—	—	(0.8)	高台は仄く内縮すると	裏地は乳白色で、構造。白色調。高台間に 目皿の隠れ。足込みに目皿。	"	明	
"	119	陶 器	鏡	—	4.6	(1.3)	高台は直角 底付み付件に目皿	裏地は淡褐色。細砂粒少ないと。内面は灰褐色。	SE04	唐唐船	
"	120	"	"	—	4.2	(2.6)	高台は低い。裏部の脇が 深い。	裏地は細砂粒を含む。灰褐色。灰白色調。 足込みに同心式の模様。	SE04 井筒	上野・高麗系 井筒 (1596~ 1614年)	
"	121	"	皿	—	5.9	(1.5)	高台部へラケヅリ	裏地は淡火茶色で、細砂粒を含む。内面に 灰黄色。	SE04	唐唐船	
"	122	"	"	14.0	—	—	口縁部と裏部に鋭い凹 凸。低い所と突出高台。 見込みに附子脚	本体は細砂粒を含み、灰茶色。灰褐色。	SE04 井筒	唐唐船 16C 水~ITC前	
"	123	"	"	—	—	5.0	裏付に目皿。高台は仄 い。高台部は茶色。	裏地は灰褐色で、暗緑。灰褐色黄色。	SE04	唐唐船	
"	124	"	片口	16.4	—	—	口縁部は向外反し、丸く開 け。底付は全体	裏地は暗褐色で、構造。乳白色調。	SE04 埋り方	唐唐船 IEC 水~ITC前	
"	125	"	"	—	—	(3.5)	口縫部は反反。丸穴をもつ	裏地は淡茶褐色。細砂粒を含む。灰褐色。	SE04 井筒	翁舟又は 上野朝か	
"	126	"	"	—	—	—	口縫部は縦状に厚化	裏地は砂粒多い。暗灰色。表面は小豆色。	SE04 埋り方	内・壁空き	
"	127	"	"	—	—	—	内面は斜め心円の叩き底 裏地は仄く	裏地は細砂粒を含み。暗褐色。外皮は小豆色。 内面は茶褐色。	"		
"	128	"	不明	—	—	—	外面は平行引き裏。内面 は内心内太のさき張	裏地は細砂粒含み。白色。	"		
"	129	土器 土器	削鉢	—	—	—	レジ痕部は丸突をもつ 内面にコハク。	裏土は形態を含み、焼成良好。外面は淡褐色。 内面は灰褐色。	SE04 井筒		
"	130	瓦 瓦	—"	—	—	—	コハク部の内面に二角突出 内面コハク。下し口は	裏土に細砂粒を含み。焼成良好。灰褐色。	"		
"	131	"	火舟	—	—	—	口縫部は斜形。外皮に1 条の横突と1条の條状。 内面コハク	裏土に細砂粒を含み。焼成良好。灰褐色。	SE04 埋り方		
"	132	"	"	—	—	—	口縫部は仄くの字形で深口 する。内面コハク	裏土に砂粒含み。焼成良好。灰褐色。	SE04 井筒		
"	133	"	"	—	—	—	レジ痕部は厚化。内面はコ ハク。外皮に1条の条状。	裏土は暗褐色。燒成良好。灰褐色。外向に 花文のスタンプ。	SE04 埋り方		
30	134	土器 土器	堆壙	—	—	—	体部付	裏土は暗褐色で、砂粒を含む。外向は青 色ガラス質化。	"		
33	145	土器	杯	10.0	—	(2.3)	糸切り底	裏土は細砂粒含み。焼成良好。灰褐色。	SE04		
"	146	"	"	—	9.0	(1.7)	糸切り底。板状底	裏土は砂粒含み。焼成良好。灰褐色。	"		
"	147	"	"	—	5.0	(1.1)	底面と口徑の辺が大きい 底付手	裏土は細砂粒含み。焼成良好。灰褐色。	"		
"	148	青白磁	瓶	—	4.1	(1.4)	輪高台、砂が化着	裏地は乳白色で、精良。燒成良好。青色調。	SE04 井筒	國庫	
"	149	陶 器	"	—	—	(4.0)	体部は丸突をもつ	裏地に細砂粒を含み。暗褐色。均褐色或灰褐色。	SE04		
"	150	"	"	—	5.5	(4.8)	三月月付で、内面に砂 付有。口台は複形	裏地に鉛線で、燒成褐色。通常に近い。另 口色。	SE04 埋り方	唐唐船	
"	151	"	皿	13.0	—	—	波状口盤	裏地は淡黃茶色で、やや粗い。黄褐色。	SE04	高麗 16C末~17C	
"	152	"	片口	18.0	—	—	(5.3)	口縁部内傾し、外面を記 せます	裏地は細砂粒を含み。褐色。表面は粉茶褐色。	SE04 埋り方	高麗 17C後
"	153	"	埋鉢	—	—	—	底部は上止形。内面は8 本筋の下し口は扇子	裏地は細砂粒を含み。茶褐色。附い亞色。	"		

番号	種類	形態	法量 (ca)			形態の特徴	文様・施物・色調・底地等	出土地	備考		
			底径	高さ	現在高						
33	154	陶器	寺	27.0	—	(3.1)	口縁部は外に折れ、器壁 高い、口縁部半周面に目面	底地は茶灰褐色で、施款。碧玉茶色釉。	SE12	興津系か	
44	155	〃	瓶鉢	—	—	(4.4)	口縁部は内傾し、丁字形	素地に砂粒を含み、碧玉色。表面は油光質。	〃	油光初期	
45	156	五瓣土 器	皿	—	—	—	内面ヨコハナ、口縁部内 面に突起、欠損	底土に砂粒を含み、施成良好。晴い灰青 色。	〃	大内系	
46	157	〃	〃	28.0	—	(4.8)	口縁部はくちびり形、器底 は丸形。内面ヨコハナ、3本以上 の目面	胎土に砂粒を含み、燒成良好。内面灰青色、外面 透明灰白色。	〃	須崎瓦窯の 模倣	
47	158	〃	〃	—	—	—	内面はヨコハナ、本台半 分の上口。上位はマツノ 内縫部は肥厚し、丸味を もつ。内面にヨコハナ	胎土に砂粒を含み、燒成良好。内面は設 目面。外側に深緑色。	〃	大内系	
48	159	〃	火舟	38.0	—	(3.6)	口縫部は肥厚し、丸味を もつ。内面にヨコハナ	胎土に砂粒を含み、燒成良好。外側 は透明灰白色。全体青灰色。	SE12	掘り方	
35	167	土師器	皿	6.2	4.2	1.3	手切り底。口縁部に深 谷	胎土に砂粒を含み、燒成良好。淡茶褐色。	SE13		
49	168	〃	〃	7.5	5.6	1.5	手切り底。口縁部内傾	胎土に砂粒を含み、燒成良好。茶褐色。	〃		
50	169	〃	〃	9.2	7.6	1.2	手切り底	胎土に砂粒を含み、燒成良好。茶褐色。	〃		
51	170	〃	杯	12.6	7.6	2.3	手切り底。器形は藍縁的 に近く	胎土に砂粒を含み、燒成良好。淡灰褐色。	〃		
52	171	青磁	碗	—	5.2	(1.9)	施釉高台	胎土は灰青色。胎土に砂粒を含む。薄灰褐色は 山形で施す。質入。	〃		
53	172	灰付	皿	10.2	4.0	3.0	底盤で強い追削、高付に 砂目	胎土は白灰色。輪郭、透明白色點、瓦面の 草花文。外縁高台間に1条、高台間に2条、 底盤下部に1条の施款。	〃	肥前	
54	173	〃	碗	10.0	3.8	5.8	体部は平底形	胎土は灰白色。輪郭、透明白色點、瓦面の 草花文。外縁高台間に1条、高台間に2条、 底盤下部に1条の施款。	〃	〃	
55	174	〃	〃	—	4.4	(3.3)	体部は窓透形 高台は高い	胎土は灰白色。輪郭、透明白色點、瓦面の 草花文。外縁高台間に1条の施款。	〃		
56	175	陶器	甕	—	—	—	内面は青釉叩き施 加焼成	胎土に砂粒を含み、燒成良好。外付は細小 の施款。	〃	須津瓦?	
57	176	七脚灰 土器	盆鉢	—	—	—	脚付	胎土に砂粒を多く含み、燒成はやや軟。茶 褐色。	〃		
58	177	土師器	皿	7.0	5.6	1.2	手切り底	胎土に砂粒を含み、燒成良好。明茶褐色。	SE14		
59	178	白磁	瓶	—	—	—	端反り口縁部 器壁が厚い	胎地は乳白色。粘膜、灰色を帯びた白色釉。	〃	中国 18C~17C初	
60	179	青磁	〃	—	—	—	端反り口縁部	胎地は灰白色。暗緑。透明白色釉。點ダメ。 内面は薄花文。	SE14	須津瓦?	
61	180	〃	〃	—	—	—	口縁部片	胎地は灰白色。暗緑。糊状色地。外面に燒 成灰。	SE14		
62	181	〃	〃	—	8.0	(1.5)	底部片	胎地は灰褐色、瓦色、糊狀、天白色釉。外 面に合掌形と新体形足込みに1条の施款。 質入。	〃	須津瓦窯系 18C末~19C初	
63	182	灰付	〃	—	6.8	(2.7)	高台はやや内傾	胎地は乳白色、瓦色、糊狀、天白色釉。外 面に合掌形と新体形足込みに1条の施款。 質入。	〃	肥前 18C中~	
64	183	〃	〃	12.0	—	4.2	体部は下深作	胎地は淡褐色、糊狀。茶褐色釉。	SE14	肥前? 18C初	
65	184	陶器	皿	—	6.0	(3.7)	体部は球体、高台は低い	胎地は淡褐色、糊狀。茶褐色釉。	SE14	肥前? 18C初	
66	185	〃	〃	—	3.7	(2.0)	高台は低い	胎地は淡褐色。糊狀。透明白色釉。輪郭に1 条の施款。外縁下校と内縁部は墨跡。	SE14	須津瓦 18C代	
67	186	〃	〃	—	5.2	(1.6)	高台は極く低い。やや外縁	胎地は淡褐色。瓦色、糊狀、透明白色。外 縁部に下校。質入。	〃	須津瓦? 17C後	
68	187	采	勺	—	—	—	体部は内形	高台は極く低い。見込み に動く目	SE14	須津瓦? 17C後~18C前	
69	188	陶器	瓶	—	5.9	(3.0)	高台は低く低い。見込み に動く目	胎地は淡灰褐色。糊狀。燒成良好。淡灰褐色 釉。	〃	須津瓦?	
70	189	采	勺	—	10.9	—	口縁部片	胎地は淡褐色。糊狀。燒成良好。淡灰褐色 釉。	SE14	須津瓦 18C前~中	
71	190	采	勺	皿	—	6.0	—	高台は細く、低い	胎地は乳白色、糊狀。水色を帯びた透明白 色。足込みに2条。高台間に2条。腹に1条の 施款。質入。	〃	明 16C末
72	191	〃	〃	—	7.0	(1.4)	高台は低く、内縁	胎地は乳白色。糊狀。乳白色釉。高台間に 1条の施款。内縁に裏葉の芋花文。	〃	伊万里	
36	192	〃	〃	14.4	9.0	3.9	蛇ノ目葉状で、端部は 細く、尖る	胎地は乳白色、糊狀。透明白色。内縁に文様。 高台間に1条。	SE14	肥前 18C中	

測定番号	測定番号	種類	等級	体 量 (kg)			形態の特徴	文様・跡印・色調・斑地等	出土 状況	備 考
				口 径	底 径	厚 度 (黄白灰)				
36	153	第 代	Ⅲ	—	6.8	(0.9)	高台は灰く、内側	裏地は褐色、稍暗、乳灰色の塊、内面に文様、藍色。	SB.4 埋り方 1630~1650年	肥前
#	194	陶 器	#	—	7.5	(1.8)	底面の軽度汚い	裏地は灰褐色、稍暗、乳白色の塊、外側に土色の斑点がある。足込みに縦溝字。	SB14 埋没地	—
#	195	#	片口	11.0	—	(4.0)	口唇部は土縛状に膨厚	裏地は褐色、暗紅茶色、稍青灰色。	"	肥前
#	196	#	束腰	7.3	7.8	8.0	环状は厚化、内部に透洞	裏地は細粒状を含み、褐鐵、燒成良好。茶色。	SB14 埋り方 16C代	福岡 18C
#	197	#	片口	—	—	—	口唇部は土縛状に膨厚	裏地は細かく、暗火灰色。口唇部は暗茶色。	SB14 埋没地と 16C代、中國だと 18C代	—
#	198	青 瓷	青灰	13.0	—	(2.1)	Y字状口縁	裏地は乳白色、褐鐵、淡綠色點、質入。	SB14 埋り方 16C代~18C初	—
#	199	陶 器	西鉢	25.0	—	(7.0)	口盤部は工程、内面ココナ	裏地は浮粒含み、燒成やや良。茶褐色、黃色を帯びた暗茶色。	"	南関東 17C 後~18C初
#	200	十輪蓋	塔塔	19.2	17.0	4.1	口盤部は丸突をもつ 体部は丸突	胎土は暗褐色多い。燒成良好。淡茶褐色。	SB14 埋り方	肥前だと 17C 代、中國だと 18C代
#	201	瓦器上	火鉢	?	—	—	口盤部は直口、 内外面ココナ	胎土は細めを含み、燒成良好。暗火青色。	"	—
#	202	#	火鉢	—	—	—	口盤部は肥厚 口面ココナ	胎土は細粒含み、燒成良好。口唇部 半圓面にY字状切出。	SB14	—
#	203	耐 磁	瓶詰	—	—	—	口唇部で二重口、 内面ココナ	裏地は細粒含み、燒成良好。茶褐色。	"	国産
#	204	土瓶貯	七輪	20.8	—	(6.0)	口唇部で二重口、 内面ココナ	裏地は細粒含み、燒成良好。茶褐色。	"	新物
#	205	豆葉二 層鉢	—	—	—	—	外側均塗装造、内面ココナ ハケ、下し目 6本以上	胎土に砂粒含み、燒成良好、灰色。	SB14 埋り方	—
#	206	土瓶貯	七輪	32.0	—	(5.5)	口盤部膨脹、腹は二重構 造、内面ココナ	胎土に砂粒含み、燒成良好、茶褐色。内面 白色點。	SP15 埋り方	淡青色
39	213	上野器	Ⅲ	8.7	8.0	1.6	無孔口底	胎土に砂粒含み、燒成良好。灰褐色。	"	—
#	214	#	#	9.0	8.0	1.8	無孔口底	胎土上に長石含み、燒成良好、茶褐色。	SB15 埋り方	—
#	215	#	#	9.2	8.0	1.3	糸切り縫、板状江戻	胎土は砂粒少ない。燒成良好。灰褐色。	SB15 埋り方	—
#	216	#	#	9.7	7.6	1.4	糸切り縫、板状江戻	胎土は砂粒少ない。燒成良好。灰褐色。	SB15 埋り方	—
#	217	#	#	10.0	8.3	0.9	糸切り縫、板状江戻	胎土に砂粒含み、燒成良好。暗褐色土色。	"	—
#	218	#	不	11.0	7.4	2.8	糸切り底、跡つけ	胎土に砂粒含み、燒成良好。暗火青色。	"	—
#	219	#	#	12.0	7.0	2.7	糸切り底	胎土に砂粒含み、燒成やや良。褐色。	"	—
#	220	#	#	12.4	7.6	2.7	糸切り底、 体部は丸突をもつ	胎土に砂粒含み、燒成良好。灰褐色。	"	—
#	221	#	#	12.8	7.0	3.2	糸切り底	胎土は細粒含み、燒成良。深灰褐色。	"	—
#	222	#	#	12.6	7.6	3.0	糸切り底	胎土は細粒含み、燒成良。灰褐色。	"	—
#	223	#	#	13.0	7.4	2.5	糸切り底	胎土は1mm弱後の砂粒含み、燒成良好。灰褐色。	SB15 井戸	—
#	224	#	#	13.6	9.0	2.9	糸切り底	胎土に細粒含み、燒成良好。灰褐色。	SB15	—
#	225	#	#	14.0	7.8	3.2	糸切り底、板状底、内 面に朱の付着	胎土は細粒含み、燒成良。灰褐色。	SB15 埋り方	—
#	226	青 瓷	皿	11.0	(4.0)	3.7	裏地は丸突、 外沿部に白膜	表面に砂粒含み、灰色。燒成良好。暗灰色。	"	青磁
#	227	豆葉二 層	大合	—	—	—	口盤部は平判面を作る、外 面に朱のスタンプ	胎土に砂粒含み、燒成良好。黑色。	"	—
#	228	十輪器	器台	—	—	(3.5)	脚柱付	胎土上に砂粒含み、燒成良。暗褐色土色。	"	—
#	229	瓦器上	壇體	34.0	—	—	—	燒成良好。外壁は灰白色。	"	—
#	230	土瓶器	壺	10.0	—	1.2	糸切り底	胎土に砂粒含み、燒成良好。灰褐色。	SB15 埋り方	—
#	231	#	#	—	—	3.1	糸切り底	胎土に白色細粒を含み、燒成良好。灰褐色。	"	—

番号	種類	標識	寸法 (cm)				形態の特徴	文様・施物・色調・質地等	市上流通	備考
			口徑	底径	高さ	現存高				
41	235	上部器	鉢	7.0	5.0	1.4	手切り底	船子はきめ細かい、茶色の粒子を含み、焼成良好、堅密。淡茶色。	SE18	
"	236	"	"	6.8	4.8	1.4	完形、手切り底、口縁部に墨付有	船子に人面の砂合み、粗い、焼成やや軟。淡青色。	"	
"	237	"	"	7.0	5.0	1.4	手切り底	船子は細かい砂粒を含む。焼成やや軟。淡青色。	"	
"	238	"	"	7.8	6.2	1.2	手切り底	船子に人面の砂合み、やや粗い。焼成やや軟。淡青色。	"	
"	239	"	"	7.7	5.6	1.4	手切り底、口縁部に保付 蓋	船子に大粒の砂合み、やや粗い。焼成やや軟。淡青色。	"	
"	240	"	"	8.0	4.0	1.6	手切り底	船子に砂粒少々含み、焼成良好。淡茶色。	"	
"	241	"	"	7.2	4.8	1.7	手切り底	船子は砂粒少ない。焼成やや軟。淡褐色。	"	
"	242	"	"	7.0	4.6	1.5	手切り底	船子に砂粒含み、粗い、焼成やや軟。淡茶色。	"	
"	243	"	"	8.8	6.4	1.7	手切り底	船子に大粒の砂合み、やや粗い。焼成やや軟。淡褐色。	"	
"	244	"	"	10.8	7.6	1.4	手切り底、保付蓋	船子に砂粒含み、やや粗い。焼成良好。淡灰褐色。	"	
"	245	"	鉢	10.6	7.2	2.0	手切り底、底部に亂付青	船子はやや粗い。焼成良好。内面は淡灰褐色。外面は淡茶色。	"	
"	246	朱付	瓶	13.0	—	3.4	口縁青 肩部青	船上は持縫。焼成良好。透明に透け、灰青色の斑。内面に墨文。口縁外間に埋物。	男 16C後	
"	247	"	"	14.0	—	(5.0)	体部は丸く、蓮子底	船子は白色。肩に墨付含み。薄緑。焼成良好。透明感。内面に只見の文様。	淡水、福慶省 16C末～17C初	
"	248	"	"	9.8	—	(3.5)	体部は直線的に聞く	船上は灰青色を帯びた白色。焼成やや軟。透明感。内面に只見の文様。	淡水、福慶省	
"	249	"	"	13.0	—	(3.8)	体部は丸座をもつ 豊作印有	本体は白灰青で、輪郭、焼成良好。灰青色に墨。三瓣花口と足の脚部、体部外向に斜出し。	肥前 17C後	
"	250	陶器	"	—	4.8	(4.0)	腹高火状	裏地に淡茶色。保付。保付口は藍緋。	肥前 17C代	
"	251	"	"	8.0	—	(3.5)	保付上面は内凹する	身地に茶褐色で、砂粒含む。焼成やや軟。淡褐色系。	"	"
"	252	坐付	"	—	4.0	(2.0)	裏部は強い筋折をもつ	裏地は灰白色で、輪郭。透明感。焼成良好。焼成外間にへつ剛り。	肥前 16C～16C半	
"	253	陶器	窓口	8.0	3.2	3.9	上縁部外折、 内部は弦紋的に聞く	裏地は灰白色で、輪郭。焼成良好。透明感。	肥前 17C末 ～18C初	
"	254	"	瓶	8.8	—	(4.0)	体部は球体	裏地は灰褐色で、やや粗い。系葉青釉。淡茶色系の脚部と文様。	店頭物 17C 後～18C初	
"	255	"	"	8.0	—	(5.3)	体部は丸座をもつ	裏地は灰褐色で、輪郭。焼成良好。淡茶色系。	"	"
"	256	"	"	10.4	—	(5.5)	体部は直線的に聞く	裏地は灰褐色で、輪郭。焼成良好。淡茶色系。脚部と文様。	肥前から筑前 (熊崎) 16C～18C前	
"	257	"	"	—	4.2	(3.1)	体部は球体	裏地は灰褐色で、輪郭。焼成良好。淡茶色系。脚部と文様。	只見風 18C前	
"	258	染付	瓶	—	—	—	新絵底	船上は致砂の跡あり。内面に呉須文様。裏地は内外に2条文の青灰色帶びた透明感。	"	新
"	259	"	"	14.2	4.6	3.8	身台は低い。口縁部外折、 脚部は円筒。外面は砂が付着	裏地は白灰青で、輪郭。焼成良好。淡茶色地。裏地は致砂の跡あり。内面に呉須文様。裏地は内外に2条文の青灰色帶びた透明感。	肥前	
"	260	"	"	—	5.0	(1.7)	身台は低い。内底に灰が付着	裏地は灰褐色で、輪郭。焼成良好。淡茶色地。裏地は致砂の跡あり。内面に呉須文様。裏地は内外に2条文の青灰色帶びた透明感。	初期肥前代前 17C半	
"	261	口 盆	"	—	4.5	(1.1)	内底と蓋付に墨目	裏地は白地で、輪郭。淡茶色地。裏地は致砂の跡あり。内面に呉須文様。裏地は白地で、輪郭。淡茶色地。裏地は致砂の跡あり。内面に呉須文様。	李越	
"	262	クロム 青磁	"	10.0	—	(2.0)	高台は低い。 口縁は玉縁	船子に墨付の砂合み、灰青。焼成良好。手彩色。	青磁 16C～18C半	
"	263	陶器	"	13.0	—	—	舟形	船子に淡茶色で、やや粗い。焼成良好。淡茶色。	青磁 16C～18C半	
"	264	"	片口	12.2	—	(3.0)	舟形口縁、 底部の皿縁は強いて 上口底。外面に保付蓋	船子に淡茶色で、やや粗い。焼成良好。淡茶色。	高麗燒	
"	265	瓦質土器	鉢	—	11.4	(3.0)	体部は直線、 上口底。外面に保付蓋	船子に大粒の砂合み。焼成良好。内面に暗茶色。外表面は淡茶色。	"	
"	266	"	丸壺	—	—	—	刻劃片	船子に大粒の砂合み。焼成良好。内面に淡茶色。外表面は淡茶色。	"	
"	267	"	"	—	—	—	丸壺	船上に大粒の砂合み。淡茶色。焼成良好。	"	

番号	通称名	種類	形状	性状 (cm)		形態の特徴	文様・施釉・色調・窯場等	出土地	備考
				口径	底径				
42	268	陶器	四脚	—	—	—	口縁部は直立し、肥厚。内面に2条の凹線。5本脚(高台脚)。	裏地は暗めを含み、軽い。茶褐色。施成良好。小豆色釉を施す。	上野又は毛取 17C
〃	269	〃	〃	—	—	—	山根部が下位につき少しし、腰圍一角形の山根部形成。	裏地は砂合込み、暗緑。茶褐色。施成良好。黄色釉を口縁部内外面に施す。	唐津焼
〃	270	〃	〃	—	—	—	伏足し、水引き模	裏地は砂合込み、暗緑。施成良好。暗小豆色。	備前焼
〃	271	〃	〃	—	—	—	直輪に平底	裏地は砂合込み、褐色。施成良好。暗茶色。	国産
〃	272	〃	〃	—	—	(5.0)	底延片、口縁部堅折 内面の下に目10本切欠	外身は大粒の砂合込み。茶褐色。施成良好。口縁部には暗茶褐色釉。	唐津焼 17C代
〃	273	〃	〃	27.5	—	—	丁字輪。口縁部は2段に起伏。下し口は12本切欠 内面ヨコハケ	裏地は砂合を含み、粘結。施成良好。口縁部には茶褐色釉。	小石川窯
〃	275	〃	紙	—	—	—	脚部付。内面には青筋捺印	裏地は砂粒食み、粗い。茶褐色。施成良好。対茶褐色釉を内外面に施す。	〃
44	287	〃	皿	8.8	3.6	3.0	円形か、一日月高台	裏地は暗緑で、淡灰褐色。施成良好。暴筋	神津社 井筒窯 16C末~17C初
〃	288	〃	〃	10.8	—	3.0	直内丸く、脚反り口縁	裏地は砂合を含み、褐色。施成良好。裏地は全周に施す。	唐津焼
〃	289	青磁	?	—	5.4	1.3	裏内は長い、直底直脚厚い。	裏地は砂合を含み、淡緑。茶褐色。質人。施成良好。	備前 伊賀窯
〃	290	口縁	皿	17.8	—	(2.0)	体部の腹面白い。口縁部外反	裏地は暗緑で、淡灰褐色。質人。施成良好。口縁部には引出通路。	伊万里
〃	291	青磁	〃	13.6	—	(2.5)	口縁部は外反し、丸足をもつ	裏地は無砂を含み、暗灰色。茶褐色地。	〃
〃	292	五貫十	火合	—	—	—	内向外指付丸形。外側黒色 内側白。内面に2条の突起筋。外面上に丸蓋のスランプ。	脚部に砂粒含み、焼成良好。茶褐色。安哥の内には丸蓋のスランプ。	〃
〃	293	十四貫 上器	脚鉢	—	—	—	脚鉢。外側指付丸形。内面ヨコハケ。下し口は5本脚	脚部に砂粒含み、褐色。施成良好。明灰茶色。	〃
〃	294	強度質 二器	鉢	24.0	—	(2.8)	口縁部はトヘンミミ上げる	脚部に砂粒含み。茶褐色。口縁部には褐色斑。	東播永
〃	295	陶器	八寸	—	—	—	脚鉢は長い。口縁には青筋 捺印あり。外側ヨコハケ	裏地砂合含み。小豆色。施成良好。濃茶葉	守綱
46	298	上器	皿	6.0	4.5	1.8	糸切り皿	新土筋織。施成良好。黄褐色~黒褐色。	SP26 調査
〃	299	〃	〃	7.3	5.0	1.5	糸切り皿	脚土に砂粒含み。黄褐色。施成良好。	〃
〃	300	〃	〃	—	6.0	(1.0)	糸切り皿	脚土は無砂で、淡灰褐色。施成良好。	〃
〃	301	〃	〃	8.0	6.0	1.5	糸切り皿	脚土に無砂。淡黄褐色。施成良好。	〃
〃	302	〃	环	—	7.0	(1.3)	糸切り皿、板状压抜	脚土に砂粒含み。淡黄褐色。施成良好。	〃
〃	303	〃	〃	—	6.0	(1.5)	糸切り皿、板状压抜	脚土に粘結。施成良好。内面は灰褐色。	〃
〃	304	〃	〃	12.4	8.0	2.4	糸切り皿	脚土は無砂で、淡灰褐色。施成良好。	〃
〃	305	〃	〃	12.9	7.0	3.1	糸切り皿	脚土は無砂。淡茶褐色。施成良好。	〃
〃	306	〃	〃	13.9	8.0	2.9	糸切り皿	脚土は無砂。淡灰褐色。施成良好。	〃
〃	307	〃	〃	12.9	7.8	3.1	糸切り皿	脚土は無砂。脚不規則。	〃
〃	308	〃	〃	12.7	8.0	2.7	糸切り皿、内面に保竹名	脚土は無砂。淡灰褐色。	〃
〃	309	〃	〃	12.9	8.0	2.7	糸切り皿	脚土に岩石を含み、被茶褐色。施成良好。	〃
〃	310	〃	〃	—	10.0	(1.7)	糸切り皿、板状压抜	脚土に砂粒含み。深茶褐色。施成良好。	〃
〃	311	〃	〃	14.0	7.5	1.9	糸切り皿、器底低い	脚土無砂。施成良好。灰茶褐色~茶色。	〃
〃	312	瓦質上器	鉢?	—	4.2	(3.5)	体部屈曲し、外反。外側はヘラ筋織、内面に指付丸形	脚土は無砂含み。粗い。茶褐色。施成良好。内向灰褐色。	器形不明
〃	313	〃	〃	—	4.8	(3.6)	体部は弓曲し、外反。外側はヘラ筋織。内面に指付丸形	脚土は無砂含み。粗い。茶褐色。施成良好。外側に淡灰褐色。	〃

試験番号	通 過 度 数	種 類	測定 方 法	法 規 (cm)		浮遊の程度 (高台部) (現存高)	文様・施華・色調・葉地等	出土 遺構	備 考	
				底 面	底 面					
名 314	古 磁	直	13.8	—	(3.2) 施部は斜面、口底外反	表面は淡め含み、暗緑。底土は淡黄色、淡 灰色船。	SE20 露り方	秀		
名 315	"	曲	—	4.6	(2.1) 戻形か、底部容積厚い	表面は滑面で、灰土、淡緑色船。焼成良好。	SE20 露り方	電気窯系		
名 316	口 窓	"	—	5.2	(2.2) 成形部、高台部ケツリ	表面は滑面、淡灰茶色、底部含み。内面は 灰白色へ緑灰色、外面は淡灰褐色。	SE20 露り方	フ		
名 317	束 紋	小箱	—	—	口蓋部等、体部は直線的 に厚く	表面は滑面で白色、外面に只見文様。 底土は滑面で白色、内外面に灰緑色船。	SE20 露り方	明 天正か 焼成不良	16C末	
名 318	"	直	—	5.0	(1.5) 底部厚、窓付は低い	表面は滑面で、淡茶色。内外面に灰緑色 船。内面に仕切り。	SE20 露り方	"	"	
名 319	脚 窓	横	15.8	—	(4.2) 体部は直線的に厚く	表面は滑面で、淡茶色、淡緑灰色船。	SE20 露り方			
名 320	土槽質 上器	短筒	?	—	—	体部は垂直に立つ。外側 に脚柱附、外側に蓋付する	表面は大粒の含み、粗い。焼成不良。淡 茶色。	SE20 露り方		
名 321	青 磁	瓶	18.8	—	(3.0) 口輪片	表面に灰色、砂粒を含む。暗緑色船。体部 外側に緑色斑。	SE20 露り方	電気窯系		
名 322	瓦質土 器	瓶	24.0	—	(4.0) 体部は直線的に厚く、外 面下部に脚柱三脚、内面 にコニハ	胎土は砂粒を含み、粗い。焼成良好。淡 茶色。	SE20 露り方			
名 323	"	火合	—	—	口縁直口、外側に2条 の突起	胎土は良好。底部含みへ墨灰色。 外側に間に丸文のスタンプ。	SE20 露り方			
名 324	十脚質 土器	器	29.8	—	(8.4) 口窓部は出っ張る。外側に 指柱3脚、内面に蓋付する	胎土に砂粒を含み、粗い。焼成良。内面は 茶褐色。	SE20 露り方	電気窯系		
名 325	"	"	—	—	体部は内面突起に聞く。内 面コニハ、外側に蓋付する	表面に砂粒を含み、焼成良好。茶褐色。	SE20 露り方			
名 326	陶 器	瓶	—	—	N字状の縫	表面は滑面含み、焼成良好。内面は暗小 豆色、外側は淡茶色。	SE20 露り方	電気窯系		
名 327	"	瓶	—	—	体部厚、内面の下し口に4 本足。	表面は滑面含み、粗い。焼成良。暗茶色。	SE20 露り方	二~三脚		
名 328	"	器	—	16.0	(2.5) 口部は平底。 体部は直線的に聞く	胎土は平底。 表面は滑面含み、粗い。焼成良好。内面 は茶褐色。	SE20 露り方	福岡 17C		
名 329	"	"	12.2	—	3.8	口部真直 底部丸底をもつ	表面は滑面含み、粗い。焼成良好。内面 は茶褐色。	SE20 露り方		
名 330	"	瓶	—	—	体部厚、内面水引き頭、 下し口4本足。	表面は大粒の砂含み、焼成良好。茶小豆色。	SE20 露り方	備前燒		
名 331	"	"	—	—	体部厚、内面水引き頭、 下し口4本足。	表面は滑面含み、焼成良好。内面は暗小 豆色。	SE20 露り方	電気窯系		
名 332	"	"	35.8	—	(4.5) 横筋等は上口につま 付し、下し口は5本足	表面は滑面含み、焼成良好。内面は暗小 豆色。	SE20 露り方			
名 333	"	"	31.6	—	(7.6)	口縁部は4つの形で、外 面には4本足と下し口。 下し口は5本足	表面は滑面含み、焼成良好。内面は 暗茶褐色。	SE20 露り方	四脚焼	
名 334	"	"	25.9	—	(3.8)	内輪部は4つの形で、外 面には4本足。	表面は大粒の砂含み、内面茶褐色、外面暗 小豆色。	SE20 露り方	備前燒 7期	
名 337	五 質 土 器	鉢	—	—	口縁部は4つの形で、内面コ ニハ、外面タマヘタケ後 ナゲ	胎土に砂粒を含み、焼成良好。外側は淡 茶色、内面は黒茶色。	SE20 露り方			
名 338	"	"	—	—	体部は直線的に聞く。 内面コニハ	胎土は滑面で、灰茶色。焼成良好。	SE20 露り方			
名 339	土質質 十脚	短鉢	—	—	口縁部は直線的、内面コ ニハ、タマヘタケ後 ナゲ	胎土は滑面で、内面は茶褐色。	SE20 露り方			
名 340	"	"	—	—	口縁部は直線的、内面コ ニハ、タマヘタケ後 ナゲ	胎土に大粒の砂含み、粗い。茶褐色。	SE20 露り方			
名 341	"	"	—	—	口縁部は直線的、内面 コニハ	胎土に大粒の砂含み、粗い。茶褐色。	SE20 露り方			
名 342	"	"	—	—	口縁部は直線的聞く。内 面コニハ	胎土に大粒の砂含み、粗い。茶褐色。	SE20 露り方			
名 343	"	"	—	—	口縁部は丁字型、内面タ ケ、コニハ、下し口アリ	胎土に大粒の砂含み、粗い。茶褐色。	SE20 露り方	Na340と同じ タイプ		
名 344	"	"	—	—	口縁部は丁字につまみ 付す。内面コニハ、外 面コニハ、下し口アリ。	胎土に大粒の砂含み、粗い。茶褐色。	SE20 露り方	Na340と同じ タイプ		
名 345	"	"	—	—	口縁部は丁字型、内面コ ニハ、外面タマヘタケ後 ナゲ、下し口3本以 下	胎土に大粒の砂含み、粗い。茶褐色。	SE20 露り方	Na340と同じ タイプ		
名 346	"	"	—	—	体部厚、内面コニハ、 下し口5本以上	胎土に滑面含み、粗い。茶褐色。	SE20 露り方			

番号	通 路 番 号	地 質 形 状	性 質 (cm)			形狀の特徴	文様・地盤・色度・風化等	出土 遺物	備 考
			器 底 口 徑 (高台径) は 現存高	底 徑 (高台径) は 現存高	厚 さ (cm)				
48	347	上部質 三層	焼鉢	27.4	11.4	14.0	円錐形若干膨らみ、内面マ ノフ。外面タコハタ。下 し口は5本单位。	粘土に大粒の砂を含み、淡茶灰色。焼成良 好。	SR20 N343と同じ 東西
#	348	"	"	-	-	-	底面や縁側に、内面の下 し口は5本单位。	粘土に大粒の砂を含み、粗い。焼成良好。 表面茶色。	S22C 調査的
49	349	上質十 基	火合	26.8	22.6	24.1	体積は底径、三層付。外 の下口位に内側2条、外 側施色化粧、内カタマ ニコハタ。	粘土は粗い。焼成良好。茶灰色。外面に溝 文と弦文のスタンプ。	"
51	352	土器器	皿	8.6	5.0	1.4	朱切り底	粘土は砂粒を含み、茶系色。焼成良。	SD20 芦穂
#	353	"	环	11.8	7.0	2.8	朱切り底。底部外縁に指 跡付。	粘土は1~2mmの砂粒を含み、茶褐色。焼成 良好。	"
#	354	"	"	10.2	7.0	1.9	朱切り底 に底面外縁に撫て青	粘土に1mm程度の砂粒を含み、焼成良好。淡 茶灰色。	"
#	355	"	"	9.8	6.0	2.2	朱切り底、板状压痕	粘土は薄歯、焼成良好。コモリ型は淡灰茶色。 表面褐色。	"
#	356	"	"	-	8.0	(2.0)	朱切り底。板状压痕	粘土は暗い。各系灰色。焼成良好。	"
#	357	"	"	10.0	7.5	1.6	朱切り底。体部丸味をも つ	粘土は暗いを含み、茶系色。焼成良好。	"
#	358	青 磁 碗	-	-	5.2	(2.4)	腹付に胎上目盛	高地は暗緑、乳灰色。焼成良好。淡茶色 地。	N 龍泉系
#	359	"	"	-	4.1	(2.0)	輪沿合。体部丸味をも つ	高地は暗緑。淡茶灰色。焼成良好。淡綠色 地。内底に1~2mm切りの文様。	" "
#	360	白 磁	"	-	6.0	(2.6)	芯?に高台、足込みに比較 的底野味をもつ	高地は乳緑、淡茶色。焼成良好。淡茶色 地。質實。	" N 磁
#	361	斐 付	"	-	-	-	口縁部外反	高地は砂粒、薄緑。白色。焼成良好。因 白地にした透視點。外面面縁2条と文様、内 縁2条の模様。	" 明
#	362	高 台	"	-	4.0	(1.2)	円盤状高台	高地は薄茶色。砂粒含む。内凹六角形。露 胎形は明茶褐色。	" 大日
#	363	白 磁	皿	11.0	-	-	口縫部内反	高地は暗緑、白色。焼成良好。白色地。	" 明
#	364	"	"	16.0	-	(2.3)	口縫部外反	高地は暗緑。白色。焼成良好。青茶味びた 透視地。	"
#	365	斐 付	"	-	-	-	体部内凹、口縫部は外反	高地は暗緑で、白色。焼成良好。口縫。見 込みに輪郭線。	" 朝末17C前半
#	366	陶 器	"	-	10.0	-	(1.9) 体部は直線的に開く	高地は淡緑を含み、薄緑。茶色地。焼成良。	" 伝津物か学び
#	367	土質質 十基	磨鉢	-	15.6	(5.4)	内面ヨコハタ。下口に 5本单位。外周均細底	地上に大粒の砂含み、削い。焼成良好。茶 色地。	SE18+子鉢と 複合
#	368	"	"	-	15.4	(4.8)	体部丸味をもつ。外周タ コハタ。下口に2条、内面ヨ コハタ。	地上は削い。焼成良好。内面は淡灰色。外 面は明茶褐色。	"
#	369	"	钵	-	-	-	口縫部は削起	粘土は粗い。焼成良好。	"
#	370	"	磨鉢	-	-	-	口縫部に2条、内面ヨ コハタ。マツメ。下口は2 本位。外周は稍細底	地上に大粒の砂含み、粗い。焼成良。明茶 地。	"
#	371	"	"	28.0	-	(7.4)	体部は直線的に開く。外 周ヨコタコハタ。下口ヨ コハタ。下口4本位。	地上に砂粒含み。削い。焼成良。内面は淡 茶色。外面は明茶褐色。	"
52	372	瓦質上 火舟	-	-	-	-	口縫部。外周に肥厚。内 面ヨコハタ	地上に淡茶灰色。削い。焼成良好。淡灰色。 外周に溝文のスタンプ。	"
#	373	"	"	-	-	-	外周に2条の突脊。内 底にヨコハタ	地上は淡茶灰色。燒成良。外周は淡茶色。 外周に窓孔のスタンプ。	"
#	374	"	"	-	-	-	腰鉢。内面ヨコハタ。 体部直線的に開く	地上は3mm前後の長毛を含み。焼成良。 底色。	"
#	375	"	鉢	36.6	-	(5.2)	深口縫部内反 内面ヨコハタ	新土、淡緑、燒成良。淡灰色。	"
#	376	"	皿	-	-	-	半底。内周に厚付筋。体 部直線的に開く	砂土堆。燒成良。外周は淡茶色。内底は 底小豆色。	" 岩原燒
#	377	"	瓶	-	-	-	体部は斜状	砂土堆。燒成良。小豆色。	" "
#	378	"	壺	-	-	-	体部直線的に開く。内面 マツメ。下口は木口上以 平底。底底は直線的に開く。 外周に直底。内面	砂土堆。燒成良。外周は淡茶色。内底は 底小豆色。	" "
#	379	"	"	-	14.5	(5.3)	下口木口上以 上	砂土堆。小豆色。燒成良。	" "

Tab. 2 第68次調査遺物一覧表 ③ 不定形上擴・盤・構築物出土遺物

著者番号	遺物番号	種類	名稱	度量 (cm)			形態の特徴	文様・施加・色調・高地	出土遺物	参考
				口徑	底径	高さ (高台所)				
56	1	陶器	瓶	—	5.0	(2.3)	高台は腹状	裏地は灰褐色。黄褐色色斑。質入。	SM01	唐津焼
〃	2	〃	〃	—	5.0	(2.7)	高台は折筋・角形状、体膨大底部をもつ	裏地は明灰黄色、質入。灰黄色を帯びた透明白地。外側に凹部模様。	〃	肥前窯 17C後半代
〃	3	アラム骨	皿	9.0	2.3	1.65	高台は底く内傾、体部は丸弧をもつ、口部は土台状	裏地は灰白色。精緻。青灰色色斑。付着物が多い。	〃	肥前窯
〃	4	茶付	〃	—	5.7	(1.2)	高台は底く、内傾	裏地は灰白色。精緻。足込みは灰褐色。圓盤は高台内1条。高台外縁2条。底部下段1条。	〃	〃
〃	5	〃	碗	—	—	—	底子窓、体部丸底をもつ	裏地は灰白色。施加粉を含む。灰灰色を帯びた透明釉。詰折は藍色。外側は唐草文。内面は灰褐色。	〃	〃
〃	6	陶器	〃	—	4.0	(1.6)	式口部、高台断面はつの字形	裏地は灰灰黄色。精緻。燒成良好。灰灰褐色を帯びた透明釉。内底は脂ハガ。	SM02	肥前窯又は 肥筑窯 18C前～中
〃	7	〃	〃	—	3.8	(1.6)	高台は底く、腹状	裏地は灰灰黄色。透明釉。内底は脂ハガ。詰折部に凹起部。	〃	肥前窯 18C前～山
〃	8	〃	〃	—	4.0	(2.3)	体添丸底をもち、高台は 腹状	裏地は灰灰黄色。燒成良好。腹灰褐色。体添内面の中央に輪郭線。	SM02	三野・山取系 18C
〃	9	〃	〃	—	2.5	(1.7)	高台は底く、内底に粘土質	裏地は灰灰黄色。精緻。輪縁灰褐色。体部下位、高台は灰白色。	SM02	肥前窯 16C末～17C初
〃	10	〃	〃	—	2.5	(3.0)	体部丸底をもつ。高台 は高い	裏地は灰灰黄色。灰灰褐色。	SM02	上野・高田系 17C後～18C前
〃	11	〃	〃	—	4.2	(3.3)	高台は細い。体部は丸底 をもつ、腹がある	裏地は灰白色。燒成良好。民藝色系。	SM02	福岡又は肥前 18C前～中
〃	12	〃	〃	5.7	4.4	5.4	高台は細い。体部は丸底 をもつ。腹がある	裏地は灰灰褐色。精緻。灰灰褐色。肩毛目 が濃い。	〃	肥前窯 18C前～中
〃	13	〃	〃	—	5.6	(4.1)	体添と半底添 体添丸底をもち	裏地は灰灰白色。灰灰褐色を帯びた透明釉。体添外縁には輪郭色斑を有す。	〃	肥前窯 17C前
〃	14	〃	〃	—	6.8	(4.7)	体添丸底をもち。高台 は厚底	裏地は灰白色。燒成良好。茶褐色。内面 に脂テレ。	〃	肥前窯又は肥筑 17C後～18C 前
〃	15	〃	皿	—	7.0	(3.9)	高台は底く。内底	裏地は灰灰黄色。精緻粉を含む。透明白。 外底は輪郭の脂ハガ。	〃	福岡 17C末～18C前
〃	16	〃	〃	—	8.0	(1.3)	高台は底く、内幅、外底 が細くなり、内底に突出状 の瘤	裏地は灰灰白色。精緻。茶灰褐色。	〃	福岡
〃	17	〃	〃	—	20.8	—	L型窓は大きく外反	裏地は灰灰褐色。輪縁灰褐色。窓口内に灰 色の網毛毛文様。	SM02	肥前窯 17C末～18C前
〃	18	円盤	小杯	4.6	2.4	1.8	蛇口・高台、体部は内向	裏地は灰白色。燒成良好。白色帯びた透明白。 外底は白化。	SM02	肥前窯 17C後半
〃	19	〃	皿	8.2	3.6	2.4	輪脚部は底く、尖る。 外底部は糸切り	裏地は灰灰白色。精緻粉を含む。深灰青色 を帯びた透明釉。体部内面は輪郭模様。	〃	肥前窯
〃	20	〃	碗	7.0	—	(2.2)	口部細く、脚部が削い てある	裏地は白色。燒成良好。深灰青色。内面 に口凹。	〃	18C前～中
〃	21	〃	〃	—	8.0	—	体堅片	裏地は灰白色。燒成良好。乳白色釉。	〃	18C前
〃	22	〃	小杯	3.5	—	(4.8)	輪反り口	裏地は灰灰褐色。燒成良好。灰白色釉。	17C後	—
〃	23	古板	青灰	—	—	—	口部端部は肥厚する。 体部・内面	裏地は白色。精緻。灰灰白色釉。体部内面 に輪郭。	—	17C後～18C 後
〃	24	茶付	小杯	—	2.4	(2.5)	輪反り口で、高台は内傾	裏地は灰灰褐色。燒成良好。灰白色釉。	SM02	肥前 1650～1700年 人手作製の軽用
〃	25	〃	碗	—	4.4	(2.2)	体添は丸底をもつ。高台は 底く。	裏地は白色。精緻。灰灰白色釉。外底に文 字。輪脚部は高台内1条、高台外縁2条。	〃	肥前 18C後半 人手作製の軽用
〃	26	〃	〃	10.0	—	(4.2)	体添は半底添	裏地は灰白色。燒成良好。灰白色釉。外底 に草花文。口縁に脂テレ。	〃	肥前 18C前～中
〃	27	〃	〃	9.6	—	(4.5)	体添は半底添	裏地は白色。灰灰褐色。外側に花文。高台 内に輪郭1条。	〃	肥前 18C後
〃	28	〃	〃	11.2	4.6	8.0	体添は半底添、内底に貼 上部、外底に竹書	裏地は灰灰白色。灰灰褐色。圓盤は体部外 縁に輪郭3条。内底に文字。外底 に文様。	—	太明灰化牛 肥前 1650～1700年 後
58	29	〃	〃	13.0	—	(3.2)	体添は灰褐色	裏地は灰灰白色。燒成良好。外側の輪郭は 墨色。	肥前 18C後 後	—

標本番号	遺物番号	種類	断面	寸法 (cm)			形態の特徴	文様・施物・色調・素地等	出土遺傳	備考
				上径	底径	器高 (高台型)				
58	30	染付	皿	—	8.0	(2.1)	高台は低い、体部は丸脚	裏地に白色、褐斑、三次色點。見込みにコシニャク色。高台外周2条、高台内1条、見込み2条。	SX2	紀前 1600~18C前
"	31	土師質	小鉢	15.0	7.8	3.9	外面断面直底、内面に擬付舟	胎土に砂粒含み、焼成良好、灰褐色。	"	
"	32	"	塔塔	16.8	—	(3.8)	口縁部高く、肥厚 体部直底、指壓痕直底	胎土は暗茶火色、砂粒多い、焼成良好。	"	
"	33	瓦質上器	鉢	—	—	—	内面ヨコハケ。下口は2本以上	胎土は淡灰褐色、表面は灰褐色。	"	
"	34	"	盤鉢	—	—	—	口縁部に突出部をつまみ出す。 内面にコナミ、タラック	胎土は砂粒多い、焼成良好、褐茶褐色。	"	
"	35	陶器	盤鉢	14.7	—	(5.8)	口縁部にくの字形、底部丸く、外周に1条の突起、内面に本革室の下し口	表面は褐色、暗茶色點。	SX2	櫛刃刀出土と 鏡合せ 台山取
"	36	"	"	—	—	—	ヨコ形、横、外周に1条の突起、内口は下し口	表面に灰褐色、砂粒含み、焼成良好、暗茶褐色。	"	唐津系
"	37	"	盤	—	—	—	口縁部は厚く、浅脚が入る。	表面は暗茶褐色、3.4mm削後の砂含む。	"	備前系
"	38	"	盤鉢	—	—	—	口縁部は加壓部に付し、外周に小さな突起がつく。	表面は灰褐色、砂粒含み、細小豆色點。	"	高取系
"	39	"	"	—	—	—	口部がやく、ヨコ形に輪で、内口部に小さな突起がつく、内面に下し口	表面は灰褐色、砂粒含み多い、暗茶褐色。	"	庄作系 18C前~中
"	40	"	"	—	—	—	口縁部は口字形で、内脚する。強い凹がつく。	表面は暗茶褐色、暗茶褐色點。体部外匝に輪	"	唐津系
"	41	"	盤	17.0	—	7.2	口縁部は口字形で、内脚する。強い凹がつく。	表面は暗茶褐色點。胎青褐色點。内外面に輪	SX2	下層 沖縄系
"	42	"	"	—	15.2	(4.1)	トゲ鉢	表面に暗茶褐色、輪離、暗茶褐色點。底部は灰褐色付する。	SX2	赤城燒
"	43	"	盤	—	—	—	斜面部、内外周に巻き口引き	表面に輪離、焼成不良。内面は暗茶褐色點、外側に輪離小豆色點。	SX2	庄作焼 1830年~1700年
59	52	土師器	皿	—	9.6	0.7	ヘラ切り底	胎土に砂粒が多い、焼成良好、淡褐色。	SX3	
"	53	染付	小鉢	6.0	2.5	3.65	端縁り口唇、腹が低い。	裏地に輪離、灰白色、脱皮良好、透明感、外周に草花文。	"	肥前 18C前~中
"	54	"	"	—	4.3	(4.0)	体部は丸脚をもつ。高台は円柱	裏地に輪離、脱皮良好。内面は暗茶褐色點、外側に輪離小豆色點。	"	肥前 17C中
"	55	"	"	8.0	—	3.9	体部は丸脚をもつ	裏地に輪離、乳白色、焼成良好。灰色帯びた透明感。高台部に輪離。	"	肥前 17C後
"	56	"	瓶	13.0	—	(4.2)	体部は丸脚をもつ	裏地に輪離、乳白色、焼成良好、透明點、外周に草花文。	"	肥前 18C中後
"	57	"	"	10.0	—	(4.0)	体部は半球形、唇縁高い	裏地に輪離、灰白色、灰火反射、灰色帶びた透明感。体部外匝にコシニヤク色の花文。	"	肥前 18C前
"	58	"	"	—	—	—	体部は丸脚をもつ	裏地は輪離、灰白色、脱皮良好、乳白色點、外周に草花文。	"	N59と同じ イズ 18C前~中
"	59	"	"	11.0	4.0	5.7	体部直底、内口は凹底	裏地は輪離、灰白色、脱皮良好。青味帯びた透明感。輪離は体部外周2条、体部下笠2条、高台1条。外側に草花文。	"	肥前 18C前~中
"	60	"	皿	—	—	—	口縁片 体部は丸脚をもつ	裏地は輪離、灰白色、脱皮良好。灰色帯びた透明感。内面に草花文。	"	肥前
"	61	"	"	8.0	—	(1.5)	高台は低く、内縮	裏地は輪離、灰白色、透明感。内面に草花文。	"	肥前 17C後
60	62	"	"	14.2	8.2	4.0	高台は低く、内縮する。 体部丸底をもつ。浅脚砂 舟	裏地は輪離、灰白色。焼成良好。透歩點、内外面に草花文、外壁に文字。文字は不明。	"	肥前 18C前
"	63	陶器	瓶	9.8	3.6	4.8	内口は丸底 体部は丸底	裏地輪離、暗茶色、焼成良好。透歩點に更迭 流れり口。	"	小太原 18C前~中
"	64	"	"	11.8	4.4	5.5	高台は低く、やや内縮、 外周に目皿。砂が詰る	裏地は輪離、灰褐色、脱皮良好。茶色帯 びた透明感。外周に草花文。	"	京燒模形 18C前
"	65	"	"	—	—	—	体部は丸脚をもつ	裏地は輪離、灰褐色、脱皮良好、輪離。体部 内面に透歩點。	"	17C中 1630~1650年
"	66	"	皿	12.8	4.2	3.6	二重高台 体部は内縮する	裏地は輪離、淡茶色。脱皮良好。内面は輪 離。内面に輪離。体部外匝は緑色 等びた透明感。	"	以降か? 18C前

器皿番号	種類	器種	法 直 (cm)			形態の特徴	文様・地紋・色調・質地等	出土地	考
			口 径	底 径	高さ (高台径)				
60-67	附 簪	皿	—	—	—	口縁部は内傾し、丸味をもつ	質地は緻密、小豆色。燒成良好。透明釉。内外面に白色の刷毛目地紋。	SND3	鹿渕焼 18C前
68	フリ 片口	—	—	—	—	口縁部は玉縁状	質地は緻密灰褐色。燒成良好。透明釉。口縁部は朱褐色。	—	鹿渕焼 17C代
69	フリ 滑鉢	—	—	—	—	口縁部外側、肥厚し、内側に9本以上	質地に砂粒を含み、燒成良好。深海色と灰	—	鹿渕焼 17C代
70	フリ ハ	—	—	—	—	口縁部外反、腹部に突出。10本竿の下し目	質地に砂粒を含み、燒成良好。深海色と灰	—	鹿渕焼
71	フリ 瓢	—	—	—	—	内外面に格子目印記	質地に緻密、底小豆色。燒成良好。内面は	—	—
72	フリ ハ	—	—	—	—	内外面に円形状印記、器脚	質地に緻密、燒成良好。小豆色。	—	鹿渕焼 1600年
73	フリ 滑鉢	—	—	—	—	体部平、内面にヨコ方向のカギ目。下し目は5本	底面に灰色。燒成良好。内面は茶色、外面	—	鹿渕焼 17C前
74	品質十 器	火舟	—	—	—	口縁部は丸味、脚は3本、内面はヨコ方向のカギ目	底面は緻密、燒成良好。内面は灰褐色。外表面黑色新鮮。外間に付丹唐草のスタンプ。	—	—
75	フリ ハ	28.0	—	20.0	—	口縁部は丸味、脚は3本、内面はヨコ方向のカギ目	脚部に5mm前後砂粒含み、燒成良好。底灰	—	—
76	上煎器	皿	7.4	5.8	1.0	糸切り底、横付耳	脚部に2~3mmの砂粒を含み、燒成良好。底灰	SND3 4号	—
77	フリ ハ	5.7	6.0	5.7	—	糸切り底	脚部に2~3mmの長石の粒含み、燒成良好。底灰	SND3 4号	—
78	フリ ハ	10.0	4.8	2.2	—	糸切り皿	脚部は緻密、燒成良好。底灰褐色。	SND3 1号	—
79	フリ ハ	10.6	8.2	1.2	—	糸切り皿	脚部は緻密、燒成良好。底灰色。	—	—
80	フリ ハ	11.5	9.2	1.0	—	糸切り底	脚部に砂粒含み、燒成良好。底茶褐色。	—	—
81	フリ ハ	12.0	—	(2.1)	—	丸底か、横付耳	脚部は緻密、燒成良好。底灰色。	SND3 5号	—
82	陶的樂 竹	皿	14.4	8.7	3.7	口縁部は西京灰釉に外皮、輪状高台は断面が三角形状	底地緻密、燒成良好。底色の化粧が4つ。見込みに下井花のコンニャク模。	SND3 3号	伊万里 1750年代
83	フリ ハ	14.0	8.0	3.7	—	NB2と同一器形 内面矢張り半凹	底地緻密、こげ茶色。透明釉。質入。内底中央にコンニャク模。	SND3 1号	伊万里 1750年代
84	フリ 古 樂樂 竹	—	14.0	8.1	3.9	NB2と同一器形	底地は灰色。燒成良好。底灰を帯びた質入。 見込みに下井花のコンニャク模。質入。	SND3 3号	伊万里 17C後
85	古 樂樂 竹	—	14.2	8.4	4.0	高台は低く、外底に説がある。口縁部は端反り	底地は精緻、乳白色。燒成良好。底灰褐色。内底にコンニャク模。	—	伊万里 17C後
86	樂 竹	—	—	9.2	1.0	高台は低く、尖る	底地は精緻、白色。燒成良好。透明釉。内底に草花文。体部一位2条、高台内に竹文。	SND3 6号	有田 1680~1800年
87	フリ ハ	—	—	—	—	NB2と同一器形 底反り	底地は精緻、白色。燒成良好。透明釉。内底文様。	SND3 5号	SEIIC開一體 1600~1670年
88	フリ ハ	14.0	—	(3.2)	—	漏斗口と蓋、内底丸味をもつ	底地は精緻、乳白色。燒成良好。透明釉。内底外間に文様。	SND3 1号	—
89	陶 器	ハ	—	5.4	(2.0)	蓋台は低く、尖る。 笠底壓	底地は精緻、底灰色。燒成良好。底灰褐色。	—	須川窯 1680年
90	樂 竹	瓶	8.5	4.0	4.4	横底充形、底邊が厚い。体部に横付耳	底地は精緻、灰褐色。燒成良好。透明釉。体部一位1条、高台内に竹文。	SND3 1号	伊万里 1680年
91	フリ ハ	—	—	4.3	(2.0)	高台は低く、尖る	底地は精緻、白色。燒成良好。透明釉。外底に網目文。	SND3 3号	—
92	フリ 小 嘴	—	8.5	3.0	4.2	横底充形、体部は半球形。 高台に低い。	底地は精緻、底灰色。燒成良好。透明釉。外底に小舟文。内底面質入。	SND3 3~4号	18C前~中
93	フリ 小 杯	—	6.0	—	(2.0)	体部に内凹する	底地は精緻、乳白色。燒成良好。透明釉。外底に竹文。	SND3 1号	—
94	フリ 瓢	—	10.0	—	(2.9)	体部に丸味をもつ	底地は精緻、底灰色。乳白色を帯びた透明釉。外底斜削形。内底に草花文。	SND3 2号	18C前~中
95	フリ 小 瓶	—	9.0	3.3	5.6	外底に丸味をもつ。 高台は崩く尖る	底地は精緻、底灰色。燒成良好。底色を帯びた透明釉。外底に草花文。底盤は体部下位に3条。	SND3 1号	—
96	フリ 瓢	—	10.0	4.2	5.1	外底は半球形。 高台は細い。	底地は精緻、底灰色。燒成良好。透明釉。外底に草花文。	SND3 2号	18C前~中

指 物 名 稱 及 番 号	種 類	各種 名	法 量 (cm)		形 態 の 特 徴	文 様・施 物・色 調・質 地等	出土 地 點	備 考	
			口 徑	底 径					
62	97	樂 村 瓶	11.0	—	(4.3) 体部は三球形	裏地は織紋、灰色帶びた透明釉。外面に蓮花文。	SX03 6層	18C前～中	
"	98	胸 器	"	12.5	4.2	8.65 体部は丸味をもつ、口縁部はわずかに内反する	裏地は織紋、淡天色、施成良好、黃土色地。高台部は織紋。外面上に蓮花文。	SX03 5層	京焼風又は肥前 18C後 5層 豊出土と接合
"	99	樂 村 瓶	"	—	4.9 (2.7) 底部片、体部は丸味をもつ	裏地は織紋、淡灰色、施成良好、透明釉。割れ。	SX03 2層		
"	100	"	"	9.9	3.8	5.5 体部は丸味をもつ	裏地は織紋、白色、施成良好。淡灰色を帯びた蓮花文。外面上に網目文。	SX03 5層	1670～1680年
"	101	"	"	10.0	—	(4.4) 体部は丸味をもつ	裏地は織紋、底付部に蓮花文。	SX03 4層	18C中葉 No.100と同
"	102	"	瓶	4.3	—	2.1 八角形で、中央部に把手をもつ	裏地は織紋、施成良好、淡灰色、透明釉。施成良好。外面上に具足文様。	"	1690～1700年初
"	103	制 器 小瓶	—	3.4	(2.7) 体部は丸く、腹がある	裏地は織紋、施成良好、淡灰色を帯びた白色。	SX03 3層	京焼	
"	104	"	瓶	—	3.4	(2.0) 高台部は低い、二字の字形、体部は丸味をもつ	裏地は織紋、クリーム色、施成良好、黃土色地。市川の透明白。	SX03 1層	"
"	105	口 罐	猪口	—	5.6 (2.6) 新形の身移	裏地は織紋、施成良好、白色帯びた透明白。	SX03 2層	伊万里系 18C前半～中葉	
"	106	"	瓶	2.4	1.0	1.2 ミューチュアの窓、侈靡手	裏地は織紋、青色帯びた透明白。施成良好。	SX03 4層	"
"	107	"	"	11.0	—	(3.9) 地反り口型、端部膨状	裏地は織紋、白色、施成良好。淡灰色を帯びた白色地。内面は墨拭りの跡。	SX03 1層	伊万里 18C前半
"	108	"	"	14.0	—	(5.4) 体部は丸味をもつ	裏地は織紋、子白色、施成良好、透明釉。	"	伊万里
"	109	胸 器	"	10.9	3.2	5.1 体部は丸味があり、腹が膨らむ	裏地は織紋、淡灰色、施成良好、天目釉、暗茶色。	SX03 3層	小石原 18C前
"	110	瓦當上 火盆	火盆	14.0	10.4	9.5 体部は織紋、3脚が付く、外面施錦丹絵、ケズラ	脚付に妙み少ない。施成良好。外面上に円文。	SX03 6層	
"	111	"	"	—	15.8 (4.2) 3脚付き	脚付は織紋、淡灰色と淡灰青色。施成良、外正面は墨拭り痕。	SX03 4層		
"	112	"	"	—	17.0 4脚不規則、内面はココナシ、施錦丹絵	脚付に船形。施成良好、淡灰青色。外面上は墨拭り痕。	"		
63	113	十脚質 上器	焰壺	23.0	6.3 口幅広く下がる。穿孔は2つ。丸底。	焰壺は手彫、施成良好、淡茶褐色。	SX03 1-3-6 層		
"	114	"	舟	9.0	—	1.60 無縫等の蓋で、内面に布目等。	焰壺は織紋、施成良好、明褐色。	SX03 1層	
"	115	"	"	—	— 始始等の蓋で、天井部平滑、内面に布目等。	焰壺は織紋、施成良好。明褐色。	SX03 6層		
"	116	"	"	—	— 口部は肥厚し、上方へ張り出る。	焰壺上に砂粒込み、施成良好。淡褐色。	SX03 4層		
"	117	"	"	—	— 口部は肥厚し、下方へ張り出る。内面面ヨコナダ	焰壺上に2～3mmの砂粒を含み、施成良好、暗褐色の舟形。	SX03 3層		
"	118	胸 器 沈鉢	—	—	— 口部部外元、外面は三角窓形、内面に7本単位の下し口	焰壺は織紋、施成良好、外面は灰色地。素面。	SX03 5層	唐津系 17C後	
"	119	"	"	—	— 体部片、外方に10本単位の下し口	焰壺は黄土色と茶褐色、茶褐色。	SX03 3層	唐津系	
"	120	"	圭	—	— 口部部外元で、側注口2箇所、内注口2箇所、側注口ヨコ方向カキ目、内面に握り口	焰壺は織紋で、淡灰褐色、施成良好、淡茶色。	SX03 6-7層	中国名しくは唐津	
"	121	"	酒鉢	—	— 阿彌口、内面に7本以上の下し口	焰壺は織紋、施成良好、内外面暗小亞色。	SX03 3層	唐津系	
"	122	十脚質 上器	七輪	28.0	(12.8) 体部は焼形で、側注口2箇所、内注口2箇所、側注口ヨコ方向カキ目、内面に握り口	焰壺は砂粒込み、施成良好、淡茶褐色。	SX03 開込み	瀬波さ	
67	161	土瓶器 皿	—	7.0	(1.3) 糸切り口、底状圓	焰壺上に砂粒込み、施成良好、内面は茶褐色、外面上に羽根模様。	SX04		
"	162	"	"	5.8	—	1.3 糸切り口	焰壺上に粗い、施成良。明茶褐色。	"	
"	163	"	"	5.8	4.2	2.0 糸切り口	焰壺上に砂粒込み、施成良、淡茶灰色。	"	
"	164	"	"	5.8	—	1.8 糸切り口	焰壺上に砂粒込み、施成良好、淡茶色。	"	

測定番号	遺物番号	種類	寸法(cm)			形態の特徴	文様・施飾・色調・質地等	出土遺構	備考	
			口径	底径	厚さ (高台付)					
67	165	土器	环	7.8	5.6	1.5	糸切り底	胎土に砂粒含み、施成良好。茶褐色。	SK04	
"	166	陶器	碗	—	4.2	(2.6)	体底部下位ケゲリ、外縁は大きい、高台付内縁	裏地は濃灰色、施成良好。内面は暗茶褐色。外縁は棕褐色。鉄錆。	"	店舗址
"	167	陶器	盤	—	10.0	(4.1)	脚部付、施成部は内縁、外縁に1条の突帯	裏地に黒い砂粒を含み、施成良好。施成部は茶褐色。外縁は棕褐色。内面は暗茶色。	SK04	中國 樂器室
"	168	"	碗	16.0	—	(2.5)	口縁部は外反、一次火を受ける	裏地は暗褐色、茶褐色。施成良好。外縁に1つ引き火痕。	"	動物骨頭 同上
"	169	桑村	小碗	—	—	—	口縫部付、施成部は薄い。	裏地は白色、施成良好。施成部は茶褐色。外縁は茶褐色。	"	中國 樂器室
"	170	陶器	盤	20.8	—	(4.2)	口縫部の上端を上につなげ、内縁の下位は8本以上の突帯	裏地に大粒の砂含み、施成良好。内面は小豆色。外縁は茶褐色。	SK04	樂器收存庫
"	171	"	瓶	—	8.2	(7.1)	小底、施成部は青白、底部有施成	裏地は天色沙引を含み、施成良好。内面は小豆色。体部外縁は暗い小豆色。当筋部。	"	樂器室
"	172	瓦質土器	瓶	24.0	—	—	口縫部付、内縁を把手させらる	胎土は茶灰茶色、大粒の砂含み、施成良好。裏地は茶褐色。	"	大内系
"	173	"	湯盆	—	—	—	刻溝部、外縁にヨコハケ	胎土はキナギ型、施成良好。内面は淡茶灰褐色。外縁は黑色明顯。外縁に菊花文のスタンプ。	"	
"	174	陶器	甕	—	—	—	外縁の突帯には割目がある	裏地に砂粒を含み、施成良好。内面は暗小豆色。外縁は灰褐色。	"	樂器室 LTC 81
69	179	土器	皿	7.0	5.0	1.3	手切り底	胎土に1~2mm前後の砂含み、施成良好。	SK07	
"	180	"	"	7.0	5.6	1.45	手切り底	胎土に1~2mm前後の砂含み、施成良好。茶褐色。	"	
"	181	"	杯	14.8	—	(2.7)	体部は直線的に底近く	胎土1~2mmの砂含み、施成良好。淡灰褐色。	"	
"	182	桑村	瓶	8.0	6.0	5.95	施成部は橢形、口縫部は輪花状	裏地は白灰褐色を含み、硬い、施成良好。透明釉。外縁の施成部は松竹文。	"	
"	183	陶器	皿	8.2	4.6	2.0	施成部は丸底をもち、高台は低い。	裏地は白灰褐色を含み、施成良好。暗色透明白。高台内部は黒ハグ。外底底部は日笠。	"	樂器室 樂器室
"	184	"	"	—	3.4	(0.9)	基盤部	裏地は成形輪胎、細砂粒を含む。施成良好。圓形。	"	16C前~後
"	185	青磁	碗	—	—	—	体部は内曲	裏地は灰褐色、砂を含む。施成良好。薄緑色。	"	青
"	186	粗底青二階	瓶	—	—	—	平底、内面両側面压出、外縁コロナ、胎壁が薄い。	裏地は茶色と黒色。砂粒を含み、硬い。内面は灰褐色。	"	無
"	187	陶器	皿	—	7.4	(2.9)	高台は低い。胎十目は見込。蓋付に8字印。	裏地は茶色で、1~2mmの砂含む。施成良好。白色透明釉。	"	初期青洋
"	188	"	片口	—	—	—	口縫部は如意形に外反	裏地は綠褐色、砂を含む。施成良好。透明白。胎部下部は直線。	"	唐津燒
"	189	"	大皿	12.4	—	(3.0)	清絞口縫	裏地は灰褐色、砂を介む。施成良好。灰白透明釉。	"	青瓷 17C前
"	190	三脚青十階	瓶	—	—	—	口縫部は肥厚な厚さ平折面をもつ。平底間に穴、内面にヨコハケ、外縁に裏付有。	胎土に1~2mm前後の砂含み、施成良好。赤茶褐色。	"	
"	191	五瓣青十階	火垂	—	—	—	四脚付	胎土に2~3mm前後の砂含み多い。施成良好。淡灰褐色。外縁に菊花文のスタンプ。黑色背景。	"	
"	192	"	"	—	—	—	四脚付	胎土に茶色を含む。施成良好。外縁は黑色背景。内面に花文のスタンプ。	"	
"	193	陶器	盤	—	—	—	四脚付、内面の下し口は	裏地は灰褐色、1~2mm前後の砂粒を含む。施成良好。内面は明茶褐色。外縁は淡茶灰褐色。	"	樂器室
"	194	"	"	—	—	—	四脚付、内面の下し口は11本单位。胎壁が薄い。	裏地は暗褐色。淡赤褐色。砂粒を含み、施成良好。茶褐色。	"	肥前系
"	195	瓦質土器	"	—	—	—	内面ヨコハケ、外縁コロナ、ハケ。	胎土に灰褐色を含む。施成良好。硬い。灰褐色。	"	
"	196	陶器	"	—	—	—	口縫部は肥厚、体部外縁はタテハケ。内面はナメハケ、下し口は12本以上	裏地はレモン色、砂粒を含み、施成良好。内面は赤茶色。	"	志摩燒
70	199	土焼青土器	"	—	—	—	—	胎土に砂粒を含み、施成良好。内面は茶褐色。外縁は深茶色。	SK08	
"	200	土的器	皿	7.6	5.0	1.6	手切り底	胎土に砂粒を含み、施成良好。内面は茶褐色。外縁は深茶色。	SK11	

器物番号	通称	種類	器種	法量 (ca)				形態の特徴	文様・施釉・色調・質地等	出土遺構	備考
				口徑	底径	高さ	厚さ				
70	土師器	皿	7.2	5.0	1.3	—	—	系切り底	器外に大粒の砂含み。焼成良好。内面は墨色。外面は褐茶色。	SXII	
70	201	皿	7.8	5.0	1.6	—	—	系切り底	器外に砂粒含み。焼成良好。茶褐色。	〃	
70	202	〃	7.8	5.0	1.6	—	—	系切り底	器外に砂粒含み。焼成良好。内面は茶褐色。外面は褐茶色。	〃	
70	203	〃	14	—	6.8	(0.7)	—	系切り底	器外に砂粒含み。焼成良好。内面は茶褐色。外面は褐茶色。	〃	
70	204	〃	〃	—	7.4	(0.7)	—	系切り底、板状压痕	器外に砂粒含み。焼成良好。内面は褐茶色。外面は茶褐色。	〃	
70	205	〃	〃	12.4	8.0	2.6	—	系切り底	器外に大粒の砂含み。焼成良好。茶褐色。	〃	
70	206	〃	〃	12.0	8.0	2.6	—	系切り底	器外に大粒の砂含み。焼成良好。内面は初系色。外面は褐茶色。	〃	
70	207	盤	—	—	—	—	—	口縁盛り、器體が薄い。	高地は白色。鶏冠。深灰青色を帯びた透明白。	明末	
70	208	瓦質土器	盤鉢	—	—	—	—	口縁盛り、内面はコロハチ、下口には7本以上	器外に肥厚。外便後環压痕。内面はコロハチ、下口には7本以上。	〃	
70	209	陶器	〃	33.8	—	(5.2)	—	コ縁盛部をつまみ出して 器口をせめる	高地に砂粒含み。焼成良好。小豆色。	備前美V期	
70	210	瓦質土器	盤鉢	—	13.4	(7.3)	—	上口縁、内面コロハチ、外面に直溝压痕	器外に2mm前後の砂粒含み。焼成良好。茶褐色。	SX14	
71	214	土師器	皿	6.8	5.4	1.1	—	系切り底	器外に砂粒を含み、透明白。焼成良好。深灰青色。	SX16 内側内	
71	215	〃	〃	7.0	4.0	1.4	—	系切り底、口縁端部に保付有	土外に砂粒含み。焼成良好。深灰青色。	〃	
71	216	〃	〃	9.0	7.0	1.75	—	系切り底	器外に砂粒を含み。焼成良好。茶褐色。	SX16 挿り方	
71	217	〃	杯	10.4	7.0	2.8	—	系切り底、板状压痕	器外に砂粒を含み。焼成良好。深灰青色。	SX16 内側内	
71	218	〃	〃	11.0	7.2	2.3	—	系切り底	器外に砂粒を含み。焼成良好。深灰青色。	〃	
71	219	〃	〃	13.8	10.0	2.4	—	系切り底、板状压痕	器外に砂粒を含み。焼成良好。深灰青色。	SX16 挿り方	
71	220	白釉	皿	—	—	5.2	(1.3)	内口は繊細に突る。側片有	器外は白色。砂粒を含む。白色。透明釉。内口は斜めハサギ。質入。	SX16 植木	
71	221	〃	小碗	—	—	3.8	(2.1)	内口は高く突る。蓋付	高地は白色。隔離。茶褐色を帯びた透明白。	SX16 内側内	
71	222	寄皿	備	—	4.0	(1.6)	—	口台は無く尖る	高地に白色。砂粒少ない。淡緑灰青色。佔居は白に黒点で點打。	SX16	
71	223	〃	〃	—	—	—	—	端反り口、先端は尖る	茶褐色に天井に、砂粒を含む。焼成良好。内面側に壓痕。茶褐色。	SX16 高麗 内側内	
71	224	米付	皿	11.2	5.3	2.6	—	基底直、コ縁折や中内凹、体部は丸突をもつ	高地は白色。隔離。透明白。器底は体部下凹した全、口縫部内面1条、見込み1条。外面は凸起。	SX16 明 内側内	
71	225	口縁	〃	—	13.0	—	—	口縁に輪化。内縁に直縁的に開く	器底は白色。隔離。透明白。内面は取剥き。器底の形状。	SX16 計前	
71	226	〃	底	10.0	—	—	—	体部は丸突をもつ 直縁	高地は白色。砂粒少なく隔離。透明白。	SX16 17C後～18C 内側内	
71	227	陶器	皿	11.4	—	—	—	口縁部は内向気味に外反	高地は深灰青色。砂粒を含み。焼成良好。深灰青色。白化粘土。	SX16 唐津燒	
71	228	〃	小碗	10.0	5.6	3.8	—	内口台は斜めに張る。断面は鋸三角形	高地は白色。砂粒を含む。焼成良好。浅灰青色。質入。蓋付。	SX16 筑前 内側内	
71	229	〃	皿	—	5.0	(3.6)	—	内口台は丸突。体部は丸突をもつ。足込み有	高地は淡灰青色。砂粒多い。透明白。	備前燒 慶安～元和	
71	230	〃	—	—	4.6	(0.9)	高台は低い。ヨウ字形	器外は淡灰色。砂粒を含む。焼成良好。透明白。内面に鉢輪。	唐津燒 16C水～17C初		
71	231	〃	—	—	—	—	—	筋縫目縫	高地は灰白色。隔離。灰綠色。	唐津燒 1630年	
71	232	〃	—	—	—	—	—	口縁部内側に段をもつ。	高地は灰白色。砂粒を含む。灰綠色。	唐津燒 1600～1630年	
71	233	〃	—	—	—	—	—	口縁部は玉筋状	高地は茶褐色。砂粒を含む。淡灰青色。	唐津燒	
71	234	片口	—	—	—	—	—	—	高地は茶褐色。砂粒を含む。隔離。	唐津燒 17C後～18C	

件名番号	遺物番号	種類	器種	法 量 (cm)			形態の特徴	文様・施錫・色調・素地等	出土 遺構	備 考	
				口 径	底 径	厚 (高台径)					
71	235	染付	碗	—	5.0	(2.0)	唇底部の底部。体部内面 高台は現存	素地に白色、砂粒を含む。淡灰色を帯びた 施錫部、外底に青入。濃縮した体部下位に1 条、高台外縁に2条。	SX16 内側内	1690年～18C 前	
〃	236	〃	〃	—	10.8	4.8	5.1	高台は断面が三角形、体 部の裏は盛り。	SX16 内側内	1690年～1800年	
〃	237	陶 瓶	瓶	—	11.8	—	(3.2)	口部部は内側に横線で外底 高台は盛り。	SX16 内側内	無	
〃	238	〃	瓶	—	5.0	(1.4)	高台は盛り。	素地は灰色、横線、天目窓。口部周辺部は施 錫部外縁に1条の横線。外底に款文。	SX16 内側内	無	
〃	239	〃	瓶	—	—	—	口部部は外反し、端部は 肥厚	本体は茶褐色、形状少なく輪郭。練茶褐色地。 内色化粧工の施錫部。	SX16 内側内	肥前 18C 前	
〃	240	〃	瓶	—	7.4	(7.0)	施錫。平底。内面に同心 円の凹凸模	本体は茶褐色、砂粒を含む。施錫良好。灰 褐色地。白化粧工の施錫部。外底に村井印。	SX16 内側内	肥前 17C 前～18C 中	
〃	241	〃	瓶	—	10.0	—	(3.5)	口部部は外反し、端部は 肥厚	素地は灰色、砂粒を含む。施錫良好。灰 褐色地。	SX16 内側内	肥前 17C 前～18C 中
72	242	十脚質 土器	鉢	—	—	—	口部部は若干厚壁。内 面ヨコカケ	施錫上に砂粒多い。施錫良好。淡灰色地。	SX16 内側内	無	
〃	243	瓦質土 器	鉢	—	—	—	断面部。内面ヨコカケ。 下には1.5本以上	施錫上に砂粒含み、淡灰色。施錫良好。外 面は施錫部。	SX16 内側内	無	
〃	244	二脚質 土器	鉢	—	—	—	口部部は若干厚壁。内 面ヨコカケ	施錫上に砂粒多く、淡灰色。淡灰色地。	SX16 内側内	無	
〃	245	〃	鉢	—	—	—	口部部は内側に肥厚。 内面ヨコカケ	施錫上に砂粒多く、施錫良好。淡茶褐色地。	SX16 内側内	無	
〃	246	瓦質土 器	火舟	—	—	—	縁付。全体は筒形に開く。 内面ヨコカケ	施錫上に砂粒多く、施錫良好。灰褐色。外 面は施錫部。	SX16 内側内	無	
〃	247	十脚質 土器	鉢	—	—	—	くの字形口巻足で、輪形 足を2つみ出す。外向に葉 付柄	施錫上は3mm程度の砂粒を含み、施錫良好。 淡灰色地。	SX16 内側内	無	
〃	248	洞窓質 土器	鉢	—	—	—	口部部は玉巻状	施錫上に砂粒多い。施錫良好。内底は灰褐色。 外底は淡褐色。	SX16 内側内	東福寺	
〃	249	制 造 機械	—	—	—	—	中央に1孔、底部は浅い。 内面の下口は摩耗で、 9本以上の半位	施錫地は淡褐色、砂粒を含む。外底は小豆色。 施錫部の下の1孔の位置。	SX16 内側内	佐賀県	
〃	250	〃	鋸	—	—	—	L字形口縫	素地は茶褐色、砂粒を含む。外底に黄褐色 と模様色の一部の位置。	SX16 内側内	17C 前～18C 中	
〃	251	〃	鋸	—	—	—	逆L字形口縫。平底直に 肩部、肩から丸も	素地は茶褐色地、砂粒を含む。施錫。螺形 螺。	SX16 内側内	筑前 17C	
〃	252	〃	鋸鉋	24.6	—	(5.1)	口縫部をつまみ出して 舌立させる。内面の下し 口は1.5本以上。	素地は砂粒を含み、底少色。舌向は淡茶 褐色。	SX16 内側内	備前 17C	
〃	253	〃	—	—	—	—	口縫部を深めし、外向に 2つの花柱。脚部はヨコ カケ。	施錫地は砂粒を含み、淡褐色。表面は茶褐色。 内面は2つの花柱。	SX16 内側内	高吸水	
〃	254	〃	—	37.4	—	(5.2)	口縫部は内面につまみ出 して舌立させる。内面の下し 口は4本以上。	施錫地は茶褐色。施錫部を含む。口縫部は施 錫部。体部は茶褐色。	SX16 内側内	備前 17C	
74	258	土師壺	壺	7.3	6.2	1.2	糸切り式	施錫上は施錫。施錫良好。淡茶褐色。	SX16 内側内	無	
〃	259	〃	壺	1b.0	10.0	2.1	糸切り式	施錫上は施錫。施錫良好。淡褐色。	SX16 内側内	無	
〃	260	〃	壺	12.0	—	(2.2)	底部を欠く	施錫上は砂粒少なく、紹締、茶褐色。施錫良 好。	SX16 内側内	無	
〃	261	〃	壺	—	10.0	(1.3)	糸切り式、板状化粧	施錫上に砂粒少ない。施錫良好。淡茶褐色。	SX16 内側内	無	
〃	262	洞窓器	壺	—	—	—	口縫部下位をつまみ出 す。	施錫上は施錫。施錫良好。灰褐色。	SX16 内側内	無	
〃	263	青 瓷	壺	—	4.6	(2.3)	口台は廢止。体部は直線 の開口部。	素地に施錫。淡灰色。施錫良好。灰褐色の 施錫部。外底は模様文、列点文。外底は施 錫部。	SX16 内側内	周安窑系	
〃	264	〃	瓶	—	5.8	—	3.4	山巒状口縫、瓶部は筒状	施錫地は淡褐色、灰褐色。青釉を帯びた翠色地。	SX16 内側内	無
〃	265	瓦質土 器	角火 鉢	—	—	—	口縫部直口、祀する。 内面施加灰漬、タテハケ	施錫上に大粒の砂粒を含み、淡茶褐色。施錫良 好。口縫部外縁に内面施加タテハケ。	SX16 内側内	無	
〃	266	〃	滑鉋	—	—	—	四脚足。内面ヨコカケ。 トロ口は5本爪	施錫地は粗い。施錫良好。淡茶褐色。	SX16 内側内	無	

地図番号	測量番号	種類	器種	法 算 (cm)			形態の特徴	文様・施釉・色調・裏面等	山土 透視	備考
				幅 径	高 さ	厚 (山台付)				
74	287	瓦質土器	擂鉢	—	—	—	口縁部を肥厚、内面ヨコハケ	器土は重い。焼成良好。暗灰色。	SX19	
"	288	"	火内	—	—	—	口縁部少し	器土は細緻。焼成良好。暗灰色。外側は無色研磨。外面に菊花紋のスタンプ。	"	
"	289	朱付	碗	—	4.0	(3.2)	体部は丸みをもつ。高台は低い。蓋付に砂目跡	裏地は青緑色、白色、白色物。圓錐は高台2条。蓋底下1条。朱台1条。外面に文様。	SX20	肥前 1090年～18C前
"	290	陶器	擂鉢	—	—	—	Y字型口縁。外縁部を肥厚さす。2条の吹抜痕がある。内面の下し目は? 本半位	裏地は青緑色。砂粒含む。口縁部に濃灰色。	"	小台原か。17C末～18C前
75	294	上切鉢	皿	6.6	4.8	0.9	手切り式	器土に砂粒多く。焼成良好。淡茶褐色。	SX21	
"	295	白器	小筒		2.3	(1.7)	体部は平底部。高台は削り出された。蓋は白灰色。	裏地は無地。白色。焼成良好。青釉を帯びた透明白釉。	"	18C後～19C初
"	296	朱付	"	6.8	2.6	2.4	体部は平底部。高台は削り出された。蓋は白灰色。	裏地は白灰色。透明物。外面に文様。	"	肥前 18C
"	297	陶器	碗	9.0	5.4	2.6	高台部をカズリ。体部は内側に斜張	裏地は青緑色。淡灰色。茶色帯びた透明白。外側に貫入。	"	肥西系 18C中～大
"	298	朱付	"	—	3.4	(3.0)	高台は高く、高い。体部は丸みをもつ	裏地は白色で、點斑、青色を併せた透明白。内側・外縁に點斑。蓋底は高台2条。本部下位1条。見込みに2条。	"	肥前 19C前～幕末
"	299	"	皿	11.1	8.5	2.4	高台に高い。体部は直線的で、口縁部鋸歯化	裏地は結構。白色。透明物。内面に斜張。	"	肥前 19C初～幕末
"	300	"	碗	10.2	4.0	5.7	高台は外縁。口縁部は滑り出し気味。蓋は張る。	裏地に溜吸腔を含む。白色。青色帯びた透明白。蓋底は口縁部に1条。内面2条。外縁に2条の斜張。	"	肥前 1600年～幕末
"	301	"	蓋	4.8	—	1.3	天井部は丸みをもつ。高台合子の蓋	裏地は無地で、白色。透明窓を全面窓化。天井部は外縁に2条。	"	18C初～幕末
"	302	"	"	9.0	—	(2.7)	口縫部の内側にかえし、つまみは厚底状、十字の巻	裏地に天色、淡緑。外面は灰緑色を併せた透明白。貫入。内面は厚底。	"	肥西系 19C末～幕末
"	303	"	瓶	7.8	—	(1.2)	口縫部片、縁部は肥厚	裏地に無い。暗灰色。淡灰色の透明白。	"	筑前 18C
"	304	陶器	擂鉢	37.6	—	(10.3)	口縫部は玉蟲形に肥厚。片口。2本半位の下し目	裏地に砂粒多い。焼成良好。暗い灰色。	"	筑前、又は肥前 19C代
"	305	"	水盤	—	—	—	口縫部は上手形。体部は四脚形で	裏地に2mm程の砂粒あり。焼成良好。青色。	"	四足
76	287	朱付	皿	—	6.5	(1.5)	高台は低く、丸みをもつ。蓋付砂目	裏地は白色。熱線。透明白。内面を分辺し。厚化支承でなく。	SX30	肥前 18C中～大
"	288	陶器	"	—	5.8	(1.5)	高台は低く、丸みをもつ。蓋付砂目	裏地は天色。構造。灰色を併せた透明白。内面に草花文。見込みに2条。	"	肥前 18C前～小
"	289	朱付	"	—	4.8	(1.0)	外底部に埋込。朱筒武	裏地に無地で、茶色を併せた乳白色。青色を併せた透明白。内面に草花文。見込みに2条。	"	初期の有田 1650～1680年
"	290	青磁	角皿	—	—	—	体部はやや丸みをもつ。裏面に砂目	裏地は白色。薄緑。灰色を併せた緑色釉。	"	有田 1600～1670年
"	291	陶器	裏	—	—	—	内外面に巻き口回り。外側に面はヨコアシ	裏地に砂粒含み。構造。内外面は小豆色～暗小豆色。	"	唐津焼
"	292	土師質土器	七口	—	13.3	10.3	外加指輪片装。内面はヨコヨコカナリ。底受付の突起1条	裏地に大粒の砂粒含む。茶褐色。	"	唐津焼
77	296	青磁	碗	15.8	6.8	7.4	完壁形。口縁部は外反気味。高台は厚底の弓形	裏地は天色。薄緑。暗緑灰色調。見込みは青磁青の鉢底。	SX31	鹿児島系 1～1級
"	297	上切鉢	耳	—	7.4	(0.9)	舟切り式。波状底	裏地は無地。焼成良好。淡灰褐色。茶色の舟形。	SX32	
"	298	"	"	—	8.2	(1.5)	舟切り式。波状底	裏地に砂粒が多い。淡灰褐色。	"	
"	299	瓦質土器	火内	19.2	14.6	7.9	口縫部の内側を肥厚させた半底丸。脚付、内面ヘーフタジ	裏地は淡灰褐色。砂粒多い。焼成良好。外側は暗灰褐色、研磨。	"	
"	300	瓦質土器	碗	—	—	—	口縫部は外反	裏地は天色。使法良好。暗緑灰色釉。口縫部内側に天色の網目。	"	龍谷系
"	301	土師質土器	擂鉢	—	—	—	口縫部片、端端をつまみ出す。内面ヨコアシ	裏地に人形の砂含み。茶灰褐色。焼成良好。	"	
"	302	瓦質土器	擂鉢	—	—	—	口縫部片、若干肥厚。内面ヨコアシ。下し目は6木はト	砂粒は暗灰褐色。砂粒多い。焼成良好。内外面は淡灰褐色。	"	
"	303	陶器	裏	—	—	—	N字式口縁	裏地に3mm程の砂粒多い。暗灰褐色。内面は系掛。	"	宝塚焼

Tab. 2 第68次調査遺物一覧表 ④ その他の山土遺物

番号	遺物名	種類	形態	法量 (cm)	形態の特徴	文様・施釉・色調・表面等	出土遺物	備考
82	304 白 磁	碗	高台は内傾、底部は直傾 内面に横縞	— 6.0 (2.6)	底部は内傾、体部は直傾 内面に横縞	素地は灰白色。燒成良好。透明釉。	A-BT	
83	305 土器器	皿	— 7.8 6.2 1.3	手作り感、板状底盤	胎土に砂粒を含み、表面に鉄分付着。灰褐色。	"		
84	307 瓦質土器	鉢	— — —	口縁部は丸味をもつ、外面ヨコハケ、外面タテハケ	胎土に砂粒を含み、褐色。燒成良好。	AT SK32石模遺跡		
85	308 "	"	— — —	口縁部に肥厚、端部丸い、内面ヨコハケ	胎土に砂粒を含み、灰褐色。燒成良好。	"		
86	309 土器器	皿	9.2 7.0 1.1	手切り感、板状底盤	胎土に砂粒を含み、燒成良好。胎系灰色。	BT 墓下部鉄合有層		
87	310 灰 磁	"	11.0	(2.5)	体部は内窓、口縁部は直傾	胎土は焼成。灰白色。燒成良好。内外面は暗褐色。	"	
88	311 土器器	耳	12.8 8.0 2.5	手切り感	胎土は灰褐色。燒成良好。	"		
89	312 青 磁	碗	— (5.0) (2.6)	直腹器蓋が厚い、内面見込に入り式底	素地は灰白色。燒成良好。表面銀色釉。外面に擦擦文。	同安塗ぬ上層ヨコハケ層		
90	313 十字彫 土器	鉢	29.4	— (10.4)	口縁部は内面気泡に外反、内面ヨコハケ、内面タテハケ	胎土は灰褐色。燒成良好。	"	
91	314 青 磁	皿	9.4 4.0 2.1	腹部は盛り腰折	素地は灰白色。胎系黄色。暗灰色點。外面に擦擦文。	CT 露泉窯系		
92	315 "	"	—	—	胎土は丸味をもつ	素地は灰白色。燒成良好。胎系灰色點。内面に擦擦文。	同安塗ぬ	
93	316 "	"	— 8.2 (3.0)	体部は丸味をもつ	素地は灰白色。燒成良好。胎系灰色點。内外面に擦擦文。	同安塗ぬ		
94	317 瓦質土器	鉢	— — —	口縁部厚	胎土に砂粒含み。直い。燒成感。	"		
95	318 上器器	杯	14.8 10.0 2.4	手切り感	胎土は直線、淡青褐色。	BT 墓下部層		
96	319 "	"	17.4 6.0 2.6	手切り感、板状底盤	胎土に砂粒含み。燒成良好。灰褐色。	"	上層	
97	320 灰 磁	碗	— — —	器頭に肥い、体部は丸味をもつ、内面へり突起、外面は斜傾底盤	胎土に砂粒含み。灰褐色。内面は細褐色。外面は灰褐色。	"	最下部層	
98	321 漆器器	高杯	— — —	脚無	胎土に砂粒含み。直い。燒成感。	"		
99	322 "	盖	—	— 口蓋片	胎土に砂粒含み。黒灰色。燒成良好。	BT 漆器層		
100	323 上器器	皿	8.0 6.4 0.9	手切り感、板状底盤	胎土に砂粒含み。燒成良好。灰褐色。胎系の一部は素褐色。	"		
101	324 "	杯	12.4 8.0 2.3	手切り感、板状底盤	胎土は薄壁。燒成良好。素褐色。	"		
102	325 青 磁	碗	15.6	(3.5)	口縁部は外反腹味	素地は薄味。燒成良好。灰褐色。灰褐色色點。外面に擦擦文。内面に片切削感りと擦擦文。	同安塗ぬ	
103	326 "	"	— (4.4)	(3.4)	胎土は丸味をもつ、開く	素地に擦擦文。成土色。燒成良好。チリーブ色點。外面に擦擦文。内面に片切削感。	"	
104	327 三 彩	"	14.8	— (5.3)	口縁部外反、口先	胎土に砂粒含み。灰褐色。青味をもった天色點。	玉瓶	
105	328 青 磁	"	— (4.5)	(2.1)	高台は低く、口の字形	素地は精緻、淡褐色。燒成良好。淡褐色色點。外行に擦擦文。内面に擦擦文。	同安塗ぬ	
106	329 "	"	16.0	— (5.5)	口縁部は外反	胎土は細孔、砂粒少なし。素地銀色點。外行に擦擦文。内面に擦擦文。	BT 墓下部層	
107	330 白 磁	"	— (3.0)	(3.2)	高台に高い。体部はやや内凹	素地に砂粒を含み、白灰色。燒成良好。灰褐色。	"	
108	331 瓦質土器	寺	—	—	上縁笠形で、腹壁は短い、外側にタケハケ	胎土に擦擦文。燒成良好。黑色。	"	
109	332 砂 器	鑿	— 13.4 (4.4)	器體は厚い、平底	高台に砂粒を含み、燒成良好。外側に斜底、方舟は灰褐色色點。	藍前窯		
110	333 土質質	羽釜	— 33.8	— (8.4)	体部は内傾し、外側に脚が付く	胎土に砂粒を含み、燒成良好。胎体外側に灰褐色色點。内面は灰褐色色點。	畿内産	
111	1 胸 器	皿	—	—	口縁部は外反	素地銀色點。灰褐色。燒成良好。灰褐色色點。	P-102 遺跡	
112	2 "	鎬	— 5.8	(3.3)	高台は内傾、蓝色の器蓋	胎土に砂粒を含み。綠青褐色色。	"	
113	3 "	"	12.0 4.6 8.1	高台は肥伏、体部は内凹	素地は灰褐色。燒成良好。胎色銀色點。高角、高底。	小石原 17C 東～18D 中		
114	4 "	"	— 7.4	— (6.3)	器物の身。半球絶形	素地は灰白色。燒成良好。胎色銀色點。胎底面には草花文。	昭和津	

標本番号	造形名	種類	形状	法量 (cm)			形態の特徴	文様・施繪・色調・底地等	出土 遺物	備考
				口径	底径	高さ				
84	5 脚 瓶	鉢	28.4	—	(7.7)	休部内側気泡に閉く、口 輪部外縁	底地に砂粒を含み、茶褐色。外面は暗赤褐色。 内面は刷毛目、緑色、褐色の一部。		Pt-02	二彩唐津 17 C後~18C中
85	6 白 瓶	瓶	—	(4.0)	(1.6)	台座は断面ヨコの字形	質地上に白色。完成良好。施淡灰褐色。		P-04	船載
86	1 上部器	皿	6.2	4.4	1.3	舟切り式	胎土上に砂粒を含み、焼成良好。明黄褐色。			
87	2 "	"	7.2	4.4	1.8	舟切り式、口縁部内面に 斜付壁	胎土に2mm程度の砂粒を含む。明茶褐色。			
88	3 "	"	7.6	6.0	1.3	舟切り底	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡灰褐色。			
89	4 "	"	8.6	6.2	1.4	舟切り底	胎土上に砂粒を含み、焼成良好。淡灰褐色。			
90	5 "	"	9.0	6.2	1.4	舟切り底	胎土に砂粒を含み、焼成良好。黄茶褐色。			
91	6 "	"	10.0	7.4	1.7	舟切り底、盤付茎	胎土に砂粒を含み、焼成良好。暗茶褐色。			
92	7 "	"	10.8	8.0	1.6	舟切り底、底部に盤付茎	胎土上に砂粒を含み、焼成良好。淡灰褐色。			
93	8 "	"	14.0	10.0	1.6	口縁部は外反	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡灰褐色。			平安時代
94	9 瓦質上 器	高杯	13.8	—	(3.2)	山巒部片	胎土に砂粒を含み、焼成良好。茶褐色。胎 地は口縁部内面に1条。			
95	10 脚 瓶	瓶	11.9	—	5.0	口縁部下で屈曲し、口縁 部は外反	胎地は淡灰褐色。完成良好。暗茶褐色。胎 地厚い。			天日茶碗
96	11 "	"	11.8	4.6	5.5	削出し高台、口縁部外 反	胎地は淡茶色。暗茶褐色。胎厚い。焼成良 好。			
97	12 白 瓶	瓶	—	(5.5)	(2.5)	高台に裏く、細い	胎地は淡茶色。灰褐色。灰褐色。胎幅は見 込みに1条。			四脚
98	13 海 鰐	皿	—	(5.7)	(1.5)	高台は低い。内面に目前 縁	胎地は1~2mm程度を含む。灰色。内底 に斜底革足。			胎地は 斜底革足。
99	14 "	"	13.5	4.4	4.0	二二ヶ所台、腰が低く張 り、口縁部は内凹風景に 外反	胎地に砂を含み、明黄茶褐色。灰褐色。胎 底に斜底(斜足)			
100	15 "	瓶	—	4.0	(2.0)	体部内面、高台に斜い 溝	胎地は茶褐色。暗茶褐色。素 材は茶褐色。			小石川 18C
101	16 "	皿	—	(5.3)	(1.7)	高台は斜く、腹が張る。 胎地込みに白帯	胎地は暗褐色。淡茶褐色。胎底良好。深灰茶 褐色の白帯。内底に斜底革足。			唐津燒
102	17 "	"	—	(4.6)	(1.8)	台座は二の字型、腰が低く 張り、斜付と見込みに砂底	胎地は斜底。灰白色。胎底良好。透明釉。 胎厚は薄い。			唐津燒
103	18 "	瓶	9.1	4.0	4.6	休部は広がり脚折し、口縁 部は外反	胎地は斜底。灰褐色。暗茶褐色。内底にヘア 片付り。			埋灰窯系I期
104	19 空 瓶	瓶	16.0	—	(5.8)	口縁部外反	胎地は暗褐色。淡茶褐色。胎底良好。灰茶 褐色。			唐津燒
105	20 海 鰐	皿	—	(11.8)	(1.5)	胎底は厚い、見込みに砂 底	胎地は暗褐色。茶褐色。			
106	21 "	"	—	(5.4)	(1.9)	胎底は斜く、腰が張る。 胎地込みに砂底	胎地は暗褐色。茶褐色。胎底良好。灰褐色。			古唐津
107	22 楠 付	皿	—	(5.5)	(1.5)	柱付は無い。削出し三脚 状	胎地は斜底。灰白色。胎底良好。透明釉。 胎厚は薄い。			吉田良 1650~1660年
108	23 肉 瓶	鉢	25.4	—	(3.7)	口縁部は内面に屈曲	胎地は斜底。内底は始茶褐色。外底は茶灰 褐色。			猪前燒
109	24 "	盤	13.7	—	(5.0)	口縁部外側に肥厚さ せる、斜付	胎地は斜底。茶褐色。暗茶褐色。			小国燒
110	25 土 壁 質 土器	鉢	—	—	—	口縁部を肥厚させる に繋がる反、端部に斜い。 休部の内面に舟形の印 き目	胎地に砂粒を含み、灰褐色。内底は茶褐色。 胎地に砂粒を含み、素褐色。茶褐色。			李朝
111	26 瓜 器	皿	9.7	—	(13.5)	—	胎地に砂粒を含み、素褐色。茶褐色。			
112	27 瓦質上 器	火舟	—	—	—	胎底は厚い。口縁部は平 坦面を形成	胎地に4mm大的砂粒を含む。口縁部外側に 1~2mmの角丸を削り、外側は黑色。内底 は素褐色。			
113	28 "	"	—	—	—	内向ミヨカケ、胎底部 底	胎地に砂粒を含み、物肌良好、暗茶褐色。黑 色背景。体部外側に舟形の印記。			
114	29 脚 瓶	皿	—	—	—	平底。休部は内凹風景、 斜底状。内底に印記	胎地に砂粒を含む。暗茶褐色。			李朝
115	30 瓦質上 器	火舟	—	—	—	休部は内凹風景に開く。 外側に突起	胎地に砂粒を含み、暗茶褐色。口縁部下に 丸形のスタンプ。			
116	31 "	"	20.8	—	(3.1)	口縁部は直口、頭端を 2点止め。胎底は厚い。 休部は斜底。口縁部を肥 厚させる。内底はマツメ 目。口底は木半球	胎地に砂粒を含み、暗茶褐色。外底は馬耳 形。外曲にタク方角の条面。内底スタンプ。			
117	32 "	酒杯	31.0	14.2	12.9	—	胎地に砂粒を含み、深灰褐色~灰茶褐色。			

Tab. 3 第68次調査出土瓦類一覧表 ① 細平瓦

番号	出土地	施設名	文様	厚さ	上外板		下外板		底 厚さ	色 調	粒 土	焼成	形 況・製作技術	備考		
					厚さ	高さ	厚さ	高さ								
16 47	SK07	軒平瓦	唐草文	4.6	0.8	0.7	0.7	0.6	2.8	1.5	墨灰色	人絞の砂を含む	良好	中心飾り不明 ナデ調整		
17 117	SK21	"	"	4.7	0.9	0.2	0.7	0.3	1.5	1.6	墨灰色	砂粒を含む	"	ナデ調整 中心飾りは宝珠形		
" 124	SK22	"	"	-	-	-	-	0.8	0.3	2.3	1.5	茶灰色	精良	"	ココナデ調整	
20 139	SE04 猪之方	"	"	4.5	1.3	0.3	0.9	0.4	-	1.6	墨灰色	精良	"	中心飾りは三葉文		
" 140	"	"	"	3.0	0.8	0.3	0.5	0.3	2.0	1.3	淡茶灰色	2~3mmの砂粒を含む	"	"		
33 190	SE12 井筒	"	"	3.8	0.9	0.2	-	-	1.9	2.1	暗灰青色	精良	"	"		
39 239	SE15	"	-	2.0	-	-	-	-	-	灰黑色	砂粒を含む	良好	糸切り 筋割れ状況き目			
42 277	SE18	"	"	4.4	0.8	0.2	0.9	0.3	1.2	2.3	灰白色	1~3mmの砂粒を含む	"	ナデ調整		
52 384	SR20	"	"	3.7	1.0	-	0.9	0.6	0.7	2.2	淡灰白色～ 灰白色	人絞の砂を含む	"	ナデ調整	A類	
" 385	"	"	"	3.0	0.5	0.3	0.6	0.4	-	2.0	各色～ 墨灰色	人絞の砂を含む	"	ナデ調整 中心飾りは宝珠形	B I類	
" 386	"	"	"	3.6	0.5	0.4	0.8	0.4	0.9	2.0	淡灰色～ 灰白色	砂粒を含む	"	"	"	
" 387	"	"	"	4.4	0.6	0.4	0.6	0.4	-	2.1	淡灰茶色	砂粒を含む	"	ナデ調整	A類	
" 388	"	"	"	4.4	0.5	0.4	0.7	0.5	1.1	2.2	淡灰茶色～ 墨灰色	砂粒を含む	"	"	"	
" 389	"	"	"	3.8	0.5	0.5	0.4	0.5	-	1.9	明茶褐色～ 墨灰色	大絞の砂を含む	"	"	"	
" 390	"	"	"	3.4	0.5	0.4	-	-	1.5	墨灰色	大絞の砂を含む	"	"	"		
" 391	"	"	"	3.4	0.6	0.5	0.7	0.5	1.5	2.5	淡灰茶色～ 灰白色	大絞の砂を含む	"	ナデ調整 中心飾りは宝珠形	C類	
" 392	"	"	"	4.2	0.8	0.6	0.7	0.5	0.9	2.0	やや小茶色～ 墨灰色	精良	"	ナデ調整	D類	
" 393	"	"	"	3.8	0.5	0.1	0.7	0.3	1.2	2.4	淡灰茶色～ 墨灰色	人絞の砂を含む	"	"	E類	
" 394	"	"	"	3.8	-	-	-	-	-	1.3	淡灰茶色～ 墨灰色	精良	"	"	B I類	
" 395	"	"	"	3.6	0.8	0.5	0.7	0.4	-	2.0	灰灰色	砂粒を含む	"	"	C類	
" 396	"	"	"	4.1	0.6	0.6	-	-	1.1	2.0	淡灰茶色～ 墨灰色	人絞の砂を含む	"	ナデ調整	F類	
" 397	"	"	"	4.5	0.5	0.3	0.7	0.8	0.9	2.5	淡灰茶色	人絞の砂を含む	"	"	G類	
59 46	SX02	近縁 唐草文	4.4	1.4	0.6	0.9	0.6	1.3	1.8	暗灰色	砂粒を含む 精良	良好	ミコナグ四葉 中心飾りは宝珠形			
" 47	"	唐草文	4.0	0.8	0.2	0.5	0.3	-	1.8	暗灰色	砂粒を含み 精良	"	ココナデ調整			
69 197	SX07	梅花文	4.1	-	-	-	-	-	4.0	1.2	灰黄色	2~3mmの 砂粒を含む	"	ココナデ調整とナデ調 整		
87 36	遺構面	唐草文	-	-	-	-	0.8	0.5	-	1.6	茶色	1~3mmの 砂粒を含む	"	中心飾りは宝珠形 ココナデにヘラケズリ 後ナデ調整、中心飾り に一葉文(新含む)		
" 37	"	"	"	-	-	-	-	1.3	0.6	1.5	灰茶色	2~3mmの 砂粒を含む	良好	高麗瓦		

② (軒丸瓦)

番号 登録番号	出上 場所	種類	文様	径	内 外 径	外 形 幅	高さ	径 高さ	厚さ	基 部 厚	色 調	胎 土	焼成	形態・製作方法	備考	
13 88	SK18	軒丸瓦	三巴文	13.7	-	-	2.2	0.8	3.9	0.3	1.1	灰青色	淡灰色で 砂粒を含む	日本文を書き、尾が短い。底文は14cm		
42 24	SR18	#	#	-	-	-	1.9	0.7	6.8	3.2	1.2	灰黑色	2mm前後 の砂粒を含む	#	瓦当の一端のみ	
# 25	#	#	#	-	-	-	0.9	0.8	6.3	0.3	1.1	墨灰色	砂粒と墨 粉を混じる		瓦当の一端のみ	
52 30	SE20	#	七文	-	-	-	1.3	1.2	-	-	1.6	墨灰色	砂粒を含む	#	瓦当の一端のみ	
# 39	#	#	#	18.5	-	-	1.4	1.3	-	-	-	墨灰色	2~3mm の砂粒を含む	日本文の高さ0.8cm、瓦 当面に墨模様		
# 39	#	#	#	26.0	-	-	1 /	1 /	-	-	2.9	13.5	墨灰色	砂粒を含む	日本文を書き、底文は 14cm	
53 39	#	#	三 文	12.6	-	-	1.0	0.8	6.5	0.2	1.8	墨灰色~ 墨灰色	砂粒を含む	#	日本文を書き、底文は 14cm	
# 39	#	#	#	13.3	-	-	1.4	0.8	6.9	0.2	1.7	墨灰色~ 墨灰色	砂粒を含む	#	日本文を書き、底文は 14cm	
84 17	SX03	#	#	(16.4)	-	-	-	1.5	6.2	1.2	-	灰青色	2~3mm の砂粒を含む	#	日本文を書き、底文は 12cm	
# 138	SX03 6厘	#	#	14.2	-	-	1.8	0.3	1.3	0.2	1.3	14.2 灰青色	2~3mm の砂粒を含む	#	巴文と墨書き、底文は 6厘の墨文の複合化なし。底文は12cm	
# 135	SX03 9厘	#	#	13.3	-	-	1.6	0.3	1.0	0.3	1.8	墨灰色	砂粒を含む	#	巴文を書き、底文は 9厘	
67 15	SX04	#	選季 文	10.0	-	-	1.0	0.4	-	-	1.5	灰黑色	大粒の砂 粒を含む	#	墨子は欠損。 8分の墨文	
76 25	SX30	#	文	(15.0)	-	-	1.8	0.6	6.9	0.2	1.9	灰 色	砂粒を含む	#	巴文を書き、底文12 cm	
87 33	邊縫山	#	#	(15.0)	-	-	2.8	0.7	1.0	0.4	2.2	灰 色	1mm程の 砂粒を含む	#	巴文を書き、底文14 cm	
# 34	#	#	軒 文	10.0	-	-	1.5	0.8	-	-	2.5	墨灰色	砂粒を含 む	#	側斜け舟文の高さ 1.3cm	
# 35	#	#	墨文	9.0	-	-	-	-	-	-	2.0	墨灰色	1mm程の 砂粒を含 む	#	墨文の高さ0.7cm	

③ (丸瓦)

番号 登録番号	材 料	形状	尺 寸		高 さ	弧 度	色 調	胎 土	燒成	形態・製作方法	備考			
			主體部	側 部										
8 21	SK02	丸瓦	3.5	-	-	-	-	-	墨灰色	砂粒を含む	- 良好			
17 118	SK21	#	3.0	-	-	-	4.7	2.4	墨灰色~ 灰黑色	1~2mm程の 砂粒を含む	#	背に墨模様、谷は布目底		
# 123	SK22	#	-	-	-	-	-	-	灰 色	3mm程の砂 粒を含む	#	背は墨目書き、谷は布目底		
28 103	SE03 井 型	#	-	-	12.6	-	6.8	5.2	墨灰色	大粒の砂 粒を含む	#	背はナグ調整、谷は布目底		
# 104	SE03 肥 力	#	-	-	-	-	-	-	次 色	3mm程の砂 粒を含む	#	背は墨目書き、谷は布目底		
34 165	SR13	#	2.4	-	-	12.3	5.7	3.5	墨灰色	砂粒を含む	#	背はヘラケズリの後ナグ調整、 谷は布目底		
43 280	SE18	#	-	-	-	-	-	-	墨灰色	1mmの砂 粒を含む	#	背に墨目底、谷は布目底		
# 281	#	#	-	-	-	-	8.5	3.8	墨灰色	大粒の砂 粒を含む	#	背はナグ調整、谷は布目底		
54 358	SE20	#	-	-	-	-	6.0	3.9	灰 色	大粒の砂 粒を含む	#	背は墨目底、谷は布目底 と墨模様		
# 399	#	#	-	-	-	-	-	-	墨灰色	砂粒を含む	#	背はヘラケズリの後ナグ調整、 谷はヘラケズリ、谷切り底		
# 400	#	#	-	-	-	-	-	-	5.0	2.5	墨灰色~ 次色	砂粒を含む	#	背はヘラケズリの後ナグ調整、 谷は墨目底
# 401	#	#	-	-	-	-	-	-	6.4	4.2	墨灰色~ 次色	砂粒を含む	#	

番号	地 理 的 特 徴	上 述 種	種類	長さ		幅	高さ	厚さ	色調	加土	成形	形態・製作方法		備考	
				4種部	性	23	前端部	後端部							
54 402	SE20	丸瓦	丸瓦	-	-	-	-	b.6	3.7	淡灰白色 ～淡赤色	大粒の砂を含む	丸瓦	背は圓筒底と原底共に平底		
" 403	"	"	"	3.6	-	-	-	6.0	3.4	淡灰白色	砂粒を含む	"	背はヘラケズリの後ナゲ調整、谷は鶴見底		
59 48	SX02	"	"	3.6	23.6	-	14.1	6.7	4.9	普通色	大粒の砂を含む	"	背はヘラケズリの後ナゲ調整、中央部に「斜不規」の通称		
" 49	"	"	"	-	-	-	-	-	-	暗灰白色	砂粒を含む	"	背はヘラケズリの後ナゲ調整、谷は鶴見底		
64 130	SX03 4 種	"	"	-	-	-	-	-	-	暗灰白色	砂粒を含む	"	背は「六角瓦」の別名、谷は鶴見底		
" 131	"	"	"	-	-	-	-	-	-	灰瓦色	砂粒を含む	"	背は「六角瓦」の別名、谷は鶴見底		
" 132	SX03 5 種下	"	"	3.4	-	-	-	6.6	4.6	淡灰白色	砂粒を含む	"	背はヘラケズリの後ナゲ調整、右端部の斜庇、谷は布目底		
" 133	SX03 3 種	"	"	3.6	-	-	-	14.0	6.5	4.3	暗灰白色	砂粒を含む	"	背はヘラケズリの後ナゲ調整、左端部の斜庇、谷は布目底	
" 134	SX02	"	"	-	-	-	-	6.3	4.8	淡灰褐色	砂粒を含む	"	背は鶴見底、谷は布目底、ヘアで下方固定		
" 135	"	"	"	3.2	-	-	-	6.4	4.4	灰瓦色	2~3mmの砂粒を含む	"	背はヘラケズリの後ナゲ調整、谷はヘラケズリと布目底		
" 137	SX03 奥込込	"	"	-	-	-	-	6.2	3.9	暗灰白色	砂粒を含む	"	背は荷物底、谷は布目底、斜穴2つ		
70 211	SX14	"	"	2.9	-	-	14.0	6.6	4.2	暗灰白色	砂粒を含む	"	背はナゲ調整、谷は布目底、タマ刀に覆いケズリ		
" 212	"	"	"	-	-	-	-	-	-	淡灰灰色	砂粒を含む	"	背はヘラケズリの後ナゲ調整、谷は布目底と鉛錠		
72 256	SX15	"	"	-	-	-	-	-	-	黑瓦色	大粒の砂を含む	"	背は鶴見底、谷は強い鉛錠		
74 270	SX19	"	"	-	-	-	-	-	-	淡灰茶色	5mmの砂粒を含む	"	背は鶴見底、一部ヘラケズリ、谷は布目底		
75 286	SX21	"	"	2.4	-	-	-	6.2	3.8	暗灰褐色	砂粒を含む	"	背はヘラケズリの後ナゲ調整、谷は布目底		
87 38	造作陶	"	"	2.0	23.9	12.9	13.0	6.5	4.6	黑瓦色	大粒の砂を含む	"	背はヘラケズリの後ナゲ調整、各ヘラケズリ		

④ 平 瓦

番号	地 理 的 特 徴	上 述 種	種類	長さ		厚さ	幅	高さ	色調	胎土	燒成	形態・製作方法		備考
				4種部	性									
17 125	SK21 -22	平瓦	平瓦	-	2.0	-	-	-	灰 色	2~3mm程の砂粒を含む	良好	谷は布目底、背には新様子叩き窓		
26 7	SE01 井戸瓦	"	"	-	1.2	-	-	-	灰 色	粗粒	"	背はナゲ調整、谷は布目底		
" 8	"	"	"	25.0	2.8	20.5	20.4	1.2	淡灰 色	砂粒を含み粗粒	"	背はヘラケズリの後ナゲ調整	井戸瓦	
" 9	"	"	"	25.0	2.8	20.5	20.4	1.3	淡灰 色	砂粒を含み粗粒	"	背はヘラケズリの後ナゲ調整	"	
26 80	SE02 細り方	"	"	-	2.1	-	-	2.7	暗灰 色	大粒の砂を含み粗粒	"	谷はヘラケズリ、張ナゲ調整、背は細り部分		
" 81	SE02	"	"	29.8	3.0	25.8	25.8	2.0	暗灰 色	砂粒を含む	"	谷は指標正直	井戸瓦	
" 82	"	"	"	28.8	3.1	25.9	25.6	2.0	暗灰 色	人筋の砂を含む粗粒	"	谷は指標正直、背はヘラケズリの後ナゲ調整	"	
28 105	SE03 井 戸 瓦	"	"	-	1.9	-	-	2.1	灰 色	大粒の砂を含む	"	谷はヘラケズリの後ナゲ調整		
" 126	"	"	"	29.9	2.6	23.7	23.5	1.5	灰 色	大粒の砂を含む	"	谷はヘラケズリの後ナゲ調整	SE04と同一規格 井戸瓦	
" 107	"	"	"	31.0	2.9	24.7	24.6	1.9	灰 色	大理の砂を含む	"	背はヘラケズリの後ナゲ調整	"	
30 141	SE04	"	"	30.0	2.7	24.0	23.5	1.6	淡灰 色	小粒の砂を含む	"	谷は指標正直、背はナゲ調整	SE03と同一規格 井戸瓦	
" 142	"	"	"	30.8	3.2	24.5	23.7	1.8	淡灰 色	大粒の砂を含む	"	指標正直	"	
31 143	SE05	"	"	24.9	2.8	20.6	20.5	1.3	淡灰 色	人筋の砂を含む	"	背はナゲ調整	井戸瓦	
" 144	"	"	"	24.5	2.9	20.6	20.3	1.2	淡灰 色	大粒の砂を含む	"	背はヘラケズリの後ナゲ調整、背はナゲ調整	"	

試験番号	目土 造構	種類	品名	厚さ	断面形状		色調	胎	土	焼成	形態・製作方法	備考
					前輪側	後輪側						
34 164	SE12	瓦	29.7	3.2	-	0.8	鉛灰～ 素灰色	砂粒を含む	良好	ナゲ調査	井戸瓦	
" 166	SE13	"	-	3.6	-	1.4	素灰色	上部の砂粒を 除く	"	ナゲ調査	"	
37 211	SE14	"	25.2	2.8	26.5	20.4	1.5	素灰色	砂粒は含まれず 粗孔	"	谷はヘラケズリの後ナゲ調査、 背はナゲ調査	SE13と同一規格 井戸瓦
" 212	"	"	25.0	2.6	29.5	20.4	1.3	素灰色	砂粒は含まれず 粗孔	"	谷はヘラケズリの後ナゲ調査、 背はナゲ調査	"
43 282	SE18	"	-	2.5	-	-	素灰色	砂粒を含む	"	手切り、底厚1.3cmの丸穴有り		
" 283	"	"	-	1.8	19.0	-	2.8	素灰色	3～4mmの砂粒を 多く含む	"	ナゲ調査	
" 285	"	"	27.6	2.9	-	23.4	1.6	素灰色	白い砂粒を含む	やや 軟	ナゲ調査	井戸瓦
" 286	"	"	27.8	2.7	-	23.2	2.0	素灰色	砂粒は含まれず 粗孔	良好	ナゲ調査	"
44 296	SE19	"	30.9	7	24.1	24.0	2.0	素灰色	大粒の砂粒を含む	やや 軟	ヘラケズリの後ナゲ調査	"
" 297	"	"	29.2	2.9	23.8	23.6	2.0	素灰色	砂粒を含み粗孔	良好	ナゲ調査	"
54 404	SE20	"	-	1.7	-	-	素灰色 素灰褐色 色	大粒の砂粒を含む	"	谷には円状孔、背はナゲ調整		
" 407	"	"	-	2.2	-	-	0.4	素灰褐色	砂粒を含み粗孔	"	谷はヘラケズリの後ナゲ調査、 背は丸め砂付層、手切り端	
59 52	SX02	"	-	1.7	-	-	3.0	素灰色	砂粒を含む	"	ヘラケズリの後ナゲ調査	
65 139	SXC3	"	27.3	2.6	25.3	23.2	2.1	素灰色	砂粒を含む	"	ヘラケズリの後ナゲ調査	
" 140	SX03	"	-	1.7	-	-	素灰褐色 色	砂粒は含まれず 粗孔	"	手切り底、隕れ砂付層		
" 141	SX03	2層	"	-	1.7	-	-	素青色	砂粒を含む	"	谷は「利右衛門」の刻印、赤切り	
" 142	SX03	"	-	2.7	-	-	素茶色	上部の砂粒を 含む	"	ナゲ調査、剣火		
72 255	SX16	"	-	2.6	-	-	1.5	素灰～ 素灰褐色	砂粒を含む	"	ナゲ調査	

⑤ 线瓦・道具瓦・瓦博

試験番号	目土 造構	種類	品名	厚さ	()は底厚 (単位 cm)		色調	胎	土	焼成	形態・製作方法	備考
					底厚	胎厚						
8 23	SK02	线瓦	29.7	2.0	5.0	黒灰褐色	1mmの砂粒を含む	良好	ナゲ調査	1675年以前		
43 284	SE18	瓦	21.8	-	3.0	素灰褐色	1～4mmの砂粒含む	やや軟	ヘラケズリの後ナゲ調査			
54 405	SE2C	"	(11.6)	-	3.0	素灰褐色～ 素灰褐色	砂粒を含む、粗い	良好	四角塊			
" 406	"	"	(7.3)	-	4.4	素灰褐色	人筋の砂を含む	"	三角塊			
" 408	"	伏見瓦	(19.3)	-	2.1	素灰褐色	大粒の砂を含む	良好	ヘラケズリの後ナゲ調査			
65 139	SX03 4-686	线瓦	20.6	1.9	3.9	素灰褐色～ 素灰褐色	大粒の砂を含む。粗孔	"	ヘラケズリの後ナゲ調査			
" 143	SX03	鬼瓦	-	-	-	素青色	砂粒を含む	"	外縁の一筋、総合部に筋口がある			
66 196	SX07	瓦	16.1	-	1.5	素灰褐色	大小の砂粒を含む	"	径0.9cmの打穴、ナゲ調査			
74 289	SX19	"	(7.8) (11.5)	2.1	-	素灰褐色～ 素灰褐色	砂粒は含まれず 粗孔	"	径0.9cmの打穴、ハケ日焼			

Tab. 4 第68次調査石製品及び土製品一覧表

No.	標目	番号	出土 遺物	種類	器種	計 測 値	(単位cm)	石 材	備 考
1	8	23	SE02	石 製 品	鏡	現存長5.9、厚さ1.1、幅さ0.25		小豆色 無斑岩	腹部のみ1/2残る。表面は研磨
2		"	上 製 品	人形幣					布袋様の頭の部分のみ
3	20	79	SE02 彌り立	石 製 品	鏡	現存長6.5、幅さ4.4、厚さ最大1.0、最小0.4		泥板岩	使用による磨滅。色調に変色
4	28	102	SD03 牙角	土 著 品	鰐羽口	現存長3.3、幅さ2.2、孔径2.0			欠損大、開成歌。色調は明褐色
5	30	135	SE04	石 製 品	鏡	現存長3.1、現存幅1.8、最の高さ0.8		泥板岩	壁部一部残る、小形の鏡
6	30	136	"	"	鏡	白 鏡38、I-鏡幅2.3、厚さ2.3~2.6		御衣岩	トロの受皿跡片
7	33	161	SE12 彌り立	"	系 紙			砂 岩	下口、彌り立1.5mm幅。2~3mm間隔
8	33	163	SE12	土 著 品	土 神	現存長3.5、最大幅1.3、孔径0.6			瘤状の十進で、円筒形
9			SE14	"	人 形				頭部欠損。男性の像。並に2つの穴
10			"	原 石				青 石	色調は淡灰茶色
11	42	279	SE16	石 製 品	男 日	直径34、高さ10.3、芯牌孔径2.4、鏡り目幅0.4 現存長6.7~1.9		飛天岩	上円、彌り付には不規則。8等区分
12			"	"	鑿 石	現存長5.8、幅2.3		真 砂	素灰色
13	49	290	SE20 彌立方	"	板 碑	現存長17.8、幅15.2、厚さ5.5		砂 岩	現直型は川形、頭との境に圓窓彌りの 施版2枚。裏は無い。ケズリ
14	50	351	"	"	石 烏	長さ19.5、幅15.6、高さ14.0		花崗岩	内方弧、金剛界四仏か
15	65	144	SD03	土 著 品	土 神	長さ3.7、最大幅0.9、孔径0.3			浮雕完形。瘤状の土神で円筒形
16			"	"	十 等				1/2が欠損する
17			"	"	人 形				頭部欠損。男性の像。並に1つの穴
18			"	"	魚 形				1/2が欠損する
20	67	176	SE04	石 製 品	鏡	現存長9.1、幅4.7、最の高さ1.6		砂 岩	表面は素灰茶色、裏面は黑色
21	76	284	SE03	"	石 鏡	長さ3.8、幅1.8、厚さ1.4		青 石	形態は橢円形、細辺の凸が疲労的に1条

Tab. 5 第68次調査青銅製品一覧表

No.	種類	番号	市 上 遺物	特 徴	計 測 値	(単位cm)	備 考
1			SE12	針 金	現存長6.7、径0.2		
2			"	"	現存長3.3、径0.2		
3	37	208	SE14	通管吹口器	現存長8.4、旋合部分1.1		吹口部端欠損
4	42	278	SE18	匙	全長15.1(納込11.5)、受口部分幅2.4		完全。柄が丸なり
5			SK04	小 片	長さ2.8、幅1.4、厚さ0.8		塊
6			"	"	長さ2.4、幅1.9、厚さ1.3		塊
7			道標面	針 金	現存長3.6+2.1、径0.2		L字型に曲がる
8			"	器種不明 円盤状	径5.8、厚さ0.5、裏に0.5の折り返し		一部欠損
9			"	"	径4.75、厚さ0.15、中心部と周縁1.3で上、下、左、右に径0.4の穴		中心部少し盛り上がる
10			"	"	径5.3、厚さ1.7、内部中心に長さ1.3、幅0.9で柱状突起か?		垂直か? 向心に累層
11			"	器種不明 球状	全長14.7、径0.4~0.3		両端が丸い
12			"	器種不明	現存長3.3、幅2.1、高さ2.3		錠管の蓋のように先が広がる
13			"	"	現存長3.9、幅1.1、厚さ0.2		内部空間
14			"	"	全長3.3、幅1.1~0.5、厚さ0.6		片端が丸い
15			"	"	現存長3.7、幅1.2、厚さ0.3		若干秀出する

Tab. 6 第68次調査試験品一覧表 ①

No.	標因 典号	流物 番号	出土遺構	種類	測定値 (単位cm)			備考
					長さ	幅	厚さ	
1			SK01	鉢	3.7	0.6	0.5	
2			SK02	"	現存長 4.3	1.2	1.7	
3			"	"	現存長 3.1	1.1 0.9~0.6	1.1~0.6	先端部欠損。両底
4			"	"	現存長 2.1	0.7~0.3	0.8~0.3	底部欠損
5			"	"	現存長 4.3	2.3 1.1~0.8	1.4 0.8~0.2	先端部欠損
6			SK14	"	現存長 5.7	1.1 0.8~0.5	0.8 0.7~0.5	先端部わずかに欠損
7			SK19	"	3.0	0.9~0.3	0.5~0.3	
8			"	"	現存長 2.5	0.7	0.8	底部欠損
9	14	108	SK20	刀子	現存長 7.6	1.0~0.4	0.6~0.3	刃部破損
10			"	"	現存長 14.1	2.5~1.8	1.0	
11			"	"	4.8	2.7	2.7	当がっている
12	18	130	SK21・22	"	現存長 8.0	2.1~0.7	1.8~0.5	先端部わずかに欠損
13			SK24	"	現存長 4.7	1.2~0.8	1.0	先端部欠損
14			SK01	"	現存長 6.6	0.6	0.4	頸部欠損
15			SK01 斧頭	"	現存長 4.8	3.3 2.3~1.3	2.1 1.8~0.9	先端部欠損
16			"	"	現存長 4.5	0.8	0.6	先端部欠損
17			SK02 摺り方	"	5.8	0.9~0.3	1.0	
18			"	"	現存長 3.6	1.0 0.5~0.4	0.9 0.6~0.3	先端部欠損。頭部を折り曲げる
19			"	"	現存長 4.8	0.7 0.5~0.4	0.8~0.5	先端部欠損
20			"	"	11.5	1.3	1.1	
21			"	"	現存長 1.9	0.6	0.7	先端部欠損
22			"	"	現存長 2.4	0.9	0.8	先端部欠損
23			"	"	現存長 3.3	0.5	0.6	小片。先端部と思われる
24			"	"	現存長 2.2	0.5	0.4	小片。先端部と思われる
25			"	"	4.1	1.0 0.7~0.5	0.8 0.6~0.5	当がっている
26			"	"	現存長 4.6	0.5	0.5	頸部欠損
27			"	"	3.7	0.6 0.5~0.2	0.6 0.4~0.1	頭部を折り曲げる
28			"	"	5.3	1.0 0.8~0.2	0.6 1.3~0.2	
29	25	78	SK02 斧頭	"	9.1	2.6 2.0~1.1	1.5 1.4~0.9	先端部欠損
30			"	"	現存長 6.3	1.1~0.8	1.2~0.9	先端部欠損
31			"	"	現存長 4.1	0.9	0.8	先端部欠損
32			"	"	現存長 3.1	1.4~0.8	2.9	先端部欠損。頭部を折り曲げる
33			"	"	4.4	1.1 0.6~0.5	1.0~0.7	
34			"	"	現存長 4.3	0.7	0.6	底部欠損
35			"	"	現存長 7.3	0.7	0.6	頭部欠損
36	25	77	"	"	7.4	0.7	0.6	頭先端が当がっている
37			"	"	現存長 4.1	0.6	0.8	先端部欠損
38			"	"	現存長 2.0	0.6	0.6	頭部欠損

Tab. 6 第68次調査鉄製品一覧表 ②

No.	規格番号	造形番号	出土地名	種類	計測値 (単位cm)			備考
					長さ	幅	厚さ	
39		SE02	彌り方	釘か?	現存長 6.1	1.8	1.2	曲がっている
40				×	現存長 2.9	0.85	0.5	
41		SE03	井筒	釘	6.0	0.8 0.4~0.2	0.8 0.4~0.2	No.39と同形状の小片
42				×	現存長 7.0	1.8~0.8	1.2	先端部欠損、頭を折り曲げる
43				×	4.5	1.2	0.8	
44				×	現存長 2.9	1.0	0.8	先端部欠損
45	30	137	SB04	彌り方	現存長 2.5	2.5	0.7	1.0
46	30	138	SB04	彌か?	11.2	1.7	1.7	
47		SE04	彌り方	釘	7.6	1.9	1.2	
48		SE04	井筒	×	9.7	1.4	1.4	
49		SE12		釘	現存長 6.4	2.0~1.2	0.6~0.2	
50				釘	6.4	1.8	0.6	曲がっている
51				×	5.4	1.3	1.3	
52				×	現存長 4.8	1.0~0.6	1.1	頭部欠損
53		SE12	井筒	×	現存長 4.6	0.7~0.4	0.5	わざかに両端が欠損
54	37	207	SE14	×	現存長 7.3	2.5	2.6	六角柱
55				×	現存長 4.8	1.3	1.2	先端部欠損
56				×	5.7	1.2 0.9~0.8	1.3 0.9~0.7	
57				×	現存長 5.0	2.2~0.9	1.8	先端部欠損
58				×	現存長 6.5	2.0~0.7	1.2~0.8	先端部欠損。本質丸る
59				×	現存長 5.0	2.1~0.7	1.1~0.5	先端部欠損。木質丸る
60				×	現存長 5.7	1.1	1.0	頭部欠損
61	39	232	SE15	井筒	釘	7.6	2.9	0.5
62	39	231	SE15	彌り方	×	現存長 4.8	2.1	0.4
63			SE15	丸	4.8	0.7~0.3	0.7~0.3	頭を折り曲げる
64				×	現存長 2.5	0.8	0.6	先端部欠損、頭を折り曲げる
65				×	現存長 3.2	0.5	0.6	頭部欠損
66				×	6.1	0.7	0.8	
67				×	現存長 5.3	1.1~0.6	1.1~0.4	先端部わずかに欠損
68				×	現存長 3.3	0.9~0.3	0.7	先端部欠損
69				×	現存長 3.1	0.4	0.4	頭部欠損
70		SE15	彌り方	×	現存長 3.2	0.9 0.6~0.4	1.2 0.2	
71				×	現存長 3.6	0.9 0.6~0.4	0.9 0.8~0.6	先端部欠損
72				×	現存長 1.5	0.6	0.6	先端部欠損
73				×	6.4	0.4	0.4	頭部欠損
74				×	現存長 6.4	1.3 1.0~0.5	1.2 0.9~0.3	頭部わずかに欠損
75		SE18		×	4.4	0.9~0.3	0.8	

Tab. 6 第68次調査鉄製品一覧表 ③

No.	添付番号	添番号	古土遺構	種類	計面積(単位cm)			備考
					長さ	幅	厚さ	
76			SE19	釘	現存長 3.5	0.7	0.7	曲がっている
77			SE19 調査め	〃	現存長 4.2	横幅 1.4~0.6	1.2~0.4	先端部欠損、頭部は折り曲げる
78			〃	〃	現存長 4.7	現存幅 1.8	1.3	先端部欠損、頭部は折り曲げる
79			〃	〃	現存長 5.5	0.9~0.5	0.7~0.5	
80			SE19 折り方	〃	4.7	0.9 0.6~0.4	1.1 0.6~0.4	頭部は折り曲げる
81			SE19 井筒	〃	現存長 3.2	0.6	0.6	先端部欠損
82			〃	〃	現存長 2.2	0.3	0.5	頭部欠損
83			SE19 井筒内下層	〃	4.8	0.8~0.2	1.0~0.3	曲がっている
84	47	335	SE2C 調査め	〃	8.6	2.0~0.6	1.1~0.8	
85			SX03	〃	6.6	0.3 0.25~0.1	0.35 0.25~0.1	
86			SX02 下層	〃	現存長 2.7	1.0 0.5	0.7 0.5	
87			〃	〃	現存長 3.1	0.9	1.0	先端部欠損
88			〃	〃	現存長 2.7	1.1	1.1	先端部欠損
89	63	124	SX03 4・5層	施丁	21.4	3.5	0.4	刃部に欠損がある
90	63	125	SX03	不規	現存長 4.7	1.9	3.8	刃部切先部分と思われる
91	63	125	SX03 1層	頭	現存長 10.3	1.8	1.3	頭部が曲がっている
92			SX03	釘	現存長 5.2	1.4	0.7	先端部欠損
93			〃	〃	6.1	0.6 0.5~0.2	0.5	
94			〃	〃	現存長 4.2	0.8~0.4	0.5	先端部欠損、頭部は折り曲げる
95	63	126	〃	〃	7.6	0.9~0.3	0.5	頭部がくの字に曲がる
96			SX03 3層	〃	現存長 4.2	0.9~0.6	0.7	先端部欠損
97			SX03 4層	〃	現存長 5.1	1.5	0.6	先端部欠損
98			SX03 頭部内	〃	7.1	2.9 1.6~0.6	1.7 1.0~0.6	木質が残る
99			〃	刀物	現存長 2.8	1.3	0.8	
100			SX04	釘	7.3	1.4~0.5	1.0	頭部は折り曲げる
101			〃	〃	現存長 4.8	0.4	0.4	頭部欠損
102			〃	〃	現存長 3.6	0.7 0.6~0.2	0.5	先端わずかに欠損
103			〃	〃	現存長 3.5	0.9 0.5~0.4	0.6	先端わずかに欠損
104			SX04 ベルト	〃	現存長 7.3	1.4 1.1~0.8	1.4 1.1~0.8	先端部欠損
105			SX07	〃	9.5	4.2 0.9~0.6	1.8 0.7~0.5	頭の部分が長い
106			〃	〃	7.5	1.3~0.7	1.2	
107			SX10	頭	4.2	2.7~0.9	1.2	
108	72	257	SX16 内側内	頭?	現存長 5.9	1.9(0.3)	1.4(1.5)	中空になっている
109			〃	釘	3.2	0.7	0.7	L字型に曲がる
110			〃	〃	現存長 6.7	2.9~1.2	1.9~0.7	先端部欠損
111			SX18	〃	現存長 6.6	0.8 0.6~0.3	0.7 0.6~0.3	頭部欠損
112			SX19	〃	5.7	1.3 0.8~0.6	1.5 0.8~0.6	

Tab. 5 第68次調査鉄製品一覧表 ①

No.	鉄器 番号	遺物 番号	出土遺構	種類	計測値 (単位cm)		備考
					長さ	幅 厚さ	
113			SX19	釘	現存長 7.4	1.4 0.9~0.5	先端部欠損
114		"			" 5.9	1.1 0.6~0.5	頭部が潰れている
115		"			現存長 5.0	0.6~0.4 0.6~0.5	頭部欠損
116		"			現存長 3.6	0.7 0.5~0.3	先端部欠損。頭部は潰れている
117	74	271	"		現存長 8.8	0.6	両端部欠損
118		"			現存長 2.9	0.6~0.3	先端部欠損。頭部は折り曲げる
119		"			現存長 3.6	0.6~0.3	頭部欠損
120			SX20		現存長 5.1	2.6~1.3	先端部欠損。木質残る
121		"			現存長 4.5	1.9	先端部欠損。木質残る
122		"			馬鹿歯 4.6	0.8 0.6	先端部欠損
123		"			現存長 3.8	1.8	先端部欠損
124		"			現存長 4.6	1.3~0.6	頭部欠損
125		"			現存長 2.9	0.6~0.3	頭部欠損
126		"			" 4.5	0.6~0.3	頭部は折り曲げる
127	76	298	SX30		現存長 5.8	3.1~0.8	先端部欠損。木質残る
128			SX32 上面		" 3.1	1.0 0.6~0.3	頭部は折り曲げる
129			Ⅳ期砂場		" 5.4	1.5~0.3	1.3~0.3
130		"			現存長 2.9	1.4	1.5
131		"			現存長 2.9	2.2~1.5	先端部欠損。頭部は折り曲げる
132		"			現存長 9.2	1.3~0.9	先端部は少し欠損
133		Pit01	"		" 8.1	1.0~0.8	1.1~0.5
134		"			" 6.4	1.2~0.4	1.2~0.3
135		"			現存長 3.8	0.5~0.3	木質残る
136		Pit02	釘		現存長 3.9	1.6~0.5	ヨの字型に曲がる
137		"			現存長 3.6	1.2	先端部欠損。頭部は折り曲げる
138		"			現存長 3.5	1.1 0.6~0.2	頭部の一端欠損
139		"			現存長 3.4	1.0	くの字に曲がる
140		遺構面	"		9.3	1.5 1.0~0.6	1.5~0.6
141		"	"		現存長 3.1	1.6	先端部欠損
142		"	"		現存長 3.45	0.7	先端部欠損
143		"	"		" 6.3	0.5~0.2	0.8~0.2
144		"	"		現存長 8.1	1.1~0.4	0.7~0.4
145		不 明	"		5.7	1.4 0.9~0.5	先端部わずかに欠損
146		"	留神不明		" 4.6	1.0 0.7~0.5	SX21、又はSX11
147		"	釘		" 7.2	1.8 0.8~0.3	頭部を折り曲げる。SX21、又はSX11
148		"			現存長 7.7	1.2	1.2
149		"	刀 物		現存長 2.5	1.9	1.7
							SX21、又はSX11

Tab. 7 第68次調査 SX02・03山土大製品及び竹製品一覧表

No.	博物 番号	出土遺物 番号	出土遺物 番号	種類	特徴	計測値 (単位cm)			木取り	備考
						高さ	幅	厚さ		
1	59	44	SX02	漆器柄		高さ径 5.0	現存幅 2.6			内外面に黒漆。内面のみ朱漆をくらべて、漆の塊が内側に付着
2	"	45	"	漆器柄	長さ	9.1	幅 3.0	厚さ 1.4 穴径 0.2~0.3	ナメ	名札か、釘穴
3	66	147	SX03 1層	漆器	長さ	5.8	上面径 3.5	下面径 2.2~2.4	板 目	表面切った痕
4	"	148	"	漆③-B	長さ	5.4	上面径 3.2~3.4	下面径 2.4~2.6	タメ割り	
5	"	149	"	漆④	長さ	4.3	上面径 3.4~3.6	下面径 2.9~3.0	板 目	面取り
6	"	150	SX03 4・5層	漆⑤	長さ	4.4	上面径 2.9~3.5	下面径 2.1~2.3	板 目	面取り
7	"	151	SX03 1層	漆⑥	長さ	3.8	上面径 2.5	下面径 2.1	板 目	面取り
8	"	152	"	漆⑦-A	長さ	4.0	上面径 3.1~3.5	下面径 1.9~2.1	板 目	面取り
9	"	153	"	漆⑦-B	長さ	4.2	上面径 2.9~3.2	下面径 2.3~2.6	芯持ち	面取り
10	"	154	"	漆⑧	長さ	3.9	上面径 2.4~2.9	下面径 2.3	板 目	面取り
11	"	155	SX03 4層	漆⑨	現存長	4.6			板 目	面取り
12	"	156	SX03 1層	漆器柄	長さ	23.4	現存幅 11.6			面取り、下端欠損
13	"	157	"	漆⑩	長さ	7.5	幅 2.0		板 II	長方形、面取り
14	"	158	SX03 4・5層	漆器柄	口径	11.3	現存径 4.3			外外面に失塗、外側は剥落
15	"	159	SX03	漆柄⑪	現存長	6.2	平管径 1.8~2.3	底管径 2.1~2.5	芯持ち	底骨部の外側は漆、内部は木製、柄は竹
16	"	160	SX03 1層	漆柄⑫	現存長	5.8	筆管径 2.1	底管径 2.3 底の厚さ 0.08		底骨部の外側は漆、内部は木製、柄は竹
17	"		先①	竹	現存長	10.2	柄 2.7	径 3.1		
18	"		先②	"	現存長	11.5	柄 1.7	径 2.9		
19	"		先③	"	現存長	13.7	柄 4.5	径 3.6		
20	"		先④	"	現存長	24.9	柄 10.0	径 3.3		先はケズリ落とし
21	"		先⑤	"	現存長	10.2	柄 2.8	径 3.8		
22	"		先⑥	"	現存長	12.3	柄 3.1	径 3.9		
23	"		先⑦	"	現存長	7.5	柄 1.5	径 3.8		
24	"		先⑧	"	現存長	8.2	柄 2.8	径 2.4		
25	"		先⑨	"	現存長	9.9	柄 2.3	径 3.4		
26	"		先⑩	"	現存長	15.0	柄 1.7	径 2.8		
27	"		先⑪	"	現存長	13.6	柄 2.1	径 3.7		
28	"		先⑫	"	現存長	10.2	柄 3.4	径 3.1		
29	"		先⑬	"	現存長	23.8	柄 3.5	径 3.2		
30	"		先⑭	"	現存長	11.0	柄 3.3	径 3.3		
31	"		先⑮	"	現存長	13.0	柄 2.3	径 3.6		
32	"		先⑯	"	現存長	19.3	柄 3.0	径 3.5		
33	"		先⑰	"	現存長	18.8	柄 1.6	径 3.7		
34		SX03	先⑱	"	現存長	13.1	柄 6.1	径 3.6		先はケズリ落とし
35	"		先⑲	"	現存長	12.7	柄 3.1	径 3.8		



作業風景

はかた
博多 32

博多遺跡群第68次発掘調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第287集

1992年(平成4年)3月13日発行

編集 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 アオヤギ株式会社
